

ワクワクプリキュア！

ネフタリウム光線

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『この世界』には、光と闇の伝説なるものがあるらしい。

はるか昔、全てを覆い尽くさんとした闇の勢力があった。それは恐ろしい速度で生き物を、世界を侵食し、今にも全てを飲み込もうとしていた。だが、突如として現れた光の戦士によって、その闇は切り裂かれたという。その光の戦士は、名を『プリキュア』というらしい。

これが、伝説の簡潔なあらすじである。

しかしながら、その光と闇が戦った痕跡などは何一つ残されておらず、そもそも誰が語り出したかもわからないという代物だったため、時が経つにつれ信ぴょう性は薄まってゆき、今ではただのおとぎ話である、という認識に成り下がっていた。

だがそれは、あくまで『人間界では』の話であり、その戦いを記録した書物、そして使われていたとされる兵器など、ありとあらゆる物的証拠のあるもう一つの世界があった。

『この世界』はどうやら、人間の住む場所とは異なる『異世界』が存在しているらしくー？

—————

主人公、光山輝（みつやまひかる）は、この春から中学生になる少女である。

学力は平均以下、運動は苦手ではないが得意でもなく、何か武器があるとすれば、底なしに明るいことくらい。物は言いようで、単にアホなだけでも捉えることができる。どこのクラスにでも、このような

キャラクターは最低1人はいる。そんな人間だ。

普通の女の子としてこれまでを生きてきた彼女だったが、その日常は、中学校の入学式を以て変貌していくこととなる。上述の底なしの明るさ、これが本当に彼女だけの、彼女にしかない最大の武器となることに――

再び動き出した光と闇の伝説に巻き込まれてしまうこととなつた、4人の少女の物語が始動する――！

??

前作に引き続き、相も変わらぬマイペース投稿となります。出来る限り速く話を進めていきたいとは思っています。やはり「書くのやめたのかな？」と思われるほど間隔が空くこともあるかと。

しかしせっかく考えた物語ですので、必ず書き終えます。書き終えないと勿体ない。かなり時間がかかってしまうかもしれませんが、いつかは完結するので、引き続き温かい目で見守ってくださいとありがたいです。

@Gearthelle↑Twitterアカウントになります。今作や、前作ウルトラマンエレメントなどについて、ボツネタや小ネタ、資料の公開などを中心にたまに呟いています。

目次

第1章 ワクワクプリキュア結成！心に漂うどんより空模様も吹き飛ばします！

第1話 「蘇る伝説！プリキュアってなに!？」	1
第2話 「弾ける心！その名も……」	22
第3話 「募集中！2人目のプリキュアは誰!？」	40
第4話 「2人目登場!？キュアイラーレ爆誕!!」	64
第5話 「吹き荒れる豪雪！スノウ強襲!」	92
第6話 「驚愕!？クリアハートの謎!」	118
第7話 「轟く雷鳴!？強敵サンダー降臨!!」	146
第8話 「百人力!？最強の戦士誕生!」	173
第2章 摩訶不思議！古代兵器とカオスシード！	
第9話 「レイン再び！動き始めた古代兵器!!」	195
第10話 「負けませんわ！復活のキュアイラーレ!」	224
第11話 「波乱の幕開け!？選挙と異世界情勢!!」	253

第1章 ワクワクプリキュア結成！心に漂うどんより空模様も吹き飛ばします！

第1話 「蘇る伝説！プリキュアってなに!？」

第1話 「蘇る伝説！プリキュアってなに!？」

『待ってよ……!』

悲痛な叫びをあげる、黄色い、くるくると巻かれたツイントールが一際目を引く、同じく黄色をベースとした衣装に身を包んだ少女。その視線の先には、彼女に背を向け、豊かで長い髪を靡かせながら歩く同じくらいの年頃の少女の姿があった。そしてその更に先には、一寸先すら見通せない、深い深い闇が広がっている。

「……私には私の道があるの。私のやり方があるのよ。……またね、キュアスパーク。これまで楽しかったわ」

歩き続ける少女は、背を向けたままそう言った。

『何かあったのなら相談だつてのるし、私に出来ることならなんだつて手伝うから！一人で全部抱えようとしなで!』

キュアスパークと呼ばれた少女はそう叫びながらバツと飛び出し、もう一人の少女の元へと飛びかかる。

「邪魔をしないで!」

しかし、それも虚しく、ようやくこちらに振り向いた彼女の手で弾き返されてしまう。

「私が必要であればあなたとだつて拳を交える覚悟があるわ。でもあなたにはない、そうでしよう？私と違って、優しい子だから」

それだけ言うと、再び彼女は歩き始めた。

『……それでいいの……?その道で本当にいいの!?!』? 「いい加減にしてよ!私とあなたは違うのよ、何もかもが!……またいつか会いましょう。でも次に顔を合わせる時は敵同士、かもしれないわね」

彼女はこのセリフを最後に、闇の中へと消えて行った。

—————

雲ひとつない青空の元で、日光があちらこちらでて反射することによって、キラキラと照らされる街並み。決して大きなものではなく、高層ビルなども少ない、どちらかという住宅街のようなものではあるが、その分都市部に比べれば緑も多く、複数の運河も設けられている。住宅街、とはいえど家々のほとんどが木造やコンクリートではなく、華やかに彩られた煉瓦の造りであり、これがまた、街に美しい色彩を与えている。静かではあるし、街灯も少ないため、晴れた夜には、それは見事な星空が映し出されることでも有名で、遠路はるばるそれを見るためだけに集まる観光客も少なくはないほどだ。

上述のような要素もあり人気も高く、それなりに土地も高騰しているため、住民たちも必然的に、ある程度裕福な世帯層となっている。そのため治安の良さも申し分ないのだ。教育機関も、保育園から大学まで、一つの私立の学校法人が運営しているため不自由はない。

強いて弱点があるとすれば、交通面だろうか。特に、鉄道が存在しないことが挙げられるだろう。それでも先述の通り大きな街ではなく、バスの本数はそれなりにあるため、特筆して不便とは言い難いだろう。運河だって、交通手段の1つとして用いられている。こうも好条件が揃っているのだ、生活する上では、文句のつけようがない場所だろう。

これが、この物語のメイン舞台となる、輝ヶ丘という街なのである。子供達は、幼少期からずっと同じ仲間と同じ学校法人に通っているのだ。同級生のほぼ全員が幼馴染だ、なんて場所、全国的にも稀有なはずである。

そして今日は、1年で輝ヶ丘がもつとも光り輝く日、全校一斉の入学式だ。輝ヶ丘大学附属中学校。ついに私『光山輝』も今日からここで中学生になるのである。

街を彩るソメイヨシノを見るのは今年で13回目にもなるのだが、やはり美しい限りだ。私は今まで何度、この桜並木を絵で再現しようとしてみたかわからないが、どんなクレヨンや絵の具を使っても表現しきれず、幼き日にはその悔しさから涙を流すことさえあったほどだ。

それだけ綺麗な桜の下、私は中学の門をくぐるのだ。初めて袖を通

すブレザーの制服にも心を踊らせながら、気がつけばスキップで進んでいた。そんな彼女の背後から、聞き慣れた親友の声が聞こえてくる。

「おーいー！ヒカルちゃんー！」

声の主は『大田愛海』もう13年目の付き合いになる、最も大切な友達だ。彼女のシヨコラブラウンに光るセミロングの髪の毛は、今でも憧れである。

「マナミちゃんー！いやー、みんな制服なのに、後ろ姿だけで良くわかったね！」

つい1ヶ月前までは、私服で学校生活を送っていたわけで、それが今日突如皆同じ服装に変わったわけだ。ヒカルは普通に驚いた、というキョトンとした顔でそう言った。

「当たり前でしょ！私を誰だと思ってるの？……まあ、そのクルツとしたアホ毛見れば、誰だってヒカルちゃんだってわかるけどね」

頭の左側のつむじ付近でくるりんとはねている、このシヨートの黄色い癖っ毛。これが私の特徴の一つでもあるのだが、同時にこれをコンプレックスに感じている。女たる者、髪は命。その命がこんなにくるつくるなのだから面白くない。おしゃれも楽しめないではないか。まっすぐな髪が欲しいとサンタクロースをお願いして、両親を困らせたことも懐かしい思い出である。

「アホ毛じゃないって何度も言ってるでしょ！これはくせ毛！私アホじゃないしー！」

「いやいや、アホだからアホ毛ってわけじゃないし……」

会うや否やいきなり頬をぷーっと膨らませた私の顔を見て、マナミは少し笑いながらそう言った。

「そうかもしれないけどーアホって言われるの嫌だもんね！」

「はいはいごめんって。……そういえば、クラス発表まだだったよね。入学式当日の早朝、掲示板にて発表って告知されてたけど」

「そうだったー……同じクラスだといいいけど……」

不安げな表情を浮かべる。その理由を、茶髪の友人はすぐに察してくれたようだ。

「まー確かに、成績優秀のこのマナミちゃんと同じクラスになってる確率は低そうね」

茶化すように、ニタニタと笑いながらそう言ってくるマナミ。実は、小学校の卒業式を迎える前に、簡単な学力調査試験が実施されていた。試験のタイミングの不自然さから、成績がクラス配当に影響を与えるのでは、と噂されているのである。

不安になる理由は他にもない、その成績だ。

情けない限りだが、私は勉強が得意ではない。輝ヶ丘は保育園から大学までの一貫校とはいえ、成績が著しく振るわない生徒は、エスカレーターに乗ることを許可されず、進級時にはじき出されてしまうのだ。実際に今年も若干名ではあるが、ほかの街へと引越した者もいた。

酷ではあるが、それら生徒たちは残留したところで、遅かれ早かれ学力的に脱落する可能性が極めて高い。これも、学校側なりの配慮なのかもしれない。

こうして入学式に出席できるのだから、進学が許されたということになるが、小学生時代、テストではいつも平均点にさえ到達すれば、まるで満点をとったかのようににはしゃぎ回るレベルであったわけなので大ピンチ。本当に成績順なら、彼女と同じクラスなどあり得ないだろう。

「も、もし違うクラスでもいいもん！家隣だし、毎日遊べるでしょ!」
「どうかなあ？私がヒカルちゃんよりも仲良くなれる友達作っちゃうかもしれないし、お勉強が忙しくなって、構ってる暇なくなるかもよ〜?」

またも白い歯を見せ、小悪魔的に笑う彼女。反撃したくはなるが、本当にそうなってしまえばそんな予感もするし、第一、言い返す言葉もないので詰まってしまう。

「…うそうそ、私の親友は後にも先にも、あなた以外にいないわよ。安心なさい?」

無意識のうちに、思っているよりも頬が膨らんでいたのだろうか？私の顔を覗き込み、すぐにフオローに入ってきた。

このようなやり取りを続けているうちに、二人はその掲示板へとたどり着いた。すでに多くの生徒で賑わっており、とてもじゃないがクラス配当など視界に入らない。

「み、見せてー!」

140中盤しかない身長なので、どうにかして覗き込もうと懸命に飛んだり跳ねたり背伸びしたりを繰り返す姿がツボにハマったのか、彼女は隣でクスクスと笑っていた。

「……あつ、マナミちゃんの名前はあつたよ! A組だつて!」

彼女の姓は大田であるため、出席番号的にも比較的視界に入りやすい、掲示板の上の方の位置に、その名前があつたのだ。

「ま、当然って感じかしら?」

わざとつぼく呟くマナミをよそに、今度こそ自分の名前を見つけるため、再び目をこらす。生徒たちも次第に己のクラスの確認を終え始めたのか、ようやく背伸びをしなくても掲示板が見えるようになり始めた。

「まだー? 集合時間になつちやうよー?」

退屈そうに待つ彼女。ここで確認したのち、各々のクラスの教室に8時に集合しなければならぬが、時間まで、すでにあと10分を切っている。せつかく学校には来ているというのに、初日からの遅刻はどうしても避けたいところだが。

出席番号がどうしても最後から数えたほうが早くなる『光山』という、マ行の名字をこの時だけ少し恨んだ。

「……あつ……!」

そう考えていた矢先、遂に見覚えのある文字の羅列を発見することができた。

「あつた?」

「う、うん……A組だ……!」

顔が次第にパアツと明るくなるのを見たのか、彼女も笑顔でこちらを見つめていた。

そんな光り輝く街とは全く正反対に、分厚くどす黒い雲に覆われ、大粒の雨に見舞われる真つ暗な都市があった。奥地には洋風の大きな城が構えられており、城下町も発展しているようだが、不思議なことにどこにも光がない。ゴーストタウンのように不気味な雰囲気が漂っている。

この土砂降りの中、気味の悪い紫色のつぶらな一つ目を輝かせながら二足歩行で歩く、人型の大きな怪物の軍団が、綺麗に整備された道路を1列で行進している姿が見て取れた。

その先頭を歩くのは、身長185cm程の細身の男だった。色白の身体を包む、威厳ある漆黒のマントと、深い緑色の軍服。胸には6つの、雫のような形をしたバッチがつけられており、彼が実績のある者であることを示しているかのようだ。水色のギザギザとした、毛先が鋭利な短髪も特徴的である。

「……しけた国だ。こんなに簡単に墮とせたのは初めてだぜ」

男は、周囲を見渡しながらそう呟いた。低いが響く声質だ。この軍団の後方に目を向ければ、所々で火災の痕跡が残っているのがわかる。この雨で、火は収まっているようだが、何やら大きな戦闘があったようだ。

「おい！国王はあの城の中にいるんだよな？まさか、逃げてねえよな？」

男が怪物の腕に捕まっていた、捕虜らしき者に詰め寄る。捕まっているのはどう見ても人間ではなく、見たことのない、哺乳類に似た、両手のひらに収まる程度の小型の生物である。

「陛下は逃げはしない！」

「どうだか。お前らを時間稼ぎに利用して、逃げてる可能性だってあるじゃねえか。それだけ、俺様らのことを恐れてたもんなあ？」

「陛下は国民を深く寵愛なさっておられるお方だ！勝手なことをいうな！レイン！貴様らなどに屈する我々ではない！」

捕虜は憎悪に満ちた目つきで、レインと呼ばれた男を睨みつけた。いまにも暴れ出さんと、身体を震わせている。

「……うるさい奴だ。おいクライナー、始末してくれ」

『クライナーアア!!』

クライナー、そう呼ばれた怪物はレインの指示通り、捕虜兵を掴み上げ、遠方へと放り投げた。遠くで砂煙が巻き上がったが、大雨のためか大したものではない。体格差に差がありすぎるため、呆気なく力タがついてしまった。

「さて、国王様とご対面といこうぜえ。いればの話だがな」

完全に抵抗能力を失っている王城へと、レインの軍が堂々と侵入して行く。城内にも兵の姿はなかったため、なんの苦労もなく奥へと進むことができた。

屈しない、と凄んではいたが、これでは説得力が皆無である。レインはニヤニヤと不敵に笑っていた。

さて、王の構える部屋までは容易くたどり着くことができたが、そこにはこれまでと違い、先ほどの小型生物たちの姿があった。

武装した兵が5人、こちらを威嚇するように構えており、その後方、最奥部の王座には国王と思われる威厳あるモノが堂々と座っていた。周囲の同種とみられる生物よりは一回り大きく、黄金の王冠と、真紅の装束を身に纏っている。この予想外の光景にレインは目を丸くして驚いてみせた。

「これはこれはキラメリアン陛下。まだ残っておられたか」

「お前はレインか……。道理で、我々の軍では歯が立たないわけだ。参ったよ」

国王キラメリアンは、彼の顔を見て嘆いた。どうやらレインという男は、広く名の知れている軍人のようであることが伺える。

「潔良い国王は嫌いじゃねえぜ。まあんなことどうでもいいんだ。クラウド様からの要求は事前に受けていたよなあ？それに従わなかったから、てめえの愛する国と民がこんなザマになっているんだが、どう思う？」

「……あのような要求を飲むとでも思ったかね？彼らは私や国に命を捧げてくれている勇敢な者たちだ。彼らの志を無駄にはせん」

「前言撤回だ。全然潔くないな。もっと敗戦国だつて意識持った方がいいぜ？クラウド様の逆鱗に触れたら、国王と雖も命の保証はでき

ねえぜ」

「ふん、いかにも勝った気でいる、という言葉だな」

「あん?」

レインは予想外の返答に、素で驚いた。

「我々はまだ負けてはいない!」

王はそう叫びながら、控えていた兵士たちに攻撃の合図を送った。5人、いや5匹の兵が足踏み揃えて駆け出した。しっかりと訓練されていることが見て取れる、洗練された動きだ。

「……バカが。クライナー! やれ!」

数十の怪物軍団も、迎え討たんと走り出す。

「おいキラメリアン! 今すぐにも、この国の所有物全てをクラウド様に捧げると宣言しやがれ! そうすれば、この兵士たちもためえも、命は助かるように手を回してやるからよお!」

これが、レインからの最後通告だった。だが、彼らは抵抗を止めるそぶりを見せない。

「それが答えかよ。ならしらねえ。力で俺に勝てると思つているとは、舐められたもんだ!」

「まあ、お待ちなさい」

その時、突如上から若い男の声が聞こえたと同時に、レイン軍も王の兵も、まとめて吹き飛ばされた。つい今まで戦場だった場所の中央に、背の低い、巻貝のような形状をした灰色の頭髮が目立つ男性が直立している。非常に若そうな顔立ちで、少年に近い風貌を感じ取れる。

その小さい男は、レイン同様、黒のマントを靡かせているが、その下に着ている服のデザインが大きく異なっており、胸部に真紅のゼラニウムの花の模様が刺繍された燕尾形ホック掛けの洋服で、灰色の袖の先から伸びる右腕には、先端に大きな宝玉のような球体を取り付けられた、身長よりも大きな杖を握られている。

「く、クラウド様!? なぜここに!?」

レインは驚愕しながらも、即座に跪き、敬礼した。クラウドと呼ばれた小柄の男は、そんな彼を少しだけ見下ろした後、視線をキラメリ

アンへと向けた。

「困りますね。おとなしく降参してください陛下。それに貴方なら、この杖が示すことも理解できるはずです」

その声もまた、変声期を迎える前の少年のようなものであった。優しげで、穏やかな口調だ。レインと呼ばれた男とはまるで正反対だが、これが彼らの頭首のようである。

「そ、その杖……クラウドお前、何が目的だ!？」

「何って、全てを闇で覆い尽くす、それだけです。嘗て、同じ野望を抱いた先代もいたようですが、その目論見はあっけなく阻止されてしまいました。このクリア王国の切り札……プリキュアの登場によって」

「そんなもの所詮はおとぎ話！それを信じるとは、お前も可愛い一面があるではないか」

王は馬鹿にするようにそう笑った。だが、その顔がわずかに引き攣っていたことは、彼にはお見通しだったようだ。

「惚けないでくださいよ。現にここに伝説の存在であったはずの『クライナー』と『カオスロッド』がある。全部史実なんですよ。だから、貴方の国を頂かなければならない。プリキュアの力の根源とされる『クリアハート』ごとね。本当は、もう持っているのでしょうか？先ほど貴方はレインに対し、不自然に強気だった。つまりそういうことでは？」

そう言いながら、国王へと歩み寄って行く。ポーカーフェイスのまま、淡々と、そしてゆっくりと迫る彼から、相当なプレッシャーを感じたのだろうか。王の背中は冷や汗で濡れていた。

「……!!」

唇を噛みしめるような表情は、もはや「そうだ」と答えているのに等しい。

「あははは、嘘つきの下手ですね。流星は馬鹿正直な者揃いのクリア王国の長です。悪あがきはおよしなさい。今日はそれさえ譲っていただけのならば撤退してさしあげますよ。何よりも恐ろしいのは、プリキュアが存在ですからね。出現は阻止しなければならぬので

す」

「……ふは……ふはははは!!若き頭首よ!私の方が、1枚上手だったようだな。周りを見てみる!」

王はそう叫んだ。言われるがまま、視線を部屋中に向けてみるが「何か変わって……?……あー、二匹減ってますね。これはしてやられてた、どさくさに紛れて逃げましたか。奴らがそのクリアアートを持っていた、なるほど」

クラウドはわざとらしくため息をついた後、すぐに杖をレインへと向けた。

「追え!手段は貴様に任せる、とっとと回収してこい!」

「は、はあっ!只今!」

優しげな声色で、丁寧な言葉使いであった先ほどまでとは、人格そのものが根っこから変貌したような、荒々しい命令口調で指示を出されると、レインは慌てて外へと駆け出していった。

「面倒なこと、してくれましたねえ……。まあ、いいでしょう。手に入るのに少し余計な手間と時間がかかるだけです」

再び元の口調に戻ったようだ。もっとイライラしてくれば、冷静な思考力を失い、付け入る隙も生まれるというものだが、やはりそう簡単にはいかない。

「陛下。少しゆっくりお話ししましょう。ご安心ください、暴力は振るいませんよ」

クラウドはそう微笑むと、王の元へとさらに迫った。

—————

「なーんだ、てっきり成績順に決まるとばかり思ってたからさ、いや〜ひと安心だよ!」

校長先生や、来賓のおじいさん達の眠気を誘うありがたいお言葉をいただいた後、新生一同は各々の教室へと案内されていた。

そして私はすっかり上機嫌に戻っていた。それもそのはずである。

「ほんと、調子いいんだから。でも、成績順ってのは本当みたいだよ」

マナミは、後半は声を潜めながらそう言った。私に耳を貸すように

言い、さらに話を続けていく。

「ほら、あれ見てよ、例のテストで全教科満点だったって噂の、安楽さんよ」

『安楽加清』この街の誇る神童、とも称される存在だ。艶のある美しい紺色の、綺麗なストレートの髪の毛は、ポニーテールに結んでも、後ろ髪が背中の中あたりまでかかるほど長い。

「か、カスミちゃんが、私と同じクラス!？」

カスミとも長い付き合いになる。

といつても、単に家が近所というだけで、二人だけで遊んだのはおそらく6歳辺りの頃が最後であろうくらいに、絡みは少ない。

当然ではある。アホと神童ともなれば、住んでる世界というものが違うのだから。

「それにあれは『月野紅羽』ね。去年の全国統一テストではあの安楽さんに僅差に迫った実力者よ。……こうして改めて顔ぶれを見てみると、この私を含めて偏差値のお化けが集っているわね」

「自分で言うんだ……」

違和感のない自然な流れでさりげなく自慢を絡めてきたマナミに小声で突っ込みながら、今解説された二人を交互に見つめる。

燃え盛る炎のようなオレンジ色のパーマロングを持つクレハは、私からすれば非常に苦手な存在だ。マナミの解説通り、相当な頭脳を持った賢い子ではあるのだが、その他の偏差値お化け軍団とは違い、嫌味な部分があるからだ。

これまでの会話を見る限り、マナミにも謙虚さはないように見えるが、これはあくまで親友同士の会話の中で私をからかうために、彼女自身もわざとやっているようなものであるため気になるものではない。

しかしクレハのそれは能力の高さをおごり、常に周囲を見下している節があるので、時折カチンとくるものがある。噂では、偉いお医者さんのご令嬢だとか。それゆえ、小学生時代から、年相応のレベルをはるかに超越したお金を所持しており、これもあつてたくさんのお金を取り巻きを作っている。なるべく関わりたくないところだが――

兎にも角にも、私がこのクラスに配属された意味が少しだけわかった気がする。察するに――

「バランス調整かな」

机にベターつと顎をつけながら、ため息とともにそう吐き出した。学級を編成する立場である教師陣にまでこの扱いをされているという事実（あくまでも推測による解釈だが）が、胸にズサツと重く刺さる。

「トップクラスの子を集めたとはいえ、ほかの学級と差が付きすぎてもいけない。さしずめ、そういつた意図ってわけかしらね。まあまあ、何はともあれ私と一緒にするのは変わりないし、気にすることはないわよ」

「でもなあ、こんな頭のいい人が揃う授業に、私ついていける自信ないよ」

初日から、テンションはだだ下がりである。彼女の言う通り、親友と同じクラスなのは喜ばしいことだが、これはウサギをライオンの檻と一緒に飼育するようなものだ。ライオンである彼女らは、確かに特段気にすることなどないだろう。しかし、ウサギには耐え難いものとなるに違いない。いつ食べられてもおかしくはないのだから。

「はあく不安だ」

その日はずっと、どんよりしたままだった。

ちょうど同じ頃、輝ヶ丘の上空に突如どこからともなく謎の小型生物が現れ、飛行していた。

その生物は、人間の両手にすっぽりと収まってしまふほど小さく、羽もないのにどういうわけか難なく空を飛んでいる。

真つ白な頭部と胴体の大きさの比率は二頭身に近く、前者には、顔の割には大きなつぶら目玉や、少し目立つ縦長い耳。後者には申し訳程度の、こんなものでは歩行も難しく、片手だけでは何も掴めないのでは、と心配させるほどの小さな小さな手足がついており、その両手で、一生懸命にガツチリと、ハート形の装置のようなものを握っている。

彼らを見る人によっては、大きな尻尾を取り除いた『リス』にも見えるだろうし『ハムスター』と捉えることもできよう。詰まる所、齧歯類に近いシルエットをしているということだ。

「強い『キサトエナジー』に惹かれてやってきたラエが……すごく綺麗な街ラエね」

黄色い耳を持つ方がそう口を開いた。人語を喋ることができないらしいが、そのヘンテコな語尾が引つかかる。

「本当レティ。まるで、私たちの故郷のような……うう……」

ピンクの耳を持つ方は、街を見下ろしながら突如泣き出してしまったようだ。

「レティツ！泣いちやだめラエ！プリキュアさせ蘇らせれば、また元のクリア王国も取り戻せるラエ！」

「……そうレティね……。この街は、すごいキサトエナジーに溢れるレティ！きつと、このクリアハートの力を使いこなせる、プリキュアの後継者がいるレティ！」

「その通りラエ！……でも、早く見つけ出さないと、すぐに追っ手がー」

その言葉通りだった。彼らの後方に、漆黒の渦巻き状のゲートが出現し、その中から水色のギザギザした髪を光らせながら、レインが現れたのだ。

「見つけたぞ……！とつとつそのクリアハートを渡してもらおうか！」

「あわわわわ……もう見つけたレティ……」

「潔く渡せば、命は見逃してやる！さあ、こつちへ渡せ！」

レインは右腕を小型生物たちへと突き出した。彼らを睨みつける鋭い眼光からは、とてつもない威圧感を受ける。あの小さな生き物たちにとつては、この上ない重圧のはずだ。

「……い、いやラエー！」

キツと睨み返しながら、黄色い耳の生き物が抵抗する。

「手間かけさせんじゃねえぜ、雑魚のくせによお！」

レインは怒鳴るように、耳がツんざくほどの大きな声で叫んだ。そ

してその時、何かに気がついたようだ。

「……なんだこゝは……！王国に匹敵するキサトエナジーに満ちていやがる……！」

彼はそう呟きながら、左手をひたいに押しえつけた。とても苦しそうな顔色がうかがえる。

「息苦しい……いや、でも僅かながら『ウィザパワー』も感じる！これを利用しない手はないぜ！」

彼はそういうと、地上へと急降下して行った。

「た、助かったレティか？」

「いや、そうじゃないラエ！あいつは、この街でクライナーを暴れさせるつもりラエ……！レティツ！急いでプリキュアを探すラエ！」

ピピユンつと、黄色い方もまた、猛烈な速度で地上へと向かって行った。そのシルエットからは考えられない速度である。

「ラエティ！待ってレティ！」

レティツと呼ばれていたピンクの耳の同種も、黄色い仲間ーラエティーに続いた。

こうして、この謎の生物たちのいざこぎに、輝ヶ丘が、そしてヒカル等住民たちが巻き込まれていくことになったのである。

「じゃあ、また明日ね〜！」

「うん、バイバイ！」

マナミと一緒に帰っていた私は、自宅の前で彼女と別れた。入学式だけだったので、学校は午前中で終わったのだが、やけに長い1日に感じられた。

マナミの前では頑張って笑顔を続けたが、すでに不安でいっぱいであるためか、そのような感情を隠し切ることができなかつただろう。数時間前のワクワク感を返して欲しいところだ。

「ただいま〜」

暗い表情のまま、家の玄関を開けた。

「あ、お姉ちゃんおかえり！学校どうだったの!？」

ドタバタと慌てだしく駆け寄ってきたのは、彼女の弟、輝樹だった。

小学3年生で、入学式だった今日は在校生ということで休日だったのだ。

「ただいまテルキ。まあ、うん、普通だよ」

「大丈夫お姉ちゃん、具合悪くない？いつもみたいな元気じゃないよ？」

彼は心配そうに様子を伺っている。

「あ、ああごめんごめん！大丈夫だよ！いやあ私もついに中学生だな〜！あははは〜！」

無理やり笑いながら階段を駆け上がり、足早に自室へと向かい、そこに籠った。

「……………」

私ができるようにしていた頃と時を同じくして、ある民家の屋根に、ストーンと静かに着地した男の姿があった。レインである。

「ここからウィザパワーを感じるぜ！」

レインはそう言うと、右腕を空へと掲げた。その彼の掌を指して、徐々に紫色のオーラが集まり始めた。

これがウィザパワーの正体。簡潔に言えば、不安、絶望、悩みなどといった人間の心にある負の側面が具現化したものである。

「……………これくらい集まれば十分だぜ。……………召喚！クライナー！！この者の心にかかる雨雲を力に変え、絶望の雨を降らすのだ！！」

充填され、ハンドボールくらいの大きさに固まったウィザパワーを空に放り投げた。

『クライナーアアアア！！』

そしてそのパワーが上空で漆黒の、一つ目の人型の怪物へと変化し、再び地上へ降り立った。身長は実に三階建て建物くらいのものである、大きな怪物だ。

「な、なんだあれは!?」

「ば、化け物だ!!」

クライナーの存在に気がついた人々が、悲鳴をあげながら逃げ出していく。

「遅かったラエか……………」

その光景を見たラエティは唇を噛み締める。

「ど、どうしよう！このままじゃ、この街もクリア王国みたいに征服されちゃうレティ！」

「防ぐしかない、けど、どうやったらプリキュアの後継者に巡り会えるラエか……？」

人々のクライナーへの恐怖心から、更に多くのウイザパワーが生じ始めているようだ。

そして同時に、上空を分厚くドス黒い雲が覆い、大粒の大雨が降り出した。

薄暗く、大雨の降る中暴れる怪物、という光景は、人々の不安を加速させるには絶好のシチュエーションだろう。

『ウイザパワー』という、『暗い感情から生まれる力』をエンジンとするレインたちやクライナーにとって、非常に都合のいい環境となつてしまった。

「どんなわずかなウイザパワーが素材であっても、そこからクライナーさえ生み出してしまえば、あとは勝手に後天的に強くなれる。だから俺様は逃さないぜ。どんなにくだらな悩みでも、絶望でも、それさえ捕まえてしまえば最後、俺様のステージだからよ！」

そう高笑いをあげるレイン。流石に『將軍』と称されるだけはある。これほどまでに迅速に、侵略を遂行していくのだから恐れ入る。

その時、小型生物たちが持っていたクリアハートのうち一つがひとりでに光だし、彼らの手を離れ、高速で飛行し始めた。

「クリアハートが！まさか、プリキュアを見つけたラエか!？」

「きつとそうレティ！プリキュアとは最初から引かれ合う運命だったレティよ！」

「よ、よし！追うラエ！」

小さな生き物達も、見失わないよう、全力で後に続いた。

—————

そんな騒ぎも知らず、自室のベッドで横になり、ヘッドホンをしながらゴロゴロと漫画を読みながら時間を潰していた私のスマートフォンが突如として鳴った。マナミからの電話だ。

「もしもしマナミちゃん? どうかしたの?」

『どうもこうもないわよ! なんか外、すつごいことになってるんですけど! 今シャイニスクール辺りなだけで、映画の撮影か何かかな!? ヒカルちゃんもおいでよ! 怪獣みたいのが暴れてるんだよ!』

聞こえてきたのは、ハイテンションとなっていた親友の声だった。「か、怪獣!? 怪獣映画の撮影があるなんて聞いてないよ! でも面白そうだね! 私も行くよ!」

『あ、待って! ちよつとこれ、何かが変……! ま、まさか本物……?』
急に声色が変わった。彼女の周辺で起こっている音を拾ったのだろうか、電話越しに、物が崩れる音や、人々の悲鳴が聞こえてくる。

「……そ、そんなく? 怪獣なんているわけないでしょ?」

『で、でも!? キヤツ!』

彼女のその悲鳴を最後に、電話は切られた。

「ちよ、マナミちゃん!? ねえつてば!」

通話が途切れ、画面が暗くなったスマホを見つめる顔が、少しずつ強張っていく。そして遂に光山家の近所でも、今電話越しに聞いたような音がなり始めた。その『怪獣』がこちらへと近づいている…?

だが、彼女がいたのは大手進学塾シャイニスクール周辺、ここから徒歩で20分ほどの場所になる。撮影ならば、そのような広範囲に及ぶのであれば近隣住民には当然通知が来ているはずだし、第一速度が尋常じゃない。1分にも満たなかった通話の間で、この近くにまで到達しているということになる。

「ま、まさか本当に!」

ヒカルはとつさにカーテンを開け、窓の外をみようと身を乗り出した。

見える光景は、まるでこの世のものではなかった。黒い雲に覆われた空から雷を伴った激しい雨が降り、そしてあちこちから黒煙が登っている。つい先ほどまでは、いつもの光景だったはずだ。

「な、なにこれ……! 一体どうなって!」

『クライナアアア!!』

「っん!」

聞いたこともない鳴き声のような奇声に、思わずビクツと体を震わす。

「か、怪獣……なの……？」

その声の主はここからはまだ見えない。しかし、それは確実に存在する。それだけは確かなことだった。

「……！お母さんは？て、テルキも！」

そしてようやくハッと我に返った。母はまだ仕事から帰って来ていないが、弟は隣の部屋にいるはず。今は長女の自分が動かなければ――

本能としてなのか、そのような使命感を抱いた私はすぐにスマホと財布をポケットに突っ込み、弟の部屋へと向かった。そこには、恐怖のあまり泣き出してしまっている輝樹の姿があり――

「うわあああん！お姉ちゃん!!」

「テルキ！大丈夫だから、私と一緒に！」

泣きじやくる弟を背中に背負うと、すぐに家の外へと飛び出した。

「……まだ行けない！マナミちゃんも一緒に……！」

静かに眩くと、逃げ惑う人々とは逆の進行方向――怪獣がいるとされる方であると同時に、マナミがいたと思われる場所を目指して走り出していた。

あまりに無謀な自殺行為とも取れる行動だが、これも本能的なものだったのか、身体が勝手にそう動いていた。あのような電話の途切れ方をしたのだ、心配しない方がおかしい。親友の無事をこの目で確認し、かつ共に逃げる。そういった本能が身体を動かしていた。

――

しかしあのハート型のアイテムは、移動中に運悪くレインの視界に入ってしまったのだった。

「なんだあ？……あれはクリアハートか……。なんでこんなところに……まあいいか」

レインはそう言い、高速飛行移動中のその装置を掴まんと、腕を差し出す。

「これで俺様もさらに出世できる……！スノウを部下に従え……いや、ストームすら超え、クラウド様の側近にもなれるぞ……！」
ニヤニヤと笑いながら、ブツブツと唱える。そして同時に、伸ばされ続けていた腕は、今にもクリアハートを手中に収めようとしているところだった。

突然、クリアハートがその場でピタリと静止し、同時に再び眩い閃光を発した。レインは予想外のことに驚愕し、思わず後ずさりまでしつつも、すぐに身構える。

「な、なんだ!?あの妖精どもの仕業か!？」

妖精とは、あの小さな生き物達のことであろうか。

真白き光を点滅させながら、クリアハートは再度動き始める。

「ま、待ちやがれ！」

「待つのはお前ラエー！」

そこによくやく追いついてきたラエティが、所持していたもう一つの同装置からエネルギー弾のようなものを発射し、水色髪の將軍を牽制する。命中こそしなかったものの、彼は一瞬足を止め、回避しようと身体を仰け反らせたため、バランスを崩してしまった。

更に、再び飛行を始めていたそれも、彼ら妖精の元へとたどり着き、そこで完全に運動をストップした。

「何!?プリキュアでなくても、力を使えるというのか!？」

戦闘経験の豊富なレイン將軍でも、これは予想外の出来事だったようだ。しかし――

「だが、なんのことはねえ。チビ妖精ごときでは、この程度の攻撃しかできないようだな！」

流石に將軍の肩書を持つ男だ。すぐにそう分析し、まずは邪魔者である妖精達を潰さんと、右手のひらをいっぱいに開き、そこから水色の光弾を生み出し、投げつけ始めた。

「うわああ!!」

二匹の『妖精』と呼ばれた生き物とたちは慌てて近くの建物の陰に隠れこれをやり過ごす。

「つたく、弱いくせに俺の手を煩わせ続けやがって！ムカつくんだよ！そういうのはよー！」

「どうしよう？私たちだけじゃ、すぐにやられちゃうレティ」

「クリアハートはこの辺りで動きを止めた……だからプリキュアが近くにいるはずラエ。大丈夫、すぐに形勢は一発逆転するラエー！」

プリキュアーどんな闇をも切り裂き、世界に、そして人々の心に希望の光を灯したときれる伝説上の存在。もちろん、この妖精たちだって実物を見たことはない。それでも、彼らはその伝説を疑うことなく信じている。

強く信じていれば、それは現実となる。

クリア王国にて伝承され続けている教えだ。私たちからすると神頼み、他力本願な印象も受ける言葉だが、国民に勇気を与えるものとなっている。

彼らが本気で信じていたからこそ、その伝説の存在が、再び現代に蘇るという結果を招くことができたのかもしれない。私は、後に彼らからその教えの言葉を聞いた時、そう思った。

「な、なにこれ……」

そしてちょうど、足を震わせながらも街を無我夢中で駆けていた私は、この小型生物と、この街に似合わない、明らかに浮いた格好をしている奇抜な髪をした長身男とが対峙している、この空間に鉢合わせしてしまったのだ。

「な、なんでまだここに人間が!?早く避難するレティ！」

レインはこの街に降り立って以降、大きな動きをしていない。

つまり、ここがクライナーの生まれた場所なのだ。付近の人間は全て避難し終えていると思いついていた妖精たちは、目を丸くしていた。

「ハムスターが喋った!?!」

もつとも、目を丸くしたのはこちらも同じだったのだが。

「そんなことどうでもいいレティ!てゆうかハムスターじゃないレティ!とにかく早く!」

「い、いや!クリアハートはこの場所で静止したラエ!そして、この人

間は少女……。一応の辻褄は合う……。!!物は試しラエ!この子がプリキュアかもしれない!」

ラエティはそう叫ぶと、クリアハートを私に向かって投げつけてきたのだ。

「え、ちよ、なに!?!」

かかえる弟のテルキを落とさないよう、片手で慌ててそれをキャッチする。

「な!?!まさかあの小娘が、プリキュアの後継者!?!」

レインが驚愕の声を上げる。

「いやいや、なにになになに!?!」

そもそも今ここに鉢合わせたばかりの私を置いてけぼりにして話が進みすぎである。

「なんでもいいラエ!今は君に賭けるしかないラエ!君もこの街の民だろう!?!街を救いたいという想いはあるはずラエ!その想いがあれば、きつといける!」

「それは……あるけど!でもなにが!?!」

「だから、プリキュアに変身するラエ!あいつとクライナーを倒すラエよ!」

ラエティの方も焦りからか、少し苛立っている様子だった。

「だから、さつきから言ってる、そのプリキュアってなに!?!」

なんの状況も理解できないまま、こうして、私という個人が、これから始まる長い戦いに巻き込まれていくことになったのだ。

2話へ続く

第2話 「弾ける心! その名も……」

第2話 「弾ける心! その名も……」

「だから、さつきから言ってる、そのプリキュアってなに!？」

わけがわからない。街を救いたいという想いは当然あるに決まっている。だがこんな、片手でも持てるような小さな、それも可愛らしいハート型の、女の子用のおもちやみたいなのは当たり前で、困惑することくらいしかできないのは当たり前だ。

「……あの小娘……隙だらけだな。なんにも理解できていない様子だ。今なら……強奪できる!」

レインはそう静かに叫ぶと、ヒュンツと、私の方へと一瞬で詰めてきた。

「ああーやばいらエー!」

「キャッ!」

私は輝樹を守るように、その場にしゃがみこんだ。

同時に、私を囲むように今度はピンク色の、ドーム状の光を出現した。その光に、ガチンという音を立てレインは弾き返されてしまう。

「な、なんだ!？」

「……助かった……?」

いよいよ何が何だかわからない。このバリアーみたいな光が、あのおもちやから出てきたというのか。

「あの娘を守った! やっぱり、あの子がプリキュアラエー!」

「で、でも私にはただの人間のひとりには見えなレティよ? 特別な存在にはとても……」

「ええい! みんなしてつべこべとうるさいラエー! 違った時は次を探すまでラエー! やってみないことには何もわからないし、始まらないラエーよ! 君、名前は!？」

黄色い耳の妖精! ラエティがそう言いながら、ストンと私の肩の上に飛び乗った。

「あなたね、人に名前を聞く時はまず自分が名乗ってからするのが常識だよ?」

「キーツ!なんでよりもよってこんな面倒臭いのが……!ラエティ!僕はラエティラエ!そしてあっちのピンクのがレティツ!」

かなりイライラしている。余計な一言を言ってしまったか。

「ラエちゃんにレティちゃんね。私はヒカル、光山輝」

「……その変な呼び方に突っ込みたいところラエが、今はスルーしていてやるラエ!ヒカル!今のこの瞬間から、僕と君はバディラエ!とにかく、僕の指示に従って欲しいラエ」

「……さつき、私にプリキュアってやつに変身して、なんとかを倒せって言ったよね?……そうすれば、この街を……マナミちゃんを助けられるの?」

私は改めて尋ねた。そこが一番重要だ。

「そのマナミってのは君の友達ラエか?」

「うん。とっても大事な」

「変身することができれば、きっと助けられるラエ。もし君がプリキュアなら、友達やこの街は愚か、世界だつて変えられる。それだけの力が眠っているということなんだラエ」

「……わかった。レティちゃん、テルキを……弟をお願いしてもいいかな?」

「お安い御用レティ!」

私は、背負っていた弟を、ピンクの妖精に預けることを決心した。つまりは――

「覚悟、決めてくれたみたいラエね」

「正直わかんないままでけど、今は私がやるしかないんでしょ?なら、腹くくるしかないよ!」

「……よくぞ言ってくれたラエ!クリアハートを利き手で握って、胸に軽く触れるくらいに持つてくるラエ!そして叫ぶラエよ!『プリキュア・エキサイティングファイバー!』」

私は、この妖精の指示した通り、右手にアイテムを握り、その動作を行った。

「プリキュアア！エキサイティングファイバー!!」

その瞬間、私は黄金の光に包まれた。体の奥底から、これまでに感じたことのない高揚感、そして力が漲ってくる。

「こ、このキサトエナジー……！馬鹿な!? たった一人の小娘から、この量だとお!?!」

レインは再び起こった頭痛に思わず手を頭に当てながら、私から距離を取るように後方へとジャンプした。

私はというと、身を包む衣服が先ほどまでの制服から、少なくともこれまでの人生の中では、アニメ番組でしか目にしたことのない様な、黄色いフリフリのド派手なものへと変貌し、毛量も色はそのままに倍以上に増加。何も手を加えていないのに勝手にツインテールになっている。

スカートも短く、身軽そうではあるが、動くたびに色々と余計な心配をしなくてはいけなさそうな格好となってしまうている。

『弾ける心！キュアスパーク!!』

そして無意識のうちにそう叫びながら、左膝を右足の方へと僅かに曲げ、同時に右腕を顔の下半分を隠す様に左斜め上に45度の角度で突き出し、左腕の肘を直角に曲げ、その突き出た右腕と三角形を組む様な姿勢のポーズングをとっていた。

『……な、なにこれかわいいお洋服……けどポーズだっさ!』

私は慌ててポーズを解き、変貌した自分の姿をまじまじと見つめた。

「キュアスパーク！ヒカル！やっぱり君は正真正銘、プリキュアだったんだラエー!」

『てゆうか髪！せっかくお洒落な髪型なのに、クルツクルのままじゃん！台無しだよ!』

ラエティの言葉をよそに、指先で髪をいじりながら嘆いた。

「……こいつひよつとして天然……いや、アホラエか?」

だが、その眩きだけは聞き逃さなかった。

『誰がアホですって!?!もう一度言ったら、あのお兄さんよりも先に

ぶっ飛ばすからね!』

「わ、悪かったラエ……」

先ほどまでは立場が上だった妖精であったが、まるで逆転したかの様だ。プリキュアを怒らせたなら、シヤレにならないことになるということだろう。

その裏付けに、実際はまだなにもしていないというのに、レインの方も引きつった顔をしていた。それだけ恐れられている存在なのだろうか。

「こ、これがプリキュア……!なんてキサトエナジーだ……!」

彼はそう震えた声で呟きながら、後ずさりをする。

『……あなたがこの街をおかしくしちゃったんでしよう!? マナミちゃんは無事なんでしょうね!? そう、私がプリキュアよ! わかったらとつととおうちに帰りなさいっ! 的なの?』

格好良く台詞でも決めようかと思っていたが、ちぐはぐで変な文脈となってしまう。なかなか、咄嗟には出てこないものである。

「なんかデジャブなセリフレティ……」

「レインの奴もビビってるラエ! スパーク! やっちやうラエ!」

『よーし!』

腕をブンブンと振り回し、身構える。

変身前とは明らかにテンションが違う。私自身に経験のないことで例えるのも如何なものかとは思うが、酒に酔うのと似た感覚だろう。確かに動いているのは我が身体、喋っているのも我が口なのだが、どこか自分じゃない様な気もする。

これがプリキュアに変身するということなのだろうか。それとも、先ほどからの兄さんの連呼している『キサトエナジー』というものが関係しているのだろうか。

いずれにせよ、今ならたとえ算数の難問であつても攻略できそうな気がする。つるかめ算だろうが植木算だろうがなんでもこいだ。それだけ高ぶっている。

「勘違いしてんじゃねえぞ! これは武者震いだ! 天下の将軍、レイン様が小娘ごときにビビってたまるか! クライナー!! 捻り潰してしま

え！」

『クライナアアア!!』

どこからともなく、先ほど聞いたのと同じ奇声をあげる、ひとつ目の怪物が現れた。これこそが、怪獣だの何だのと騒がれたモノの正体なのだろう。予想以上に不気味で、どちらかという妖怪に近い。今度はこちらが気圧され後ずさりする番だった。

『こ、怖くなんかないよ!あれをやっつければ、みんな助かる……!なら、やるしかないよ!』

足を震わせながらも、気づけば私は地を蹴り、宙へと躍り出ていた。

『はああああ!!』

そして、振りかざした拳を勢いよく繰り出す。

『クライナアアア!』

同じくパンチを浴びせんとしていた怪物Ⅱクライナーの腕と、空中でぶつかる。その衝撃波がコンクリートで整備されているはずの道路を抉りながら、広範囲に渡った。

『こ、これが私の力……?』

私は自分の右腕を、口をポカンと開けながら見つめることしかできなかった。重量級格闘技の男性金メダリストですら、一撃でリング外に吹き飛ばせそうな腕力だ。これなら――

『勝てる!』

足の震えはすっかり治っていた。この力が私に自信を与え、その自信が恐怖心や不安を跡形もなく何処かへと飛ばしてしまった様だ。同時に身体の奥底から、さらにパワーが湧き上がってくる感覚を覚えた。

『ゆ、油断はしちゃダメラエよ!』

ラエティの忠告に無言で頷くと、そのまま空中で身体を捻らせ、奴の脳天にかかと落とすしをお見舞いした。

『プリキュア天空落とし!』

この一瞬でテキストかつ適当に考えたこの技の名前だ。次に使用する頃には忘れているかもしれないが。

『ク、クライナア……』

一瞬間が潰れた怪物は、そのまま頭から地面にクレーターを形成させながら倒れこんだ。

「お、おい！しつかりしろ……うん？」

レインはクライナーのお尻を蹴り上げながら、ふと何か異変に気がついた様だ。

「雨が止んで……いや、晴れている……？」

私も、そう言われるまで気がつかなかった。先ほどまで、輝ヶ丘全域に降り注いでいた雷雨が止んでいるどころか、雲まで消え去り、再びお日様の光が暖かく照らし始めていたのだ。これにすら気がつかないとは、やはり今のテンションはおかしい。

そして異変は、クライナーにも生じていた。先ほどまでと比べても、明らかに身体が小さく、いや、しぼんでいるというのが的確か。もう威圧感は微塵もなく、枯れかけの草花の様である。

「スパーク！今ラエ！必殺技で決めるラエよ！」

ラエティが叫んだ。

『どうやるの？』

「胸に手を当てるラエ！クリアハートが、力を貸してくれるラエ！」

『そういえば、あのおもちやはどこに消えたの？』

ここで思い出した。変身の際に使用したあのクリアハートというアイテム、どこを探しても見当たらないのである。

「後から色々説明してやるから、とっとと決めるラエ！友達助けるんじゃないかったラエか！」

『わ、わかった！』

言われるがままに、変身時の様に胸に手を当てた。

『闇に呑まれたあなたの心に、ワクワクを取り戻してみせる！』

またもや無意識にセリフが放たれるとともに、胸に当てていた右腕が虹色に輝き始めた。その腕を、クライナーへと向け、一気に力を込め、虹色のオーラを解き放つ。

『プリキュア！ミラクルスパークレインボー！』

オーラを放つ、というよりは、レーザービームを撃ち込んでいる様な感覚だった。虹色のビームは瞬く間に、クライナーの全身を飲み込

んだ。

『……タノ……シイ……ナア……』

そう呟きながら、怪物は消え去った。

『雨のち虹ープリキュアがいる限り、止まない心の雨もない!』

ビシツとレインを指差しながら、私は自動的にそう続ける。もはや私自身がロボットになったかの様な感覚である。

「ちっ……あーあ、しけっちまった。今日のところは撤収してやる! 覚えていやがれ!」

レインは捨てセリフを吐きつけると、そのまま姿を消した。

上空には、輝く虹がかかっていた。

—————

「マナミちゃん! マナミちゃん! 大丈夫!」

親友は、ただ気を失っていただけの様だ。今は、私の膝の上で眠っている。

「ん……? ヒカルちゃん? ……私、何があつて……?」

私の呼びかけに反応し、ゆっくりと目を開けるマナミ。

あの後どういうわけか、倒壊したはずの建物は蘇り、発生していたはずの火災などは綺麗さっぱりに収まり、輝ヶ丘はクライナーが出現する前の、いつもの光景を取り戻していた。これにも、プリキュアの力が関係しているのだろうか。

人々も、彼女の様にただ気を失っているだけ、という結果になっていた。もちろん、あの時に負傷した人だつていたはずだ。それほどの騒ぎになっていたのだから、いないわけがない。

それでも、全ての人的被害が『失神』に上書きされるーとかなんとかを、妖精たちが説明していたが、私にはよく理解できない。こればかりは私でなくても不可能はずだ。多分。

しかし怪物が暴れた、という記憶そのものから失っているわけではなく、実際に実物を見て、その姿形まで覚えている人も多い様だ。

怪物が暴れていた気はするが、誰も怪我ひとつしていない。人に

よっては、ここで何かの異常に気がつくかもしれない。もし今後、プリキュアの出番が増えるとしたら、どれだけ勘が鈍い人であっても、このおかしな現象には首を傾げずにはいられなくなるだろう。

そしていつか必ず、誰かがプリキュアの存在に気がつく。善意からか悪意からかは人によるだろうが、その正体まで探ろうとする輩も必ず現れる。そこからが大変だぞ、とも、これまた妖精たちが述べていた。

「いやあ無事でよかった。電話いきなり切れるから心配したじゃない！」

「あーごめんごめん。そこで気を失ってたみたいね……。それにしても、奇跡的になんともなかったみたいでよかったわ。入学式早々に怪我して入院とか困るからね？よかったよかった」

「そ、そうだね……。…」

とはいえ今は、この街で誰も被害にあっていない、というこの上書き(?)された事実には安堵する他ないだろう。ややこしい仕組みやらなんやらは、私の様な中学生になったばかりの女子が気にすることではない。

怪物は確かにいた。けれども私がプリキュアとなり、親友を、人々を、街を救った。それもまた揺るがない事実だし、それだけで満足ではないか。

しかし私もつい数日前まで小学生だった身分だ。妖精からは『どんなに信用できる近親者や友人であっても、絶対にその正体をバラすな』との忠告を受けてはいるが、これは自慢したくなるもの。

なぜなら、周囲からは抜けてるだのアホだのとの酷評を受けることすらあるこの私が、みんなを救ったのだから。それも漫画みたいな魔法少女みたいな格好に変身して、だ。いつそのこと道端で路上ライブをする感覚で変身のお披露目でもしてスターになりたい気分である。

しかし、それこそ本当にお披露目でもしなければ誰にも信じてもらえないだろうし、下手をすれば私の天然キャラが電波系キャラへと進化を果たし、さらなる笑い者になるだけである。

それにあの変身、いくら光に包まれているとはいえ、一瞬全裸になるにも等しい感覚も覚える。流石の私も公衆の面前でそれを、積極的にやろうとするほど抜けてはいないし、そういう趣向もない。

忠告があるうとなかろうと、結局はバラさないのではなく「バラせない」のだ。

彼女を家へと送り届けた後、私も自宅へと戻った。弟は、レティツが先に帰してくれていた。親もまだ帰宅前で、テルキ本人も気を失ったままであるという都合の良い条件が揃っていたので、それほど難しくはなかったらしい。

「さて、妖精さん。質問がたくさんあります！」

母親の帰宅後、入学式そのものは無事に終わったこと、マナミと同じクラスにはなれたがレベルの高いクラスに配属されてしまったことなど、今日の出来事の一部を話し、夕飯とお風呂を済ませ寝巻きに着替えた私は自室で、二匹の妖精を前に手を挙げた。

「答えられる事なら答えてやるラエ」

「えつとまず、そもそもラエちゃんとレティちゃんは何者？あの奇抜なお兄さんも何者？」

「その呼び方やめるラエ……僕は一応雄ラエよ」

ラエティは結構、冗談抜きで嫌がっている様子だ。

「奇抜なお兄さんってレインのことレティか？あいつは帝国カバークラウダーの将軍。とつても強くて怖いやつレティ。私たちの住んでる、クリア王国って国も、奴らに侵略されてしまったレティ。だから、国を取り戻すために、カバークラウダーの連中と渡り合える……いや、かつては封印までしたともされるプリキュアを探すために、こっちに来たレティ」

「……えつ、私ってこれから、そのなんとかって帝国を相手にしなくちゃいけないの!？」

顔が引きつる。今日の戦いの結果から、悪い奴のひとりや二人ならやっつけられる自信は生まれていたが、敵が国家レベルとは予想だにしていなかった。しかも『帝国』ときた。もうすでにやばそうである。

「まあ、そうなるラエな。プリキュアにしか奴らと戦うことはできないし、僕たちの国を救ってもらうこともできない」

「救ってもらおう立場にしては、ちよつと偉そうにしすぎているんじゃないですか？」

私は眉毛をピクピクと動かしながら、ずっと上から目線の黄色い妖精をなじる。

「他人事だと思っっているのなら大間違いラエよ。現に、レインはこの人間界に現れた。今回は僕たちを追ってきただけ、と捉えることもできるけど、クラウドのことラエ。必ず、この世界も手中に収めようとしているに違いないラエ」

「……でも、私というそのプリキュアの後継者は見つかったわけじゃない。あなたたちも見ていたでしょ、このキュアスパークの戦いっぷり。怖がる必要はないよ！」

「そんなに甘くはないラエ！あの程度のクライナー、プリキュアならば圧倒できない方が問題ラエよ！……君がなんでプリキュアとして選ばれたか、少しだけわかった気がするラエ」

ラエティは怒鳴ったあと、呟くようにそう続けた。

「……どういう意味？」

「そのお気楽な性格、確かに君みたいなあホは良くも悪くも、キサトエナジーに満ちているラエ」

「この！アホって言ったね!?また私を馬鹿にして！」

「事実ラエ」

「くっ……！」

私とこの生意気な妖精がキツと睨み合う。それを見かねたレティツが、慌てて口を開く。

「ヒ、ヒカル！まだ質問、あるレティ？」

「そ、そうだ！その、キサトエナジーって何？あのお兄さんもたくさん喋ってたけど」

くだらない喧嘩をしている場合じゃない。これも重要なことだった。

「不安や絶望、悩みなどといった、心にある負の力……すなわちクライ

ナーやレインたちの力の根源である『ウイザパワー』と対をなす、希望や夢といった心をワクワク、楽しくさせる正の力レティ」

「プリキュアは、そのスペックにキサトエナジーが100%関わる存在ラエ。故に、正の力が強い者ほど、強いプリキュアになれる。もちろん逆も成り立つラエ。それに戦闘中は、変身者の心臓となるクリアハートが興奮作用を高め、無意識のうちにキサトエナジーが嫌でも高まるような仕様にもなるラエ」

変身者の心臓、とは文字通り、物理的な意味だろうか。それならば確かに、胸に手を当てる動作や、変身後に見当たらなかった理由にもなる。

「な、なんとなくわかった。でもちよつと情報量が多いよ……。今日はこれ以上聞いても頭に入らなさそう。もういいや」

私はパンクしそうになる頭を押さえながら、ベッドに横になった。

「……この街、輝ヶ丘って言ったラエ？この人々からは、本当に強いキサトエナジーを感じる。僕らの故郷、クリア王国そっくりラエ……」

突然、ラエティが声のトーンを変えてそう切り出してきた。私は黙って、耳を傾ける。

「……奴らは強いキサトエナジーを感じると体に異変が起こる。だからこそ、それが奴らを寄せ付けないための最強の結界のような役割になるはずだったラエ。でも、現にクリア王国は侵され、この街でも活動できていた。何か引っかけがあるラエ。……色々小言は言い続けるだろうけど、それでも今頼れるのはヒカルだけラエ」

「……まあ、他人事じゃないってのはよくわかったし、あのバブリー兄さんと違って、戦うよ。別に、あなたみたいな生意気な妖精を助けるためじゃなくて、私の生まれ育ったこの大切な街と、大切な友達や家族のためだから」

私は小声ながらも、はつきりそう言い切った。

「君がプリキュアになれた理由、またひとつわかった気がするラエよ」

その言葉を聞いて、妖精は、今度は少し微笑みながら言った。

「その決断力と意思の強さ。戦士としては欠かせない大切なことラ

エ。今日だって、本当は怖くて、逃げたかっただろうに、友達を心配して、わざわざ危険な場所めがけて走ってきた。そういう行動ができる若干小学生はそうはいないラエ」

「……ところで……バブリー兄さんって誰レテイ？」

さっきの私の私の台詞の中に出てきた謎の名詞が気になったのか、レテイツが訊ねてきた。

「レインって人に決まってるでしょ？うちのお母さんが若い頃は、バブル？かなんかであーゆう派手な格好の人が多かつたって聞いたことあるし！」

「……人間って生き物は、みんなすぐに人にニックネームをつけたがるレテイか？」

「さあ？みんなかは知らないけど、でもその方が呼びやすいし覚えやすいじゃん！」

「知らないところで変なあだ名つけられてそれで怖いラエね……」

とにかく長い1日だった。明日から通常授業も始まるので、もう寝て備えなければならぬ。

しかし、戦うと宣言はしたものの、敵さんにはなるべく放課後か土日祝日に出てきてもらいたいところだ。

平和のためとはいえ、授業中にふと抜け出すような非行少女と思われたくはないからである。

—————

ここは帝国カバークラウダー首都。

上空を分厚い雲に覆われ、激しい突風が吹き荒れる、高層ビルの建ちならぶ街の大通りを、レインは歩いていた。目指している場所は、この先にあるもっとも大きな建物、レイン含む幹部の拠点である城だ。

「おお、レイン将軍が戻ってきたみたいだぞ？」

「でも手ぶらだ。まさか、失敗したのか？」

すれ違う民達が口々に、小声ではあるが、将軍をチラチラと見つめ

ながら囁いている。どうやら、既に人間界に赴き、クリアハート強奪の命を課せられているという事は知れ渡っていることらしい。

それもそのはずで、彼らが党首クラウドは、その部下に課す命令のほとんどを、一般国民レベルにまで開示しているのだ。

普通には考えられない、この異常とも取れる方針。だがこれが、幹部達をうまく縛り付けているのだ。

必要以上かもしれないが『失敗は許されない』という使命感が強く発生するのも勿論、党首に向かつては反抗心が生まれにくくなり、統率が取りやすくなるというメリットまである。

むしろ党首への不信感や不満などが募りそうなやり方ではある。しかし、その中でも任務を遂行できるものにとってはなんのデメリットもなく、遂行できないものにとつては、ただの逆恨みにしかならないからだ。加えて、その任務の内容も国民に知られているとなると、その動機から謀反を起こそうとでもすれば付いてくるものがないどころか、窮地に立たされるのは自分ということにもなる。

クラウドはこれを上手く利用しており、課す任務も、その者のレベルに合わせた、実現可能な範囲にしている。無茶振りなどはまずあり得ない。そしてその優しげな雰囲気、市街地にも積極的に顔を出し、民に声をかけて回るなどの活動から深く尊敬されているため、幹部外から反感を買うというのも考えにくい。

クラウドにとって、理想的な支配ができる国が完成しているのである。

単純に彼と拳を交えたところで、誰も勝てるわけがないというのも大きな理由だが。

「レイン将軍。失敗したのはその身なりを見ればわかります。しかし、天下の将軍がこのざまだなんて、何か大きな理由があるのでしよう。まあ、察しはつきますが」

城内にたどり着いたレインは、早速クラウドの構える部屋へと迎え入れられ、ここで彼の前に跪いていた。

「……おっしやる通りです。それも、クラウド様の恐れられていた最悪の展開となつてしまいました」

「プリキュアですか。こんなに早く蘇るとは思ってもいませんでしたよ。クリアハート、アレには、自らその力を使いこなせる者を探し出せる能力でも備わっているのでしょうかね。そうでもない、あまりにもあちらにとつて都合が良すぎる」

「で、ですがご安心を！今回は妖精から奪い取るのが目的だったため、油断して弱いクライナーを作ったのが敗因！次は奴を本気で潰します！」

レインは慌てて弁明した。

「レイン！見苦しいねえ言い訳かい」

横から口を挟む者が現れた。真っ白な、ボリユームのある長い髪を、後ろは背中まで、前は目が隠れるほどに伸ばした、白い、毛皮のような質感漂うマントともコートとも取れる上着に身を包んだ、雪女のような風貌漂う女性だ。

「ス、スノウ！今は俺とクラウド様が話している！黙っていろ！」

「いや、スノウ。あなたにもいてもらいましょう。遅かれ早かれ、出番はあると思いますからね」

クラウドが許可を出したため、スノウと呼ばれた女もレインの隣で跪いた。

「そ、その必要はない！…です！俺だけで十分！この女の出番など！」
「ほう、それは頼もしい。ですが、二人で協力してもらわなければならぬ展開にもなりうる。というのもですね。彼の証言によると……いえ、ここからは直接話してもらいますか。ストーム、あのお方をこの場へ」

「承知」

クラウドはその脇に控えていた2メートルは優に超えているだろうスキンヘッドの大男に、そのような指示を出した。大男は、相撲取りのような図太い体を揺らしながら、大きな足音を立て歩いていく。その男が連れてきたのは、他でもない、鎖に繋がれたキラメリアン王だった。

「これはこれは王様じゃねえか！けけっ、良いザマだぜ！テメエのせいで俺は……！」

レインは今にも殴りかかりそうな姿勢である。

「およしなさい。……陛下。先ほど私に話してくれたことを、彼らにもお願いします」

「……ふん、貴様ら風情が調子に乗れるのも今だけだ！伝説上、プリキュアは2人いる。しかも、複数の技や姿があるとのことだ。貴様らが何を企もうと、必ず勝つのは光、プリキュアだ！」

キラメリアンは強い口調で、はつきりと叫んだ。

「……らしいです。私が目にした伝説の書物でも確かに似たような記述があつたので、嘘ではないでしょう。なので、レイン将軍。あなたに実力がない、というわけではなく、単純に1人じゃ無理です。この私とて、苦勞するかもしれない案件だ」

「しかし、囚われの身というのに口数の減らないジジイですね。もう必要なことは話してもらつたのでは？処分してもよろしいですかね？」

スノウが苛立った口調でそう訊ねる。

「あなた方はどうしてそう血の気が盛んなのだ。落ち着きなさい。さて、本題はここからですよ。今からあなた方に、仕事を振ります」

クラウドのその言葉に、その場に佇む幹部たちの顔が強張る。

「レインは引き続き人間界でお願いします。クリアハートはもう一つある。次のプリキュアが目覚める前に回収できれば最高ですが、まあそう上手くはいかないでしょう。さつきあなたは自信たっぷりに潰せるといった。信頼してますよ。奪い取ってきてください」

「はっ！必ずや、ご期待に応えます！」

レインは敬礼し返事をする、すぐに部屋を出て行った。

「スノウにも、場合によっては人間界に行ってもらうかもしれませんね。というのも、探し物をしてもらいたいので」

「探し物、ですか」

「はい。古代、プリキュアと闇の勢力は、様々な兵器を利用し戦つたらしい。この私のカオスロッドやクライナー、プリキュアのクリアハートは、そのほんの一例。これを『エンシヤント・ウエポン』としましよるか。陛下の話した、複数の技や姿、というのにも関係があるかもし

れない。もちろん、闇の勢力が使用していたというモノも欲しいですし、敵の戦力を削ぐことも大事。手がかりなど一切なく、わかっているのは各世界に散ったということだけ。大変だとは思いますが、頑張ってもらいますよ。探し物なら得意でしょう?」

「わかりました、お任せください」

こちらも自信ありげに返答した。そしてレイン同様、すぐに仕事に取り掛かるために部屋から姿を消した。

「……ああ、そうだストーム。レインに渡しそびれたものがあるので、後から代わりに渡してください」

そう言いながら、大男ストームに、植物の種子のような小さいものを手渡した。

「カオスシードか?悪いが、レインに渡したところで……」

「いいから、お願いしますよ。では、解散」

「……承知」

ストームは、部屋中に突風を巻き起こしながらその姿を消した。同時に、外で吹き荒れていた風もすっかり治ったのだった。

—————

「昨日僕は、正体はバレちゃダメと言ったラエ」

「……うん、そう言っていましたね」

眩しい太陽の光が、カーテンの隙間から差し込んでくる。今日も気持ちのいい朝のはずだ。

とはいえ、私が目を覚ますなりすぐに、先に起きていた妖精が目の前で真剣な顔をしているのだから、やはり気持ち良くはない。

私はまだ寝ぼけたまま、目をこすりながら彼の話に合わせる。

「でも、もう1人のプリキュアは探さなくちゃいけないラエ。それも、条件はだいたい揃っている。僕も詳しくは知らないけど、間違いないのは、15歳以下の少女ってことラエ」

「へえ〜」

まだ脳が起きていないのに、また小難しい話をするつもりかこいつ

は、とも思っただが、振り切る元気もないため、とりあえず聞いておくことにする。

「つまり女子中学生！この街の住民はみんな強いキサトエナジーを持っていてから、中学校に行けば、たくさんの候補生がいるはずラエね」

「そだね〜」

大きくあくびをしながらベッドから起き上がり、朝ごはんを食べるために1階に降りようとすする。

「というわけラエ。今日は僕とレティツも学校に付いていくラエ」

「おくそれはよか……ええ!？」

まだ顔も洗っていないというのに、スツキリ目が覚めた。

「い、今なんと?」

「だから、学校に付いていくって言うてるラエ」

「いやいやなにに?喋るハムスターを見せびらかしながら、はいー!プリキュアの仲間募集中で〜す!とか言うわけ?冗談やめてよ!」

そんなことしたら、ただでさえ昔から天然系だった私が電波系に

……

「流石にそうはさせないラエ。まあ、探すのは僕とレティツの仕事だから、ヒカルは普通にしてくればいいラエ。正体を明かしているのは、見つかったもう1人のプリキュアにだけ、ラエ」

「ペット持ち込みは当然禁止なんですけど」

「ペットじゃないラエ!」

「……私にばかり正体があーだこーだって言うてきますけど、バレちゃいけないのはあなたたちもだからね!あ、後間違つてもマナミちゃんを巻き込んだら怒るからね!」

私は慌てて、まず念を押しておかなければならない注意事項を述べた。

「なんでラエ?仲良い方が意思の疎通も図りやすく、戦闘時もいいコンビになれるラエ。効率いいラエよ」

「あのね、普通嫌でしょ?そんな、なんとか帝国とかいうわけのわからない奴らをやつつけるために一緒に戦って、だなんて、いくら親友で

もお願いできないでしょ！そんな危険なことに巻き込めるわけないじゃない！」

「まあ、そんなに言うなら仕方ないラエ。けど、何よりも最終的に選ぶのはクリアハートラエよ。そのマナミって子が選ばれる可能性はあるラエ。一応、そうなった時のための覚悟は決めておくラエよ」

ラエティはそう言った。

「ヒカル〜！起きてるの？早くしないと遅刻するわよ〜！」

階下から、母親の声が聞こえてくる。

「……まあ、とにかくそう言うことだからよろしくラエ。なに、ヒカルの学校生活に迷惑はかけないラエ」

「ならいいんだけど……」

不安だ。不安しかない。果たしてこの妖精たちが誰の目にも留まることなく、バレずに1日を終わることができるのだろうか？ただ黙って付いてくるだけならいけるかもしれないが、候補生を探すとまで言っている。

見つかつて、私が怒られるくらいで済むならまだいい。しかしそれ以上の大ごとになる可能性だって……

「行つてきまーすー！」

朝食と身支度を終えた私は、カバンに教科書と、今日は二匹を詰め込んで家を飛び出した。考えている時間はない、考えていたら遅刻するからだ。とにかく、祈るしかないだろう。

今日もまた、引き続きはちやめちやな1日になりそうだ。

第3話 「募集中! 2人目のプリキュアは誰!」

第3話 「募集中! 2人目のプリキュアは誰!」

入学式を終え、二日目の今日が授業初日となる。

とはいっても、ほとんどの授業が初回はオリエンテーションだった。

この科目ではこのようなことをしますよ、であるとか、中学生からは予習も大事ですよ、だとか。そういつた説明ばかりとなっている。

個人的に、数学担当の原先生という、まだ大卒2年目の若き女性教師とは相性が良さそうだと感じた。美人だし、優しそうだし。逆に、体育の中畑先生はいかにもな、絵に描いたような熱血教師という第一印象で、あれは苦手そう。すでに体育を受けるのが億劫である。

午後には英語と国語のコマが入っていたか。昼食の後に言語学二連発とは、これは居眠りするなという方が難しいような組み合わせだが大丈夫だろうか。特に授業についていけない自信のない私なのだ。本格的に授業が始まる来週からは、寝てしまい怒られる、という光景が脳内で鮮やかに描けてしまうのも情けない限り。

けれども、今心配なのはそのことではなく「彼ら」の動向である。「ヒカルちゃん、今日ずっとブーツとしてるけど、寝不足? ちゃんと先生たちの話聞いてた?」

昼休み、教室で一緒にお弁当を食べていた親友、マナミがそう話しかけてきた。

「え? あっああ! もちろん聞いてたよ! 大丈夫だよ!」

「本当かなあ? ヒカルちゃん、嘘つくとそのアホ毛がピンってハネるからもうバレてるよ?」

「うそ!? 私そんな癖あったの!」

私は慌てて髪を押さえつけた。

「あ、アホって言ったことにはツツコマなかったね?」

親友はニタニタとにやけている。

「いや、ちよつ、アホじゃないし!」

「マジウケるんですけど。やっぱり面白いなあヒカルちゃんは。ずっと

と側に置いときたいわね。飽きないし」

「すつごく馬鹿にされてる気がするんですけど……」

キーツと睨みつける。

「さあ、気のせいじゃない？もちろん、友達としてずっと一緒にいたいって意味ですけど？」

「……それは嬉しいけど、でも、ぶつちやけ馬鹿にはしてるでしょ？」

「まあ、そりゃあ……ヒカルちゃんだからねえ。ほんのちよつとくらいは」

「またもニヤつきながらそう続けた。

「……ぐぬぬムカつく！でもマナミちゃん、私を馬鹿にできるのも今だけだからね！なぜなら私はプ……！」

「そこまで言いかけて慌てて口を閉じた。危うく口を滑らすところだったからだ。

「プ……？なになに、言ってみなさいよ？」

「い、いやその……なんでもないよ！」

「髪、ハネてますけど」

「ま、まあなんだっていいじゃない！早く食べないと昼休み終わっちゃうよ！」

「……なら、そういうことにしといてあげる」

よかった、どうやらこの場はやり過ぎせそうだ。

しかしこの子、以前にも増して人を煽るスキルが高まっている気がする。まったく、未恐ろしい人物である。

さてその彼ら、妖精たちであるが、朝のホームルーム以降、行方がわからないのである。気づくと、カバンの中から姿を消していたのだ。私に迷惑はかけないとは言っていたが、もしあんな新種の珍獣が他の誰かの目にも留まったら、もしくは怪しい人物に捕獲されていたらと、いろいろ考えてしまい気が気でないのだ。側からはボーツとしているように見られても仕方がない。

今どこで、どういう動きをしているのだろう。

「午前中の3時間でいろいろな子を見たラエが……ズバリもう候補はかなり絞れたラエ」

同じ頃、校舎の屋上の端で、ヒソヒソと小声で話し合う妖精たちの姿があつた。

「本当レテイか？流石ラエテイレテイ！」

「でも、ヒカル並みの莫大なキサトエナジーを持つ子は遂には見つからなかつたラエ。そこだけは類い稀なポテンシャルの持ち主ラエね。これは褒めるべきなのか、単に何も考えていないポジティブバカつてだけなのか……」

「でもプリキュアとしてならめっちゃ強くなれる存在つてことレテイ。褒めてもいいレテイよ！」

「……女子中学生つてのは難しい年頃と聞いているラエ。各々それなりに強いキサトエナジーこそあれど、心の何処かにウィザパワーの種も潜ませている。それはヒカルにも同じことが言えるラエが、あの子は多少の悩みや不安なら、いつの間にか消え去っているタイプラエ。確かに、プリキュアとしては申し分ない。クラウドたちに負の面を利用されるリスクも限りなくゼロに近い。ある意味無敵の存在ラエ……」

アホとはいえ、良く言えば事柄を難しく考えようとしないうため、深い絶望に陥りにくいという性格でもある。そのため、常時高い水準のキサトエナジーを維持することができるのだ。これも一つの才能である。最も、人間界でのこの能力を見抜き、評価するのは難しいだろうが。

初陣となつた昨日も、強い恐怖を感じてはいたが、それでも自己の判断で動けない弟を抱え、さらには危険を顧みず親友の元へと向かつた。

肝っ玉が据わっているからであろうか。そうではない、とラエテイは踏んでいる。おそらくだが、特に深くは考えず、本能的に今すべきことを選択していたのだ。

この行動について、捉えようはいくらでもある。反対に悪く言えば

思いつきでしか行動ができないということにもなるだろう。咄嗟の判断であれだけ動ける13歳は確かに貴重な逸材でもあるが、同時に危険がつきまとうのも避けられない。だからこそー

「キサトエナジーはあの子ほどじゃなくても、無鉄砲な彼女を正しい方向へ導ける、賢い存在が2人目として相応しいラエ。候補は3人。まずは、第1候補に接近するラエよ」

「それはどの子レティ？」

「大田愛海。ヒカルには絶対にダメだと念を押されているラエが、やっぱりあの子が適任ラエ」

その口から出てきたのは、親友の名だった。

—————

「ヒカル、ヒカル！」

昼食を終え、マナミと次の授業のある視聴覚室へ向かう途中に小声ではあるが、私の名を呼ぶ声が耳元ではつきりと聞こえた。だが、彼女の前で彼らに対して返事をするわけにもいかない。ここは、無視することとする。

「ヒカルってば！なんでシカトするラエ！」

しかししつこい。これでは、無視を貫くと余計に面倒である。仕方がないので、お手洗いによるから、とマナミだけを先に行かせ、廊下の隅で話を聞くこととした。

「ちよつと、学校で話しかけるなんてどういうつもりなの!？」

「ごめんラエ。でも、大事なことを伝えておこうと思って」

「大事なこと？」

「……君の友達、マナミにレティツをつける」

「え……!?!ちよ、ダメって言うてるでしょ!?!」

あれほど念を押したというのに、何を考えているのだこの妖精は。私がこのように誰かを怒鳴るのは実に久しぶりだ。冷蔵庫の奥底にしまい、密かに楽しみにしていたプリンを知らぬ間に母に食べられていた時以来だろう。

「でも、やっぱりあの子しか！現状最高のパートナーになれるのはあの子だけラエ！」

「そうかもしれないよ！私とマナミちゃんは親友だもん。一番仲がいいんだもん、あなたのいう通り最高のコンビになるかもしれない！けどそういうことじゃないの！友達だからこそ、危ないことさせたくない！」

「友達じゃなかったら、危険なことさせてもいいってラエか!？」

「そうでもなくて!!あーもう、なんて言ったらわかってくれるの!？」

私はトーンを下げ、怒鳴りつけるのをやめた。絶対に彼女をプリキュアにさせてはいけない。そのためには全力で説得しなければならぬのだが、セリフが出てこない。頭の悪さと語彙のなさをこの時ばかりは悔やんだ。

「……僕は彼女こそが相応しいと本気で信じているラエ。プリキュアは伝説の戦士ラエ。その戦士が、私情で戦友を選別するだなんてことは許されない。例えばパートナーが親友でも、顔も名前も知らないような人であつたとしても、受け入れるほかない。そして、共に戦うしかないラエ。押し付けてばかりで本当に悪いラエが、それがプリキュアというものラエ。割り切らないと、やっていけないラエよ。じゃあ、また後でラエ」

それだけ語っていくと、彼はまたどこかへと飛んで行った。

「……私だって、あの時はテルキを、街を、マナミちゃんを助けたくて、無我夢中で、たまたまプリキュアになっただけなのに、そんな言い方ないんじゃないの……。あんな、帝国だの何だのの危なさそうな話を聞いて、親友をその危険な場所に連れ出そうなんてこと、できるわけないじゃん。ラエちゃんには、心つてものがないわけ?」

ブツブツと彼に対する愚痴を、小声で吐き出していく。

「光山さん、こんなところでなにをしているの?遅れるわ」

急に、背後から聞き覚えのある声があった。その声質だけで、育ちの良さがヒシヒシと伝わってくるこの感じ、『安楽加清』に間違いない。「カ、カスミちゃ……じゃなくて、安楽さん!ごごご、ごめん!すぐ行く!」

慌てて振り返ったと同時に、動揺しすぎて抱えていた筆箱を落と
てしまった。カシャつという音を立て、筆記用具があたりに散らば
る。

「……別に、今更苗字で呼ばなくてもいいのに。それにしてもその様
子、昔から変わっていないようね」

そう言いながら、彼女はその場にしゃがみ込み、自らの近くに転
がっていた私のボールペンを拾ってくれた。私もすぐにしゃがみ、同
じく筆記用具を拾い上げていく。

「あはははは……」

安楽加清、幼少期はよく遊んでいた仲だった。小学校に上がると同
時に接点は徐々になくなり、今ではお互いに認識だけはしている、く
らいの関係になってしまったが。

昔から、周囲の子供とは何かが違う、1人だけ大人びていた少女
だった。しかし今では、もうはるか雲の上、遠くへと行ってしまった
届かない存在である。

そんな彼女に、昔から変わっていない、と言われると顔が真っ赤に
なる。

理由は二つあり、一つは、今や街の神童とも謳われ、将来が約束さ
れている彼女に、昔のことまで覚えてもらえていることが素直に嬉し
いということ。一つは、その神童に、この慌ただしい姿を見られてし
まったこと。昔から変わらない、それは「アホでドジでおちよこ
ちよいなところ、まだ治っていないのね」と言われているような感覚
になり、恥ずかしいからである。

「はい。仕草の乱れは心の乱れ。中学に上がったばかりで緊張してい
るのかもしれないけど、落ち着いて。ここは他と違って、みんな一緒。
先生方ともかく、クラスに知らない顔ぶれがいるわけでもないで
しょう？怖がることはないのよ」

彼女は先ほど拾ってくれたボールペンを、私に手渡しながらそう
言った。どうやら、私のこの動揺の様子を、進級したてはやはや状態
特有の緊張からだ勘違いしているらしい。

いや、これも当たってはいるのだが。

「あ、ありがとう……」

まだ顔が赤い。この表情を見られたくないので、私は顔を伏せたまま、小さくお礼を言った。

「これくらい、お礼を言うまでもないことよ。……先に行っているわ」
彼女はそう言うのと、クルツと、髪を靡かせながら私に背を向け、歩き始めた。

「あ、安楽さん！そ、その！今年もよろしくね！」

どういう意図でこんなことを言ったのかは覚えていない。もしかしたら、また彼女と友達になれるかもしれない、とでも思ってしまったのだろうか。

彼女は私のこの言葉に対し、立ち止まってもう一度私の方へと顔を向け、無言のまま微笑んでくれた。そして再び歩き出し、廊下の角を曲がったところでその姿は見えなくなった。

「……なんか、久しぶりにカスミちゃんとか喋ったな……」

今の私と彼女では、住んでる世界が違うにもほどがある。それでも、確かに昔は友達だった、と思う。少なくとも私はそうだと認識している。この懐かしい感覚の余韻に浸っていたいが、早く視聴覚室へ向かわなければ遅刻になってしまう。急がなくては、と立ち上がったが――

「……そういえば、視聴覚室ってどこだっけ？」

この瞬間、遅刻が確定したのであった。

――

「背丈からして小学生程度のガキだと思っていたが、中学生だったか。まあ、んなことどうでもいいんだ。この街には幸いにも中学は一つしかない。キュアスパーク……あいつは間違いなく、あそこにいる」

高層ビルの屋上に佇む男―レインが、そう呟きながら、私たちの学校を見下ろしていた。

「よくもこのレイン様の戦績に泥を塗ってくれたな……！きつちり落とし前をつけてやる……と、言いたいところだが、今の任務はあくま

でクリアハートを奪うことだぜ。奴らが2人揃ったら、俺に勝ち目はない、とクラウド様は仰っていたか。癪だが、自信持ったの反論はできねえ。プレーンのクライナーとはいえ、たった1人の小娘にあっさり倒されたという現実、重く受け止めなければならぬだろうぜ」

この男、プライドこそ高いが流石に將軍、現状の戦力の差を漠然とはあるが理解しているようであった。少なくとも、今のままでは2人のプリキュアを相手に圧倒することは難しいと判断している。

「ならばやはり、もう一つのクリアハートを、2人目のプリキュアよりも先に手に入れる必要がある。だができるか……？……下手な小細工は考えるだけ無駄か。なら、とつとと始めなくちゃな！」

レインは自身を鼓舞するようにそう叫ぶと、ウイザパワーを探すために屋上から飛び降り、街を物色することとした。

「万が一のこともある。そう上手くことは進まなねえしな。強いクライナーを作るのに越したことはない」

ブツブツと独り言を唱えているうちに、彼の眉がピクンと何かの電波を受信したかのように動いた。ウイザパワーを感じとった時に起こる反応のようである。

「……あつたー！よし、利用させてもらうぜ！」

彼はその反応がある場所へと方向転換し、ヒュンツと音を立てて飛んで行った。

「はあ……最近はどこもかしこも厳しすぎるぜ」

その発信源は、どうやらこう呟く、スーツ姿の中年男性のようだった。その手にはタバコの箱が握られている。

「喫煙スペースも少なくなってきたしな……子どもがいるから家で吸うわけにはいかないし、会社では白い目で見られる。……これは、辞めどきなのかもしれないな。時代に合わないんだ」

タバコに火をつけ啜ると、煙とともに深いため息をつく。

「俺はそうは思わねえけどな」

その背後に、ふとレインが着地した。

「う、うわあ!!なんだ君は!?!」

「落ち着けよ。お前の味方だ。タバコか、いつから吸っている?」

「……就職してから、になる。15年ほどかな」

「そうか。15年、長い年月だ。タバコはそれだけ長い間、お前の相棒だったんだろう。疲れやストレスから救ってくれる相棒だったんだろう。それをなぜ辞めようとする？世間を気にして、なのか？馬鹿馬鹿しいとは思わないのか？」

「だが……やはり家族や他人に迷惑がかかるんだ。俺は好きだし気も楽になるが、自分が良ければそれでよし、なんて自分勝手なことが許される社会ではないだろう？仕方ないのさ。これも時代の流れだよ」
遠くを見つめながら、タバコをふかしていく。

「はあ、しけたった親父だなあ、てめえはよお。……俺は今、偶然ここにいるわけじゃない。お前の心の叫びを聞いて駆けつけたんだ。本当は、辞めたくなんかないだろう？もつと自由に、気の向くままに喫煙したいんだろう？お前の心はそう叫んでいるぜ。解放しろよ、この喫煙者に対する風当たりの強い世の中への憎悪をよ！」

レインはそう叫ぶと、掌をいっばいに開いた右腕を男性へとまっすぐに向けた。

「な、なんだ!？」

男性の胸が紫色に光り始める。大量のウィザパワーが目視できる状態となったのだ。

「召喚！クライナー!!この者の心にかかる雨雲を力に変え、絶望の雨を降らすのだ!!」

『クライナー!!!』

男性を媒体として出現したクライナーは、先日現れたものとはかなり異なっており、身長もひとまわり大きい、タバコの箱の体をした、大量の煙を常時撒き散らす個体だった。

—————

「まったく、本当ドジなんだから。オリエンテーションとはいえ、最初の授業に遅刻するなんて普通ないわよ。それも、5時間目の授業でよ。いきなり先生に目を付けられたんじゃないの？」

5時間目の英語を終え、私のクラスメイトたちは視聴覚室からクラスルームへと戻っていたのだが、その道中、私はマナミから説教を食らっていた。

「はい……言い返すセリフもございませぬ……」

「私を先に行かせるからこうなるのよ。一緒なら迷うことなんてないのに。あなたって子はねえ、そういうところがあるから危なっかしいのよ。一般的に、高い行動力は長所よ。でも、あなたの場合は最大の短所でもある気がするわね」

「……やっぱり？最近似たようなこと、ほかの人にも言われてさ。その行動力とかは褒めてくれたけど、お気楽なアホとかひどいこと言ってきたんだよ!？」

人というより齧歯類系の小動物ではあったが。

「……いい？つまり、ヒカルちゃんを見て私と同じことを思う人が、少なくともその1人はいるってわけ。でも安心しなさい？私たちはまだピカピカの中学1年生。これからいくらでも治していけるに決まってるじゃない」

「……そうかなあ？」

「そんな下向いてちゃらしくないわよ。ヒカルちゃんのいいところは、行動力とか、そういうところもだけど他にもあるでしょ？何よりも、その明るさとポジティブシンキングじゃん。お気楽なアホも良く言えば底なしの明るさ。どんな場面でも、とりあえず前を向ける。これは大きな武器になるわよ！」

マナミが珍しく私を褒めている。慰めてくれているのだろうか、親友に面と向かって高評価をされると気恥ずかしいものだ。

「そうかなあ？デヘデヘ……」

お説教から一転、お褒めの言葉へと変わった彼女の言葉を聞きながら、私は今までにないほど表情筋を緩め、間拔けな面をして頭をかいていた。

「……ちよつと引くわよその顔。調子にのるとまたドジ踏むから、気をつけてね？」

「はいー！よし、気を取り直して頑張るぞー！」

「流石はヒカルちゃん。そうこなくっちゃ」

さて、このやり取りを廊下の天井に張り付きながら見守る影があった。二匹の妖精である。

「うん、僕の見込んだ通りラエ。ヒカルをうまく扱えているラエね」

「そんな、ヒカルをモノみたいに言っちゃダメレテイ」

すかさずレテイツがそうツツコミを入れる。

「まあまあ。……!!レテイツ！気付いたラエか!？」

突然、ラエテイがピンつと耳を立て、隣にいるピンクの妖精に訊ねる。

「う、うん。この感じ……」

レテイツの耳も、無意識のうちに同じく立っていた。

「クライナーが出たラエ……こんな時に！ヒカルはまだ学校が終わってないから、行かせられないラエ！」

「……でも、マナミを試すいい機会でもあるレテイ。どうせ今日は全授業オリエンテーション、最悪受けさせなくてもいいレテイよ」

「何言ってるラエ！プリキュアは伝説の戦士！学校サボってまで出動して、その伝説に非行と言う名の傷をつけるわけにはいかないラエよ

！第一、伝説の戦士たるもの、一人前の女性としての教養を蓄えー」

「そんなこと言ってる場合レテイか!?!じゃあ誰がクライナーからみんなを守るレテイ!？」

「……それはそうラエが……」

「こうしている間にも、怖い思いをしている人がいるかもしれないレテイよ！今やつを倒せるのはヒカルだけレティー!!」

口論が激しくなった結果、レテイツの発した声も大きいものへとなってしまっていた。この叫びのような声に、生徒がざわつき始める。

「ねえ今の誰の声？」

「聞いたことない語尾だったけど、あんな口調の子、うちのクラスにいたかしらね」

声の正体を探そうと、生徒たちのざわめきは徐々に大きなものへと変化していく。

「あの子たち……！人のことアホって言える立場なのそれ……」
当然その声は私の耳にも入っていた。

「ヒカルちゃん？どうかしたの？」

この眩きが少し聞こえたのか、マナミが私の顔を覗き込む。

「い、いやなんでも……」

私は髪の毛を立たせながらそう誤魔化していた。

人語を話す小動物などが中学生に見つかってしまったえば、その話は光よりも早くそこら中に拡散されてしまう恐れがある。そうなる通常にまづい。こういうハプニングが起こりうるから、どうしても学校には連れてきたくはなかったのに。

「あら、天井に何かいますわ。ぬいぐるみ、かしらね？斎藤さん、捕まえて頂戴」

「本当ですわ！お任せくださいクレハ様！この斎藤、必ずやひっ捕らえて見せますわ！」

最初に妖精たちを見つけたのは、あろうことか私が最も苦手とする相手『月野紅羽』だった。取り巻きの1人を使い、彼らを捕えようとしている。

「ヒエッ！こっちくるラエ！」

「逃げるレティ！」

そしてさらに最悪の事態を招いた。動こうとした上に、発声までしてしまっただ。ここはぬいぐるみのふりをするのが最良の手だったはずだ。いや、ぬいぐるみが浮いていることもそれはそれで怪奇事件にはなるのだが、自ら生き物であることを公表してどうするのだ。

「喋りましたわよクレハ様！やはり、先ほどの声はあれが！」

「ええ聞きましたわ斎藤さん。つまりそれはぬいぐるみではなく、新種のネズミですわね。榎原さん、あれはいくらで買えますの？ペットにしたいわね」

「見当もつきませんが、月野家の財力があれば支障ないでしょう」

クレハのグループが勝手に盛り上がっている。個人的感情ではあるが、あの人たちの手に渡すわけにはいかない。ここは、なんとか誤魔化さなければ。しかし、今更どう誤魔化せばいいのか。

「月野さん、そういうことは褒められたことではないわよ。よしたほうがいいわ」

捕まえようとする斎藤の腕を掴み、押さえ込みながら、カスミが彼女らをそう牽制する。

「……安楽加清……！あなたはいつも私の邪魔をしますのね」

「いつも、とは心外ね。私は、間違っていると思うことを止めているだけよ。無理やり捕まえようだなんて、あの子たちも怯えているわ」

「……それなら公平に多数決を取りましようか。私に賛成するのか、安楽さんに賛成するのか。クラスメイトたちの意見を取り入れることは大切でしょう？」

「公平？小学生の時、児童会選挙で大量の票を『購入』していた過去のある、あなたの提案する多数決に、公平さは感じられないけど」

2人が睨み合う。

いつもこうだ、この2人はいつも何かと喧嘩をしている。最高に相性が悪いのだ。これではとても、私が口を挟めるような空気ではない。だが、一つ安心してることがあった。これで、妖精たちがクレハたちに捕まるということはなくなったのだから。

「く、クレハ様、もうやめておきましょう！あ、安楽さん相手にすると後々面倒ですって！」

「……まあ、次の授業もありますしね。早く教室に戻らなければ。行きましょう」

クレハはあっさり新種のネズミの獲得を諦め、さっさと教室へと歩き始めた。先程までの食い付き具合が嘘のようである。

だいたい、このような結果になるのが常だ。昔は、もっと激しい論争に発展することもしばしばあったのだが、クレハは何度もカスミに言い負かされ続けているため、最近では、自分が不利と判断した場合は言い争うことそのものを棄権し始めている。

加えて、カスミには目に映るものすべてを凍てつかせてしまいそうなほどの目力がある。そして自分が正義と強く自信を持っているため、言葉にも真に迫ってくる圧が生じる。少なくとも同年代には、彼女と対等に論争ができる存在などいないであろう。

それでも何故かクレハは諦めない。何かとカスミに挑み続けようとしている。このようなことだけではなく、学力、運動能力、部活動。学生のステータスとなる項目であれば果敢に勝負を申し込んでいる。要するに、強くライバル視しているのだ。カスミもそれを感じているのか、クレハには負けまいと、以前にも増して努力するようになっている。

負けず嫌いで互いに切磋琢磨することは結構なことなのだが、そこに周囲を巻き込むことも稀ではないため、彼女らの近くにいると少々疲れるのである。

「た、助かったラエか？」

ラエティが、他の子にバレないように私に近づき、そう囁いた。

「まあ、今のところはね……。でもみんなの記憶には強く焼きついたと思うよ……」

「すまないラエ……。それと、君に伝えることがあるラエ」

「マナミちゃんはプリキュアにはさせないからね？」

「それじゃないラエ。クライナーが出たラエ。今、行けるラエか？」

「ええ!？」

今度は私の発した大きな声に、みんなが一斉に振り返る。私は慌ててラエティを驚掴みすると一瞬でその手を後ろに回すことでこれを隠した。

「ヒカルちゃん、やっぱり今日おかしいよ?まあ、いつもおかしいけど」

「だ、大丈夫だって、心配するほどのことでは……」

急遽こしらえた作り笑いで切り抜けようと試みる。

「……ちようどいいラエ。君も来るラエ!」

何を考えているのだろうか、ラエティが私の手の中を脱出し、マナミの肩の上に乗ったのだ。

「え?!きっきのネズミ!」

「ちよ、何やってんの!?!ていうか、まだ私が返事してないし!」

「やっぱりヒカルちゃん、このネズミのこと何か知っていたのね」

いけない、この狭い空間には収まりきれないほどの情報量が溢れて

いる。どこから、そして誰から順番にツツコミを入れるべきなのか、判断ができない。

「どうせ授業は中止、今からみんなで避難レティよ」

そこにレティツも現れた。

「どういうこと?」

「言葉のまんまレティ」

その次の瞬間、何かが爆発する音が鳴り響いた。音源はかなり近いように感じる。

『クライナアアアア!!』

聞き覚えのある、例の怪物の遠吠えも、うつすらとだが耳に入ってきた。近い。

「……ヒカル、君だって、成り行きで半ば強引にこの運命を背負わせられた被害者かもしれない。それでも、今この学校をクライナーから守るということは、君にしかできないこと。君にしか頼めないことレティ。行ってくれるレティか?」

「……私は最初から、戦うことは嫌がってないでしょ?やめてって言うてるのは、マナミちゃんを巻き込むことただそれだけ。だから、私1人で行くから。連れてこないでよね!」

私はそれだけ言い残すと、外に出るため、玄関へと走った。

「ちよ、ヒカルちゃん!?!……ネズミさん」

「レティツレティ」

「……レティツさん、ヒカルちゃんはどこへ……?」

「知りたいのなら腹をくくるレティ、大田愛海。ヒカルはああ言っていたけど、私たちは君を強く推薦している。現場にも連れて行くレティよ」

二匹の妖精が、マナミの顔付近まで接近する。

「近いし……ていうか、ここじゃ人目につくわ。あんたたち珍獣なのよ、少しは身を隠したらどうなの?」

そこに、背後から私たちの担任、桑田先生が駆け寄ってきた。

「みんな、聞いて!近くに未確認生物が出たわ!それも、かなり危険で、すでに街にも被害が出ているらしいの!……避難訓練すらまだ

やっていないから難しいかもしれないけど、本番の避難よ！出席番号順に列を作って逃げるわ！」

「先生、お言葉ですが、緊急時にわざわざそのように整列するのは逆に時間のロスかと考えます。点呼を取り、二列にして避難時の混乱を避けることは重要ですが、その順序は問わなくていいのではないのでしょうか？」

カスミがそのように声を上げる。

「そ、そうね。とにかく、授業帰りでしょ？なら全員いるわね。すぐに並んでー」

「せんせーい！光山さんがいません！」

「な、なんですって!?誰か、光山さんを見ていないかしら!?」

桑田先生の顔色が少し青くなつたように感じた。無理もない、担当するクラスから逃げ遅れを出すわけにはいかないのだろう。

「さっきまでそこにいなかったっけ？」

「あの黄色いちんちくりんでしょ？いたはずだけど」

確かに印象には残りやすい髪をしているが、そのような認識だったとは。

「先生、光山さんは体調悪いみたいで、保健室に向かいました。おそらく、保健の駒田先生と一緒に避難していると思います」

マナミがそのように返答した。とりあえず、これでこの場は落ち着くだろう。

「そ、そう。安心したわ。さあ、逃げるわよー！」

クラスメイトたちは速やかに二列に並び、桑田の誘導に従って動き始めた。偶然にも、その二列のうちの一角が、マナミとカスミという組み合わせだったことが、その後の事態をさらにややこしくさせていくことになるのだが。

「大田さん。光山さん、保健室に行った感じではなかったわよね。本当はどこに行ったの？」

カスミは既に感じていたようだ。

「さあ、私も詳細は知らない。少なくとも保健室ではなさそうだけどね」

詳細は、ポケットに押し込んだ小動物たちが知っているのだろう。現場に向かわせるとまで言っていたが、成り行きでこうなってしまう以上、それも難しい。

「そう。無事ならいいんだけど、何か不自然だとは思わない？」

「安楽さんもそう思う？ 流石に怪しいよね」

「そもそも、現れたという未確認生物と、急遽変わった天気。今日は晴天予報のはずよ。なんで土砂降りになっているのかしらね。それに、はつきりとは覚えていないけど、昨日もこのような光景を見た気がするわ。夢……にしては鮮烈に記憶に残りすぎている。街が異常なのかしら」

「昨日、か。確か、私も突然倒れて……言われてみれば確かに、倒れる前に怪物を見た気がするわ。それをヒカルちゃんに教えようと電話して……夢だと思っていたけど、確かに鮮明に覚えてる。いや、思い出そうとすればするほど、鮮明に記憶が浮かんできているんだわ」
マナミはそう言った。もし、あれが現実に起こっていたことだとすると――

「倒れてた？ 外傷とかは？ 大丈夫だったの？」

カスミがその話に食いついた。

「え、ええ心配ないわ。無傷よ」

「目が覚めた時は？ 1人だったの？」

「いや、ヒカルちゃんに起こしてもらって……。うん？ 私は確か、塾の近くで倒れたはずよ。なんであの時、違う場所で起こされたのかしら……」

「光山さんに、ね。そして今日も、このタイミングで光山さんが消えた。彼女がこの異変となんらかの関係がある疑いは濃厚よ。彼女を追うべきだわ」

「なんであれ普通に気になるしね。でも、そのためにはまず、この列を上手く抜け出さないよ」

「そうね。まあ、私に任せて。先生方は私の言葉を疑わない。私はそれだけ厚い信頼をされているから」

カスミはそう言うと、サツと拳手をした。

「先生、私と大田さん、教室に忘れ物をしてしまったみたいです。取りに引き返してもよろしいでしょうか？」

「え、ええ!?ダメに決まってるじゃない!早く逃げないよー」

「どうしても大切なものなのです!それとも、この安楽加清の言うことが、信用に値しないのでしょうか？」

カスミは真剣な眼差しで先生の眼を見返した。

「……そ、そんなことはないわ!わかった、早く戻ってくるのよ」

「ありがとうございます。大田さん、行くわよ」

2人は列を抜け出し、正面玄関へと急いだ。

「ご、強引な手を使うのね……。それに先生も先生だわ。あんなにチョロくていいのかしら」

「私が日頃から模範的優等生であり続けるために、必要な努力は全てしてきているからよ。それがいざという時に役に立つの。私たち子供は、まだしばらくは大人に管理される存在。だから、その管理側にどれだけ好かれるかでこの期間の人生が変わってくるわ。現に、今こうして抜け出せた」

カスミはそう淡々と述べた。

「もつと真面目なキャラかと思っていたけど、案外したたかなのね」

「心外ね。想像の通りとても真面目よ。真面目でなければ、この日々の努力はできない。私の成績や校内での待遇を羨ましがる人もいるようだけど、私と同じ日々を歩めば得られるものよ。全ては努力が産んだ結果。私とあなたたちの差はそれだけ。……口がすぎたわ。急ぎましょう」

靴を履き替え傘をさし、2人は外へと飛び出した。

「安楽さん、確かに想像通りお固いキャラではありそうだけど、面白いのね。私あなたのこと、ちよつと誤解していたかも」

「……どのように誤解していたのかは後日伺うわ。まずは彼女を探さないよ……」

「僕たちが案内するラエー!」

ラエティが、マナミのポケットの中から顔を出した。

「あなたはさっきの……大田さんの腹話術?」

「んなわけあるかい！……私もよくわからないけど、ヒカルちゃんの知り合いみたい」

「へえ。ああ見えてあの子、顔が広いのね。こんな珍獣ともお友達とは……」

「珍獣じゃないラエ！神聖なる妖精ラエよ！」

ラエティは顔を真っ赤にして怒っている。確かに先ほどから、やれ新種のネズミや珍獣など、好き放題言われていたので仕方ないだろう。

「とにかく、こつちラエ！ついてくるラエよ！」

「あ、待って！」

先に向かったラエティの後を追うために、彼女たちは走り出した。

—————

『ハアアアアア!!』

『クライナアアアア!!』

私は既にクライナーの元へと到着し、戦闘に入っていた。敵は昨日戦ったものとは異なり、背丈も大きくガタイもいい。なにより大量のタバコのようなものを両手で握っており、口にも数本くわえているのが大きな特徴だろう。

『クライナアアアア!!』

ボフツと、大量の煙を一気に吐き出してくる。

『うわっ！ゲホツ、ゲホツ！』

これだけの雨が降っているというのに、奴のタバコの火は消える気配がなく、煙も御構い無しに襲ってくる。特殊なモノとなっているのだろう。

『……!!か、身体が動かない!』

煙が落ち着き、反撃に出ようとしたのだが、どういわけか全く動けないのである。

『クライナアアア!!』

『キャッ!』

その隙を見事につかれ、私は太いバットのようなタバコに、ピンポン球のように吹き飛ばされてしまった。民家の壁に激突し、ようやく止まることができたが、かなりのダメージだ。すぐに立ち上がることはできない。

『……強い……!』

「ふん、どうだタバコクライナーの味は。あの副流煙には一時的に神経を麻痺させる毒が仕込んである。少しでも吸えば、お前は5秒間動けなくなる。クライナーのサンドバックになるんだぜ!」

レインはこの光景にご満悦の様子だ。

「な、何あれ!あれが未確認生物?」

そこに、2人と妖精たちが駆けつけた。

「……全部思い出した!私は昨日、確かにこいつに似た怪物に……!」
マナミはこれを見て、ようやく全ての記憶が鮮明に浮かんできたようだ。

「そうレティ。そして君をあゝの怪物から守ったのが、伝説の戦士プリキュア、レティ」

「ぶ、プリキュア……?」

同時に、今日の昼休みに私と交わした会話までを思い出したようだ。

——「なぜなら私はプ……!」

「まさかとは思うけど、そのプリキュアって……」

「そのまさか、光山ヒカルラエ」

2人は耳を疑った。

「つまり、今もあの怪物と光山さんが戦って!」

『プリキュア!スパークルショット!』

バツと空中に躍り出た私は、腕にキサトエナジーを集中し、それを電撃に変化させ解き放った。

『クライナー!!』

それを受けて、怪物は数十メートル吹き飛んでいく。

『ちよ、ラエちゃん!連れてきちゃダメって!!』

その次の瞬間に、私の視界には彼女たちが入っていた。あれほど

言ったのに、なぜー

「申し訳ないけど、やはりマナミを試させてもらうラエ」

「私を、試す?」

「そうレティ。君にも、プリキュアの力を与えたい。そう考えているレティ」

レティツが、彼女にクリアハートを差し出した。

『……もう止めても無駄なことかあ……』

私はもう諦めていた。これから何度止めたって、彼らはマナミを勧誘するだろう。それならばいつそ腹を括ったほうがいい。

「……ヒカルちゃんと一緒に戦えってこと?」

「そう言いたいみたいね」

カスミはというと、傘をさしたまま腕を組み、この場を静観していた。驚いてはいないのだろうか。

「……そうか!お前が2人目のプリキュアか!!させるか!!」

そこに突如レインが乱入してきた。一気にマナミへと襲いかかる。

「キヤーツ!なにになに!!」

「こ、こいつも敵レティ!追い払うには、変身するしかないレティよ!!」

「んなこと言われても……」

私の時よりも必要な説明がはぶられている。アレだけ渡されても、使い方がわからないのだからテンパることしかできないのは当然だろう。

『もう!だから言ったのに!!てやああ!!プリキュア流星キック!!』

そう叫びながら、レインの横っ腹を蹴っ飛ばしこの窮地を救ったのが私だった。

「グオツ!」

「ひ、ヒカルちゃん!」

『大丈夫!?無理して変身なんかしなくていいから、早く逃げて!』

「……大田さん、ここは光山さんに従いましょう。まずは情報を整理する必要があるし、なにより彼女のようない私たちが、ここにいては危険よ」

カスミがマナミの腕を取り、この場を離れようと走り出す。

「ま、待って！ヒカルちゃんは!?ヒカルちゃんはもつと危険なんだよ!?あの子化け物と戦っているのよ!」

「でも、だからと言って私たちにできることはないわ。精々、彼女が気を散らさずに戦えるよう、この場から消えるくらいしか」

「できること、あるかもしれないでしょう!?これを使えば、加勢できる!」

マナミは今一度、クリアハートを握りしめた。

「……本気?なら止めはしないわ。私は先に逃げているから。怖くなって気が変わったら、すぐにこっちに来るのよ」

「バカにしないでよね。友達が戦っているところを見捨てて逃げるわけないでしょ!」

「……つまり私を非難しているわけ?心外ね」

「そうは言っていないって!とにかくよ、妖精さん!これどう使うの!」

マナミは覚悟を決め、レティツを呼び出した。

レティツが簡潔に、そして口早に変身方法を説明し終える頃、起き上がったクライナーとレインが再び襲いかかって来る。変身させてはいけない、その使命感が彼らを駆り立てていた。

「そいつを渡せええ!!」

『クライナーアアア!!』

『む、むむうこうなったら!邪魔をしないで!』

私はというと、咄嗟にマナミを庇うように躍り出て、1人と一体の突進を、それぞれ片腕で受け止める。

『ぐぐぐぐ……』

だが無理をしすぎた。とても抑え切れるようなパワーではない。

「へっ、一対一ならともかく、二対一でしかもその姿勢!お前に勝ち目はねえんだぜ!腕の骨折りたくなかったら、そこをどけ!」

「マナミ!ヒカルを助けたいのなら急ぐレティ!!」

「わ、わかった!……プリキュア!!エキサイティングファイバー!!」

変身するための合言葉だ。これを叫んだ瞬間、体中のキサトエナジーが目覚め、プリキュアとしての力を解放する!はずなのだが。

「……な、何も変わらないんだけど！」

「そんなはずは……！まさか、クリアハートはマナミを選ばなかった……!?」

二匹の妖精が思いもがけぬ事態に目を丸くしている間に、レインは私の腕を振り切り、猛スピードでマナミに接近すると、彼女の腕からクリアハートを強奪した。

一瞬の出来事だった。たった一瞬で勢力は大きく逆転してしまうこととなった。

最悪なことに、もう一つのクリアハートはレインの手へと渡ったのだ。

「ピヤッハー!!これでこいつは俺様のものだ!!全ては思い通り!!目的は果たされた!!今日のところは、この辺にしておいてやるよ!!満足だからなあ!!帰るぞ、クライナー!!」

彼は上機嫌に叫びながら、クライナーと共に姿を消した。

『……そんな……!!』

私はその場に膝から崩れた。結構な被害を出しておきながらも、遂にはクライナーを倒すことができなかつたため、街は修復されていない。奴がこの場から消えたため、天気こそ元には戻っていたが。

しかし、敵を倒せないどころか、思う壺にはまってしまったそのような私よりも、後ろにいる彼女たちの方が狼狽している様子だった。

これからもまた、ややこしい事態となりそうな予感がする。

続く

第4話 「2人目登場!?!キュアイラーレ爆誕!!」

第4話 「2人目の登場!?!キュアイラーレ爆誕!!」

私!!キュアスパークだけでは手に負えない強さのクライナーが出現し、窮地に陥ってしまった。そこにマナミたちが駆けつけ、彼女が2人目のプリキュアへと変身したーはずだったのだが、なぜかそれは失敗に終わり、その隙にレインにクリアハートを奪われてしまった。

そして、今に至るわけである。

「……3人とも、これは一体どういうわけ?」

しよぼくれながら校舎へと戻った私たちを最初に待ち受けていたのは、担任の桑田先生だった。非常に険しい表情をしているがそれもそのはず。保健室にいたはずの私、そして教室に戻っていたはずのカスミとマナミ、3人とも外におり、かつ雨に晒されず濡れなから、先生としては理解ができない事態だろう。

「これにはえーっと、ふか〜い事情がありました……」

最初に口を開いたのは私だった。

「事情?未確認生物が出ました、みんなで逃げましょう、という時にわざわざ危険な外に、嘘をついてまで出て行く事情って、何かしら?」
先生は怒り心頭の様子である。

「私が説明します」

そう言いながらカスミが私を手で制し、一歩前に出た。

「まず、結果的に桑田先生を欺き、クラスメイトや先生方、多くの方にご迷惑とご心配をおかけすることになってしまったのは事実です。謝罪致します。本当に申し訳ありませんでした」

カスミが深々と頭を下げる。

「ほ、ほら私たちも!」

マナミが小声で私にも頭を下げるように促し、私も彼女たちに続いて同じようにした。

「……そこを怒っているわけじゃないのよ。迂闊にあなた達を列から

外してしまったことは私の責任でもあるのだから。そうじゃなくてね、なんで危険なことをしたのかって聞いているの。心配もするじゃない。何かあったらどうするつもりだったの?」

先生の声が先ほどに比べると少し柔らかくなった。カスミが謝罪から入ったことで、怒りの感情が少し収まったのだろう。

「それに、その格好で立ち話をすると風邪を引いてしまうわ。職員室まで来なさい」

先生は私たちにタオルを手渡しすると、背を向け、先に職員室の方へと歩き始めた。私たちはとりあえず、さつと髪の毛に付着している水分を拭き取り、後に続いた。

職員室の奥にある応接用のスペースに招かれたが、そこはエアコンにより温められており、雨に濡れた私たちの身体も徐々に熱を取り戻し始めることができた。まだ春先で、少し肌寒い時期だからこそ、夕イミングよく暖房が効いていたのだろう。ひとまず助かった。設けてあるソファに、私たちと先生が腰をかける。

「私たちは先生なの。生徒であるあなたたちに勉強を教えることはもちろん、学校生活を安全に、快適に送ってもらうための手助けをするのも仕事よ。勝手な行動で自ら危険なことをして、ほかのみんなに心配をかけることは、学校という社会の中で集団生活をする上であってはならないことだし、何よりも自分の身を大切にしないことはもつといけないことよ。そこは、理解してくれるかしら?」

先生の第一声がそれだった。大分落ち着いてきたのか、怒っているという様子ではない。

「おっしやる通りです」

カスミがそう返す。

「……そうね、安楽さんはわかってくれているでしょう。大田さん、光山さん。2人も、ちゃんとそこはわかってくれているわよね?」

「……はい……」

2人同時に返事をした。

「なら、改めて訊ねるわ。なんで嘘をついてまで外に出たの?事情って何?」

「えーつと……」

プリキュアなので、怪物を倒すために飛び出しました、とは言えるわけがない。3人とも押し黙ってしまおう。

「言えないの？安楽さん、どうなの？」

「……本当にすみません、うまく説明のできないことで……」

直接的には関係のないカスミばかりに喋らせている現状に申し訳ない気持ちでいっぱいになるが、先生側としてもこの場で最も信頼している生徒が彼女でもあるため、必然的に質問される回数が私たちよりも多くなってしまうのだ。

「……これは取り調べでもなんでもないし、答えられないのなら無理に詮索はしないわ。でも、できればその事情っていうのを把握しておきたいのよ。もし、今後も授業中や、学校にいなければいけない時間帯に黙って外出されても困るのはわかるでしょ？」

先生の言うことはもつともである。教職者として、責任をもって生徒を管理しなければならぬ立場なのだから。だが、先ほども述べたように、こんな漫画やアニメのような、私が戦わなければみんなを守れない、という話ができるわけがない。黙秘せざるを得ないのも同様にもつともなことなのである。

「……じゃあ、今日はもういいわ。教室に戻りましょう。帰りのHRをしないと、クラスの他のみんなが下校できないわ。話せるようになったらでいいから、その時は教えてね。特にお咎めといったものはないから、安心してね。もしも次にまた無断で同じことがあったら、毎日早朝に登校してもらって、校内の清掃活動くらいはしてもらおうことになるけど、とりあえず執行猶予処分って感じね」

「はい、寛大な処置をありがとうございます」

カスミがそう返答して立ち上がった。このようにして、私たちはひとまず解放された。優しい先生で本当によかったと胸をなでおろすと同時に、この先生だけには二度と心配や迷惑をかけてはいけいけいな、とも子供心ながらに感じたのであった。

「おーほっほっほっほ！安楽加清、今の気分はいかががでして？」

教室に戻るや否や、月野紅羽が唐突に、上機嫌な面持ちでカスミに絡んできた。

「あなたには関係なくつてよ」

カスミは相も変わらざるの塩対応である。いつもの通り無表情のまま、自分の席に着いて、下校のための支度を始める。

「いえいえ、関係大有りですわ。あなた方のせいで、私たちは他のクラスよりも15分ほど下校が遅れておりますの。ねえ皆さん、無関係ではないですわよね?」

「クレハ様のおっしやる通りです!」

彼女の問いかけに対し、これまた彼女の取り巻きが大きな声でそう応える。

「……そうね。それは確かに私のせいだわ。ごめんなさい」

カスミは再び立ち上がり、その場で頭を下げた。

「あ、安楽さん……っ!」

流石に、カスミばかりが矢面に立ちすぎだ。私は思わず庇うように、彼女の前へと飛び出してしまった。

「安楽さんは何も悪くないの!全部私がー」

「あら光山さん、あの安楽加清が自分から頭を下げているのよ?こんな光景、長い人生でも指で数えられる程しかお目にかかれないわ。貴重なシーンなの、どいてくださる?」

「な……っ!そんな言い方……!」

これには、私が挑発を受けているわけではないとはいえ頭にカーツと血がのぼってしまった。このままでは、喧嘩が始まってしまうのではーと、クラスが不穏な空気に包まれる。

「いいの光山さん、どいてくれていいわ。こういうのは、相手にした方の負けよ」

私にだけ聞こえるような小声で、彼女はそう囁いた。本当に、このデキた完璧少女は私と同年なのだろうか。つい先日まで小学生だった者とは到底思えない。心底感心するばかりだ。

「で、でもー!」

「私が良いと言っているのだから良いの。私が過去に間違えてたこと

が一度でもある？それより放課後話があるわ。一緒に帰ってもいいかしら？」

「……それは、もちろんいいけど……」

「そう。なら、早く帰らなくちゃね」

「はいはいお待たせ、みんな、帰るわよー！」

そこでようやく、桑田先生が教室へと入ってきた。

「おほほほほ。先生もいらっしやったことですし、この辺にしておいて差し上げますわ」

クレハは満面の笑みで、上機嫌に高笑いをあげながら自分の席へと戻って行った。

「……安楽さんは、月野さんにあんなに言われて、ムカついたりはしないの？」

私は席に戻る前に、一つだけそう疑問を彼女に投げかけた。

「私はあなたが思っているほどデキた人間ではないわ。もちろん、怒りはあるわよ。でも、自分の感情は自分で制御しなくてはならないの。彼女とは自分を磨ける勝負はするけど、なんの生産性もない、低俗な罵り合いは避けたいわね」

彼女は淡々とそう話してくれた。

「そ、そうなんだ……」

この2人の相性の悪さは最悪だ。まだ始まったばかりの新学期、早々に二度も一触即発のムードを作っている。これからの1年間、一体何が起こるのか、不安しかない。

—————

今日のところは、無事に進行された帰りのホームルームの直後、カスミと共に速やかに下校することとなきを得た。

と、思われたのだが、次に『口撃』を喰らうのは私、ということになってしまった。

「ねえ光山さん。単刀直入に聞いわ。あの力はなんなの？」

「プ、プリキュアのこと……？」

「そう、そのプリキュアって力よ。どこで手に入れたの？いえ、質問を変えましょう。なぜ、あなたが手に入れることができたの？」

グイグイと顔を近づけながら、彼女はそう訊ねてきた。

「え、えーっと……」

「僕が代わりに説明してやるラエ！」

ポケットからひよこつと顔を出したラエティが助け船を出してくれた。

「あなたは、廊下で見かけた……。あなたの仲間が大田さんにも力を授けようとしていたわね。あの力を司るのは、この生物……？」

「ちよつと違うラエね。まあ、ヒカルがプリキュアになれた理由を知りたがっているみたいだし、それだけ教えてやるラエ。簡単に言えばアホだから、ラエ」

「……アホだから？」

「こつこいつ！アホって言うなって何回言えばいいわけ！」

私はすぐにこの子生意気な口数の減らない妖精をとっ捕まえて、両こぶしで頭をグリグリと攻めた。

「あだだだだだ!!ごめん、ごめんって言ってるラエ！」

かなり効いたようだ。あまりのダメージに、妖精は今までに発したことのないような悲鳴をあげている。流石に可愛いそうなので、これ以上は勘弁してやることとした。

「何かのジョークなの？」

痛みから、まだ頭を抱えているラエティに対しても、カスミは容赦なく質問を続ける。

「いたた……冗談ではないラエよ。表現はまずかったけど、真理ではあるラエ」

「遠回しなのね。ズバリな答えを聞きたいのだけど」

「……素朴な疑問ラエが、なぜ知りたがるラエ？」

今度は質問返しだ。けれどもこれは、私も思っていたことだった。なぜ急に、プリキュアについて食いついたのだろうか。興味はなさそうであるが。

「考えてもごらんなさい。日々、周囲の期待に応えるために努力を怠

らない私に、特別な力が褒美として天から与えられるのならば理解はできるでしょう？でも、その力を授かったのは、本人の前で言うのも申し訳ないのだけど、特に才能もなければ頭も良くはないし、これという努力もしていない、光山さんというわけ。おかしいじゃない。気になるのは当然でしょう」

「わ、わるうござんしたね……」

目前でナチュラルに淡々と悪びれもない悪口を言われると、ただ顔が引きつるばかりである。

「君のいうことはもつともラエ。報われるべきは、確かに君ラエね」

ラエティは彼女に同調している。

「そうでしょう。だから疑問なのよ」

「それで、君もプリキュアになりたいと？」

しかし、その問いかけに対してはすぐに返事をしなかった。考えるような素振りを見せ、すこし間を開けてから話し始める。

「……光山さんがどのような志で怪物と戦っているかは存じ上げないけど、アレとは戦いたくないわね私は。危険なことはしたくないわ。大怪我なんかしてしまったら、両親や先生方の期待に應えるどころか、余計なご心配をおかけしてしまう」

首を少し傾け、拳を顎に添えながらそう語った。

「ええ……つまりどうしたいラエか……？」

プリキュアの力を手にする、それはすなわちカバークラウダーを倒し、かつて闇を裂き光を取り戻したという伝説を再現しなければならぬという使命を背負う形になる。それでいて戦いたくはない、とはどういうことなのだろうか。

「特別な力は欲しいわ。でも、危険なことはできない。それだけよ」

その答えは極めてシンプルなものだった。

「呆れるほどわがままな娘ラエね……」

「あ、安楽さんってこんな人だったっけ……」

昔からプライドは誰よりも高かった。しかしそれも彼女が相応の、他には真似できないほどの努力を積み重ねた結果のものであることは誰の目にも明らかであり、こうして得た自分の力を何よりの根拠に

できる、そんなカスミのかっこよさに憧れていた。

しかし、決してわがままな性格ではなかったはずだ。

プリキュアの話になった途端に、人が変わったような気さえするというのは大袈裟かもしれないが、私の勘がそう言っている。

「要するに、自らの能力の一部として、プリキュアの力が欲しいってことラエか？」

「言い方は心外だけれど大体合っているわ。それで、どうしたら手に入るの？」

「……悪いけど、君はプリキュアにはなれないラエ。僕も候補の1人とは考えていたけれど、見込み違いだったみたいラエね。幻滅したラエよ。ヒカルの方が100倍プリキュアとしての適性があるラエ。ヒカル、とつとと帰るラエよ」

そう吐き捨てると、ラエティは少し怒った顔で私のポケットへと戻ってきた。

「ちよつと、どういう意味？」

「プリキュアは人々の希望と平和を守る伝説の戦士なんだラエ！ステータスになる資格かなにかと勘違いしているみたいだけど、全然違うラエよ！君は確かに計算高く、大人に評価されやすい、正しい人生を歩んでいるかもしれない。でも、だからこそプリキュアにはなれない。自分ファーストな性格じゃ無理無理。おとといきやがるラエ！」

「……そう。……光山さん、ごめんなさいね」

「……え？な、なんで私に謝るの？」

「さつきは悪いことを言ったわ。それに、プリキュアってものを誤解していたみたい。小馬鹿にするような真似をしまして、ごめんなさい」

そう言いながら彼女はちよこんと頭を下げると、数秒後にはテクテクと早歩きで私から離れるように去って行った。

「わ、わかつてくれたのかな……？」

「まあ、素直に自分の非を認めて即座に謝罪する真面目さは評価してやるラエ。とんでもないやつだと思ったラエが、あの金持ちよりは100倍マシラエね」

「もともとは、あんな子じゃなかったんだよ。とても素敵で、同級生なのにお姉さんみたいな感じで……勘なんだけど、何か焦ってる様子にも見えたような……」

一応彼女は幼少期には仲良くしていた、いまでも私にとっては憧れの対象なのだ。ラエティの中でカスミの人物像が悪い印象で固まっ
てしまわないように、フォローを入れておいた。

「焦り、ラエか。確かに言われてみれば……」

「……安楽さんみたいに、私なんかから見ればなんでもできる人でも、あんな風に何かを欲しがるんだね」

私は、ふとそう思い、ボソツと呟いた。

「そりゃ、いくら天才少女といえども欲望はあるに決まってる。ただ、ちよつと放つてはおけないかもしれないラエ」

「……なんで？」

「……彼女は、根拠のある強い自信に満ちているラエ。つまり、キサトエナジーも周囲よりは頭一つ抜けてるラエよ。でも、さつき会話した時少しウィザパワーの気配を感じたラエ。焦りというのは的確かもしれないラエね。欲望は、育て方次第でキサトエナジーにもウィザパワーにも変化する混沌の種。下手したら、クラウドに利用される可能性もあるラエ」

なるほど、それはそうだ。欲しいものを手に入れるために努力すること、そして結果得ることができれば大きな自信や満足感が手に入る。これが大きなキサトエナジーとなる。

だが、手に入れるための手段を間違えたり、得られなかった場合は強い負の感情も生む。これがウィザパワーになると、この二つのエネルギーの仕組みは、私も大方理解しているつもりだ。

「欲望……何をそんなに求めているんだろう？」

「評価されたい、とでも考えているんじゃないラエか？例えば、プリキュアのような力は持っているだけで自尊心は満たされるだろうし、みんなから感謝もされる。手っ取り早く特別な存在になれるラエ」
「でも、もうとっくに超高評価だと思うけど」

「きつと足りてないラエよ。君から見て高評価でも、彼女目線だとま

だ相応な評価じゃない、ということだと思おうラエ。プライドも相当高いようだから、的外れな推測ではないと思おうラエが」

「そんなもんなのかなあ。私だったらもう大満足って感じだけど」

「よく言えるラエ」

「……本当に口数減らないよね、あなたって子は」

相変わらず、流れるように辛辣な言葉を並べるこの生意気な妖精に腹は立たせながらも、ここは私も我慢してやることとした。

カスミ曰くの低俗な挑発に乗らない、を実践すれば、私もちよつぴり大人に近づけるかもしれない。その練習相手だと思えば、この妖精と今後も共に過ごしていくことも悪くはないだろう。

「……これは……すごいことを聞いてしまいましたわ！見てしまいましたわ！」

その時、後方でこのやり取りを盗み聞きしている人物がいたことには、私たちは気づいていなかったのであった。

—————

輝ヶ丘という街は、その周囲を山に守られるように囲まれており、これが他の街との「街境」の役割も果たしている。

そんな山の一つの雑木林の奥深くに、怪しい影がふたつ、佇んでいた。

この一帯の山々は人の手の介入を最低限に留めているため、豊かな自然を保っているが、反面土地の所有者や行政関係者以外の人間が滅多に立ち入らない場所ともなっている。そのため、このような怪しい人物が隠れ家として身を隠すのに適したエリアでもあるのだ。

「へえ、やっぱり將軍ってのは伊達じゃないのね。見直したわ」

「舐めてんじやねえぞ！こんなの朝飯前だつてんだよ！」

レインとスノウ。帝国カバークラウダーの幹部である。

スノウは任務の途中、レインの様子を見にきていたのだが、思いがけないことに彼はすでに一つのクリアハートを所持していたのだ。しつかり戦果を挙げている彼を見て、煽りなどを抜きにして心底感心

している様子だ。

「あら、舐めてなんかいないのよ。戦闘だけなら、レインには敵わないし」

「戦闘だけなら、か。まるで他の要素は全て俺より優っている、みたいな言い分だな」

「事実でしょう？あんたみたいな脳筋には、戦いしかないんだし」

上下関係の上では、レインの方が立場は上なはずなのだが、どうもスノウは彼のことを見下しているようだ。

「……好き勝手に言えるのも今のうちだ。すぐに俺に舐めた口聞いたこと後悔させてやるぜ」

「あらそう。それで、なぜこんなところで道草食っているんだい？クリアハートを本国に持ち帰らない理由はなんだ？クラウド様はそれを一刻も早く我が手にと望んでおられるのよ」

スノウは、この理由を確かめにここまで来ていたのだった。

「ふん、わかってねえなあ、だからこそだぜ。クラウド様はクリアハートを二つとも手中に収めることを望んでおられる。中途半端に一つだけ持ち帰っても、その場のご機嫌を取ることしかできねえんだぜ。俺が持っている以上、プリキュアはキュアスパークのみだ。増えることもあり得ない。それに、奴だけなら潰せる。手応えは得られた。奴は戦士と呼ぶには程遠い、ただの未熟者だぜ」

「その未熟者に一回負けているくせに。……まあ、回収できるのならそれでいいんじゃない？好きにすれば？じゃ、私は私の仕事に戻るから、アデュー」

そう別れの挨拶を告げると、彼女はその周囲に巻き起こった吹雪の中へと消えていった。

「けっ、クソ生意気な女だぜ……！」

レインはググツと硬く拳を握り直した。日頃からこのように舐められているのだろうか、相当彼女に対するフラストレーションは溜まっている様子である。

それでも、腐っても目下の者だ。同じ組織内の目下の女性に、感情任せに手を挙げるなどということは將軍としてのプライドが許さな

いのだろう。

「イライラはプリキュアにぶつければいいんだぜ……！キュアスパーク！次こそ絶対に倒す！」

彼は気合を入れ直し、立ち上がった。

元々が少し生活水準の高い街である輝ヶ丘内でも特に、豪勢な住宅が立ち並ぶ南に位置するエリア。ここに、月野紅羽の家族も家を構えている。

その家というと、まさに『豪邸』という言葉がふさわしいものでーいや、もはや一見、家には見えないレベルだ。例えるのなら、首都東京にある国会議事堂や、インドのタージマハルのような造りをしている。国の重要建築物のような物件だ。

当然、部屋一つ一つの大きさも半端ではない。特に一人娘として溺愛されている彼女の部屋は学校の教室よりもさらに一回りも広い。

こんな環境でここまで13年間育ててきたのだ。あのような性格になってしまうのも妙に納得できてしまう気もする。

「おほほほほ……聞いてしまいましたわ……！ついに！ついに安楽加清の弱点を知ってしまいましたわあ!!」

帰宅するや否や高らかに笑うと、居間のソファへと腰掛けた。

「お嬢様。今日はいつにも増してご機嫌のご様子で」

執事だろうか、整えられた光沢のある黒髪をオールバックにしたタキシード姿の若い男性が、彼女のそばへと歩み寄ってきた。

「当然よ久義。私の永遠のライバルにして宿敵！安楽加清の弱点を見つけたんですもの！」

「それは先ほども聞きました。安楽様の弱点、でございますか？いつたい、何でしょう？」

久義、とは下の名前だろう。そう呼ばれた執事が訊ねる。

「具体的にはわからないわ！でも、何かを求めようと焦っている……！久義！月野家の執事総動員で調べて欲しいものがあるわ！」

「……何なりと」

「プリ……プリなんとかってのを探すのよ!!」

クレハは先ほど聞こえてきた単語を完全には思い出せなかったようだ。それだけ命令する。

「……プリンでしたら、東のエリアにお嬢様も鼻屑にされておられる名店がー」

「違う!!後、喋る新種の動物も探すのよ!!あいつが何か知っているはずだわーやっぱり、あの時捕まえておくべきでしたわね!」

「お、お嬢様、何をおっしゃっておられるのか、私にはさっぱり……」
「何なりとって言ったじゃない!ゼーったいに探し出すのよ!安楽加清が求めているその何かを、私が先に手にしてみせる!そうすれば、私はついにあの安楽加清から一步リードを奪うことができるのよ!私のためなの!なんとしてでもやりなさい!」

クレハはそう早口にまくし立てると、テクテクと早歩きで自室へと向かって行った。全く、どこまでも自分勝手な人物である。

「久義、お嬢様はどのような命令を?」

わけのわからない命令を下され、ポカーンとしている彼の側に、同じ格好をした執事が数名集まってきた。先ほどの彼女の大声を聞きつけ、やってきたのだろう。

「それが……喋る新種の動物と、プリなんとかってものを探せと言われてまして。杉内さんは何かご存知でしょうか?」

「はて?どちらも今初めて耳にしたが……」

ビシツとオールバックに整えられた白髪が格好良く目立つ、最年長と思わしき杉内と呼ばれた執事はそう首を傾げた。

月野家に仕えて30年以上のこの男でも、今回のクレハの要望についてはピンときいていないらしい。

「そうですか……困ったものです」

わがままなお嬢様の無茶振りのような要求に、執事一同はただただ困惑していた。

街の南方に構えられている月野家とは対照的に、北方のエリアにあるのが安楽家だ。洋風な造りである前者とは大きく異なり、この街では異色な、昔ながらの日本家屋風の造りとなっている。もちろん街の住宅全てが洋風な建築物、というわけではないのだが、大きな、それも屋根付きの門が出迎えてくれる、平安時代の貴族の住む家のような物件はこの安楽宅のみである。

月野家ほどの圧倒的な財力はなくとも、この家が醸し出している通り歴史のある由緒正しい家系で、その血を辿れば戦国時代の大名にまで辿り着くのだとか、そういう噂まである。

「ただいま戻りました」

カスミの帰宅時の挨拶がこれだ。

「カスミ、こっちへ来なさい」

帰るや否や、奥の方から威圧感のある男性の声が聞こえてきた。

「お父様？帰っておられるのですか？」

その声に対し、カスミはそう訊ねる。

「いいから来なさい。話がある」

彼女は、周囲に聞こえない程度にため息を吐くと、言われた通りに父の待つ書斎に向かい歩き始めた。まだ夕方の5時前後という時間帯、この時間に帰宅しているなど通常ではあり得ない。声からも怒りの感情を汲み取ることができる。

察するに、校外に飛び出した例の件が彼女の父の耳にも入っており、これに対する説教のために仕事を放り出してまで帰って来た、ということだろう。娘の教育のためならばなんでもする男であるため、その可能性が濃厚だ。

「失礼します」

彼女は書斎の襖の前に正座し、これを静かに開け入室した。

「カスミ……。教員から聞いたぞ。なんの話か、わかるな？」

「はい」

「……なら答えだけ聞こう。一体何があった？」

「……」

彼女は黙り込んだ。いくら父であれ、このことは話せば長くなるーいや、話すと余計にこじれる。それだけの非日常で非科学的な案件だ。

「私には言えぬか？澄子には言えるのか？」

澄子、とは彼女の母の名である。

「いえ、お母様にも……」

いつもであれば、どんなことにも正直に素直に、そしてハキハキと報告をする娘が、こうもおとなしいのは珍しい。父は大きく息を吐いた後、葉巻に火をつけ、口に咥えた。

「学校に迷惑をかけるのは構わん。むしろとことん迷惑をかける。お前はすべてを踏み台にしてこの国の頂点にまで登り詰めればいい。だが、自分の身を危険に晒すようなことだけはするなと、昔から口酸っぱく言ってきたつもりだ！それを破っていることに憤りを感じておるのだ！わかるか？」

「……はい」

彼女は短く返答する。

「いいか？お前は誰よりも優れているのだ。学力、運動能力、容姿、何をとっても敵なしという安楽家の誇る宝なのだ！それがどう血迷ったら、自ら危険な目に遭いにいこうとするのだ！何か、お前をたぶらかしている輩が近くにおるのか！あれほど友人関係には気をつけるよ、私たち親が選んだ者以外とは付き合うなと教えてきたはずだ！我が娘の輝かしい、汚れなき人生に泥を塗ろうとしているのはどこのどいつだ！」

「……いいえ、他人は関係ありません。これは私の問題です」

「……お前はこれまで一度も嘘をついたことがなかったな。ならば、その言葉も真実であろう。念を押しておくが、お前の人生はお前だけのものではない。お前の命もだ。それだけわかったのならもういい。戻れ」

「はい。ではまた、夕食の際に」

入室時と同じように静かに退室すると、彼女はそのまま自室に向かった。

「お父様の言うとおりにね。プリキュア……あの特別な力に興味はあるけど、危険が伴うのなら必要ないわ。私が為すべきことは、ご期待に応えること。そうすれば、自ずと私が欲しがっている評価というものもついてくるものよ」

彼女は自分に言い聞かせるようにそう呟くと、机の前に腰掛け、分厚い参考書を取り出し勉強を始めた。明日は土曜日、学校は休みだ。休日にどれだけ自分を磨く努力ができるか、その時間配分なども考えながら、彼女はペンを進めていった。

—————

「さて、今日は土曜日？ かなんか知らんけど、学校は休みらしいぜ」
山の頂上から、レインがそう呟きながら街を見下ろしている。

「今回の目的はキュアスパークを確実に仕留めることだぜ。休日ってんなら、絶好の機会だぜ。クライナー、準備はできてるな？」

『クライナーアアア……』

いつの間にか、彼の隣には大きな怪物が佇んでいた。あのタバコのクライナーだ。

「悪いが、今日俺は欠席だ。クリアハートを所持している俺が奴らの近くに出向けば、何かの拍子に第二のプリキュアを生んでしまう可能性もありそうだからな」

この点は考慮しているようだ。意外に賢いのかもかもしれない。

「そういうわけだ。目標キュアスパーク。奴をおびき出し、潰してこい！」

『クライナーアアアアア!!』

彼の命を受け、怪物は街へと飛んで行った。

—————

輝ヶ丘でも一番規模の大きい、カガヤキ総合公園。

今日は毎日のように利用している高齢者に加え、休日ということもあり遊びに来ている家族連れ、さらに、この公園は現代では珍しくボール遊びも許可されているため、簡単なサッカーやキャッチボール

を楽しむ高校生や大学生といった若者たちもいるなど、大変賑わっている。

特に公園のシンボルでもある、中央広場の大きな噴水の前は、小さな子どもたちで溢れており、この街の平和さや明るさというのがこの一箇所に表されているとしても過言ではない光景を生み出している。「今日のワクワクステーションは、このカガヤキ総合公園からお送りいたしますーす！」

それだけに留まらず、人気ローカル番組までやって来ていたようだった。

「この街に住む方なら知らぬ人はいないでしょうこの公園は、今日もたくさんの人で賑わっています！来月には、この中央広場に、アメリカのグライシン大使も来訪予定ということもあり、全国からも注目が集まっています！」

なんの縁があつて大使がやってくるかまでは知らないが、そういうことらしい。これは、前にも述べた学校の制度などの影響により、どこか他の自治体に比べて閉鎖的な雰囲気もある輝ヶ丘にとつてはい取り組みだろう。

「輝ヶ丘という、誇るべき美しい街を世界に発信するチャンスにもなります！この機会をー」

ここまで語った時だった。噴水と、元気に遊んでいる子供達によりキラキラと輝いている空間に、じわじわと白い煙が立ち込み始めた。「ゲホツゲホツー……し、失礼しました、この匂い……タバコ？ちよつと、ここは禁煙ですよ」

キヤスターが、カメラが回っているのにも関わらず、喫煙者を注意しようとするがー

「あ、あれ？誰も吸ってない……？」

それもそのはずだった。煙を吐き出しているのは人間ではなく、クライナーなのだから。

『クライナーアアアアアア!!』

バシャーンという派手な音と水しぶきをあげ、怪物は噴水の中に勢いよく飛び込んで来た。

「わあっ！な、なにあれ！ちよつとカメラ回し続けるのよ！なんか出たわ！」

「い、いやヤバそうですよあれ！離れましょう！」

「ていうか水かかって、お化粧が崩れちゃってるわ！私は映さないで、あれを映すのよ！」

このスタッフの方々は、番組が生放送であることをわかっているのだろうか。

「く、クライナーが！」

家でゴロゴロと、テレビを通じてその様子を見ていた私はバツと起き上がった。

「ヒカル！早く行くラエー！」

「う、うん！」

クリアハートをポケットに押し込み、私は妖精を連れて一目散に外へと飛び出した。しかし、公園までは、全力で走っても15分はかかってしまう。

「もういつそこで変身して、プリキュアの身体能力で行った方が早いラエー！」

「そ、それもそうかも！」

「2人ともく待つレティ〜!!」

ここで変身しようと身構えた私の後方から、もう一匹の妖精レティツの声が聞こえて来た。

「レティツ！何してたラエー！クライナーが出たラエーよ！ヒカルと一緒に現場に……」

「いや、待つレティ！そのクライナー、この間ヒカルが倒せなかった相手レティよ？やっぱり、マナミも一緒に連れて行くレティ！」

「でもマナミはプリキュアに変身できなかった！言い方は悪いが、ヒカルが守らなくちゃいけない対象が増えるだけ……足手まといが増えるだけラエー！」

この妖精たち、仲は良さそうに見えるが度々意見が衝突しているよな気がする。

「ちよつと、マナミちゃんにそんな言い方ないでしょ！」

「事実ラエ！って、こんなところでなんか言ってる時間なんかないラエよ！急ぐラエ！」

「……そ、それはそうだね……よし！プリキュア！エキサイティングファイバー!!」

私はクリアハートを握りしめ、変身のための所謂『合言葉』を叫んだ。

これを合図に、私の身体が、そしてそれを纏う衣服が大きく変化していく。衣装は黄色いフリフリのド派手なもの。髪の毛については、色はそのままだが毛量が倍以上に増加。ついでに、何も手を加えていないのに勝手にツインテールになっている。これがプリキュアとしての私、キュアスパークの姿だ。

—————

『よし、パパッとやっつけるよ!!』

ビュンツという音を立て、私は空へと舞い上がった。ある程度の高度に達したところで体を捻らせ、足を畳み、勢いよく蹴り出す。

この結果、とてつもない速度を得た私は、瞬く間に公園の噴水の中に、先ほどのクライナーがそうしたような着地ーいや、着水をするこゝとができた。走れば15分の距離でも、飛べば30秒である。

ただ、頭から突っ込んでしまったため、顔面が強打の影響で真っ赤に腫れ上がり、全身に思い切り水をかぶってしまうこととなった。なんと格好のつかない、ヒーローの到着である。

『は、弾ける心……キュアスパーク……』

頭の上にお星様を浮かべながら、フラフラのまま私は締まらないポーズと名乗りを行なった。

『クライナーアアアアアア!!』

だがあのタバコの怪物はそんな私が落ち着くまで待ってくれるわけもなく、私の姿を見るや否やすぐに襲いかかって来た。この間よりも強い殺気を感じる。

『うわっ!』

強襲の体当たり慌ててジャンプすることで避け、一旦距離をおく。

『ラエティィー！どうやって戦えばいいか……な？あれ？いない……』

今の今まで忘れていたが、そういえば、プリキュアの力でここまでの時間短縮が可能だったのは私だけであった。妖精たちを置いてけぼりにしてしまったようである。

「な、なんでしょうか！少女が、1人の少女がああ怪物と対峙しています!!」

『へっ!?!』

さらにもう一つ忘れていたことがあった。カメラが回っていたのである。

「これは、何かのショーなのでしょう……?しかし、それにしてもよくできて……」

キャスターは困惑している様子だが、この場をうまく乗り切るためには、それこそヒーローショーを演じているふりをするほかないだろう。そうと決まれば、遣り切るしかない。

『で、テレビの前のいいこのみんな!!私はこの輝ヶ丘の平和を守る正義の味方!キュアスパーク!この煙を撒き散らす迷惑な怪物をやっつけるから、応援してねー!!』

我ながら恥ずかしい限りだが、これならどうにかなるはずだ。

「おおーやはりご当地ヒロインか何かのショーのようです!流石は大使を迎えることが決まっているこの輝ヶ丘!注目を集めるための活動は多岐にわたっている模様です!」

「へえ、キュアスパーク……。プリなんとか……。キュアスパ……。?もしかして、あれが安楽加清の求めている、プリキュアつてもものかしら……。?」

この中継を自室で眺めている紅羽は、顔をぐいっと画面へと近づけた。興味津々の様子だ。

『てやーっ!プリキュア!スパークキック!』

キサトエナジーを右足へとチャージし、バチバチと弾けるオーラをまとったその足で怪物めがけて飛び蹴りを行う。

『クライナアアアア!!』?

見事に腹部に命中し、数十メートルに渡り吹き飛ばすことができた。

だが、さすがに先日は苦しめられた相手だ。これだけで終わってくれるはずはなく、すぐに起き上がると、体中からもくもくと、タバコの煙を漂わせ始めた。一気に視界が悪くなる上、呼吸も苦しくなるほど咳き込むことで、集中力も散漫してしまう。

それだけではなかった。クライナーは咆哮し、雨雲を呼び出し、大粒の雨をもふらせ始めた。レインから作られた個体には、等しくこのようなオプシヨンも付いてくるらしい。

『クライナー!!』

奴は不意に背後から現れた。今度は強烈なパンチを無防備の背中に食らってしまった私が吹き飛ばされる。

『きゃっ!』

すぐに体制を整え、反撃したいところなのだが、クライナーは上手く煙の中に溶け込んでいる。それに、大雨の雨音で敵の足音などの移動音も聞こえてこない。本当に、敵の居場所がつかめないのだ。

『……やっぱり、2人揃わないと無理なのかな……』

そう考えた瞬間だった。心の底から常に湧き上がり、身体中に供給されていたはずの『力』がふと送られてこなくなつた。弱気なことを考えたがために、キサトエナジーが弱まった証拠である。プリキュアは100%キサトエナジーで身体を動かしていると妖精たちは話していたが、こういうことだったのか。

『……ううん、1人でもやらなきゃ!今この街を守れるのは、私だけなんだから!!』?

再び力が湧いてきた。結構単純なシステムである。

とはいえ、何か策を練らなければ、いくらパワーがあっても攻撃が当たらない。どうすれば――

――

「久義、車を出すのよ」

テレビの画面は、ただただ延々と広がる白い煙の空間を映している

だけで、それからの状況をつかむことはできない、という具合だった。だが、そこからでもなんとなくキュアスパークの劣勢を感じ取ったのだろうか。紅羽は執事に命じながら立ち上がると、外出用の上着を羽織った。

「今外は危険な様子ですよ。どちらへ向かわれるというのです?」

「あなたが知る必要はないのよ。私が出せて言ったら出せばいいの。なんなら小遣いもあげるわ。早く、パパに言いつけてクビにするわよ?」

「……かしこまりました」

久義は解せない、といった表情のままではあったが、渋々従うこととした。

—————

勉強の合間に居間でテレビを見ていたカスミも同様だった。やはり、ヒカルのピンチを察したのだろう。

「お父様、お母様。外出してもよろしいでしょうか?1時間ほどで戻ります」

「何?今テレビに何が映っているのかわからんのか?ショーと言っていたが、こんなもの、ショーでもなんでもない。私には、本物の化け物が暴れまわっているようにしか見えんぞ。第一、本当にショーならば、公園の器物を破壊まではしないであろう。昨日も言ったはずだ。危険なことだけはするなよと」

「……わかつてます。しかし危険なことではありません。危険な状況に陥っているであろう友人の様子を伺いに行くだけです。私が、危機に陥っている友人を救ったともなれば、私の評判は上がります。プラスにはなつてもマイナスにはなりません。それに私も馬鹿ではありません。危険と判断すれば何よりも自分の保身に動きます」

カスミは静かにだが強い言葉で、父に対抗する。

「ふん、反抗期のようなな。まあいい、友人を救う、か。状況はよくわからんが、そういうエピソードの一つや二つ、持っているのも悪くは

ないかもな。いいだろう。ただし1時間を破れば、二度とこのような外出はさせない」

「ありがとうございます。では」

こうして、カスミとクレハは奇しくも同じタイミングで家を出たのであった。

—————

『きゃっ！』？ 私はというと、相変わらず、見えない敵からの攻撃をただ耐え忍ぶしかなかった。やはり私の頭では、どうにも打開策が見つからない。こういう面でも、確かに2人そろったほうが効率がいいだろう。しかしないものをねだったところで何の解決にも繋がらない。私がやるしかないのだ。

とはいえ伊達に攻撃を受け続けたわけでもない。あるパターンのようなものも掴みかけているところだ。例えば、背後からの攻撃の後には—

『左!!プリキュア!!スパークパンチ!!』

弾けるオーラをまとった利き腕で、思い切り左方向にパンチを入れた。

『クライナアアア!!』？

バチインツという音とともに、命中した手応えを感じた。張ったヤマが当たったようである。ようやく、反撃らしい反撃ができた。

まだ安心するには早い。これを学習してパターンを帰られでもしたら、また振り出しに戻ってしまう。それでは身体が持たない、今度こそやられてしまうことにもなるだろう。

「へえ、これが噂のプリキュア。生で見るとなかなかの迫力ですわ。安楽加清が欲しがるともわかる気がしますわね。しかし、まさか化け物と戦う力のことだったとは」

背後から聞き覚えのある声でした。

『つ、月野さん!!?なんでここに?』

「あら、私のことを知っているの?……よくよく見ると、どこかで見た覚えのある顔立ちですわね……?」

「あの人は光山さんだから、それもそのはずよ」

さらに、その隣にカスミまでもが現れた。

「安楽加清……やはりプリキュアが気になる様子ね。……正直驚きましたわ。あなたが評価や名声を欲しがっているのは存じ上げていますわ。そのために、あれほどの派手な力を求める理屈もわかる。でも、怪物と戦うなんていう危険も伴うのに」

「確かに痛いのは嫌だし、怪我でもしようものならお父様に叱責されるし、危険なことなんてごめんよ」

「……なら、なぜそれをわかって、その危険な場所に、のこのこと出てきたのかしら」

「心外ね、私だって人間よ。街が壊されたり、同級生が身を呈して頑張っている姿だったりを見たら心くらい動くわ。そして気がついたら身体が動いてた。それだけよ」

「あら、柄にもないことをおっしゃるのね」

「……そういうあなたも興味津々みたいだけど、そんな月野さんにいいことを教えてあげるわ。プリキュアの力は、後ひとつ枠が空いているの。もう1人、あの力を手にできるのよ」

「……！へえ、そうなの……」

「どう？どちらが先にプリキュアの力を手に入れるか、とか。たまにはこういった勝負があっても面白いとは思わない？」

カスミの口から、予想だにもしていなかった言葉が飛び出した。

「……どうしたのよ安楽加清。今日はちよつと様子がおかしくてよ？柄にもないことを言うし、あなたから勝負まで仕掛けてくるなんて。これまで70回ほど勝負しましたけど、あなたからの申し入れはこれが初めてだよ」

「……繰り返しですけど私だって人間よ。学校では先生に、家ではお父様に叱責されたことで、ちよつと落ち込んだの。落ち込んだ心には刺激が必要なの。あなたみたいの方がいると、それも受けやすい」

「……光栄ですわ。よくってよ。どのみち、私たちのうち誰かが加勢しないと、光山さんが負けてしまいますし」

2人は互いの目を合わせ、ニヤリと笑みを浮かべあった。相性は最悪、常に対立し喧嘩することもしばしばだが、互いに良き好敵手とし

て認め合っていることには間違いないようだ。

「それで、どうすれば手に入るのかしらね」

クレハが素朴な疑問を投げかけた。

「残念ながら私は存じ上げないわ。でも御覧なさい、力を得ることができた光山さんには、強い正義感があるわ。鍵になるのは、あのような強い意志かもしれないわね」

「なるほど。あながち的外れではなさそうですね。なら、私の方が有利ね。私はあなた以上に、あなたには負けられないという強い意志がありますわ。そこで指を啜えてみていなさい、この月野紅羽が、あなたよりも一歩先に行く瞬間をね！」

「心外ね。あなたはどう足掻いたって私には勝てない。永遠の2番手だつてことを思い知らせてやるわ」

先程までのいいライバル同士、というムードは一転、2人の間に漂う雰囲気はいつもの緊張感にあふれるものへと変貌した。どちらも呆れるほどの負けず嫌いである。

「ヒカルく大丈夫ラエか〜!？」

そこに、ようやく妖精たちが追いついてきた。

「喋る新種の動物……やはり関係者でしたのね」

「お、お前はあの金持ち！なんでここにいるラエー！、しかもカスミまで……」

「昨日は悪かったわ。プリキュアを小馬鹿にしたことを言ってしまった。危険なことをしたくない、あくまでステータスとしてあの力が欲しい。その考え方そのものは変化してないけど、流石にこのまま光山さんをただボーッと眺めているわけにはいかないわ。この間、大田さんが言っていたことがわかる気がする」

「そして私は、何があっても安楽加清に負けるわけにはいかない。プリキュアの力をこの方よりも先に手にしてみせる。そう思つてここに来ましたの」

「……不純な動機ラエが、2人とも十分なキサトエナジーラエね。僕は君達2人とも好きじゃないラエが、確かにこのままじゃヒカルがやばいらエ。君らに賭けるしかないみたいラエね」

「でも、クリアハートはレインが持っているレティ。あいつ、ここには来てないレティよ。きつと2人目の出現を予防してるんだレティ」
「いや、希望はある。2人が、クリアハートをこちらへ引き寄せる、それだけの強い意志があればなんとかなるラエ。この際動機は問わないうラエ！2人とも強く力を求めるラエ！ヒカルを助けて、敵を倒してくれるのなら今日のところは許してやるラエ！」
「なんであれプリキュアが揃えばクリア王国だって取り戻せるレティ。私は、私欲にまみれた自己中な戦士も嫌いじゃないレティよ」
「と、いうわけらしいわね」

「負けせんわ！」

2人は、目を閉じ、胸の前で手を合わせた。次第に、彼女たちの体は、各々から溢れ出したキサトエナジーによる黄色いオーラに包まれ始めた。

—————

「な、なんだ!?クリアハートがひとりでに……?」

山頂でゆつたりとくつろいでいたレインは、急に光り始め、宙へと浮かび上がったクリアハートを驚嘆の目で見つめていた。

「ま、待ちやがれ!どこに行きやがる!まさか!」

ハート型の装置は、そう叫ぶレインを置き去りに目にも留まらぬ速さで街の方へと飛んで行った。

—————

「クリアハートが!こつちに飛んで来たレティ!」

「2人が引き寄せたラエよ!一体、どつちがプリキュアに……!」

二匹の妖精が固唾を飲んで見守る中、クリアハートは、クレハの元へと舞い降りたのだった。

「……な!?まさかあの金持ちが!」

「クレハ!合言葉を叫ぶレティ!プリキュア、エキサイティング」

「ファイバーつとー！」

「そんな……！私じゃなくて、彼女が選ばれたっていうの!？」

隣で目を丸くするカスミに対し、彼女はニヤツと短く笑った後その言葉を叫んだ。

「プリキュア！エキサイティングファイバー!!」

彼女を包んでいたオーラは、合言葉とともに燃え盛る紅蓮の炎のよ
うな形状へと変化した。黄をベースとしたスパークのものは色違
いの、橙色を基調とした衣装に様変わりし、髪も真紅に染め上がり、前
髪は目にかからない程度、後ろは背中を覆い隠すほどの量と長さにな
った。

これが、クレハのプリキュアとしての姿である。

『高貴な心！キュアイラーレ!!』

『つ、月野さんが……もう1人のプリキュア!？』

『加勢しますわ光山さん！プリキュア！イラーレフレイム!!』

降り注ぐ大雨の中でも全く勢いの衰えない炎が、立ち込める煙を全
て吹き飛ばした。

『す、すごい……』

『おーほっほっほ!!見ました!?見ましたかこの私の力を!!どうです!?
安樂加清!!私は今、あなたの一歩先にいますわ!!』

後ろでただ眺めることしかできないカスミの方を向き、そう高らかに
笑うキュアイラーレ。

「イラーレ!!君の相手はカスミじゃなくて、クライナーレティー!」

『わかっていますわ!光山さん、いえ、スパーク！エナジーを合わせま
しょう!』

『う、うん!!』

私たちは手を繋ぎ、2人の持ち合わせる力を、その繋ぎあつた手に
込めていく。

まさか、クレハと手をつなぐような日が来るとは。私は彼女のこと
が苦手、嫌いというところまであるが、今は溢れ出て来るキサトエナ
ジーが、そのことを忘れさせていた。

『プリキュア!!スパークイラーレエキサイト!!』

繋いだ手から解き放たれた虹色の光線が、クライナーを包み込んだ。

『……タノ……シィ……ナア……』

そう呟きながら、怪物は消え去った。同時に雨とこれを降らせていた雲は綺麗さっぱり消え去り、周囲は太陽の光によって明るく照らされ始めた。

「……なんで……なんでこの私を差し置いて、あの2人がプリキュアなの……」

だが、カスミの心は晴れるどころか、さらなる分厚い雲に覆われていたようである。

プリキュアは無事に揃った。だが、まだ一波乱、いや、ふた波乱は起こりそうだ。

続く

第5話 「吹き荒れる豪雪！スノウ強襲！」

第5話 「吹き荒れる豪雪！スノウ強襲！」

分厚い雲に覆われた、灰色の空。この土地は、ある男が治め始めてからというものの、未だ一度たりとも「光」を浴びたことがないという。毎日のように雨や雪が降り、激しい稲妻が走ることで珍しくはない。

日本の千葉県に構えられているとあるプロ野球の球場では、打球の行方が左右されるほどの強風が吹くことで知られているが、この土地で常時吹いている風はその比では無い。

まさに「嵐」という表現がそのままピタリと当てはまるような土地なのだ。

もつとも、上述の男が訪れてからというものの、ここはただの土地ではなく、一つの国土となった。彼が国を創り上げたのである。

男は通常、その国土の最奥部、ひときわ目立つ大きな城の中で、専用の台座に肘をかけながら座っている。だが今日は少し様子が違うようだ。機嫌の悪そうな面持ちで、数十メートル離れた場所で平伏せている部下を見下ろしている。

「かのレイン将軍とあろうものが、この失態の連続は何事です？期待以上のご活躍ですね」

男は皮肉を交えながら吐き捨てた。

「申し訳ございませんクラウド様!!プリキユアとやらが、あそこまでの戦闘能力を所持していたとは……!」

レイン将軍と呼ばれた部下は、ひたいを床にくっつけるほどの勢いで頭を下げている。

「……ほう、私にはわかりませぬが、かつて闇をも引き裂いたとの『伝説』を持つ戦士を、どうして侮り舐めてかかれるのか、詳しく説明していたいただきたいですね。でも、過ぎたことを話していても仕方がない。私から言えるのは一つだけです。失望しました。戦線から離脱してもらいます」

男Ⅱクラウドは、冷めた顔のままそう告げた。

「お、お待ちください!!この將軍レイン、次こそは必ず……!」

「いえ、スノウと代わってもらいます。彼女にも、もうそのように話してあります。じきに戻ってくるでしょう」

「そんな!お言葉ですが、このレインに倒せなかったプリキユアを、あの女でどうにかできるとは到底思えませぬ!!クラウド様もご承知のはず、この国の現在の領土の3割は俺が奪い取ったもの!戦場での実績はあの女とは比べ物にならないはずです!!」

「それはそれ、これはこれですよ。あなたの戦績を否定まではしていません。私は、クリアハートを奪取せよという任務に失敗しながらも、自信たっぷり次こそは!と語ったあなたに二度目の機会を与えました。その結果がこれですので、その罰を与えているだけです。將軍ともある軍人が、自ら有言したことを実行できずまた手ぶらで帰ってくるとは何事ですか?冷静に考えなさい。私、何かおかしいこと言ってますかね?」

クラウドはため息をつきながら、淡々と語った。

「……おっしゃる……通りです……」

あまりにもまっすぐな正論を突きつけられてしまい、レインは押し黙るしかなかった。

「しかしまあ、あなたの言うことも一理ある。プリキユアが2人……前にも言いましたが、レインとスノウ、二人掛かりでないと止められないかもしれないでしょう。スノウも満足な戦果は挙げられないと踏んでいます」

「で、では……!?!」

「ですが、これはあくまで、現在の戦力差を分析して得た目測です。……ちやうど、スノウが帰還したようですね。報告を伺いましょう」

クラウドたちのいる大広間に、突然、小規模だが吹雪が吹き荒れた。この小さな雪の嵐はすぐに収まったが、つい数秒前まではそこにいなかった女が立っていた。これがスノウである。

「クラウド様、スノウ、只今帰還いたしました」

すぐに跪き、クラウドに対して頭を垂れた。その右腕には、何やら

見慣れない物体が握られている。

「ご苦労様です。それで、その手に持っているものは何か、報告をお願いします」

「はっ……こちらはクラウド様のお求めになられている『エンシヤント・ウエポン』の一つ『ダークブレード』。文字通り、そして見ての通り、ウィザパワーを使うことで真の威力を発揮する、闇の劔です」

ダークブレード、その名の通り禍々しいオーラを話す長劔だ。中世西洋の騎士が好んでいそうな、シンプルなロングソードの形状をしており、扱いやすそうな武器である。

「ほほう。素晴らしいではないですか。スノウ、ちょうどいい、レインに代わり、このダークブレードとともに人間界に行きなさい。プリキュアを倒せ、までは言いません。彼女らの持つエンシヤントウエポン、クリアハートを奪うのです」

「承知いたしました。お任せください。この男とは違って、立派に結果を残してまいりますよう」

スノウは横目でレインを見つめ、ニヤリと笑うと、再び吹雪を巻き起こしながら姿を消した。

「レイン。私からの信頼を回復したくはありませんか?」

スノウが完全に姿を消した後、クラウドはもう一度、レインへと視線を向けた。

「も、もちろんです!!なんでもします!!」

レインは叫ぶようにいった。クラウドという男は、この優しげな雰囲気とは正反対の、凶暴な性格も秘めているという二面性がある。本気で怒らせれば、実績ある将軍といえどもどのような処分が下るか想像するのも恐ろしいことだ。必死なのだろう。

「いい心意気です。さすがはレイン将軍。では、スノウに代わり、エンシヤントウエポンの回収に向かってください。あなたにも、その必要性は教えているはずですよ。将軍としては、戦場から離れこのような雑務をこなすことは屈辱的かもしれませんが、間接的には軍事のためでもあります。お願いしますよ」

クラウドはあいも変わらず、淡々とそう告げた。

「承知いたしました!!見ていてくださいクラウド様!このレイン!必ずやー」

「あー…、そういうのはいいです。あまりそうやって成功を約束しないほうがいいですよ。あなたそれで失敗して私からの信頼失つてるんですから。仕事はあげますけど信用はしていません。それをちゃんと理解してくださいよ。さあ、時間がないですよ。とつとと行つてきなさい」

「……は、はっ!」

単調な口調で、改めてあっさり「信用していない」との烙印を押しされてしまったレイン。一瞬、何かを言い換えさんという表情をしたが、相手はクラウドである。すぐにその言葉を、喉の奥へとしまい込み、頭を下げて命令に従った。

「随分と辛辣だったな。相手はレイン將軍だぞ。不満など持たれて、クライナー軍を率いてクーデターでも起こそうものなら面倒になる」

レインが完全に姿を消した後、常にクラウドの側で控えているスキンヘッドの大男、ストームが耳打ちをした。

「はは、彼は素直な男です。すぐに顔に出るので、そういうことは未然に防げますし、例えそうなつてもあの程度の者、あなたにかかれば赤子の手を捻るようなものでしょう」

「そうだが、今はエンシヤントウエポンを集めること、そして邪魔なプリキュアをどうにかすることに集中すべき時期だ。プリキュアは強い。隙を見せるわけにはいかないだろう。面倒になるとはそういうことだ」

「まあ、そうですね。しかしご安心を。私は彼が、本気で私に対して反抗心が芽生えるようなことはしませんよ。そこらへんは上手くコントロールします。それに、渡してくれたのでしょうか?カオスシードの方は」

「ああ。……なるほどな。カオスシードにはそういう使い方もあったか。俺はてつきり、プリキュア側の人間に植え付けるものだと思っていたが」

「その推測も当たっています。もう、目星はつけた。レインはあのま

ましばらく放置で行きます。カオスシードは後1個残されている。それを、私の指示した『人間』に植え付けましょう」

クラウドは、カオスシードと呼ばれる、大豆よりも小さな、まるでひまわりの種のような物体を指先で遊ばせている。

「目星がついていると言ったな？どいつだ？スノウに指示を出す」

「いえまだいいです。まだ早い。それにストーム、あなたなら、すぐに察するはずです。さて、スノウはダークブレードの力をどの程度使えるのか、見ものですね」

クラウドは不敵に笑った。その外では、嵐がさらに激しさを増していた

—————

「おーほっほっほ!!いやあ、いい気分ですわあ!」

「ちよ、ちよつと月野さん、声が大きいって……」

月野紅羽、彼女がプリキュアの力を手に入れた翌日の、教室。テレビで放送されていたこともあり、怪物を退けた女性戦士が2人いるという事実は、もうクラス中、いや街中に広まっていた。ローカル番組であったのが不幸中の幸いか、全国区の話題こそ呼んでいないが、このネット社会である。SNSなどを通して拡散されるのも時間の問題だろう。

しかし問題なのはそこでもあるが、今はそうではない。妖精たちも頭を悩ませているのだが、なぜ月野紅羽が覚醒したのか、これである。

1番最初に覚醒したプリキュアが、キュアスパーク、つまり私、光山輝である。そのプリキュアに変身するためのアイテム、クリアハートはふたつあったため、必然的にもう1人、プリキュアが存在するということはわかっていた。

変身には条件がある、と妖精は述べていた。女子であることは言うまでもなく(近年は多様性社会であるため、これを言うまでもなくと表現すると語弊はあるかもしれないが)、特に中学生あたりが望ましいらしい。明確な理由は定かではないが、有力な説としては、プリ

キュアの力の根源であり、前向きな精神が生み出す『キサトエナジー』が最も多く分泌される年代だから、というものがある。

キサトエナジーは、プリキュアの全てであるとしても過言ではない。もちろん、戦闘においては変身者の身体能力や、状況判断能力なども求められる。だが、モノを言うのはやはり火力であり、ここが変身者のキサトエナジーの量と直結している。

月野紅羽は確かに条件を満たした上で、少なくともネガティブな思考回路ではないためキサトエナジーも持ち合わせている。理屈で言えば、変身は不思議なことではないのだ。

ただ、その理屈上であれば、私の親友、大田愛海が変身できなかった理由を説明できない。それに、クレハの覚醒時には、隣に同じく条件を満たしているはずの『神童』安楽加清もいた。なぜ彼女だけが覚醒できたのか、クリアハートをこの人間界に持ち込んできた妖精すら説明ができないのである。

「しかし、いい気分ですわねえ。あの安楽加清の先を越しましたわ！おほほほほ」

「安楽さんの目の前でよく言えるわね。プリキュアになるにはふさわしい凶太い神経なこと」

カスミを目前にし煽るクレハに対して、マナミが皮肉を交えながらそう言った。

「だから、2人とも声が大きいよ！もうみんなにプリキュア存在を知られてるんだし、慎重にしないと……」

「知られているのは女性戦士がいるってことだけ。プリキュアって名前は知られてないはずよ。だからいいんじゃない？」

せつかくの私の忠告を遮ったのは、煽られているカスミ本人であった。

「まあ、私ではなく月野さんがクリアハートに選ばれたことは心外だけど、兎にも角にもプリキュアは2人揃ったのよ。これで、私がこのことに介入する必要は無くなったみたいね」

カスミのプリキュアへの興味関心は、すっかり冷めてしまっている様子だ。昨日はとても悔しそうな表情をしていたはずのだが、落ち

着いてきたのだろうか。

「そうですねわそうですね！もうあなたは必要ないってことよ！これからは私の天下ですね！！」

「……なんですって？」

「何をカリカリなさっているのかしら？今ご自分で申し立てたことですよ？」

「心外ね、あなたを調子に乗らせるために言ったことではないのだけど」

カスミが、クレハの元へと詰め寄っていく。普段の彼女なら、クレハの挑発には耳も貸さないはずなのだがーやはり、少なからず焦りのようなものはまだ残っているのだろうか。

ただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、クラス中の視線が私たちの方へと集まってくる。

「あーもう!!いっつもこんなじゃん!やめなつて!」

私はそう叫びながら、彼女らの間に割って入った。

「月野さんも、安楽さんにちよつかい出しすぎだよ!大体いっつも月野さんの余計な一言から始まるじゃない!」

止めに入ったところで、それ以上のことをやめておくべきだったのだが、私もクレハへの苛立ちから、ブーメランであるが余計な言葉を放ってしまった。しまった、と口を閉ざそうとしたがもう遅い。

「……ふふ、まさかあなたが割り込んでくるなんて、思いもしていませんでしたわ。さ、どいてくださる?プリキュアとしては私よりも先輩かもしれません、今は関係ないですね。当たり前ですけど、あなたのように何も無い、おつむも鈍そうなアホの子に説教される筋合いはなくてよ?」

「な……っ!い、今なんて……!?!」

カーツと頭に血が上り、顔が徐々に赤くなっていく。

「や、やばっ!ヒカルちゃんに面と向かってアホっていうのは禁句……!!」

マナミが慌てて席から立ち上がり、私の腕を掴んで教室の外へと走り出した。

「し、失礼しました〜!!」

ドタドタつと音を立て、そのまま廊下の奥の方へと走り去る。

「……シラけちゃいましたわ」

クレハは溜息を吐きながらそう言った。

「そうね。私も気がつかないうちに熱くなっていたわ。でも月野さん、あまり調子に乗らないことね。今回のことは素直に私の負けよ。でも、まだあなたが完全に優位に立ったわけじゃない」

カスミも詰め寄るのをやめ、自分の席へと戻っていく。

「わかってますわ。まあ、私も初勝利の嬉しさあまり、過剰に舞い上がっていましたわね。だけど、近いうちに私はあらゆることであなたに勝つ」

「と、いうことは、出馬の意思は固めているのね?」

「当然ですわ。この学校では未だ嘗て、1年生の生徒会長は存在したことがない、と言いますが、その歴史は今年で終わりますわ。あなたか私、すでに二択しかないようなものよ。そして私が勝つ。いまに見ていなさい? 貴方の神童伝説はもう間も無く終わりを告げますわ。おーほっほっほ!」

なぜか、自然に和解のムードが出来上がっている。いつもならば、カスミが頑なに無視を続けることで、クレハの方が飽きてしまいいつの間にかピリピリとした空気が時間の経過とともに緩和されていくのだが、このような雰囲気彼女らの対立が終わるのは初めてと言ってもいい。

カスミが、クレハのことを認め始めているのだろうか。いや、認めざるを得ないことを目前に見届けてしまったのだから、無理もない。

こうなると、私は無駄にただキレていただけのヤバい子になってしまうののだが、もともとそういう認識らしいのでこの際よしとしよう。「キーツ! やつぱり私、月野さんとは合わないよ!! あの子と一緒にプリキュア!?! できるわけないじゃない!!」

廊下の奥で、私はマナミに八つ当たりするかのようにそう叫んだ。

「ま、まあまあ……ほら、昨日の戦いでは仲良くお手てを繋いでたし……」

「あれは！変身の時と同じで身体が勝手に動いてただけだし!!」

「……割り切るしかないよ、月野さんのあれは、多分死んでも治らないやつよ。いかんせん、本人に悪気が一切ないんですもの。彼女、安楽さんに勝つことしか頭にない。安楽さんしか視界に入っていないのよ」

「それにしても、言い方ってものがあるよ」

「でも、さっきのはヒカルちゃんも悪いわ。2人のあんな雰囲気は別に今に始まったことでもないだし、無関係な私たちが割って入る必要はなかったのよ」

「それは……でも、私安楽さんのこと好きだし、目の前で安楽さんのことバカにしているようなところを見ると、まるで自分までバカにされてる気がするっていうか、なんていうか……」

「あらヒカルちゃん、『そっち』の気があつたの?」

マナミがニタニタと笑いながらそう言った。

「そ、そういう意味の好きじゃないよ!!……ふふ、ごめんマナミちゃん！マナミちゃん何も悪くないのに、当たっちゃって……おかげで頭冷えたよ。ありがとう」

「いいってことよ。これでよくわかったでしょう?あなたは私が、ちやーんと見ていなくちゃね」

「あはは……そうみたいだね」

私の話に対して、真面目に耳を傾けつつ、手頃のタイミングで冗談を交えることで苛立った感情を緩和させる。しれっとやってのけているが、これはかなり高度な術とも言えるはずだ。冗談のタイミングを間違えば、私の怒りの感情の矛先が彼女へと方向転換してしまうことにもなる。

マナミの頭の良さという部分は、このようなシーンで光っている気がする。もちろん偏差値というデータも安楽、月野というツートップと比較しても遜色ないものだが、機転が利く、頭の回転が早いという意味合いでの良さが目立っている。

「しかし、これは大きな懸念材料ラエ」

そう言いながら、黄色い耳を持つ妖精ラエティがひよこりと、私の

ポケットから顔を出した。

「うわびつくりした!いたの?」

「いたの?とは失礼ラエ!!……知つての通り、プリキュアの力はキサトエナジーが左右するラエ。ヒカルの、あの嫌味な金持ちに対する負の感情を取り除かなければ、2人で戦う時、ヒカルの力が弱体化してしまう恐れがあるラエ」

「あんたもその言い方だと負の感情ありそうだけどね……」

マナミがボソツと呟く。

「とはいえ、人間関係において負の要素を正の要素にする難しさは僕も理解はしているラエ。逆はとても容易なのに、ラエね。これだと、せつかく2人揃ったのに大して強くないことになってしまう。何か手を打たなければ……」

「ヒカルちゃんと月野さん、2人でデートでもさせるとか?」

マナミが今度は大きな声で提案した。

「で、デ!」

思いがけぬ言葉に驚き、目を丸くする私。

「親睦を深めることは大事ラエ。ナイスアイデアと言える」

「ナイスアイデアじゃないよ!?無理だよ、むしろ仲悪くなる可能性大だよ!」

「でも月野さんとなら、ヒカルちゃん、一円も使わずとも楽しめると思うよ。すっごいおしゃれな、大人っぽいカフェとか連れてってもらえそうじゃん」

「月野さんにタカれと!」

「ヒカル、無理と決めつけるのは良くないラエ。プリキュアたるもの不可能を可能にしなければならぬ。どのみち、君たちの間には一定の絆がなければ、この先の戦いも苦しくなるラエ」

「だとしてもね……」

「まあ渋る気持ちはわかるラエ。僕だって、あの金持ちと2人で行動するのは嫌ラエよ」

ラエティは腕を組み、首を何度か縦に振りながらそう言った。

「……でも、そういう方法があるつてのは覚えておくよ……。むしろ

月野さんの方が嫌がりそうだけどね……」

彼女は私を1人のプリキュアとして認めていそうな節はあったが、それでもまず私のことなど眼中になく、何もできないモブの1人という大前提を持つていそうだ。私が行くの行かないのの前に、彼女から拒絶される可能性のほうが高いだろう。

「まあ、話変わるけどさ、いい?」

ここで、マナミがそう切り出した。

「まあ、こんな話続けててもね……なあに?」

「ほら、今日からしばらく部活動の見学期間じゃん? ヒカルちゃんは部活、何するのかな?」

「あ……! 部活ね、忘れてたよ! まだ何にも決めてない……」

一応、小学校ではソフトボールをやっていた。得意でも下手でもなという感じだったが、続ける気は今の所ない。運動神経が鈍いという自覚もなければ運動が苦手というわけでもないのだが、なんとなく、運動部という気分ではないのだ。

「私も何も決めてないからさ、せつかならヒカルちゃんと同じやっがいいな?」

「その方が楽しそうだしね! 興味あるやつとかあるの?」

「そうねえ、吹奏楽とか!」

「おお! 中学生っぽい!!」

「なにそれ。でもいいでしょ? 今日暇なら見に行こうよ!」

「オツケー、そうしよう!」

部活、そうだ部活だ。中学生になった途端にプリキュアの戦いに巻き込まれすっかり忘れていたが、中学生が最も輝き活躍できる場所、部活があるではないか。ここでしっかりと青春しながら成長すれば、なにもない、おつむも鈍そうなアホな子という失礼極まりないレッテルを貼られることもなくなるかもしれないのだ。

プリキュアも大事かもしれないが、第一に私はまだピカピカの中学1年生、ワクワクで胸を満たしながらイキイキと日々を送っていかねければ。私は月野紅羽のことは一旦忘れ、それだけを考えることにした。

「さてと、あそこがプリキュアのいる学校だったかしら？」

高層ビルの屋上から、この輝ヶ丘を見下ろす、1人の女性のシルエットがあった。スノウである。

「つたく、レインめ、あの時に変な理屈をこいてないで、あのクリアハートをクラウド様へとお渡ししていれば、面倒なことにもならなかったのにね。將軍だかなんだか知らないけど、わけのわからないチンケなプライドのせいで仕事が増えるなんて、こっちの身にもなれってんだ」

ブツブツと、レイン將軍に対する愚痴を吐き捨てながらも、その腕にはエンシャントウエポンの一つ、ダークブレードを強く握りしめている。いつでも戦闘に入れるという姿勢だ。

「2人揃うと危険なことくらいわかってる。ならば、どちらか片方に狙いを絞り、1人ずつ確実に潰さなければ。刺し違えてもクリアハートだけでも手に入るならそれで私の勝利。2人目のプリキュア、キュアイラーレに関してはデータも少ない、迂闊に突っ込むのは危険と判断すべきかね。ならば、最初に出現したキュアスパークか」

スノウは空中で右腕を、左へさつと素早く振った。するとその場に、いくつもの電子ウィンドウが出現した。どうやら、プリキュアのデータが記載されているものようである。

「キュアスパーク……本名は不明だが、バディ妖精にはヒカルと呼ばれている。キサトエナジーの量は凄まじく要警戒。だが中身はただの子供、戦術の知識は無いに等しく、立ち回りも上手いとは言えない。正面からキサトエナジーに物を言わせた体術を繰り出してくるが、中距離でも強力な飛び道具あり。こちらの推定レンジは半径10メートル。十分に距離をとれば避けられる程度のもの。決め技はそれ以上の広範囲かつ高火力でスピードもある。撃たれたら負けと思うべ

し……か。なるほど、まあ、たった数度の戦闘で割としっかり分析してあるし、レインも完全な手ぶらだった、というわけではなさそうね」
どうやらレインが残した記録のようである。このように、戦闘記録から分析したデータを、他の仲間も閲覧できるようにするシステムがあるらしい。流石は軍事国家というべきか。

「まあ、なら間違いなくこのキュアスパークを1人にする状況を生み出し、イラーレが参戦できないほどの距離に誘い込むのがいいね。プリキュアの移動速度は尋常でないとも聞いている。この街全てが守備範囲といっても過言じゃないだろうね。なら、誘い込んだ後も数分で決着をつけなければ、イラーレが駆けつけ面倒なことになることも予測できる。迅速に叩かなければ」

スノウは空中に映し出された電子ウィンドウを、先ほどとは逆の操作を行うことで消滅させると、屋上から飛び降りた。

「さあ、作戦は固まったわ。私の勝利は間違いない、これで昇級すれば、レインをも私の部下にできるわね……ククク……」

そのレインも似たようなことを言っていた気がするがー。

カバークラウダーの幹部たちにあるのは仲間意識ではなく、あくまでお互いを蹴落とすべき相手という意識のようだ。よく言えば、切磋琢磨しているとも捉えられるが、悪事のためにそんなことをされても、困ったものである。

—————

そのビルの麓のベンチに、1人のスーツ姿の女性が、魂の抜けた様子で腰をかけていた。すっかり疲れ果てた顔をしている。

「はあ……なんでうまくいかないんだろ……何がダメだったっていうのよ……」

だらん、とベンチの外側へと降ろされている右腕。そこに握られたスマホの画面には『別れよう』とのチャットアプリのバナー通知が来

ていた。1時間前のものだ、少なくともそれだけの時間、このように過ごしていたのだろう。

「あら、これはいいウィザパワーね」

その背後に、ストンつとスノウが降り立った。女性は突然、空から降って来た人間の姿に酷似したその異世界人を目にし、ビクツと飛び上がる。

「ひっ……な、なんですかあなたは!？」

体を震わせながら、スノウを見つめている。

「ククク……いいわね、その表情。恐怖からますますウィザパワーが強くなって。これは、いいクライナーになりそうね……!」

スノウはそう言うと、女性の方へと右腕を差し出した。

「かわいそうに、まるで氷のように冷たい心……。召喚!クライナー!!この者の凍てついた心を力に変え、絶望の吹雪を吹き荒らせ!!」

『クライナーアア!!』

女性を媒体として出現したクライナーは、身長おおよそ5メートル程度の、全身が分厚い氷で覆われた、薄暗いピンク色をしたハート型の個体だった。

「失恋クライナーってところかしらね。さあ、おゆき!まずはキュアスパークをおびき出す!」

周囲に、身体の芯から冷え上がるほどの吹雪を吹き付けながら動き出したクライナー。その影響で、道を行き交う人や車が、その身に雪を積もらせながら舞い上がっていく。

「う、うわああああ!」

人々の悲鳴や、鳴り止まないクラクションをよそに、クライナーはゆっくりと歩みを進み続けている。

「あら、あなたもこっちについてくるの?」

学校の廊下。珍しく、安楽加清と月野紅羽が並んで歩いている。

「当然ですわ。部活動見学など不要。私は先ほども言いましてけど、最初から生徒会と決まっていますわ。別に、あなたに付いて来ているというわけではないですわよ」

「まあ、そうね。ごめんなさいね、愚問だったわ」

「それで、少し伺いたいことがあるんですけど、よろしくて？」

「……あなたが私に？珍しいこともあるのね。明日は嵐かしら」

カスミが冗談っぽくそう呟く。

「……光山ヒカルのことですわ。彼女は一体、どのような人間でして？」

カスミのジョークを無視しながら、クレハはそう続けた。

「奇遇ね。私も似たようなことを先日、あの妖精さんに伺ったわ。不思議な子ね、一見、何も持ってなさそうな、どこにでもいる明るいだけが取り柄の子。昔からそうだったわ。なのに、特別な力に選ばれている」

「……そこですわ。私のような全てがハイスペックな人間にこそふさわしそうな、あのプリキュアという力。なぜ光山ヒカルに発現したのか、意味がわかりませんわ。……あなたも、似たような疑問をお持ちのこと。正直、悔しいですが現段階ではあなたは私よりも優れている。なのに、あなたはあの力には選ばれませんでしたわ。やはり、そこには引つかかるものがありますか？」

「まあ、過ぎたことは仕方がないわ。手に入らないものをねだるよりも他のことに時間を費やすべきよ。でも確かに、納得はしてない。心外ですもの。……別に、あの力が心底欲しいというわけではないし、むしろあんな危険なことに巻き込まれるくらいなら不要だわ。でも、納得がいかないのよ。私は誰よりも努力をして、誰よりも優れた人間なはず。なのに、力は私ではなく、何も無い彼女と、私の下位互換であるあなたを選んだ。引つかかるものがあるかって？ないわけがないでしょう」

カスミは少し早口気味にそう言った。

「安楽加清……いちいち結構辛辣ですわね。まあ、慣れてますけど」

クレハもクレハだが、カスミもカスミで相変わらずのやや自己中気味の思想だ。能ある者というものは、当然だが自信に満ちている。私も強くなりやすいということか。

「でも割り切ってはいるわ。プリキュアとしては光山さんやあなたに負けた。でも、プリキュアは正体を隠さなければいけない存在。よくよく考えてみれば、力を手にしたところで、それを示すことができないのなら私の人生にとってプラスにはならないわ。なら、成績や肩書きという、誰の目にも明らかかなものを手にし、それを示したほうが効率的よ」

「……なるほど、安楽加清らしいですわ。でも、宣言した通り、あなたの神童伝説はもうここまででしてよ。この月野紅羽、あなたが重視しているその『誰の目にも明らかかなもの』でも完全勝利を収めてみせませわ！下位互換？言ってくれるじゃない、あなたが私の下位互換に成り下がる日はそう遠くなくてよ。おーほっほっほー！」

「楽しみにしているわ。今のあなたとなら、胸が踊る勝負になりそうね」

このようなやり取りをしている間に、彼女たちは生徒会室の前へとたどり着いていた。

「さて、今日からここを私たちのモノにしてみせますわ」

「先輩方を甘く見ないことよ。もちろん私も生徒会長の座は奪うつもりだけど、目上の方をリスパクトできない人は上に立つことはできない、いえ、許されないわ」

「わかってますわよ……」

早速カスミに説教をくらい、いささか不満げな面持ちのクレハ。ふてくされながら、その扉を開けようとしたところ、スカートトのポケットの中から、突然、ピンク色の妖精、レティツが飛び出してきた。

「クレハ！クライナーが出たレティ！戦うレティよ！」

「あら、びっくりしましたわ。何か、スカートトがモソモソしますわねとは思っていましたが、あなたがいたのですね」

焦るレティツとは正反対に、呑気なことを呟くクレハ。

「さあ、早く行くレティ！！」

「……と、申されましても、私たち、今から生徒会に入会しなければならぬのですわ。早ければ早い方がいい、すぐにでも出馬の準備を固めたいのですわ」

クレハには、戦う意思が微塵もない様子だ。

「何言ってるレティ！生徒会と街の平和、どっちが大切レティか!?!」

「……どちらも大切ですけど、それはもちろん、生徒会でしてよ？私たちは中学生ですよ？学校と天秤にかけたら学校が優先度高くなるのは当然ですわ」

「な……!?!?そうかもしれないけど、君は学生と同時にプリキュアレティよ!?!」

「妖精さん、横から失礼するけど、これに関しては私も月野さん側の意見よ。プリキュアなら光山さんがいるじゃない。あの子はまだ入部する部活も決まってるだろうし、すぐに駆けつけられるわ。そういう人が率先して現場に向かうべきよ。平和を大切に思っていないわけではないの。ただ、優先順位の問題よ。そういうことでしょうか？月野さん」

この会話に割って入ってきたカスミがそう述べた。

「ですわ。入会の手続きが終わり次第、行くつもりでしょう。プリキュアとしての先輩、光山さんですもの。それまで持ち堪えることくらいできますでしょ?」

「で、でも、この間の戦いを2人とも見てるはずレティ!!1人じゃ、強力なクライナーを倒すのは……」

「そう言われても困るのですわ。だから、終わり次第行くと言っているじゃないですか。ここで私たちを引き止めようとしている今この時間こそ無駄の極みですわよ。なるべく急ぎますから、そう急かさなideてください」

「……そんな……ど、どうなつても知らないレティよ……」

しかしまあ、なんとも相変わらずの2人である。一理あるのかもしれないが、プリキュアとしての責任感が根本的に欠落している。本当にどうして、この者がクリアハートに選ばれたというのだろうか。まだ大田愛海の方が、戦士としての覚悟を決めていたようにも見えたの

に、なぜ月野紅羽が―

――

私たちは、部活動見学をも投げ出して、騒ぎのある方角へと走っていた。こんな時にも現れるのだから、クライナーという怪物は本当に甚だ迷惑な存在である。

「マナミちゃん、なにも付いてこなくてもよかったのに！」

走りながら、後方で同じく駆け足のマナミに聞こえるようにそう叫んだ。

「仕方ないじゃない！私にできることはないかもしれないけど、1人で行くよりはマシでしょ!？」

「ありがとう！でも危ないって！」

強力なクライナーともなると、プリキュアに変身したとしても単独ではギリギリの戦いになる。先日現れたタバコクライナーには一度敗れているし、二度目の戦闘でも、キュアイラーレの増援がなければ負けていただろう。そんな所に、プリキュアの力を持たない、生身の女子中学生が向かうのはあまりにも危険すぎるのだ。

しかし心強いのは事実だった。伝説の戦士の力を継承したのかなんだか知らないが、大前提として私はまだ、先日まで小学生だった中学一年生、それも女子なのである。いくら戦う術を持っていようと、怖いものは怖い。本当なら戦いなんかしたくはない、誰だってそうだろう。

友達が1人付いてきてくれている、それは確かに心の支えにはなっている。

「どうせヒカルちゃんのことだもん、1人だと足ぶるぶる震えてまともにも走れないでしょ！私が応援してあげるから、勇気を持って頑張るのよー！」

「う、うん！ありがたいけど、やっぱバカにしてない!？」

「気のせい気のせい！」

そうこうしているうちに、急激に周囲の気温が低下してきた。よく目をこらすと、数百メートル先で、雪に覆われた車や人が強風に煽られ、宙に浮いている。どうやら、季節外れの猛吹雪に見舞われているらしい、今回は、そういう能力のクライナーのようだ。

『クライナーアアアアア!!』

雄叫びも聞こえてきた。目標は近い。

「マナミちゃん、ここからはもう大丈夫だから、下がってて！」

「……そうね、ここから先は、むしろ足手纏いになるかも……」

「そんなことないよ！でも見てて、すぐにやつつけるから！」

マナミは大切な親友だ。彼女だけは絶対に守らなければ。

まだ月野紅羽の姿は見当たらない、この騒ぎに気がついていないのだろうか？二人掛かりならばどうにかなるかもしれないが、正直、1人というのは不安だらけだ。二度も敗北しているのだから、当たり前といえども当たり前だ。

しかし、不安になつていては、キサトエナジーにも影響が及んでしまう。ここはポジティブに、ポジティブに考えなければいけない。

正直、紅羽のことは苦手だ。苦手なのだが、彼女には感謝をしなければならぬこともある。

一つは先日、増援にきてくれたこと。一緒にクライナーを倒してくれたことだ。

だが、私はそれよりも感謝、というと皮肉に聞こえるかもしれないが、そう思っていることがある。そもそも、プリキュアになってくれたことだ。

プリキュアは2人と聞いている。現に、クリアハートは2つしか存在しておらず、クラウドたちも必死にこの2つを追っていることから、第3、4のそれが出現することは到底考えられない。つまり、もうこれ以上プリキュアの戦いに巻き込まれる女子中学生を生み出さずに済むということになる。

要するにである。親友、マナミがこの戦いに直接巻き込まれる、なんていう事態を避けることはできたのだ。

紅羽でよかった、そう思ってしまう私は、人間としての何かが欠落しているのかもしれない。でも、それが私の正直な気持ち、本音だった。

「きたね、プリキュア……!!」

上空から声が聞こえた。レインのものではない、女性の声だ。

「私は帝国カバークラウダーのスノウ！無能なレイン将軍に代わり、お前たちを倒しにきた者だ!!覚悟しろ！」

スノウと名乗ったものはそう続けた。

『クライナアアア!!』

氷のハートのような姿をしたクライナーも、ついに私たちの前へと現れた。周囲に吹雪を起こす能力、雨を降らせるレインのクライナーとは違い、これはこれで厄介そうだ。

「覚悟するのはそっちだよ！いつもいつも、私たちの大事な街にちよっかい出さないで！雨だか雪だか知らないけど、これ以上暴れるなら、許さないんだから！」

「威勢のいい小娘だねえ。そんなに街が大切かい？なら、そのクリアハートを寄越しな!!用があるのはそれだけさ。渡したら、こんなくだらない街には二度と来ないよ！来たくて来てるわけじゃないんでね！」

「でも、渡したら渡したで、悪いことするんでしょ!?!この街はそれで守れても、ほかの場所で、ほかのだれかが嫌な思いをするなら、渡せないよー！」

「けっ、大層な正義感なこと。でも嫌いじゃないね。さあ、かかってきな!!」

『クライナアアア!!』

場の雰囲気は、すっかり戦闘用のムードとかしていた。戦わなければ守れない。

「……プリキュア!!エキサイティングファイバー!!」

クリアハートを握りしめ、私は『合言葉』を叫んだ。

これを合図に、私の身体が、そしてそれを纏う衣服が大きく変化していく。衣装は黄色いフリフリの下派手なもの。髪の毛については、

色はそのままだが毛量が倍以上に増加。ついでに、何も手を加えていないのに勝手にツインテールになっている。

これがプリキュアとしての私、キュアスパークの姿だ。

『てやあああ!!』

そう叫び、一気に大地を蹴り、宙へと踊りでて、クライナーを見下ろせるまでの高度を取る。

『プリキュア流星キックー』

毎度おなじみ、テキトーにつけた名前のアクションである。

クライナーはこの奇襲に身動きも取れず、物の見事にキックをもらに受け、数十メートルと吹き飛んで行く。

『まだまだああ!!』

一息つくような暇はない。今は私にしか、街を、マナミを守れない。その意識が、私の身体を自然に動かしていた。身体の奥底から、噴水のように力が溢れてくる感覚がある。

これなら、1人でも戦える！

その自信の根拠となるほどの力が溢れ、そして、その力がさらなる自信を呼ぶ。今なら、どんな敵にも負ける気がしない。

「今日のヒカル、やけに調子がいいラエ……。プリキュアとして理想のキサトサイクルに入ってる。いい集中力ラエ……」

「思いの外、強いじゃない。でも、確かにデータ通り……。恐るるに足りないわね」

スノウはそう不敵に笑みを浮かべた。

『プリキュア!!スパーク百裂拳!!』

彼女が不気味に笑ったことには一切気がついていなかった私は、ただ目の前のクライナーを倒すために無我夢中になっていた。視覚化されるほどに溢れてきた大量の黄色いオーラキサトエナジーを両拳にまとい、連続パンチを繰り返して行く。

ズガガガガ……という、建築作業現場の工事による騒音のようなやかましい音を立てながら、連続パンチが次々に命中してゆく。だが、その分厚い氷には少しのヒビを入れるのがやっとである。

『く、クライナ……』

しかし、怪物の精神にはかなりのダメージになっているようだ。いくら氷で打撃からどうにか身体を守っているとはいえ、完全に集中しきっている、おそらく鬼の形相になっているであろう私から烈火の如く攻撃をされている光景を目の当たりにしているのだ。怪物といえど、恐怖心が焼きついたようである。

「まったく、何やってるんだあのクライナーは……。でも、確かに、感心する集中力だわ。小娘のくせに、あそこまで戦闘に没頭できるなんて、素晴らしい逸材よ。それも、クリアハートがなんらかの作用を与えているから、かしら？まあ、なんでもいいわ。少なくとも、単身で複数を相手にするときに入力する状態ではないってことを、未熟な小娘に教えてあげなくちゃね!!」

ダークブレードを強く握り直したスノウはそう叫ぶと、がら空きと なっている私の背中をめぐめて飛んできた。

「ヒカルちゃん危ない!!後ろ!!」

そのとき、マナミの叫びが聞こえて私はハッと我に帰った。振り返ると、今まさに大きな黒色の剣で私を切りつけんとするスノウの姿が目に入った。慌てて上空へと飛び上がり、これを回避する。

『クライナーアアア!!』

ダークブレードによる斬撃を食らったのはクライナーだった。私のパンチでは亀裂で精一杯だったはずだが、この攻撃を喰らった箇所 の氷はほとんどエグられていた。あの剣がとんでもない代物だとい うことは、この光景を見れば一目瞭然だった。

「チッ、人間が隠れていたとは……。邪魔してくれちゃつて」

スノウは少し苛立ったのか、そう吐き捨てると、今度はマナミへと 斬りかかろうとする

『やめて！その子は関係ない!!』

慌てて、私は彼女を庇うように、スノウの前に立ち塞がった。

「……キュアスパーク、自らの関係者を庇うときは、どんな状況であ れ、危険を顧みず突っ込んでくる、か。データに加えておかなきゃ ねえ。まあ、そのデータが役に立つ来る日は、こないかもしれないけ どね!!」

スノウは一瞬動きを止めたが、すかさず、私へと再び斬りかかろうとしてくる。

『プリキュア!!スパーク白刃取り!!』

これを、キサトエナジーをまとった両手のひらを合わせるようにして受け止める。しかし、少しの痛みが手に走った。わずかだが、流血しているようだ。

「面白い、キサトエナジーの鎧のようなものを纏っているとはいえ、まさか素手で受け止めにくるなんてね……!」

『ぐっ……ぐぐ……!』

痛む両手に力が抜けそうになったが、ここで離してしまつたら、また攻撃を受けることとなる。絶対に離してはいけない、私は剣の刃が食い込んでくることをも恐れず、さらに力を入れ、刀身を握りしめた。

「ぐっ、この小娘……!!離せ!!」

「ひ、ヒカルちゃん!!手が……」

『離さないよ……絶対に!!』

「……その勇敢さと根性、褒めてやるよキュアスパーク!気に入つた!!でも、これはただの剣じゃない!エンシヤントウエポンの凄まじい、真の力を見せてやる!!」

スノウはそう叫ぶと、体中からドス黒く染まったオーラを出現させた、これが、視覚化されたウィザパワーだろうか、とんでもない量だ。「くっ、あの金持ちは何してるラエ!!このままじゃスパークは……とてもじゃないけど持ち堪えられないラエ!」

「一旦撤退しないと、ヒカルちゃん、マジでやばいつて!」

「撤退すると、街へ大きな被害が……でも止むを得んラエ……。ここは僕が気をひくラエ!そのすきに、ヒカルを連れて逃げるラエよ!」
ラエティが、果敢にスノウへと突っ込んで行く。

「ふん、そうはさせないよ!クライナー!!」

『クライナーアアア!!』

戦意を取り戻したクライナーが、ラエティの前に立ちはだかる。

「……く、これでは……」

「……な、何か、私にできることは……」

マナミは泣き出しそうな顔で、周囲をキョロキョロと見渡している。混乱しているのだろう。

「ふはははは!!もつと絶望しろ!その絶望が、私たちの力、ウィザパーになるんだよ!」

「クライナーが戦意を取り戻したのも、それが原因ラエか……マズイ。レティツに緊急信号を!こうなったら金持ちにもすぎる思いラエ!イラーレが増援に来れば……!!」

「おっと、そいつを呼ぶわけにはいかないね!クライナー!頼んだよ!!」

『クライナーアアアア!!』

クライナーはこれまでにないほどの声量で雄叫びをあげた。同時に、地中から分厚い氷の壁が出現し、戦場をドームのように包み込んだ。この場は、氷によって遮断された陸の孤島、密室と化してしまう。

「……こ、これは……」

撤退することすら許されないのか。まさしく、完全なる敗北、そう言わざるを得ない状況だ。スノウめ、ここまで作戦を用意していたとは。

「ククク、さあ、命が惜しかったらクリアハートを差し出すんだ!私だって、子供を相手に残虐な真似はしたくはないんだよ!渡したら逃がしてやる!さあ!早く!」

そう叫んだスノウだったが、その時、彼女の額に何かコツン、と当たった。

「……?」

額に当たった何かは、そのままポトンと真下、足元に落下した。小石だ。

「ヒカルちゃんを離して!!」

小石を投げたのはマナミだった。そのまま、いくつか握りしめていた分を連投し始める。

「……はあ、健気だねえ。……余計なことしなければ、そのお友達が痛い目見ることはなかったのにね!!」

怒り狂ったスノウは、一気に力を集中させて行く。先ほど彼女の周

囲に広がった、視覚化されたウィザパワーが、ダークブレードの刀身へと集まり始めた。

『ま、負けるもんか……』

握りしめていた刀身が、みるみると重くなっただけでなく、このまま握り続けていると、掌が裂けてしまいそうだ。それでも、離れたら負けだ。堪えなければ。

「いい、いい加減に手を離したらどうだい!!死ぬ気なの!」

あまりのしつこさに、スノウはそう叫んだ。その一瞬、躊躇いのような表情が見て取れた。残虐なことはしたくない、どうやら本心だったのかもしれない。

『……わかった……』

その隙を逃さなかった。私はすつと手を離し、二歩ほど引いた。力が入って重くなった刀身は、私の両手という支えを失ってしまったことでバランスを崩し、これを握っていたスノウがよろけた。今しかない。すぐにその場を離れると、壁の近くにまで接近した。

『スパーク……パンチ!!』

全力のパンチを氷の壁へとお見舞いし、破壊した。そこに生まれ、人が通れそうなくらいの穴に向かって、ラエティを捕まえポケットに押し込み、マナミの手を握り駆けて行く。

「ま、待て!!」

スノウはすぐに追いかけてきたが、剣のあまりの重さにさらにバランスを崩し、その場に片膝をついてしまった。その間に、私は残る全てのエナジーを両足に込め、全力でこの場を離れていたため、もう追いつけないほどの距離が開いていた。どうにか、撤退には成功したらしい。

「……ふん、まさかこの状況から逃げ出してしまうとはね……。キュアスパーク、ますます気に入った。……ダークブレード、全く使いこなせなかったな……。今日のところは引き分けということにしてやるよ。次は必ず、倒す」

スノウはそれだけ言い残すと、クライナーとともに姿を消した。街を襲った吹雪は止み、氷のドームなどの痕跡も跡形もなく消え去って

いた。だが、やはり敵を倒したわけではないため、建物や道路などへの被害は修復せず、人々の記憶も改善はされていない。このままでは、いよいよこの戦いが明るみに出てしまうだろう。そうになると、正体だってバレかねない。

両手の傷は、全治1週間程度で済んだとはいえ、肉体的にも、そして今後にとっても、かなり手痛い結果を残してしまった。

続く

第6話 「驚愕!?!クリアハートの謎!」

第6話 「驚愕!?!クリアハートの謎!」

「あらヒカル……どうしたの、その手……」

「あはは……ちよつと派手に転んじやって……」

全力の撤退後、学校へと帰還し、保健室で応急手当でだけはしてもらった。結構な深い傷かと思っていたが、想定よりは軽傷のようだった。プリキュアとして強化されていた肉体が関係しているのだろうか。

しかし、我が娘が両掌をガーゼでぐるぐる巻きにして帰ってくるのだから、母もたまげただろう。目を丸くしている。

「あんたって子は……もう。元気なのはいいことだけど、もう少し自分を大切に……昔も言ったけどね、あの時も」

玄関先でお説教が始まってしまった。別に悪いことをしたわけでもないのにこの仕打ちであるものだから、プリキュアというのも辛いものである。

「あ、お姉ちゃんおかえり!!」

この窮地を救ってくれたのは、奥の方からドタバタと騒がしく足音を立てながら走り寄ってきた弟の輝樹だった。

「テルキ……ただいま!退屈だったでしょ!?!遊ぼつか!!」

弟を都合よく利用し、彼の手を引いて、階段を駆け上がり自室へと一目散に逃げて行く。

「まったく、中学生になってもちつとも落ち着かないんだから。もつとひどい怪我しても知らないからね〜!!」

「は〜い!!」

返事だけすると、そのまま自室の扉を閉めた。

母なりに心配してくれているので、ろくに話も聞かずに退散というのは申し訳ない気持ちにもなる。

父が家に帰ってこなくなつて、はや5年にもなるだろうか。それだけの間、幼稚園から小学校低学年という1番やかましい時期のテルキ

と、いつになつても騒がしいこの私とを育ててきてるのだから、頭が上がない。

― 父が帰ってこない、というのは語弊のある表現だっただろうか。離婚した、別居中、そういうシリアスな話ではなく、単に海外に単身赴任しているというだけだ。なかなか、帰国できるほどの纏まった休みが取れないらしい。

できることなら、心配をかけたくはないが、これから戦いも激しくなるかもしれない。本当に、これ以上の怪我をする日も来るかもしれない。となると、私をもっと強くなって、毎度無傷で家に帰ってこれるだけのたくましい、頼れる存在にならなくては。

プリキュアの前に、私は中学生であり、この家では母の次にしつかりしなくてはならない長女なのだ。もっと、強くなりたいと――

――

その翌日。私たちは登校の前に、いつものように私の家の前で待ち合わせをしていた。

今日は珍しく、目覚し時計のなる前に起床することができた。いつもはマナミを15分ほど待たせ、あわや遅刻というギリギリの登校に巻き込んでしまうのだが、今日は問題ない。

ガーゼは、目立つとクラスでの話題の種にはなるかもしれないが、ドジをやってしまった、では誤魔化しきれない事態になることも想定しなくてはならない、とのラエティの助言を受け、薄い黄色のオープンフィンガーグローブを着用することでこれを隠すこととした。

一見こちらの方が目立ちそうにも見えるが、これはついこの間、小学生の頃までは、部活動のソフトボールをプレーするときのバツティンググローブとしても活用していたため、私の知り合いはこのグローブを見慣れている。私の場合、こちらの方が自然なのだ。

しかし、今日はマナミの方が遅い。彼女は某有名な架空のスナイパーのごとく、時間はピタリ賞で厳守するタイプのはずだ。1分でも早く来ることもなければ、同じく遅れることもない、そんな彼女の姿

がまだ見えない。

風邪でも引いたのだろうか、あるいは、昨日のショックなども考えられる。あれだけの至近距離で凶器を振り回して来る異世界人を目の当たりにし、私が傷を負ったシーンも見てしまっている。なんらかの精神的影響を受けていても、不思議ではないのだ。

とはいえ、そんじよそこらの女子中学生の何倍も強い子のはずだ。大丈夫だとは思うがー

結局、10分待っても来なかった。さらにそこから2分ほど経過した後、母が私の元へとやってきた。今、彼女の母親から、今日は少しだけ遅刻するとの連絡があったそうだ。欠席、ではないようなのだが、なかなかないことなので心配ではある。

でも、彼女のことだ。きつと何食わぬ顔で、元気に登校して来るだろう。私は彼女を、学校で待つこととした。

—————

「おはようございます光山さん、昨日は、大変失礼いたしましたわ」
教室に入るやいなや、月野紅羽が私にそう謝罪してきた。表情も伺ったが、反省はしているような顔色ではある。

だが問題だったのは、皆がニュースなどを見たのだろう、昨日のクライナー事件のことを認知している様子であることだ。紅羽が謝罪してくれることはいいこと、ではあるのだろうか、あまり大きな声で話したい内容ではない。

しかし流石にクレハもそこは理解しているようだ。私にしか聞かない程度の声量しか出していない。

「すぐにでも駆けつけるつもりでしたが、思いの外手続きに時間がかかりましてよ。まあ、私たちは中学生ですので、今後もこのように揃わないことはあるでしょうし、お互い様かもしれないですね」

どうやら勘違いだったようだ。反省してなさそうである。これが来なかった側の言うことだろうか。それは、私が気を遣っているというセリフのはずなのだが。

「いい、いいよ……。今度からは、私1人でも大丈夫になるよう、頑張るから」

私はこれでも、最大限に皮肉を込めたつもりであったがー

「結局は片方しか行けない日の方が増えますわ。それが理想ですわね」

澄ました顔でそういった。本当に、心底腹立たしい人だ。彼女のことが苦手、から嫌い、にまで進化しそうになったが、ここはもう、何も考えないことにした。

これは間違いのないことだが、彼女とタッグなど、そんなもの成立するはずがない。ならば、どのみち2人揃ったところで負の感情、ウィザパワーが私たちの間に蔓延し、本来の力を発揮できないはおろか弱体化し、さらに敵を強化してしまうという最悪の事態にもなりうる。

彼女の言っていることはその意味では正論だ。結局は、1人で戦う術を身につけるしかない。

だが、敵は帝国、一つの国家である。1人ではいずれ限界が来ることはわかっている。いや、すでにもう限界ではないか。单身での戦闘は、いまだに初陣でしか勝利を収めていない。実に3連敗中と言ってもいいのだ。これでは1人でもーなど、強がりではない。

――

1時間目の授業を終え、昼休みを迎えた頃に、マナミは登校してきた。具合が悪そうな顔色、というわけではないが、いつもの明るみなおーラは鳴りを潜め、どことなく機嫌の悪そうな雰囲気醸し出していた。

「あ、マナミちゃん、おはよ……」

声をかけた私に対し、横目で軽く視線を送り返すだけの反応を示すと、彼女はそのまま一直線にクレハの机へと向かって行った。

「……おはようございます、大田さん。あなたが遅刻とは珍しいですわね。体調でも悪くて？」

自らの机の前に足音を立てながらやってきて、静止した後も険しい表情で仁王立ちしているマナミの姿を見て、クレハはそう挨拶をした。

「おはよう。悪いのは体調じゃないわ、機嫌の方よ」

「……私がおか？身に覚えはありませんことよ」

「……へえ、そう。自覚がないってのなら、わからせてあげなくちゃいけないみたいね……」

私はそこで、ハツとただならぬ雰囲気を感じ取り、すぐに立ち上がり、マナミの方へと駆け寄ろうとしたが、一瞬遅かった。次の瞬間、マナミはぐつとクレハの胸ぐらを掴み上げたのだ。ガタツという音を立て、クレハの椅子が倒れる。

「……なんの真似ですの？」

クレハは冷静だった。多少は面を食らったようだが、落ち着いた表情と口調で、自らを掴み上げた者にそう問いかける。

大田愛海が、月野紅羽をつまみあげている、この異様な光景に、クラス中の視線が集まり始めた。

「あなた、昨日何してたの？」

「その話ですか、安楽加清と生徒会室にいましたわよ、その件なら朝から光山さん本人に謝っています。あなたに、このような暴力を受ける覚えはないと申し上げているのですが」

「生徒会？クライナーが出現したことを知っていて、そつちを選んだってわけ？」

「ええ、そうですわ。ではお伺いしますが、何が問題ですの？私は中学生にして、次期生徒会長候補の月野紅羽ですわ。街の平和は暇な光山さんでも守れる。忙しい身である私が学校ごを優先するのはごくごく当然のことですわ、私でなくとも、多くの方はそう動くと思いませんけど」

クレハは相変わらず、済ました顔でそう言った。

「……その結果、ヒカルちゃんに怪我をしたわけだけど、そこはどうお考え？」

「あら、お怪我まで負われていたのですね。お気の毒ですわ。でも、戦

うのなら当然背負うリスクですし、それは光山さん本人の問題でしょう。私が来ていたら、負わなかった。その決定的保証があるのなら、このことについても重ねてお詫び申し上げますわ。それで、ありますの?」

「う、この……!」

マナミの顔は真っ赤に染めあがっていた。もう、我慢の限界が来ているかもしれない。これ以上は――まずい。私は慌てて、この2人を引き離そうとしたが――

「お話は終わりですか?そろそろ首が苦しいので、離していただけます?しよがないことでしょうか?みんながみんな、すぐに現場に駆けつけられるほど、暇というわけじゃないのですわ」

この一言が余計だった。その時、マナミの中で、理性が切れる音がしたような気がした。

「ええ……今すぐに離しますとも……!こうやってね!!」

一瞬だった。バチンツツという乾いた音が、教室中に響き渡り、その次には机が倒れる音、そして、人が床に叩きつけられる音が続いた。クレハが、マナミの手のひらによって、真横にはたき落とされたのだ。

「な……!ま、マナミちゃん!?何やって……!」

「く、紅羽さま!」

私はマナミの方に、そしてクレハの囲いの生徒は彼女の方にと慌てて駆け寄って行く。

「な、何をしますの!?!これはれつきとした暴力ですわ!犯罪ですわ!あなたがこんな凶暴な人だとは知りませんでしたわ!」

弾かれた左の頬を真っ赤に染めたクレハがそう叫んだ。

「少しはわかった!?ヒカルちゃんがどんな思いをしたのか、1人でどれだけ苦しかったか、怪我というものがどれほど痛いのか、少しはわかったのかって聞いているのよ!この温室育ち!」

「お、落ち着いてマナミちゃん!暴力はダメだつて!!」

私は必死に彼女の体にしがみつき、どうにか彼女を制止しようとするが、今の彼女は怒りのあまり正気ではないようだ。私の声が聞こえていない。

大きな騒ぎになってしまったからか、隣のクラスの生徒までもが、廊下の外からこの光景を静観している。先生たちが到着するのも時間の問題かー

いや、今はそんなことを考えているような時ではなかった。

「はあ!?別に、私が怪我をさせたわけでもあるまいし、第一あなたは第三者、全く関係ないじゃないですか!?あなたにはたかれて、さらに説教までくろう?そんなバカな話はありませんわ!……今この場で土下座すれば、クラスメートという間柄ですわ、穏便に済ませましょう。さもなければ、あなたの家族もろとも、この月野家の長女に手をあげたこと、生涯にわたり後悔させてやりますことよ!」

「まだわかってくれないみたいね!私の今のビンタが犯罪というのなら、あなたのその言い分も立派な脅迫罪だわ!聞き入れるまでもないって感じよ!そんなに自分のことが最優先で大事なら、とつとつプリキュアなんかやめてしまいなさいよ!」

あまり、こう注目されている場面で、堂々とプリキュアという言葉を使って欲しくはないのだがー

「……ああそうですか!そうですね!こんなもの、やめてやりますわよ!私の敵はハナから安楽加清ただ1人!その彼女ではなく私が選ばれたのは事実、それだけで満足ですわ!言ってしまうえば、もう必要な力ですの!!やめてほしいのならやめますわ!」

彼女は売り言葉に買い言葉の勢いでそう叫ぶと、ポケットから取り出したクリアハートを、床へと勢いよく叩きつけた。ガチャンツという乾いた音が鳴り響く。

「もつとも、これで私が空いている日でも、光山さんをサポートしてあげることができなくなりましたけどね!光山さんを思うあまりのあなたの行動が、彼女をさらに苦しめているのですわ!その時になって泣きついてきても、知りませんことよ!」

そう捨てセリフを吐いて、彼女は教室の外へと飛び出して行った。取り巻きたちが慌ててその背中を追っかけて行く。

「……ちよつと、誰か説明してくれるかしら?」

たった今、クレハと入れ違いで騒ぎを聞きつけ、教室に到着した私

たちの担任の教師、桑田先生がそう問いかけた。当事者以外の生徒は、全員が一体全体、何をそんなに激しく喧嘩しているのかを理解していなかったため、誰も答えられないという、一転して静かな空気となっていた。

「……おもちゃの取り合いです」

最初に声をあげたのは、やはりカスミだった。叩きつけられ、床に転がっていたクリアハートを拾い上げると、先生へと手渡す。

「お、おもちゃ？」

「そうです。私たちも中学生といえど、先日までは小学生だった身分。仕方のないことでしょう。子供っぽさがあつて可愛げがあると考えます」

「……事実なの？」

先生は、一応、彼女の供述に間違いがないかを確認するため、その場にいた全員に問いかけるように言った。誰も状況を理解できてはいなかったが、安楽さんがそう言っているのだからーという空気に包まれていた。全員がお互いの顔を確認しながら、徐々に頷き始める。「……ではとにかく、これは没収ね。私は月野さんを追いかけるわ。みんな、もう2時間目の授業はとづくに始まっているのよ、移動教室でしょう？ すぐに向かいなさい。担当の先生には後から私からも謝っておくけど、ちゃんとお詫びはするのよ」

「はい」

生徒たちはゾロゾロと移動を始める。

「……先生、私、職員室に行きます」

その中で、そう発したのはマナミだった。正気を取り戻したのか、顔色は元に戻っており、目にはうっすらと涙を浮かべている。

「大田さん？ どうしたの？」

「私……私……人に……暴力を……」

彼女は身を震わせながら、頬にツーツと涙を流し始めた。

「……詳しいことは後で聞いわ。あなたは職員室の前に、保健室かどこかで落ち着く必要がありそうね。それと光山さん、私にはどうも、ただのおもちゃの取り合いではこうはならない気がしているの。何

か知っているのなら、放課後私のところに来て。些細なことでも構わないわ。何か教えてちょうだい」

「は、い……」

私は小声で返事をした。またプリキュア絡みの問題であるため、多くのことを説明することは、いや、ほとんど喋ることはできないだろう。前回、桑田先生に怒られた時もそうだった。正当な理由がないわけではないのに、それを説明することは許されない。こちらとしても歯痒いし、先生としても、自らが担任を務めるクラスで今何が起きているのか、把握することもままならないということに頭を抱える事態ともなりうる。

いつそ、正体やここまでの経緯などを全部話すことができれば楽なのに。

しかし、そこにどんな背景があったとしても、よほど正当な防衛でもない限り暴力は許されない。マナミは、その重さこそ不明だが確実に何らかの制裁は受けるだろう。暴力を振るった生徒になんのお咎めもない学校など存在しない。特にここは私立。考えたくもないが、最悪、この場を追われることだってー

だが、では私はどうなのだろう。平和のため、みんなを守るためとはいえ、異世界からやって来た、命ある生き物に対して暴力を駆使して戦っているではないか。大義名分があれば、許されることなのだろうか？それならば、今回のマナミにだって理由は存在している。というよりも、この世には理由のない暴力こそ少ないのかもしれない。

プリキュアとしての戦いは、あくまでも正当防衛の範疇なのだろうかー

「クソっこの剣、取説とかないわけ!」

輝ヶ丘の街を囲む山の奥で1人、漆黒に染まった長剣の素振りをしてながら、苛立っている女性の姿があった。スノウである。

「普通に振り回すことはできたけど、ウィザパワーを込めると途端に私の力では制御できなくなった……いや、あんな重さになったんだ、レインや、ストーム、クラウド様ですら扱えるか怪しい代物ではない

か……。実戦で使えないなら意味ないじゃないの」

この長剣こそ、かつてプリキュアと闇の勢力が戦ったときに使われたとされる古代兵器『エンシヤント・ウエポン』の一つ、ダークブレードなのだが、どうにも手に追えていないようだ。実際、前回の戦闘ではキュアスパークを単独にするという作戦が物の見事に決まり、勝利まで後一歩というところまで追い詰めた。だが、そこで制御不能の事態に陥り、そのすきに逃げられてしまっている。作戦が完璧に遂行できていただけに、非常に悔やまれるシーンとなった。

「つたく、せつかく惜しいところまで行っただけに……。でも、今度こそ問題ないはずよ！ 剣に頼り切らずとも、もう一度スパークを1人にする作戦を練れば、今度こそ！ やつと一対一なら勝率は10割に限りなく接近する、昨日の戦闘で確信した。いや、昨日だって引き分けとは言ったが、実質私の勝利ではなかったか！ ククク、次こそおしまいだよ、プリキュア!!」

自信に満ちた顔でそう叫び、長剣の刃を長い舌で舐め回す。確かに、一対一でスノウに勝つのはーいえ、戦闘の術を有したとはいえ、ただの女子中学生が訓練されている軍事帝国の幹部に単身で勝てるはずが、そもそもないのである。やはり、2人でなくては勝てない。

だが、キュアイラーレこと月野紅羽は自らクリアハートを放棄。スノウはこれから、再び作戦を練り始めるのだろうか、それは無駄な準備に終わるだろう。

何をしようが、すでにプリキュアとして戦えるのはキュアスパークただ1人となっているのだから。

—————

そのままあつという間に放課後を迎えた。

桑田先生には、何かを知っているのなら教えて欲しいと頼まれているが、行くべきなのだろうか。流石に学校の先生である、口から出まかせの『おもちやの取り合い』という口実でやり過ぎるほど簡単な大人ではないはずだ。むしろ、それである暴力沙汰の誤魔化しが効く

のならば、教師として如何なものか、素質を疑うレベルの事案である。とはいえ、話せるようなものでもないのだから困っている。

仮に正直に話すとしたならば、それはマナミを庇うことには繋がるだろうか。いや、そうともいえない。友達をかばうために、非現実的でわけのわからない証言をした電波系少女として余計に目をつけられるだけだ。

どうしろとーすでに私の脳みそでは処理が追いつかない事態となってしまうている。

「珍しく頭がフル回転している様子ね」

昼休みになっても机から動かず、しかめっ面でこのことを考えていた私に対して、声をかけてきたのはカスミだった。

「かす…、じゃない、安楽さん……」

「考えてることは察しがつくわ。余計なことしちやっただかしら、ごめんなさいね」

「いいや、あの時は助かったけど……。ねえ、安楽さんは、マナミちゃんが悪いと思う？そりゃ、私だって暴力はダメだと思うし、やりすぎだったとは思うけど……」

「……難しいこと聞くのね。一概には言えないわ。私は『生徒会を優先し戦場に駆けつけられなかった』問題では月野さん側の意見ではあるけど、これが正しいとは言い切れないわ。少なくとも、道徳的な面では限りなくアウトに近い。あなたは怪我しているし、敵にも逃げられてますもの。その後ろめたさがあるから、私には大田さんが悪いとすることはできなくてよ」

カスミはそう述べた。

「そっか……」

「光山さん、正直月野さんのこと嫌いでしょ？見ていればわかるわ。なら、あなたにとつての正義は比べるまでもなく大田さんのはず。彼女は悪くない、そう断言できるのはあなただけよ」

「き、嫌いというか、苦手ではあるけど……。でも、月野さんが安楽さんを超えるために色々努力してることは知ってるよ。生徒会だつてその一環だし、たまたま戦士になっちゃっただけなんだから、普段通

り学校優先するのもわかるの。わかるから、私には月野さんが悪いとも言えない……」

「お人好しなのね。まあ、私は今後この問題には介入しないと云ったばかりだから、踏み込んだ言及は避けるけど、一つだけ聞いてもいいかしら？」

カスミは私の前の机に腰をかけると、私の目を正面から見つめてきた。その眼力に押され、思わず無意識的に頷いてしまう。

「大田さんは、なんで暴力を振るってしまうまでに熱くなってしまったと思う？」

「そ、それは、月野さんの態度にムカついたからじゃー」

「それはそうね。でも、月野さんが迷惑をかけた対象は彼女じゃないわ。あなたよ。それなのになぜ、あそこまで熱くなったのか、手まであげたのか。どんな理由をつけようが決して許されることではないけど、その真の理由を汲み取ることができたならば、貴方がとるべき行動も自ずと見えてくるはずよ。……無関係かつ何もしていない傍観者の立場でありながら、上から目線でごめんなさいね。じゃあ」

それだけ言った後、カスミは教室から出て行った。

「真の理由……？暴力まで振るってしまった真の理由……そっか！それなら！」

ガタツという音を立て、勢いよく立ち上がった私は、そのまま駆け足で職員室へと足を動かした。

クレハが到着しなかったことで私とともに窮地に立たされ、怖い思いをした、理由としては確かにそれもあるだろうが、カスミの言う真の理由がこれを指しているわけではないのは流石の私にもわかってる。

要は、人として、友達として、親友として、私を危険に追い込んだクレハが許せなかったのではないのだろうか。人に対して直接文句を言うなどということができない私を守って、私の代わりに怒りをぶつけてくれたのではないのだろうか。もちろん、やりすぎだが。

私のために、彼女はあそこまでしてしまったのだ。なのに、どうして私がここで彼女を見捨てるかのように何もしないなどという選択

肢が取れるだろう。取れるわけがない。先生に対して私なんかが上手く説明できるかどうかは不安だが、今度は私が矢面に立って彼女を守らなければいけない。

世界や街の平和を守ることだけが戦士の役目ではない。親友一人救えない人間に何が守れるというのだ。ない頭を最大限に使って、説明するしかないだろう。

不幸中の幸いか、記憶がすり替えられていないために、先生たちもクライナー騒動のことを認知しているはずだ。少しは話も早くなるだろう。そして、近日のうちにあのクライナーを倒せば、そこで説明した情報も記憶から消えるはずだ。

そう考えれば、そこまで難易度の高い話ではない。もともと、あのクライナーを一人で倒せる自信はないのだが――

「さーて、準備は整ったね！事は早急に済ませるよ！クライナー!!」
『クライナーアアアア!!』

ビジョンが定まったのだろう。スノウは、昨日猛威をふるった、ハートマークのような身体を分厚い氷で覆う大型のクライナーを呼び出した。

「スパーク1人を狙う作戦に変更はないけど、最初から最後まで優位に立つためにも、あのお友達も一緒に呼び出したところね。お前がプリキュアを攻め、私があの小娘にちよつかいを出す。そうすれば、奴は必ずそいつを庇って隙が生まれる。ククク、完璧ね」

ニヤリと笑みを浮かべるスノウ。そのまま右腕を、クライナーに対して合図を送るかのように動かした。それを受けて、氷の塊のような大きな怪物が、学校へ向けて飛び出して行った。

「さあ、今日も楽しませておくれよ、キュアスパーク!!」

そう叫ぶと、彼女も後を追うように地面を蹴り上げ、空中へと躍り出た。

「来てくれたのね、光山さん」

私が職員室を訪れると、すぐに桑田先生が出迎えてくれた。マナミ

はというと、職員室奥の応接間のような空間のソファに腰をかけているのが、この出入り口からも見て取れた。

「……うまく説明できるかはわからないけど、でも、私の話を聞いてくださいー！」

「話してくれる気になつてもらえたのね。嬉しいわ。そういえば、前にも光山さんや安楽さん、大田さんが私たちに無断で外出したこともあったわよね。その時は話してくれなかったけど、これと関係があることなの？」

「……はい。あの時はすみませんでした……」

「いいのよ。中学生は誰にだって、大人に話したくないことの一つや二つはあるの。デリケートな話かもしれないじゃない、だから、私たち大人も深く詮索はできないのよ。でも、あなたたちはまだ子どもなの。大きな問題になりそうなら、子どもだけで抱え込まないで。私じゃなくてもいい、信頼できる大人に話してちょうだい。……今日は私に話そうと思ってくれてありがとう。先生じゃ力になれないかもしれない。でも、先生にも、大田さんがなんの理由もなしに暴力を振るうような子には見えないのよね」

桑田先生は、ゆっくりと穏やかな口調でそう述べた。その優しい声色を聞いて私は安心していった。この先生になら、あるいは話せるかもしれない。

「……先生、これから話すことを、笑わないで、ばかにしないで真面目に聞いていただけますか？おかしな子だと思われるかもしれませんが、それでも聞いてもらえますか？」

これが最終確認だった。恐る恐る、そう切り出してみる。「当たり前じゃない。どこの世界に生徒の話を見事に真面目に聞かない先生がいるの」

先生は少ししやがんで私に目線を合わせながら、変わらない優しい表情でそう言った。

「立ち話じゃあれでしょ？大田さんの隣に座ってあげて。そこで聞くわ」

「わかりました。失礼します」

指示通り、マナミの隣に腰をかけ、そこでかくかくしかじかの事情を説明した。怪物が現れた、そのニュースはやはり認知されていたため、クライナーのことについては話が早かった。

もつとも、私たちが戦ったわけではなく、あくまで襲われた被害者だったこと、襲われた際にクレハたちと喧嘩し、そのゴタゴタが今日の騒動につながった、という風に辻褃が合うように虚偽も含めたが。

もつとも話さなければならぬ部分である、「マナミはクレハが私を危険な目に遭わせたことに対して怒っている」ということはもちろん伝えた。

そういえば、前回レインが襲撃したときも、最初の戦闘でクライナーを仕留め損ねたため『未確認生物』の記憶が改変されていなかったか。その際の記憶は後に上書きされたとはいえ、これが続くとやはり何か異常が出て来てもおかしくはないだろう。クライナーは確実に倒さなくては――

「なるほどね……そんな怖い思いをしたわけね……。……重ねて質問してもいいかしら？ じゃあ、これは何？」

先生は、カスミから受け取っていたクリアハートをポケットから取り出し、テーブルに静かに置くことで私たちに提示した。さて、これはどう言い逃れようか――

「えーっと……まあ、安楽さんの言ってた通りです。これはただのおもちやでして、昨日もこれを巡ってちょっとした喧嘩になって……。今日の喧嘩でも、ヒートアップしちゃってこれの話もついに出て来てしまったというか……」

苦しいが、間違っではない。

「……まあ、おかげでなんとなくの事情はわかったわ。話してくれてありがとう。今日はもういいわ、時間取らせてごめんさい。大田さんも、そんなに自分を責めないで。あなたが一方的に悪いわけじゃないし、誰だって過ちの一つや二つはあるものなの」

「でも……」

「確かにいけないことをした。それは事実かもしれない。だけど、それは光山さんを想ったのこと、だったんでしょ？」

「……はい」

「それに、ちゃんと月野さんに対しても申し訳ない、と想う心があるじゃない。あなたは優しい子だわ。だからこそ、その優しさを別の、いいことで表現できるようになればいい。それだけのことよ。反省も大事だけど、それを活かすことの方が大切だわ」

先生は相も変わらない穏やかな表情で、マナミをそう励ました。

「……わかりました」

「さあ、帰るわよ。遅くなっちゃったわ」

先生がそう言つて、立ち上がった時だった。遠くから、聞き覚えのある遠吠えが聞こえて来たのは。

『クライナアアアアアアアア!!!』

「何、何の音かしら?」

「……先生、また勝手なことをすることを許してください」

私はそう言つと、テーブルの上に置かれていた、クレハが所持していた方のクリアアートを掴み取り、マナミへと投げ渡した。

「光山さん!?何をー?」

「マナミちゃん行くよ!」

先生はキョトンとした顔をしていた。あまりに突然、私がこのような行動に出たことにわけがわからない、と言つた心境だろう。だが、クライナーさえ倒せば、先生のこれに関する記憶は消去されるのだ。今は何を思われても、どれだけ怒られても構わない。まずは、確実に倒し、街を守り、そしてマナミを守らなければならない。

「で、でも私が付いて行つても仕方がないよ……」

クリアアートをキャッチしたマナミだったが、いつになく弱気だ。「何言つてるの!……ほら、私弱虫だから!マナミちゃんいないと戦えないから!とにかく行くよ!」

私は彼女の腕を無理やり引つ張ると、そのまま職員室を飛び出した。

「ちよつと、光山さん!」

先生も慌てて私たちの後を追おうと足を動かさんとしたが、それを他の先生の一言が制止させた。

「桑田先生！まだ学校に残っている生徒がいるかもしれない！避難のアナウンスと準備をしますよ！」

「し、しかしあの子達が……」

「率先して避難しただけでしよう！大丈夫です！早く他の生徒も！」

この隙にかなり距離が開いてしまっていた。

桑田先生には大変申し訳ないことをしてしまった。反省文はいくらでも書くし、掃除だって宿題だって後から人一倍こなしてもいい。それだけで許されることではないかもしれないが、これが生徒である私にできる最大の償いだろう。

だが、戦士としての償いも別にある。クライナーを確実に倒し、平和を守り切る、これこそが「それ」にあたるはずだ。

この一連の事の発端は、誰のせいかと問われれば駆けつけなかったクレハーもそうかもしれないが、何より戦士として目の前の友人すら満足に救えなかったこの私のせいなのだ。同じ失敗を二度繰り返す、それは嫌だ。

私がこの手で、全てを解決してみせる。きっと大丈夫だ。それだけの強い意志があれば、キサトエナジーだって無限に湧いてくる。とにかく、私たちは先を急いだ。

—————

街では、すでにクライナーが好き放題に暴れていた。学校からも走って5分も経たずに現場に到着してしまったくらいには、住宅地や学校が近い。早く止めなければ――

「来たねプリキュア!!今度こそ、逃がしはしないよ!!」

スノウの声だ。どこにいるのかはわからないが、確かにはつきりと聞こえる。

「またあなたが……でも、もう負けないし逃げない!!」

「ふん、まだその手の傷、癒えていないのだろうか？ただでさえ逃げ出した身分のくせに手強い、そんな小娘に何ができる!!まあ、せいぜい楽しませておくれよ!!」

そう叫びながら、奴は吹雪とともに姿を現した。クライナーの頭の上に飛び乗り、私たちを不敵に笑いながら見下ろしている。

「……ラエちゃん、いる?」

私は小声で囁いた。

「だから、ラエちゃんって呼ぶのやめるラエ……。いるラエよ」

私のささやきに反応し、妖精がポケットから頭を出した。実は、ここにきてようやくの今回初セリフでもある。

「マナミちゃんをお願い。それと、レティちゃんも呼んどいて」

「……レティツを召喚したところで、金持ちはもう来ないラエ……。」「いいの。確か、あなたたち妖精にもクリアハートの力、ほんの少しは使えたはずでしょ?フリーのクリアハートもここにある。あなたたち2人で、いえ、2匹でマナミちゃんを守って。私1人じゃカバーしきれないから、お願い!」

「……まあ、そういうことなら。でも、僕たちじゃ限界があるラエ。ヒカル、酷なこと言うラエが、それでも君の守備しなくちゃいけない範囲は広い。かつ攻撃もしないと、防戦一方では一行に勝ち目もない。やれるラエか?」

「わからない。でも、やれるやれない、じゃないよね。やらなきゃ。任せて。もう、プリキュアは私しかいないんだもん。私1人でもやれるってところ、見せてあげるから。プリキュア!!エキサイティングファイバー!!」

クリアハートを握りしめ、私はそうを叫んだ。

これを合図に、私の身体が、そしてそれを纏う衣服が大きく変化していく。衣装は黄色いフリフリの下派手なもの。髪の毛については、色はそのままだが毛量が倍以上に増加。おまけに何も手を加えていないのに、勝手に髪型がツインテールになっている。

これがプリキュアとしての私、キュアスパークの姿だ。

『弾ける心!キュアスパーク!!』

ビシッとポーズを決めつつ、スノウたちをキツと睨みつける。

「作戦は固まったかい?じゃあ、来な!!」

スノウは挑発するように、手首をクイツと捻らせ、手招きのような仕草を見せる。

『言われなくても!!はああああ!!』

私は両拳、そして両足の先にキサトエナジの黄色い鎧を纏い、コンクリートの地面を思い切り蹴り上げ、敵の待つ方へと飛び出した。私の後方で、今の今まで道路だったはずの小さな破片が舞っている。『クライナーアアアアアア!!』

クライナーはその大きな拳を振りかざし、私を迎え撃たんとしている。望むところだ。

『プリキュアースパークパンチ!!』

怪物と戦士の繰り出した拳同士が宙でぶつかった。直下の地面を挟り取るほどの衝撃波を生み出したが、当の1人と1体は均衡している。どちらも譲らず、5秒ほどその場でせめぎ合う。

『はああああああ! ダアツ!』

だが、最後に押し込んだのは私だった。拳にさらにキサトエナジーを流し込み、瞬間的に火力をあげたのだ。腕を思い切り押し切られ、後ろへと仰け反り、姿勢を崩したクライナーに、さらに攻撃を仕掛ける。

『プリキュア! トリップルアクセルかかと落とし!』

そのまま宙で、フィギュアスケーターのごとく体を3回ほど回転させると、そのまま勢いのついたキックを、怪物の腹へと叩き込む。

奴を纏っていた氷が、全てではないが砕けた。蹴られた箇所を中心に、蜘蛛の巣状にヒビが入っている。さらに、吹き飛ばされたことで思い切り背中から地面に叩きつけられ、その箇所の対角線上の氷も砕け散った。しかし、やはり分厚いので、まだまだ中身にダイレクトアタックできるような状態ではない。

だが、間違いなくダメージは受けている。その分体重もあるので、思い切り叩きつけられればそれなりの衝撃があるようだ。

「さすがに体術は強いねキュアスパーク。恐ろしい火力だ。あれだけの敗戦を喫した相手との戦いだというのに、これほどまでのキサトエナジーを保てるとはな。心底、感心するよ。お前ほどプリキュアというシステムにベストマッチできる人材はそうはいない。本当、面倒なやつにクリアハートが『渡ってしまった』な」

スノウはクライナーから飛び降り、安全な場所で静止しながらそう

言った。

『それはどうも！でも、あなたに褒められても嬉しくないよ！』

「そうかい。でも、その両手、やはりプリキュアの肉体でも、傷の影響があるか。常にキサトエナジーの鎧を纏わなければ、マトモに振るうこともできないか？」

私の拳を指差し、詮索するかのように問いかけてくる。

『どうだろうね』

「……まあなんでもいいさ。ただ、忠告しとくよ。そのように、常にエナジーを可視化できるほどに消費していれば、消耗も格段に早くなる。さあ、とつと私たちを倒さないと、また苦しくなるよ」

『心配してくれてありがとう！でも、敵に心配されなきゃいけないほどじゃないよ！』

「あーそう。ま、いくらお前の体術が強烈でも、何か新しい戦術でも考えてない限り、昨日の二の舞さ。そもそも、プリキュアは2人揃って初めて真価を発揮する存在。キュアイラーレが加入する前に、私がお前をー」

『大丈夫だよ。イラーレはもういないから』

「……なに？どういうことだ？」

思いがけぬ返答に、少し困惑したのか、スノウは隙を見せた。

『プリキュア！スパークショット!!』？

それを逃すわけにはいかない。私はキサトエナジーを電撃のように変化させ、敵にぶつける技を披露した。ツインテールの両端から発射されているため、二方向に別れている。格闘技のようなものが多い私にとっては、貴重な中距離攻撃技だ。

黄色に着色された電撃攻撃が、二手に別れてスノウとクライナーを襲う。

「チツ、こんなこともできたか！」

だがスノウはこれをジャンプして避けた。彼女への命中は敵わなかったがー

『クライナーア!!』

奴は直撃を被ったようだ。それに、先ほどの一連の肉弾攻撃よりも

手応えがある。分厚い氷に覆われているとはいえ、電撃はそこに隠れている本体にもなんらかのダメージが通るようである。

「そういや、レインのデータには中距離攻撃もある、とか書いてあったかな。だが、データにあった技とは違い、髪から出てきやがった……。複数パターンあるのか？確かに、とんでもない量のキサトエナジーを抱えているからな、力任せの体術も、量にモノを言わせた電撃も可能ってわけか。……戦術を度外視した無鉄砲型だから助かってる部分があるが、こいつに戦闘脳があったらと思うと寒気がする。……プリキュアはキサトエナジーで成り立つ存在。そのエナジーを底なしに生み出せるガキか……。未恐ろしい小娘だよ、ここで芽を摘んでおかなければ、いずれクラウド様をも脅かす脅威に……」

スノウはこの攻撃を見て、早口にブツブツと独り言を唱えた。

「だが、新たなデータもある。何、ただの力任せのばかだ。昨日と同じことをするだけで、勝手に自滅してくれる！はっ！」

何かを決心したのか、宙に浮いたまま右腕を空にかざし、どこからともなく現れた『ダークブレード』を手にとると、まるで空を蹴るかのような動作でマナミめがけて急降下を始めた。

「うわっ！こっちくるラエー！」

「は、早い！避けれないよ……」

『マナミちゃん!?あんな速度で突っ込まれたら、ラエちゃんの扱おうクリアハートの力じゃ防げない……私がいかなきゃ!』

私も、スノウから親友を守るべく、全速力で迎撃に向かう。

「かかったね！クライナー!!」

しかしスノウはとっさに動作を止め、その場に静止してしまった。それを見て驚き、僅かに速度を緩めた私の前に、クライナーが立ちはだかる。奴にはハナからマナミらを攻撃する意思はなく、ただ私に隙が生まれるのを伺う魂胆しかなかったようだ。

『しまっー!?!』

「まずい！スパーク！避けるラエー！」

わずかに速度を緩めたとはいえども、その前まで最高速度に近いスピードで移動していたのだ。避けろと言われて避けることも、止まれ

と言われて止まることもできない。

次の瞬間 ガギンツ という鈍い音を立て、私は氷の塊のようなクライナーに衝突し、一気によろけてしまう。

「隙あり!!トドメだ!!」

動けない私めがけて、今度は本命の攻撃を仕掛けてきた。クライナーごと斬りつけるつもりなのだろう。スノウは黒いオーラをまとったツルギ、ダークブレードを思い切り振りかざしている。このままでは―

「そ、そんな、また私を庇ったせいで、ひかるちゃんが……」

マナミはいまにも泣き出しそうな顔をしている。

そうだ「また」なのだ。これではそれこそ昨日の二の舞。ハイライトを見ている気分になる程、そっくりそのままの展開でまた敗れようとしている。無理やりマナミを連れてきたのがまずかったのだろうか。連れてこなければ違う展開にも―

否、そうではない。もうすでに、昨日とは違う要素が揃っている。私はまだ、最後の秘策を残している。もつとも、かつて一度失敗したものになるのだが、可能性が0ではないはずだ。その秘策のために、彼女を連れてきたと言っても過言じゃない。

僅かでも光があるのなら、望みは捨てられない。そもそも、プリキュアとはスノウの言う通り、キサトエナジーで成り立つ存在だ。希望を捨てる＝負けなのだ。

「嫌だ……もう、私のせいで傷を負うひかるちゃんは……悔しい思いをするひかるちゃんは……見たくない!私に力があれば―」

その時、もう一つのクリアハートが輝きを放ち始めた。それだけではない。スノウめがけて、光弾のようなものを一発だが、発射したのである。

「何!?!くそっ!」

緊急回避のため、彼女は地面に不時着する。おかげで、斬撃は免れたが―

「妖精さんが、やったの?今の?」

マナミは突然のことに驚き、きよとんとした顔をしている。

「ち、違う、君のキサトエナジーに共鳴したんだラエ……でもなんで……君はあの時、クリアハートには選ばれなかったはず……」

『違うよ。あの時選ばれなかったのは、多分マナミちゃんが100%純粋なキサトエナジーを持つていなかったから、だと私は思う。いや、よくわかんないけど、勘がそう言ってるの。あの時のマナミちゃんは、安楽さんに対して僅かだけど負の感情があった。そうじゃない？』

「……よく覚えてないけど、多少なりとも、自分だけ離れようとする安楽さんに何かを思っていたーかもしれない……」

『でしょ。そしてイラーレに変身した時の月野さんは負の感情のない、安楽さんの先を越したいという正の感情が占めていた。だからそれが結果的にキサトエナジーとなつて、クリアハートと共鳴できた。ラエちゃん、違うかな？』

「……お、お前にしては理屈が通ってるラエ。伊達にプリキュアじゃないラエ、戦闘を重ねることで、本能がキサトエナジーについて理解しているみたいラエ。けど、こんなことつてあるラエか？本人は放棄したとはいえ、このクリアハートは金持ちのモノのはず。なら、その力を使いこなせる『プリキュア』になれるのは、金持ちだけのはずだわー」

ラエティは困惑している様子だ。

『やってみなくちゃわかんないよ。だって、さっきの攻撃も、マナミちゃんのキサトエナジーがやったつて言っても正解なんだし！マナミちゃん、一緒に戦つてくれる？やっぱり私、弱虫だから、マナミちゃんがいないとダメみたい！』

私はそう言つて、強い光を放ち続けているもう一つのクリアハートを、マナミに手渡した。

「……私でも、できるのかな……」

『もう！マナミちゃんつてば、迷ったらダメだよ！だって、マナミちゃんは私なんかよりとっても凄くて強い人なんだから！私にできることができないわけじゃないじゃん！』

「……そう、だね。ごめん、ちよつと自分を見失つてたかも。でも、そ

うだね。私がいなくちゃ、ひかるちゃん、ダメだもんね。私が、ちゃんと見ておかなくちゃ、危なっかしいもんね！」

マナミの表情が打って変わった。もう、しよげている彼女ではない。たまに私を小馬鹿にしてはニヤニヤと笑う、イラつくことはあるけど大切な親友、私の知っている大田愛海の顔をしていた。

「……いいキサトエナジューラエ。文句なしラエね。悪いけど、今は君にしか託せない。2人で、スノウを倒してくれ、ラエ！」

「わかった！えーつと、なんだったつけ？プリキュア、エキサイティン グフィーバー？かな？」

その瞬間、クリアハートの輝きが、マナミの身体を飲み込んだ。成 功だ。記念すべき初変身の掛け声が疑問形だったのが残念ではある が――

彼女の身体を繭のように包んでいた光が姿を消した時、そこには、 ハワイアンブルーに染まった、ボリユームのあるポニーテール、髪と 同じ色を基調とした、清らかな印象を与える色彩の装束に身を包んだ 戦士直立していた。

マナミのプリキュアとしての姿のようだ。

『高鳴る心！キュアパンプ!!』

キュアイラーレを生み出したはずのクリアハートから新たに生まれ たのは、全く別の戦士、キュアパンプであった。

「……あの人間は不適合者だった……レインのデータにはそうあった はずだ！クリアハートの力は人を渡るのは確か。現に、遙か昔の伝説 の存在だったプリキュアの力を、この小娘が継承しているのだから間 違いない。が、それでも、人にわたるのは、そのプリキュアの継承者 の役目が満了した時、または継承者が資格を失った時、もしくは命を 落とした時であるというのがクラウド様の解釈だったはず！イラー レという正当後継者がいるのに、どういうわけだ!？」

月野紅羽が力を放棄したことを知らないスノウは、ただただ困惑し ている。

いや、全く違うプリキュアが爆誕したのだ。もしかすると、月野紅 羽がまだクリアハートの所有者であったとしても、同じことがありえ

たかもしれない。

一層にこの装置の、このエンシャント・ウエポンに対しての疑問ばかりが浮くことにもなるが、秘策はハマった。今やらなきやいけないのは、クリアハートの謎解きではない。

2人揃ったプリキュアの力で、敵を退けることだ。

『言つてたよね。プリキュアは2人揃って初めて真価を發揮するって。ちなみに、前2人揃った時は、レインってやつもあつという間に負けちやっつけ?』

パンプが挑発するかのようにニヤリと笑った。すっかり元の調子である。変身者の心臓ともなるクリアハートが彼女のキサトエナジーを高めているのだろう。だから、余計に自信満々になるものなのである。

「私とレインを一緒にするな! きやがれ! このダークブレードでー」
『プリキュア! スプラッシュユフィールド!!』

スノウにセリフを最後まで言わせる隙すら与えず、パンプはその身から放つキサトエナジーを水へと変化させ、あたり一面を水浸しとした。

「ちよ、調子が狂うな、青いプリキュアめ、スパークとは違う面倒臭さだ。だが、こんな水でどうする? レインの方がまだマシな水攻撃をするぞ?」

スノウも挑発するようにニタニタと笑った。この2人、もしかしたら似ているのかもしれない。

『何回も言わせないでよ。2人で真価を發揮するんでしょ? あなたが言ったことだよ? ……スパーク、あとはお願い』

『任せてープリキュア! スパークショット!!』

先ほど仕掛けたのと同じ電撃攻撃だ。だが、少し違う。今度は敵ではなく、地面に向けてはなつた。その攻撃範囲は先ほどとは比べものになるはずもなく、パンプのばら撒いた、キサトエナジーの水を伝い、徐々に火力とレンジを上昇させて行く。

「ま、まづい、くそっ!」

スノウの逃げ足の早さには感心する。とつさに近くのビルの屋上

へと避難した。だが、巨体であるクライナーには、そんな身軽さがあ
るはずはなくー

『クライナーアアアア!!』？

バチチチツツという耳を劈く音を立てながら、奴は電撃の被害者と
かした。もうすっかり、動けなくなってしまうている。

『あとはトドメね。スパーク、エナジーを合わせるわよ』

『オツケー!!』

私たちは手をつなぎ合わせ、互いの残る全てのエナジーをその手へ
と込めて行く。

『プリキュア!!スパークパンプエキサイト!!』

繋いだ手から解き放たれた虹色の光線が、クライナーを包み込ん
だ。

『……タノ……シィ……ナア……』

そう呟きながら、怪物は消え去った。

「チツ、しかしこれは想定外の事態。すぐにクラウド様に報告せねば。
くそ、一体、どうなつていやがる!？」

スノウは捨て台詞を残し、再び起こした吹雪とともに消え去って
行った。

—————

「しかし、謎が残るだけ、ラエね」

その30分ほどあとだった。私とマナミ、そしてラエティと、戦い
が終わった後に到着したレティツが私の部屋に集っていた。

クライナーが倒されたことで、街は元に戻り、記憶改竄も完了した
ようだった。もう、先生たちも忘れてしまっていることだろう。

「それで、結局私のパートナーはマナミってことになるレティ?。」

レティツがそう訊ねる。

「一概にそうとも言えないラエ……。この状況を見るに、プリキュア
の資格を満たすものならば、誰でも使用可能、という可能性も……」
「クリアハートは二つしかないから、同時に存在できるプリキュアは

2人だけ。でも、不特定多数、多パターンのプリキュアが出現する可能性になつても不思議ではない、つてことかしら」

マナミはそのような仮説を立てた。

「まあ、そうなるとしか言えんラエ。けど、伝説にそんな話は残されていないはず。それなら、はるか昔にも複数のプリキュアが存在しているはずラ……あ、そんな記述、あつたラエ。プリキュアは複数の姿があるつて、王様言つてたラエ。それつてまさか……」

「そうなるレティ……」

「しかしそれが知られば、今はプリキュアの存在をなんとか隠せているけど、もし一般認知などされようものなら、人間同士でのクリアハートの奪い合いになるかもしれないんラエ。敵はクラウドだけだと思つてたけど、そうなるはず。やはり他言厳禁、クライナーは素早く倒し記憶を残してはいけないラエね」

ラエティは改めて、正体バレが招くであろう懸念を述べた。

「でも、もう月野さんと安楽さんには知られてるわけだし……。特に安楽さんは、それを知つたら間違いなく、力を欲しがるよ。プリキュアは2人揃つたからもういい、みたいなこと言つてたけど、可能性があるつてことになるし。それに、安楽さんが動き出したら、絶対に月野さんも動く、これを取り返しに来るかも」

私はそう言つた。十分に考えうる事態である。

「その通りラエ。だから隠さなくちゃいけない」

「でもどうするの？私がキュアパンプに変身するところ見られたら、口で言わずとも、その事実を認めているようなことになるわ」

「……むむう、頭がいたいラエ……」

「でも戦力としてみれば、いろんなプリキュアがいた方が有利レティ。敵に合わせて送り込めるレティよ」

「そりやそうだけど、かと言つて増やしすぎると、人間界で内乱起こるラエ。欲しがるのは女子中学生だけじゃない。各国の政府が軍事兵器として手に入れようとする懸念もある。この人間界が減ぶことにつながるかもしれないんラエよ。なら、やはり増やせない。それに、有力とは言えあくまで仮説。クリアハートはまだ、王ですら全てを把握で

きていないほど未知の機械なんだから……」

私の部屋は静まり返ってしまった。

なんだか、大きな話になりつつある気がする。果たして、これからどのような事態が待ち受けているのだろうかー

続く

第7話 「轟く雷鳴!?!強敵サンダー降臨!!」

第7話 「轟く雷鳴!?!強敵サンダー降臨!!」

「ふうむキュアパンプ。水色のプリキュア、ですか」

クラウドはため息をつきながら、スノウの提出した電子報告書のプログラムを、自らの正面で開き、指先でスライドするようにページを捲りながら眺めていた。

「確かに予想の範疇の外でした。ともなると、面倒ですね。プリキュアはただでさえ2人揃うと脅威と言うのに、複数パターン出現する可能性も出てきた。ここまで出現した3パターンは、全てキサトエナジーを、例えば電撃や炎、水などに変化させて使用してくるのを見るに、異なる性質を持った戦士の登場が今後あり得ることも想定しなくてはいけませんね。我々の送り込むクライナーによって、相性のいい戦士の組み合わせを使い分ける、なんて戦術も取れるでしょう。小癩なクリア王国の妖精もついているんです、中学生だけでその発想には至らなくても、彼らが参謀となれば十分想定できる」

クラウドはゆっくりと、彼の後ろで腕を組むストーム、そして近辺で跪いているスノウにも聞こえるようにそう分析した。

「やはりクリアハートの奪取が必要不可欠ですね。片方でもこちらの手中に収めれば、候補生はいくらでもいるとしても、戦闘に参加できるプリキュアは1人です。あの時、レインが片方だけでも持ち帰っていれば……使えないヤツめ」

スノウがそう言った。あくまでも、自分の敗戦はレインのせいだ、とも言いたげな表情だ。

「一概には言い切れぬ。レインの報告には、遠く離れた場所で控えていたはずのレインの所持するクリアハートが、キュアイラーレに共鳴するかのように、1人でに戦場に向かったとある。我々が人間界から離れた場所で管理するとしても、同じことが起こる可能性は捨てきれぬ」

しかしこれに、ストームがそう応えた。

「どうするクラウド？候補生を未然に潰し、今後の脅威を排除するか？それとも、なんなら俺が出向き、まだ未熟な小娘戦士どもを早々に叩き潰すのもアリだ。ガキとはいえ腐ってもプリキュア。戦闘経験を集めば積むほど、成長するだろう。手に負えなくなるぞ」

「ストーム、そう早まらないでください。我々の目的はあくまで、エンシャントウエポンを揃えることです。プリキュアは邪魔だから排除したのであって、彼女らを潰すのが最優先事項ではないでしょう。それに、プリキュアはまだ泳がせておきたいですね。彼女らが光のエンシャントウエポンを集めてくれるまでは」

「……方針は理解した。ならば我々も下手に動かないほうがいい。無駄な戦闘は避けよう。余計に経験を積ませたり、新しい戦士を発現させてやる必要はないはずだ」

「そうしたいのは山々なんですけどね。ある程度は積ませる必要があるんですよ。それに、人間界にもウエポンは眠っている。人間界に遠征するなら戦闘は避けられない。あまりこちら側の都合通りになることを期待してはいけません」

「経験を積ませる？なぜだ。我々の首が閉まるだけではないのか」

「いずれわかります。私を信じなさい。これまでに私が間違ったことがありますか？つべこべ言わず、までは言いませんけど、従っておけばいい。何か、そこに文句のある方は？」

クラウドは少々面倒くさげな面持ちでそう吐き捨てた。質問ばかりで疲れたのだろう。

「……おっしやる通りでございます」

「そうだな……。案ずるな。疑問があっただけだ。俺はお前に従うつもりだ」

2人の部下は肯定するほかなかった。実際に、疑問はあるが不信感はない。この国を短期間で大きなものへと成長させたのはほかでもない、このクラウドという統率者なのだから。

謎が多い人物ではある。どこで伝説を知ったのか、その杖、カオス・ロッドをどこで手に入れたのか。伝説の書もどのような経緯で入手したのだろう。なぜ、このタイミングでエンシャント・ウエポンの回

収をし始めたのだろう。謎しかない。

エンシヤントウエポンは、全てを揃えれば世界をも変えてしまうほどの力が手に入るといふ。だが、漠然としすぎていふ。『世界を変えろ』とは具体的に何を指すのか。『力』とは。クラウド自身は何かを知っているそうだが、彼らには聞かされていなかった。

「今後の人間界はどうでしょうか。スノウに引き続き任せるのもアリですが……せっかくダークブレードを掘り出したのに、あなたではその力を引き出せなかった。どれほどの能力を秘めているのかのデータは欲しいです。これはどちらかというところ、パワー系のレインの方が適合するかもしれません。試しにレインを送りましょうか」

「いや、レインはエンシヤントウエポンの搜索に向かわせたばかり。こちらの都合で、將軍の肩書を持つ男の配置転換を頻繁に行なっていれば反感を買う。レインはしばらくそのままがいいだろう」

「そう、ですか。しかしスノウではデータが取れない。……ああ、そういえばあの男がいたのでは？ 謹慎中ではありませんが、特例として出してあげましょう」

クラウドはポンつと両手を叩いてそう言った。

「サンダーのことか……？ 俺はあまり気が乗らないが……」

クラウドの提案に対し、ストームは表情を強張らせた。クラウドはサラツと言っていたが、謹慎処分を受けているほどの男らしいので、間違いなく危険な人物なのだろう。

「別にいいでしょう。パワーだけならレインをも凌ぎます。まあ、頭があまり回らないのでたまに困りますが」

「ありゃ失敗作だからな……。まあ、新しい、水を操るキュアパンプとやらの相性は相当良いだろうし、おそらくキュアイラーの炎にもビクともせず、キュアスパークの体術も圧倒できるほどの高いスペックはある。試すのも面白いか」

「わ、私はあの男に近づきたくはないですが……」

スノウが誰にも聞かえない程度の音量でボソツとつぶやく。

「なら、そうしますよ。サンダーを人間界へ送ります。その名の通り、

カミナリを落してもらいましょう」

こうして、サンダーという危険な人物の投入が決定されたのだった。

—————

「ヒカルちゃん、結局部活はどうするの?」

マナミがキュアパンプへと覚醒した翌日のことだ。教室で、彼女が私にそう訊ねてきた。

そういえば、部活動のことを完全に忘れていた。最初の見学の日にクライナーが襲撃し、そこからバタバタとしていたので頭になかったのだ。確か、2人とも吹奏楽部に興味があるというところまでは話していたはずだが。

「ああ……忘れてた。どうしよつか、紹介と見学って昨日とおとただけだったような……」

「学校主催のものは、そうね。でも、個人でならいつでも行けるんじゃない? 今日吹部見に行こうか?」

「なるほどおそうか! うん、行こう!」

吹奏楽といえば、ほとんどの場合が中学校から始める生徒が多いだろう。等しく同じスタートラインに立てるし、なんとなく、女子中高生としてほのかな憧れがある部活だ。もちろん、練習はきつそうだが

「部活なんかするラエか? 金持ちとカスミみたく、プリキュアがおろそかになっちゃうラエよ」

周囲には聞こえない程度の声で、妖精が口を挟んで来た。

「あのねえ。私たちはその前に中学生なの! 部活くらいしていいでしょ!」

「やるな、とは言ってないラエよ。でも、特にヒカルはすでに何度も戦闘したからわかると思うラエが、奴らは御構い無しになるラエよ。部活をすれば、その中で友達ができたり、人付き合いが増えることもあるし、練習を積んだ先にはコンクールや大会もあるラエ。友達と遊ん

でる最中に、練習中に、そしてその集大成である大会の最中にでも、飛び出していける覚悟あるラエか？」

急に真面目なことを語り始めた。だが、その通りではある。

「……それは……」

誰だつて、ある！と即答はできないだろう。

「まあまあヒカルちゃん、そんな小難しく考えなくてもよくつてよ。攻めてくるあの人たちを迎え撃つ前提だから、そういう話になっちゃうのよ。ここは、2人揃って真価を發揮したプリキュアの力を持って敵国に潜入し、一気に叩き潰して、脅威を早々に排除すればいいのよ！クリア王国？つてところも救えるし、悪い人たちもやつつけられるし、最高の作戦でしょう！？そうと決まれば、いざ帝国カバークラウダーにー」

マナミがそう威勢良く、右腕に力こぶしを作りながら言いかけたがー

「待て待て待て待てラエー！アホかいな！さては君、ヒカル以上の天然ラエか！？確かに戦力は整備できたラエが、今の君たちで向こうに行つたところで、カップラーメンができる前にやられるだけラエー！瞬殺ラエよー！」

妖精ラエティガすかさずにツツコミを入れた。瞬殺される、の例えとしてカップラーメンを持ち出してきたが、クリア王国にもあるのだろうか？

「オーバーじゃない？今のは冗談で言ったけども、割と戦えるでしょ。あなたたち妖精さんもみたでしょ、2人揃った時のパワーを。雨男も雪女も目じゃなかったじゃない？」

「クラウドを舐めすぎラエ。それに、かつてプリキュアは何も、プリキュアだけの力でクライナーを封印したわけじゃない。古代兵器の力を使つてたらしいラエよ。今の所、僕たちの元にあるその古代兵器は、クリアハートというプリキュアに力を与える基本装置だけ。いわば、初期装備だけでラスボス倒そうとしてる感じラエ。それも、経験値が浅くてプレイヤーのレベルも低いのに。無理ラエ」

妖精のくせに、先ほどから例え話がやけに人間界よりなものになつ

ているところには触れないでおこう。

クラウドは恐ろしい人物だと、妖精の口から嫌という程聞かされてはいるが、実際、私にもマナミと少し似ている考えはあった。実際に何度か敵を退けたからこそ抱いている感情だろう。

『ぶつちやけどうにかなるのでは』そんな考えだ。百聞は一見にしかずという言葉があるが、どれだけ恐ろしい人物だと聞いたところで、実物を見たことがないのだから想像はつかない。逆に、妖精たちがプリキュアの力を見くびっている線だってあるのではないだろうか。

どのみち、プリキュアとはキサトエナジーを原動力とする存在。やる前から恐れているのは、キサトエナジーが弱まるどころか、ウイザパワーも生みかねない。今はこのくらいポジティブでいた方がいいだろう。

「それで?じゃあ部活するのやめる?」

「長らく訪れていた沈黙をはらったのはマナミだった。

「いやあ、でも流石に、それは……そうだ!ラエちゃん、部活するのはプリキュア活動でもプラスになると思うよ!!」

私の頭にとっさに、良いアイデアが浮かんできた。これなら、口うるさい保護者妖精だって言い丸めることができるかもしれない。

「どういふことラエ?」

「部活って、楽しいことも辛いこともたくさん経験できるものでしょ?辛いことは、仲間と乗り越えようとするのでいろんな力が身につくと思うし、それを乗り越えた上で、その先にある楽しいことを経験することで、自信もつくと思うんだ!人としても鍛えられるし、キサトエナジーだって今よりも大きくなるかも!それにそもそも!人間としての成長は、イコールプリキュアとしての成長にだってなるじゃない!!」

「……まあ、お前にしちやあ理屈は通ってるラエが……」

「えっへん!私はもともと、理屈?というか、正論みたいなことは前から言ってるつもり!」

ね!?!いいでしょ!逆によ、部活とかしてなかったら、私たち中学生なんだし、戦士としての修行みたいなこともできないんだからプリ

キュアとして成長できないと思うよ？部活こそ修行場!!そうは思わない？」

「む、むう……わかった、わかったラエ。そもそも、僕もやるなど言っていたわけではないし……。まあ、一理あるというか、プリキュアというものは伝説の戦士。君達はみんな、まだ伝説の戦士と呼ぶにはあまりにも中身が伴っていないラエ。レディとしての鍛錬という意味でも、まあ、いいと思うラエよ」

さりげなくデイスられたが、こうして無事に部活を始めることはできそうだ。

「で、結局何部を始めるラエ?」

「私は第一希望吹部ね。まあ、もつといろいろ見てみましょうよ」

「そだね!」

「……でも、僕が懸念しているような事態に陥るリスクは高まるし、その日は絶対くるラエ。やはり、戦力補強は必須ラエかね……。適合者であれば力を使えるかもしれない、というキュアパンプの示した可能性、仮説の検証はやはり進めるべきラエか……。でも加減がわからないラエ、頭がいたいラエよ」

ウキウキしていた私たちをよそに、妖精は1人、ブツブツと呟きながら悩んでいた。

—————

輝ヶ丘中学の、一階奥隅にある生徒会室。

ここでは今、全ての生徒会員、そして加えて、おなじみであるあの2人が揃っていた。

2人は予め、入会希望の手続きは済ませてはいるのだが、今日が全員が揃う初めての日、ということとで挨拶をしに来ていたのだ。

「君たちが今年の生徒会入会希望者だね。改めて、自己紹介からしようじゃないか。僕は現生徒会長、村田聖一、3年生。よろしく」

少し明るめの茶髪で、パーマのかかったショートヘアの爽やかな男子学生がそう自己紹介をした。いかにも知的で、漫画に出てくる生徒

会長のような雰囲気醸し出している。

「同じく3年で書記の吉村裕子です」

「同じく3年。会計の金城辰巳です」

その両脇に立っていた生徒たちも続けてそう名乗った。流石に生徒会、この3人だけでなく、部屋にいる全ての学生―カスミらを除いて合計6人―から、育ちの良さそうな、知的な雰囲気を感じる。放つオーラが、まるで中学生のそれではない。

だが、それはこの2人も同じこと。

「初めまして。入会希望の安楽加清、1年生です」

「同じく入会希望、1年の月野紅羽ですわ」

「安楽さんと月野くんか。話には聞いているよ。2人とも、小等部にいる頃から有名だったからね。来てくれるとは思っていたよ。この輝ヶ丘中生徒会には、これ以上にならない戦力補強だ」

村田会長は嬉しそうに、にこやかな笑顔でそう言った。

「補強、ですか。お言葉ですが、少し違うと思います。補強とは補い強くすると書きます。意味的には、足りない、弱い部分を補う、と。……いいえ。私はここに生徒会長になるために来ました。補うためではなく、リーダーとして引つ張るために来たのです」

カスミは真顔のまま、表情をピクリとも動かさずに、はつきりと言いつ切った。

「右に同じくですわ。もつとも、安楽加清にも、それ以外の候補者にも負けるつもりはありませんことよ」

クレハも同じであった。もちろん、1年生が最初の挨拶からこう飛ばしているので、上級生たちはあまり快くも思っていないようで―「大きく出たな1年生。神童だか優秀だか知らんが、礼儀もわきまえていないとなると、人の上に立つのは難しいのではないか？」

2年生の会員がそう指摘する。

「先輩は私が礼儀をわきまえていない、と。……楯突くようで申し訳ないのですが、先ほど述べたことに何か、失礼に値する発言がありましたでしょうか。会長の発言に対し、私の意見を述べたまでだと思いますが」

「……そういうところではないのかな？」

「おっしゃっておられることの趣旨がわかりません。抽象的ではなく、具体的な該当箇所があるのですかとお尋ねしています」

「まあまあ。安楽くん、君の言うとおりだ。私は別に、失礼な発言だと捉えてはいないよ。1年生ながら、このような場面で一切の緊張を見せず、自分の主張をはつきりと通せる。さすが、噂通りの生徒ではないか。我が校の生徒会には未だ、1年生会長の前例はないが、ぜひ、そこを目指し、目標通り、リーダーになれるよう努めてもらいたい」

村田会長はにこやかな笑顔を浮かべたまま、そう言った。とても優しい少年である。

「ちなみに、今発言していた彼、谷繁くんはすでに今季の会長選挙に立候補することが決まっている。君たち2人のライバルでもある存在だね。それはそうと、入会希望者、という位置づけだった君たちだが、当然だが入会は承認です。今この瞬間より、生徒会役員となります」
「ありがとうございます」

「感謝しますわ」

「続いて、ですが。もう2人とも意思は固いようじゃないか。なんならば、ここで早速出馬の宣言をしてもいいですよ。もちろん、後日改めて書類などの提出もしていただきますが、せっかくこの場に谷繁候補がいるんだ。お互いに意識し合う、いい機会だとは思わないかい？」

村田会長はそう提案した。

「そうですね。……谷繁先輩、先程は気分を害するような真似をしてみましたようで、申し訳ございません」

カスミは谷繁の方に体を向けると、まずは深々と頭を下げた。

「ですが負けるつもりは毛頭ありません。必ず私が勝ち、私が会長になります」

「と、先程無礼な真似をしたこの安楽加清が申しておりますが、会長になるのは安楽加清でもなく先輩でもなく、この月野紅羽でありますわ。オホホホホ」

たった今入会が承認されたばかりだというのに、この生徒会室は彼

女ら2人が支配しているのでは、とすら思わされる。谷繁はじめ他の上級生は皆、静観はしているものの、やはり初っ端からマイペースを飛ばしまくる下級生を良くは思っていないようだ。

だが、村田会長はこれを、むしろ頼もしいと感じているのだろうか。そのニコニコな笑顔を崩さない。

「良くも悪くも噂通りだな。まあ、いいだろう1年生、このままでは立候補者は俺1人となり、特に選挙することもなくあっさり会長となってしまうところだったぜ。そこにイキのいいのが2人も現れ、それもどちらも下級生となれば、俄然燃えるというものだ。いい勝負にしよう」

谷繁はそういうと、彼女らに向かって手を差し出した。意外にも、ライバルとして認めてくれたようである。

「よろしくお願いします」

「お手柔らかにお願い申し上げますわ」

2人は交互に握手を交わした。

「さて、では立候補者3人も決まった。いい生徒会選挙にしよう。実施日はすでに決まっている。1ヶ月後の5月10日だね。今よりその前日である5月の9日まで、選挙活動をすることを認めます。なお、立候補者各位は、各々1人、応援演説を行う生徒をつけること。我が校の生徒であれば誰でも可能ですが、現役の生徒会役員は原則避けてください。活動は、輝ヶ丘内であれば校外でも構いませんが、校外活動の場合、必ず制服で行うこと。また、大人の手助けを借りることも認められています。金銭のやりとりなどを行わないこと。そのほかには特にルールはありません、比較的自由に活動できると言っていないでしょう」

村田会長は緩い表情を少し締めつつそう言った。

「大人を使えるのですね。これは、私の勝利の方程式も見えてくるというものですわ」

クレハがニヤリとしながら呟く。

「金銭のやり取りの話は聞いていたかしら？あなたの家や関係者に無償で動く方はいるの？」

すかさずカスミも小声でツツコミを入れる。

「執事を使えばいいではないですか」

「その執事さんは、あなたの家からお金をもらっているわけだと思うけど」

「ああ。そうでしたわね。でも私が直接払っているわけではありませんわね？」

「グレーゾーンね。後から詳細を訊ねておいたほうが安心よ。私を倒すと公言している人が、反則で退場は悲しいわ」

「おっしゃる通りですわね。小細工など使わなくともあなたを倒しますわ!!……とは言いませんわ。使えるものは全て使いながらあなたを倒すのです。しかしながら、使用不可を使用して反則負けは嫌ですわね」

「1年、コソコソと話すな」

上級生がそう指摘する。

「まあまあ。では、今日はこの辺で解散でいいでしょう。立候補者の皆さんは頑張ってくださいね。生徒会選挙を楽しみに待っています」

こうして、生徒会選へと向けた戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

—————

ドンっという、雷のような音が一瞬、輝ヶ丘の街に鳴り響いた。それに気がつき空を見上げた住民こそちらほら見受けられたが、天気は晴天のままであり、その後は何も起きなかつたので、多くの人が気のせいだろう、と、興味を失っていた。

「ここが人間界……そして、プリキュアのいる都市か……」

低く、威勢のある声でそう呟いた男は、ストームにも匹敵しようとする大柄な体格で、上半身には衣服を着用しておらず、その代わりに、岩山のように発達した筋肉に纏われている。肌の色は金色に近い明るい黄色であり、白く染まった髪の毛は逆立っているが、おそらくこれは全身から時折放たれている青白いスパークのようなものが原因

だろう。

「そ、そうだとサンダー。道案内はしてやった。あたしはもう帰るよ！」

「どうやら彼が、冒頭でクラウドたちが話していたサンダーのようだ。彼をここまで導いたスノウは、関わりたくなかったのか、早々に引き上げようとするがー」

「待てスノウ。俺は長いことテンペストプリズンに収監されていた身分だ。状況を知らん。どいつがプリキュアなのか、もな。伝説の戦士なのだろう？俺は敵の強さを、その者が放つオーラで判断できる。この街にある大きなオーラは貴様のものくらい。そのほかではとても、戦士と呼べるほどのオーラを放っている反応はない。本当に、ここにプリキュアがいるのか？」

「プリキュアってのは、普段はただの人間なんだ。だから当然、今は反応をキャッチできなくて当然さ。だが見くびるな、私もレインも、一度負けている」

「貴様ら雑魚と一緒にするな。では、人間から『変身』してもらい、おびき出す必要があるな」

「ああ、だからクライナーを作らねば。媒体を探せ」

「クライナーだと？必要ない。あれはクラウド様の見出した、本来は戦争をする際に物量で攻める手段として使用する兵器のはずだ。戦士の1人や2人を相手にするには向いていない。だから貴様らは負けている」

「何!?!それは、クラウド様の方針への批判として捉えていいのか!?!」

スノウはサンダーを睨みつける。

「違う。貴様らの要領が悪いのだ。それともなんだ、貴様らは生身では、クライナーよりも弱いのか？」

「クライナーは確かに本来はその使い方が正解だ。だが、プリキュアはキサトエナジーを利用する戦士。クライナーがいたほうが効率よく非戦闘員からもウィザパワーを生成し、そしてプリキュアのキサトエナジーの弱体化にもつながるのだ。火力だけで考えるな」

「要はプリキュアに絶望を与え、キサトエナジーの効力を失わせれば

いいということだな。なら、俺だけで十分だ。あのクラウド様でさえ、この俺を恐れたのか、遠いテンペストプリズンに封じ込めてたくらいだしな。おい、とつととダークブレードとやらを渡せ」

「チツ、この脳筋が……だが忘れるなサンダー。我が帝国では、正当防衛ややむを得ない場面以外での非戦闘員の故意殺害は違反行為。お前はそれを6度も破ったためにプリズン行きだったんだよ。次は死刑かもわからんぞ。せつかく出されたんだ、今度こそクラウド様の怒りを買うな！」

スノウは彼に向かってダークブレードを投げ渡しながらそう忠告した。

「ふん。だが、俺の場合はやむを得んのだ。俺が強すぎるのでな」

彼は不敵に笑うと、大剣を担ぎ、市街地へと飛んで行った。

「つたく、ありや絶対何人か殺すな。ていうか、殺される奴には悪いけど、それくらい暴れてもらって、死刑を執行したほうが今後のためだよ……。クラウド様は奴の何に期待して、生かしているのだろう」

スノウはそう吐き捨てると、巻き込まれなくなかったのか、足早に撤退した。

—————

「こ、これは!?」

放課後、私とマナミが部活動の見学に行こうとしていた時、急にレティツが大きな声をあげた。

「しっ、静かにしてよびつくりするじゃん……」

「どうかしたの?」

「……こ、これほどまでのウイザパワーを感じるのには、クラウドを前にした時以来ラエ……! 2人とも! 見学は後日でもいいラエか!? レインやスノウのウイザパワーとは桁が違う反応があるラエ!」

次に叫んだのはラエティだった。

「ま、また先送り〜?」

私はとほほという顔でそう嘆いたが、ラエティとレティツの表情は

いつになく強張っていた。その様子を見て、私の顔も自然と引き締まって行く。この場を、緊張感が一瞬で支配してしまった。

「へえ、つまりボス級ってこと？ちようどいいじゃない。乗り込もうとしてたのに、向こうから来てくれるなんて。ここでやつつけて、平和な学校生活を心置きなく楽しまなきやね」

マナミはニヤツと笑いながらそう言った。全く、肝っ玉の座りすぎである。

「とにかく、急ぐレティ！このまま走って向かっても、間に合わないかもしれないレティね。どこかに隠れて変身して、プリキュアの身体能力を使って一気に向かおうレティ」

「おっけー！ひかるちゃん、行くわよ！私たちのスーパーコンビネーションで2分くらいで片付けて、部活見学に戻りましょう！」

「う、うん！」

私たちはグラウンドに出て、物陰に隠れ、周囲に誰もいないことを確認したのち、クリアハートを握りしめた。

「プリキュア！エキサイティングファイバー!!」

同時にそう叫ぶ。次の瞬間、私たちはプリキュアへと変身が完了していた。

『行こう！パンプ！』

『おっけースパーク！ラエちゃん、敵の場所は!?!』

「こっちラエー！」

ラエティは私の肩に乗ると、北を指差した。タイミングを同じくして、レティもパンプの方に乗る。

『了解！ひとつ飛びで行くわよ！それ!!』

2人で同時に地面を蹴り飛ばし、大きくジャンプして目的地へと向かった。

—————

再び、ドンつという大きな音を響かせながら、サンダーは市街地へと着陸した。その場所には、軽いクレーターのようなのが形成され

てしまっている。

「人間界、とはこんなものか。ここにいるのは全て非戦闘員だとはいえ、皆オーラが虫ケラ以下だ。目を瞑って歩いていけば、誰にも気がつかないレベルだぜ」

サンダーは周囲を見渡しながら、ため息をついた。周りの人々は、突然空から地面に穴を開けながら降り立った、上半身裸の金色の大男を前に、ただただ唾然としている。

「さて、少し準備運動をしよう。その過程でプリキュアも俺の存在に気がつき、こちらへと向かってくるはずだ。まずは、屈伸から始めよう」

しばらくぶりに謹慎を解かれ、監獄ではなく広い世界へと降り立ったのだ。まずは、鈍った体を慣らさなければならぬのだろう。彼は、大剣を背負ったまま、その場で屈伸運動を始めたが、一度膝を曲げた瞬間、クレーターはさらに大きく広がり、半径10メートルほどに渡って、地面に蜘蛛の巣状のヒビが走る。

「……人間界というのは、地面の耐久力も虫ケラ以下なのか？これではまともに動けぬ。空中で運動するか」

「な、なんだあいつは！」

その光景を見た人々は、流石にこう着状態から解き放たれたのか、一斉に彼から勢いよく離れ始めた。サンダーはそれを特に気にもとめず、身体を宙に浮かせながら、運動を続けていく。だがその動きが一瞬固まった。何かを察知したようだ。

「急激に大きな反応が現れたな。2つ。禍々しいほどのキサトエナジーを感じる。音に聞くプリキュアか。想像以上にでかいオーラを持っているな。楽しめそうだ」

『ハアアアアアアア!!』

私たちはその場に、叫びながら宙より到着した。彼の前方へと着陸し、各々その場でポーズをとる。

『弾ける心！キュアスパーク!!』

『高鳴る心！キュアパンプ!!』

『闇に染まった心に元気と天気を取り戻す！輝け！ワクワクプリキュ

ア!」

ビシツと決めセリフも決まった。最初から2人揃っていれば、怖いものはないのである。

「オーラは想像以上だが、同時にやかましさもだな。まあいい。おい、プリキュアとやら! 選択肢を与えてやる。1分コース、2分コース、3分コースだ。どれがいい?」

『なんの話?』

私がそう聞き返す。

『カップラーメンなら、実は3分よりも2分が美味しかったりするわね。よし、2分コースにしましょう』

パンプがそう言った。

『……絶対そういうことじゃないでしょ……』

『まあいいじゃない? 私もさつき、2分くらいで帰ろうって言ったし』
「……2分でいいんだな? このオーラの戦士を2人、2分で片付けられるくらいのパワーは……」

サンダーは眩きながら身構えた。するとウィザパワーがさらに高まり始め、ついには彼の周りに紫色のオーラとなり既視可された。

「このくらいか……。お手柔らかに頼むぜプリキュア。まだ準備運動が満足にできていないんだ。少し鈍っているのではな」

『……妖精さんと違って、ウィザパワーを感知とかはできないけど、それでも相当な力を感じるわね……』

キュアパンプは表情を引き締め、身構える。

『そうだね……。でも、私たちなら負けないよ!』

私も同じく戦闘態勢に入った。私たちも同様にキサトエナジーを高め、全身からこれを放出し、目にて確認できる黄色のオーラとしてまとい始めた。キュアスパークこと私が、前回のスノウ戦で使用した、キサトエナジーの鎧だ。攻撃力も防御力も跳ね上がる。同時に、消耗も当然ながら、目に見える量のエナジーを常に放出しているため激しくなるが。

『先手必勝! こっちから行くわよ! ハアアアア!!』

先に動いたのは、キュアパンプだった。目では追えないほどの高速

で移動しているため、まるで瞬間移動をしているかのようである。

瞬時に金色の大男の背後に回り込み、回転しながら勢いをつけた蹴りを撃ち込もうとするが―

「遅い」

その蹴りは空振りしてしまった。

『消えた!?!』

「貴様と同じだ。俺は魔法使いでもなんでもないのでな、ただ動いただけだ」

その声は、キュアパンプの後方から聞こえてきた。後ろをとったつもりが、とられていたのである。

「我が名はサンダー。その名の通り、いや、その名をも凌駕する。俺は稲妻よりも速く、そして―」

サンダーはまた、その場から姿を消した。

「雷より強く、全てを破壊し尽くす」

今度は、地面で待機していた私、キュアスパークの背後からその声が聞こえた。あまりにも速すぎる。

「貴様ら、やる気はあるのか？オーラだけなら大したものだな。レインとスノウが負けるのも頷ける。だが、遅すぎるな。止まって見える。ああだがお前は、実際に止まったままだったな」

そう言うと、彼は一瞬のうちに拳を私の無防備の背中に打ち込んできた。

『キャッ!!』

そのまま高速で吹き飛ばされ、向かいのビルに大きなクレーターを形成しながら激突する。

『スパーク!?!』

『だ、大丈夫……』

キサトエナジーの鎧が、突き、壁への激突ともにダメージを軽減してくれたため、なんとか一発KOは避ける頃ができたが、それがなければまずかった。

これまで対峙してきたどのクライナーよりも、どの幹部よりも格段に強い。

妖精たちの語るクラウドという男は、これよりも強いということだろう。部活動なんて、さつきはあのようにには言ったが、本当にやっている暇はあるのだろうか。

「ほう。結構力を込めて突き飛ばしたつもりが、まだ立てそうだな。だが、俺も2分と宣言してしまったしな。あと1分と少ししかない。もう少し飛ばすぞ。ついてこれるかな？」

サンダーはニヤリと笑いながら再び身構えた。私たちの背中に、緊張から、そして恐怖から冷や汗が流れ始める。

「こ、この男！サンダー！思い出したラエ！かつて軍事大国をたった1人で落としながらも、非戦闘員を必要以上に大量殺戮し、クラウドから謹慎処分を受けていた、帝国カバークラウダーの中でもずば抜けた極悪人ラエ!!こ、ここは逃げるラエ！勝てないし、勝てないは愚か、最悪の場合……!」

ラエティは、それ以上は言わなかった。

「案ずるな。逃がしはしないし、殺しもしない。それをしてしまえば、今度こそ俺はクラウド様に消される身分。だが、やはり相手がガキで、それも女となると俺も調子は狂うものだ。クリアハートを差し出すのならば、敗走も見逃そう。クラウド様がお求めになっておられるものは、貴様らの命ではなく、クリアハートだ」

サンダーは身構えたまま、そう言った。

『……それで、私たちがクリアハートを差し出すとでも?』

流石にキュアパンプ……いや、マナミといったところか。再び地面へと降り立ちながら、この撤退の最大のチャンスとも言える通告に対し、強気で言い返す。

「いい度胸だ。そうこなくては面白くない。では、戦うのだな?」

『とはいえ、あいつに私たちを本気で殺すことはできないわ。クラウドというやつから、そういう命を受けてるみたいだし。圧倒的な力の差があるとき、半殺しするのは殺害よりも難しいらしいわね。なんかのバトル漫画にそういう事が書いてあったわ。まあ、何にせよ、ここは最強のコンビネーションを見せつける時よ！ヒカルちゃん！私が陽動をするから、あなたの力任せの体術を叩き込んで!』

『わかった!』

私たちの作戦は固まった。ちょうどよく、奴が動き始める。

「覚悟は決まったか!? いくぞお! サンダータツクル!!」

紫色に、目に見える量までに溢れ出たウィザパワー、そしてさらに激しさを増した、全身から放電されている青白いスパークを纏い、その技名通りタツクルの姿勢に入り、今度はキュアパンプへと攻撃をするために、彼女へと高速で体当たりを仕掛けに行く。

『まともに喰らうとやばそうね。まあ、このマナミちゃんに任せなさい! プリキュア! パンプスライダー!!』

そう叫ぶと、キュアパンプに纏われていたキサトエナジーが青色に変色し、さらに大量の水へと変化した。水は6本の柱となり、それぞれがサンダーへと襲いかかる。

「こんなものでどうするつもりだ?」

サンダーはタツクルの体勢のまま、水流の柱を次々に躲していく。「……いや、これは本命の攻撃ではないのか? まあいい、どんな小細工も力でねじ伏せるのみ!」

6本中5本をあまりにあっさり回避することができたため、サンダーには一瞬、迷いが生じたようだが、やはり力任せに、御構い無しに突っ込んでくる。

彼女と激突する寸前で、残る1本が、パンプを守るように現れた。だが、どう見ても強引に突破されてしまいそうに見えるが――

しかし、次の瞬間、サンダーの軌道が大きく変わった。水に押し流され、パンプの目前で右側へと軌道を逸らされたのだ。彼女は一步も動かずして、彼の攻撃を回避したことになる。

「攻撃ではなく、防御の技だったか! だが、それがどうした!」

すぐにタツクルの体勢を一旦解除し、足を使いブレーキを効かせ、身体を反転させながら、彼女の背後より攻撃を繰り出さんと動き始めるが、ここまですでに私たちの作戦通りだった。キュアパンプばかりに目が行っていたサンダーは、彼女の後ろで待ち構えていた私の存在に気がつくのが一瞬、遅れたのだ。

「何!?! この水を使うプリキュアは、ただの陽動だと?」

『隙あり!!プリキュア!スパークナックル!!』

全身に纏っていたキサトエナジーを、利き腕の拳に一極集中し、メリケンサックのような形状に変化させ、威力を高めたパンチを隙の生まれたサンダーへと撃ち込んだ。

「ぬおおおお!!」

バリバリツという、雷が炸裂したかのような音を響かせ、サンダーの身体が、地面をめぐりとりながら吹き飛んでいく。

『はあ……はあ……、決まった……!』

全身から放出させていたキサトエナジーを一気に消費した、会心の一撃だった。私はいまの動作で、肩で息をするほどまでに消耗してしまったが、流石の、筋肉に覆われた大男といえどもこたえたはずだ。「……今のは効いたぞ……貴様、キュアスパークと名乗ったか? 覚えておこう。かなりの体術だ……。この俺をここまで吹き飛ばしたのは、ストームとクラウド様以外では貴様が初めてだ」

ゆつくりと立ち上がりながら、彼はそう言った。全身に土ほこりを浴びている。

『今の攻撃でも、やつつけることまではできてないか……』

パンプは顔をしかめた。まずい、今の私たちでは、これ以上の打撃を与えるのは難しい。2人のエナジーを合わせた合体の必殺技こそ、まだ切り札として残してはいるものの、それで確実に決めるためには、サンダーの体力をまだ削る必要がある。

「2分で片付けられると思っていたが、無理だったな。少し甘く見ていた。少しは本気を出さないと、いけないかもな。いい準備運動にはなったよ」

『……どうするパンプ? あのおじさんの様子を見る限り、ハツタリじやなさそうだけど。正直、かなり厳しいんじゃない?』
『弱気にならないで、スパーク。キサトエナジーが弱まるわ。私の力では、決定力にかける。最後にはスパークのパワーが必要なの』

『うん、ごめん、そうだね。まだ、負けたわけじゃないんだから!』

パンプの言葉を受けて、私は再び自らを奮い立たせた。大きく消耗したばかりだというのに、またも、身体の芯から多くの力が溢れてく

る感覚を覚えた。心臓と共鳴しているクリアハートが、さらにキサトエナジーを分泌させているのだ。

「……大した奴だ、驚いたな。奴はキサトエナジーの永久機関なのか……？またあの技を食らうとまずい。が、奴らのスピードでは、陽動がなければこの俺に指一本触れることもできないし、同じ手にはかからない。俺の勝ちほぼ決定的だな。しかしキュアスパークとやら、ここでプリキュアの力を奪ってしまうのは惜しいとすら感じる。奴をこのまま鍛えていけば、いずれ本気の俺と渡り合えるだけの戦士へと育てることもできそうなものだが……」

サンダーは誰にも聞こえない程度の音量でボソボソと呟いていた。

『次はどうやって攻撃しようか。普通にやっても、追いつけないよ』

『そうね。特に、私が陽動役つてのがバレている以上、作戦だつて相当練らない限り、なかなか通用してくれないわよ』

「やっぱり、分は悪いレティね……。特に、見るからにスパークと似たような電撃の使い手、水を使うポンプじゃ、相性も最悪レティ」

『前にスノウにやってみたみたいな、水を利用した広範囲電撃も、むしろ敵のリーチを広げるだけの恐れもあるわね。……確かにこれでは、戦力差もそうだとしても、それ以上に相性が悪すぎるわ。あのスパークナツクルで倒せていない時点で、私たちの勝機は……』

『何言ってるの、ポンプ！ついさつき自分がなんて言つたか忘れたの？やるしかない、でしょ！ここで逃げたら、この街は誰が守るの!？』

私は、溢れ出てくるキサトエナジーの効力もあり、いつになく勇氣に満ちていた。このエナジーは、正のエネルギーであるため、正の感情を強く持つていれば持つているほど、その量も相対的に増加する。

さらに加えて、このエナジーをエンジンとするプリキュアに変身しているときは、キサトエナジーが勇氣や自信、希望といった正の感情を高めるため、今のようにハマれば、先ほどサンダーが評していた『永久機関』のごとく力が湧いてくるシステムだ。

このような状態を、妖精ラエティは『キサトサイクル』と呼んでいた。

「キュアスパーク、放置しておけばさらに力を高めそうだ。当たらん

とはいえ、仮になんかの拍子にかすりでもしてしまえば、またダメージを負いそうだな。惜しいなどと感じている暇もない。これでは将来が楽しみどころか、脅威になり得る存在だ」

「キサトサイクルに入ったヒカルは、そう簡単には倒せないラティよ！それに今回は、パンプの支援もあるから、無防備になる展開も防ぎやすい。マナミ！ここはヒカルへのサポートに徹するラエ！あいつの、馬力に賭けるしかないラエ！」

『……わかったわ。そうね、私が弱気にならないでって言ったんですもの。援護は任せて！』

キュアパンプのキサトエナジーも高まってきた。これだけの強敵を相手に、怯んで力が弱まるどころか、高まらせている。これがプリキュアの伝説の戦士たる所以でもあるのか。圧倒的だったはずの戦力差を、戦いながら埋めつつあるのだ。

『じゃあ、行くよ！サンダー!!』

「こい！キュアスパーク!!」

両者が同時に地を蹴り飛び出した。

『てやあああああ!!』？

「やはり遅い！」

私の飛び蹴りは、寸前で躲かれてしまう。だが、敵が速いのはもう充分にわかってのことだった。この蹴りは、外れる前提で繰り出したのだ。本命の攻撃は――

『ハン!!』

私はすぐに身体を反転させ、背後に現れたサンダーに対し、回転蹴りをお見舞いした。

「なにい!？」

キュアパンプによる最初の攻撃も、そして私に繰り出した突き攻撃のときも、奴は背後を取るよう移動していた。目で追えない速度とはいえ、ワンパターンであるのなら、奴が次に現れる場所の大体の目星はつくものである。

と、如何にもしつかりと攻撃を当てるために策を考えていたかのような、物言いではあるが、実はそういうことではない。キサトサ

イクルに入っていたことで、本能的にそう動いていたのだろう。

なんであれ、これで、奴は再び、私の攻撃で吹き飛ばされたことになる。

『これが、ストーム?とか、クラウドって人以外に吹き飛ばされた、記念すべき2回目ね。前回から、案外早かったけど』

「なめやがって!この俺を怒らせたな!」

勝手に怒られるのも理不尽なものではある。

「貴様……面白い!この俺が6割の力で相手してやる。光栄に思え、滅多にないことだ!1つの軍事大国を攻め入ったときですら、5割程度にとどめていたのだからなあ!」

『10割の方がいいんじゃない?私のことバカにするのなら、また吹き飛ばすよ!』

「ほざけ小娘!!」

ストームは眉間に怒りマークを浮かばせると、背中に背負っていた大剣を装備した。スノウが使っていた、ダークブレードという代物だ。彼女では扱えていなかったが、これまでのパワフルな戦闘スタイルをみるに、彼には難なく扱えそうなため、警戒が必要だ。

「しかしまあ、キサトサイクルに入ったヒカルは人が変わるレティ……」

「キサトエナジーにいい意味で支配されてるラエからね。一種のドーピングみたいなものラエ」

妖精たちは、若干引いている様子ではあった。

『これ、私の援護、必要なのかしら』

パンプも引きつり笑いをしている。

「ダークブレードのデータを取るのも任務のうちだったか。こんなものなくとも奴を葬ることなど容易いが、命令ならば仕方ない。この剣の力を見せてやる!はあつ!」

スノウは両手で握っていたこのダークブレードだが、彼は片手で振り回していた。剣は彼のウィザパワーと共鳴したのか、同じように紫色のオーラを纏い始める。

『丸腰相手に武器だなんて、卑怯じゃないの!?!』

「戦いに卑怯も堂々もあるものか。勝った方が正義だ！覚悟せよ！プリキュア!!」

サンダーが、剣を構え、私に襲いかかるー

と、誰もが思っていたそのときだった。彼の剣は、私ではなくキュアポンプを襲った。

「オラァ！ダークスラッシュ!!」

オーラをまとった剣を一振りすると、そこからウィザパワーのエネルギーに満ちた、紫色のかまいたちのような斬撃が飛んだ。これが、キュアポンプに直撃する。

『キヤアッ!』

『ポンプ!』

禍々しい紫のエネルギーに覆われた彼女は、そのまま吹き飛ばされ、向かいのビルに激突した。エネルギーの塊は、ビルとの衝突と同時に消滅し、彼女も解放されたのだが、次の瞬間、彼女の変身は解除されていた。

「マナミ!!」

レティツが慌てて、彼女の元へと駆けつける。

「あの卑怯者……。無警戒だったマナミもマナミラエが、あのタイミングでヒカルではなく彼女を攻撃するなんて……」

「はっはっはっは!!いま言ったばかりだろう!勝った方が正義だ。さあ、そのクリアハートはいただくぜ」

変身解除とともに、その場へと投げ出されたクリアハートを、サンダーは難なく回収した。

『あなた!!絶対に許さない!!』

私は思わず、何も考えなしにサンダーの元へと特攻してしまった。だが、何かがおかしい、先程までのような力が出せない。

「どうした?オーラが、さっきまでの凄まじいものから格段に落ちているぞ?まあ、それもそのはず……」

彼は突っ込んできた私を表情1つ変えずに受け流した。クリアハートが1つ手に入ったので、もう用はない、とでも言いたげな表情だ。

「怒り、それは負の感情、ウィザパワーの根源だ。正のエネルギー、キサトエナジーと対をなす感情。怒れば強くなるやつも多く存在するが、貴様らプリキュアのような存在は全くの逆だ。ウィザパワーが増えるため、プリキュアとしての力は落ちる」

そういうことだったのか。

「今日のところはこの辺にしておいてやる。だが、お前の力は素晴らしい。いつかまた手合わせを願おう。次は、1分で倒す」

『ま、待って……！』

私は、急激に力が弱まった反動で身体にどつと押し寄せた疲労感に潰され、その場に片膝をついてしまったが、だが逃がしてはいけない。どうにか立ち上がらなければ、でも、動けない。

「まずいラエ、せつかくプリキュアが2人揃える状況になったのに、また奪われては……」

ラエティも青ざめている。

「待ちなさい」

次の瞬間、その場に聞き覚えのある、少女の声が響いた。

「うん？」

サンダーもおもわず、声のした方へとゆっくり振り返る。

その視界に入ったのは、安楽加清だった。

「家に帰ろうとしていたら、近くで大騒ぎがあつて、来てみたらやつぱりプリキュア絡みのものだったわね。しかし、こういうことかしら？なぜ、大田さんが変身を？」

カスミは、マナミが最初、変身に失敗していたことを知っている人物だ。そして同時に、自らも変身に失敗した経緯を持っている。

「こ、こんな時に、面倒な奴に見つかったラエ……」

ラエティは、青ざめた表情のまま、頭を抱えた。クリアハートと事件さえ揃えば、誰でもプリキュアに変身できるといふ仮説が有力視されている段階なのだ。彼女がこの力を欲する懸念はあった。

強大な「敵」は異世界からのみやってくるわけではない。今後の人間界の情勢を考えても、まだカスミに見つかってはいけない。これが引き金となり、クリアハートの争奪戦が人間、異世界人の間だけ

ではなく、人間同士の真柄でも起きてしまう可能性がある。

「ただの人間の小娘か。下がれ、貴様が出る幕ではない」

「あなた、大田さんからその、プリキュアの力が宿ったアイテムを強奪した様子ね。しばらく戦いを安全な場所から見守らせてもらっただけで、強い敵と戦うと燃えるタイプ、にも見受けられるわ」

「だからどうした？」

「私は、そこにいる光山さん、大田さんよりも、強いプリキュアになれる自信があるわ。当然よ、人間としての中身が違う。どうかしら？それを私に譲ってまない？面白い戦いになることを、約束してあげるわ」

カスミは、予想だにもしていなかったことを言い出した。

「な!?!何言ってるラエ!?!君は一度、変身に失敗したー」

「それは大田さんも同じことよ。どういう経緯があつたのかは知らないけど、彼女が大丈夫なら、私だって可能性はあるじゃない」

「そ、それはそうかもしれないラエが!」

「私は誰よりも自信があるわ。当然よ、誰よりも努力をした人間ですもの。現に、少なくともあの2人よりは結果も残しているわ。それに、あれ、持つて行かれたらマズインでしょう？私はこれから大事な生徒会選挙を迎えるの。プリキュアが1人になって、あいつを止められなくなつて、この街ごと厄介なことに巻き込まれるのなら困るのよ。前は、プリキュアは光山さん1人いればいいじゃない、とは言つたけど、あれはどうも、1人じゃ無理そうだし」

カスミは淡々とそう述べた。少なくとも、肝っ玉は誰よりも座っている。プリキュアに変身しておらず、キサトエナジの恩恵もそこまですべて受けていないのにこれであるのだから、変身さえできれば、その絶対的な努力量から現れる、ヒカルとは異なる「根拠のある自信」から、膨大なキサトエナジーを生み出し、本当に最強のプリキュアとなることだつてありえなくはないだろう。

「でも、危険を伴うことはわかっているラエね？君、怪我をすることなどをかなり懸念に持つてたけど」

「ええ。確かに、怪我までするのは困るわ。お父様に怒られてしまう。」

でも、怪我をしなければ済む話よね」

大したものである、さすがは安楽加清と言ったところか。このサンダーを相手に、どうやら無傷で戦うつもりらしい。

「一度は興味を失った特別な力。でも、手にできる可能性があるのなら、やっぱり欲しいもの。さて、どうかしら、黄色の筋肉男さん。私に、譲ってくれないかしら？」

カスミは、手のひらを彼の方へと差し出した。

「いいだろう。そこまでの自信があるのなら、面白い。ただ、変身失敗、などという興ざめなことはやめてくれよ。今はせつかく機嫌がいいからこうしてやるんだ。そんなことされたら、怒りのあまりこの都市を破壊し尽くすかもしれない」

サンダーはそう言いながら、本当にカスミへとクリアハートを投げ渡した。

宙へと放り出されたクリアハートは、しばらくはそのまま物理法則に従った運動を続けていたが、ふと、ひとりでにカスミの方へと向かい始めた。

選ばれた、ということだろうか。

「どうもありがとう。脳筋に見えて、結構話のわかる人なのね」

「礼などはいい。とつとつと、俺と戦ってみせろ」

「そう、わかったわ。合言葉は、プリキュア、エキサイティングファイバー、だったかしら」

その言葉とともに、彼女の身体は真白き光に包まれたのだった。

続く

第8話 「百人力!?最強の戦士誕生!」

第8話 「百人力!?最強の戦士誕生!」

「私は誰よりも自信があるわ。当然よ、誰よりも努力をした人間ですもの。現に、少なくともあの2人よりは結果も残しているわ。それに、あれ、持つて行かれたらマズインでしょう?私はこれから大事な生徒会選挙を迎えるの。プリキュアが1人になって、あいつを止められなくなつて、この街ごと厄介なことに巻き込まれるのなら困るのよ。前は、プリキュアは光山さん1人いればいいじゃない、とは言つたけど、あれはどうも、1人じゃ無理そうだし」

こう自信満々に発言したのは安楽加清。彼女は私のクラスメイトで幼馴染(と言つても、今は関わりが少ないのだが)で、この街、輝ヶ丘の神童と謳われる、将来は国の、世界のトップを目指している絵に描いたような優等生だ。プライドの高さゆえに、よく周囲の人間を苛立ててしまうことも珍しくはないのだが、彼女の場合、その桁外れの努力から生まれた力によるプライドの高さでもあり、それを知らぬ者はいないため、大きな反感を買っている、などということはなく、ある意味で『彼女はそういう人間だ』として処理されている。

とはいえ、そのように若干敬遠されている所謂孤高の存在、というわけではなく、この長台詞のように、口を開けばよくしゃべる人物ではある。存在が大きすぎているため誰も近寄れず、結果的には親しい友人の少ないことにはなっているが、決して嫌われていることはないのだ。

「いいだろう。そこまでの自信があるのなら、面白い。ただ、変身失敗、などという興ざめなことはやめてくれよ。今はせっかく機嫌がいいからこうしてやるんだ。そんなことされたら、怒りのあまりこの都市を破壊し尽くすかもしれんな」

キュアパンプを一撃で倒し、一度は奪ったクリアハートを、そう言いなながらカスミへと投げ渡したのは強敵、サンダーだ。2人が揃い、真価を發揮できる状態になった伝説の戦士、プリキュアを相手に単身で互角以上に、いや優位に戦い、なおもまだ、フルパワーの6割ほど

しか出していないというのだから、恐ろしい相手だ。それもハツタリではなさそうで、私の全力の必殺技を受けたはずなのにピンピンとしている。

「どうもありがとう。案外、結構話のわかる人なのね」

「礼などはいいい。とつとつと、俺と戦ってみせろ」

「そう、わかったわ。合言葉は、プリキュア、エキサイティングファイバー、だったかしら」

その言葉とともに、彼女の身体は真白き光に包まれる。

「ほう、本当に変身できるようだな。安心したぜ」

サンダーはニヤリと不敵に笑みを浮かべた。

「……これは、あの2人にも引けを取らない、いいオーラだ。いや、少なくともキュアパンプはゆうに超えている……!」

敵の強さを『オーラ』というもので、ある程度は判別できる能力のあるらしいサンダーにとっては、まだ変身が完了していない時点でも、カスミの強さが大体推測できるのだろうか、彼は少し表情を引き締め、身構える。

変身が完了し、彼女を包んでいた眩い光は徐々にその輝きを失い、光の破片となりあたりに飛散することで消え去った。

その中心に立っていたのは、尻にまでかかるほどの長い、濃い紫紺のポニーテールが特徴的な、紫色の戦士だった。フリフリな衣装であるキュアスパークと比較すると、衣装は無駄がなく動きやすそうである。かつスタイリッシュなものとなっており、より戦闘向きにも見える。

基本的な色調は紫と、黒という、どこか大人っぽい雰囲気も醸し出している。

『楽しむ心ーキュアジョイフル!』

紫の戦士の第一声はそれだった。変身者は常時クールなカスミであったが、この名乗りはいつもの彼女からは考えられないほど弾んでおり、エネルギーシユなものであった。テンションが高まっているのだろう、これもキサトエナジーの効力か。

「キュアジョイフル、それが貴様の名か。いいぞ、そのオーラ、貴様のようなのものが、まさか人間界にいたとはな……。プリキュア、どいつ

もこいつも驚かされるぜ。まあ、俺の敵ではないが」

サンダーは、またも現れた強敵を目にしてテンションの高まりが止まらないようだ。

「どんなに自信があるのか知らないが、その自信も全て力でねじ伏せてやる。貴様のようなプライドの高そうなやつを痛めつけ、絶望に満ちた表情にさせることが、どれだけの快感かわかるか？」

『さあ、興味ないから知らないわ。あと、怪我はさせないでちょうだいね、お父様に叱られるし、2度と変身もできなくなってしまうわ。まあ、この戦いではひとつの傷も負わないつもりだけど』

「大した自信だ。その自信が貴様をさらに強くするわけだ。プリキュア、全く都合が良くて羨ましい限りのシステムで動いてやがる。貴様もキサトサイクルに入れるのか？ならば厄介だな」

『そういうあなたも、今はワクワクしてるみたいだけど、それはキサトエナジーにはならないの？さつき光山さんが、怒りからウィザパワーを生み出して弱体化してしまったようだけど、あなた達はキサトエナジーを生み出すことでの弱体化とかは、ないわけ？』

ジョイフルの投げかけた疑問は当然のものではあった。

「いい質問だ、着眼点がいい。俺も詳しいことは知らんが、俺の場合は、これはキサトエナジーとは少し違う。貴様らのようなキサトエナジー溢れる輩どもを絶望させることが気持ちいいのでな。絶望させてやりたい、それだけだ。だから、そういうことにもならんのだろうよ」

『あら、それならば都合いいのはそちらの方のようね』

「ふん、俺は貴様とトークショーをするためにわざわざクリアハートを譲ったわけではないのだ。とっとと攻撃してこい。どれほどの力なのか見せてみるよ！」

『どれほどの力か、ね。応えてあげたいのは山々だわ。でも、私も今変身したばかりで、自分でも把握してないのよ。だから、組手をお願い。私には、幼少期より空手に柔道、合気道くらいは黒帯のキャリアがあるから、武術の心得はあるつもりよ』

「組手？組手といったか？この俺を、練習試合の相手にしたいと言っ

ているのか？」

ジョイフルはまたもサンダーの思いもがけないことを言い出し、彼を驚かせた。

『組手で鳴らしながら、戦いへと移していきましよう。あなたはさつき、2人を相手に軽い準備運動くらいはできているかもしれないけど、私はまだよ？不公平じゃない。戦いは公平であるべきだわ。さつきの不意をついた、大田さんへの一撃は邪道も邪道。恥ずかしくないのかしら？』

「何が公平だ。俺は軍人だ、武道家ではない！ふん、世界のトップを指していると自称する割りには、頭の中にはお花畑が広がっている様子じゃないか。女の子らしくて可愛いかもしれないが、そんな甘っちょろい考えで世を統べられると思っているのか？」

『そういう考えの人間が多いからこそ、戦わなければ、卑怯な手でも使わなければ上に立てず、そしてそのようなものが上に立つからという図式だというのが、中学生なりの現在の私の見解だけど。まあ、あなたみたいな、比喻ではなくそもそも脳みそに花でも咲いているのかしら、オツムの悪そうな方と論争しても不毛だわ』

お互い、未だに拳を交えず、煽り合いをしているだけである。

「少々、口が過ぎるぞ小娘。いいだろう、組手にも乗ってやる。組手とはいえ、手は抜かん、最中に倒してしまふかもしれないが、恨むなよ！」

そう叫ぶと、サンダーは地を蹴り、ジョイフルの方へと殴りかかりに行く。

『やっぱりあなた、話はわかる人みたいね、感謝するわ。あと、その忠告はそっくりお返しするわね。私はまだ、己のプリキュアとしての力量は理解していないけれど』

こう呟きながら、ジョイフルは戦闘体制に入った。空手家のような構えだ、隙がない。

腕を大きく振りかぶり、拳を繰り出した彼の利き腕を紙一重で、小限の動作で回避すると、空振りにより隙の生まれた瞬間を逃さず、流れるように彼の身体を受け流し、これを地面へと叩きつけた。

ドスンツという音を上げ、サンダーはその勢いのままに倒れこむ。『さつきも言ったけど武術の心得はあるの。素人である2人と同じ括りにしないでね』

「あのサンダーを投げ飛ばした!?!」

いつの間にか、活動限界から変身が解除されていた私は思わず叫んだ。

「いや、見た所ジョイフルにはキュアスパークと違ってそこまでの怪力はないレティ……。テクニクか何かを使ったレティね、その、習っていた武道の技みたいなのを……」

レティツの見解では、そういうことらしい。

『流石は妖精さんね。そうよ。今のは柔道で言う所の、返し技の技術を用いたのよ。もつとも、この人が隙だらけで助かった要素はあるけれど。練習より簡単に決まったわ』

倒れこむサンダーを冷たい視線で見下ろしながら、彼女はそう解説してくれた。

「お、おのれ!はあつ!」

サンダーはすぐに起き上がり、またもジョイフルへと飛びかかる。今度は大振りではなく、小刻みにパンチやキックを仕掛けてくるが、これも全て一切の余計な動作をせずに、紙一重でかわし続けて行く。

「ちい、スピードには自信があるようだな……だがこれでは、どうかな?」

サンダーは不敵に笑うと、攻撃の速度をさらに上げた。これには流石のジョイフルも躲すだけ、というわけにはいかないらしく、一部攻撃を両腕をたくみに扱いながら弾いて行く。だんだんと、組手らしい凶になってきた。

この攻防はいつの間にか空中での格闘へと発展し始めた。武道の経験者である彼女にとつて、地上での攻防は、超高速化しているため経験してきたものとは大きく違うとはいえ、まだ慣れている様子だったが、そこに上下の空間が加わる空中では、やはり不慣れなようであり「隙ができているぞ!キュアジョイフル!」

『……!』

少し隙の生まれた彼女の身体に大振りの攻撃を仕掛けるサンダー。だが、これもギリギリで回避し、今度は一旦距離を置くことで一度間合いをとることにしたようだ。

『身体の使い方はだいたい分かってきたわ。便利な身体ね』
今の回避動作で、どうやら空中での身のこなし方もマスターしたようだ。戦闘センスがすば抜けすぎである。

しかし、常軌を逸した大ジャンプこそできても、飛行や空中浮遊のできないスパーク、パンプと違い、ジョイフルにはどうやらその能力があるようだ。よくみると、腰に小さく透明な、キサトエナジーで生成された羽のようなものが出現している。私たちのキサトエナジーの鎧と似たような原理なのだろうか。

「調子にのるなよ！かわしてばかりでどう反撃するつもりだ!?組手なのだろう!?!」

『確かにさつきに比べれば隙がない……。最初からこのくらいできないよ、私のことを下に見ていたのかしら?まあ、いいわ』

ため息交じりに呟きながら、彼女は次の瞬間姿を消した。

「何!?!」

『確か、あなたや大田さんも、こんな感じで高速移動していたわよね。どうぞ、お望みの反撃よ』

そしてサンダーの背後に現れた彼女は、彼の背中めがけて、両手のひらをがっちり固めて作り出した拳の塊を思い切り打ち付けた。勢いよく地面へと突き飛ばされた彼は、あまりの落下速度に受け身姿勢をとることすら許されず、モロにコンクリートの道路へと激突してしまう。

彼ほどの大男がこれだけの勢いで叩きつけられたのだ。地球のコンクリートくらいでは全く受け止めきれず、そこにあったはずの道路は跡形もなく吹き飛び、窪んだ荒地へと急変していた。

「い、今のも力任せの体術に見えてそうではないラエ……。もちろん、パワーもすごいラエが、それ以上にやはりあいつは戦い方をわかっている……。サンダーの体重をうまくこと利用して、ダメージを増幅させてるラエね」

「す、すごい……これもう、私たち2人分よりも強いんじゃない……」

私はただ口をポカーンと開けることしかできなかった。

「笑わせるな、確かに、想像以上に強かったが、まだこの俺の足元にすら及ばぬ」

私の眩きをこう否定したのは、ゆっくりと起き上がったサンダーだった。身体に土ほこりこそ多量に付着しているが、全くどうともなさそうで、ピンピンとしている。

『あら、結構効いたかと思っていたけど』

「実際、少しやばかった。地面に激突する前に、ウイザパワーを増幅させていなければマズかった。プリキュアめ、面白いじゃないか。今まで戦ってきたどんな敵国のどんな戦士よりも圧倒的に強い。心底驚いているぜ」

語尾を荒げながら、彼は手のひらの上に雷を帯びた黄色のエネルギー弾を作り出し、これをジョイフルへと投げつける。

『お褒めにあずかりまして』

これを明るく紫色をしたキサトエナジーを帯び、パープルに光るブレードのように変化させた利き腕を使って後方へと弾き飛ばすと、彼女はそのまま地面へと降り立ち、彼を正面から睨みつける。

『もう相手はいいわ。本気で戦いましょう』

「いいだろう……とやりたいところだが、今日はやめだ」

サンダーはそう吐き捨てると、高めていたウイザパワーを急速に鎮めたのだろうか、途端に先程までの、禍々しいまでの威圧感のようなものが消え去った。

『……どういうこと？』

「この俺としたことが、ダサイ言い訳にはなるが……もう少し準備がいるようだ。本気が出せぬ。身体がなまったままだ。とはいえ、それでも人間界ごとき楽勝だとは思っていたのだが、3人もの伝説の戦士との連戦は、しばらくぶりに動かす身体には堪える。はつきり言う、貴様らを舐めていた」

『降参ってこと？それはこっちが興ざめつてもよ。……それで、準備期間を私が与えるだけでも？確かに、本気は出せていないよね。そ

の体格や秘めてるエネルギーには見合っていない攻撃や動きだったわ。でも、本気を出させたら驚異的なことに変わりはないですもの。ならば今ここで、確実に倒させていただくわ」

ジョイフルはそう言いながら再び身構え、キサトエナジーを高め始めた。いまにも、飛びかからんとしている。

「勇ましいな。だが、できるかな？俺の見立てではー」

しかし、ジョイフルからもまた、急激に、先ほどまでのキサトエナジーを感じられなくなった。それどころが、突然変身が解除されてしまう。

「あらっ？」

「貴様もエネルギー切れだろう、とちようと言おうとしていたところだったが、当たっていたようだ」

「……なぜかしら。私はまだ、変身してそこまで時間も経過していないはずだけど」

「そのクリアハートを、先ほどまでキュアパンプも使用していたから、だろう。変身者を交代するだけで、クリアハートのエネルギーがフル回復するのなら、危なくなったらローテーション、という手法をとれば半永久機関となりうる。そこまで都合がいいはずはないだろう」

「……それがわかっていて、組手に応じたというのなら、あなた、見かけによらず結構な頭脳派じゃない？」

「どうだかな。まあ、でも楽しかったぞ。次はこうはいかぬ。俺も出し惜しみなく戦えるだろう。次会うときに貴様らの命日だ。残りの人生を、せいぜい楽しんでおけ。ああそうだ、いい戦いを見せてくれた褒美だ。街と人間の記憶は修復しておいてやる」

それだけ言い残すと、彼はダークブレードを背に背負い、その場から姿を消した。

彼の最後のセリフ通り、みるみるうちに街から戦いの傷跡が消え、元の姿へと戻っていく。

「た、助かったレティか……？」

「どうでしょうね。あの男、正直、今の私や、光山さん、大田さんと2人がかりでも精々刺し違えるので精一杯よ。私の失態だわ。彼が私

たちを舐めていて、本気を出していなかったところで、仕留めておくべきだったわね」

カスミはため息交じりにそういうと、クリアハートをレティツへと差し出した。

「これ、あなたと大田さんのでしょ。返すわ」

「か、返すって……また力を貸してくれるレティツよね?!」

レティツは不安げにそう訊ねる。月野クレハのように、一度きりで放棄されても困るのだ。特に、この妖精のバディはコロコロ変わりすぎである。

「ええ。私は常に頂点にあるべき存在なの。あの男に負けっぱなしは許されないし、あの男よりも強いのだって知っているって話でしょう?全員にこの私が1番だと、そう思い知らせるまでは、力を貸すわ。それに、戦いにも協力しましょう。プリキュアは現時点で、月野さんを含めて4タイプ。戦場にいけるのは2人まででも、様々な組み合わせや戦術が取れるわ。作戦の立案なら、私に任せることね」

「やけに協力的ラエね。それに、あの金持ちはもう変身はしないラエよ」

ラエティは嫌味を含んだような声色でそう言った。まだ彼女のことを信頼していない様子である。

「協力的なのは当たり前でしょう。生徒会選挙の邪魔をされるのも困るし、次期生徒会長筆頭候補として、そもそも敵が出現するたびに本校の生徒が授業中にも関わらず戦闘に出なければならぬ、という状況は見過ごせなくてよ。早いうちに処理をして、平和かつ円滑な学校運営をしなくてはならないの。十分な動機でしょう?月野さんだつて、私がプリキュアであることを明かせば、すぐにまた気が変わるわ。……もういいかしら?この後も忙しいし、私はこの辺で」

そういうと、彼女はこちらに背を向け、自宅の方へとゆっくり歩き始めた。

「……行っちゃった……」

「まあ、食えないやつラエが、たった1人で、それもエネルギー残量の少ないクリアハートでサンダーと互角に渡り合った戦士の加入は、素

直に喜ばしいラエね。でも、奴だつてまだ本気を出していなかった。このままじゃ、絶対に勝てないラエ」

ラエティの表情は、いつになく険しいものであった。恐ろしい敵だ、あれでも十二分に驚異的な存在だったのだ、あれでまだフルパワーでないというのだから、正直自信を無くしかけてはいる。自信を保たなければキサトエナジーが減少し、出せる力も出せなくなるのだが、あれを見せられてまだ戦意もやる気もある、というほど、私もそこまでお気楽ではないのだ。

「このままじゃ勝てない、のはわかったけど、でもどうするの……？」
「……強くなるしかないラエ。もちろん、君たちが心も体も鍛えることで、プリキュアとして成長していくことも必要ラエが、やはり、一番の近道は――」

「近道は？」

「大いなる力を、光の古代兵器を手に入れるラエ」

「光の古代兵器……でも、どう探せばいいんだろう……」

ひとまず、周囲の人々も徐々に目を覚まし始めているのだ。ここから離れなくては。私は、まだ気を失っているマナミを背負うと、妖精たちとともに自宅を目指した。

—————

漆黒の超高層ビルが立ち並んではいるものの、それ以外は特に何も無いという殺風景な都市。

ここが帝国、カバークラウダーの首都『ネブリーナ』だ。

いつもは上空を分厚い雲で覆われ、激しい突風や雷雨に見舞われる、年中嵐の吹きつけるような街なのだが、今日は天気は曇っているだけでおとなしく、代わりに濃ゆい霧がかかっている。

それ以外は特に何も無い、とは表現したが、このネブリーナには帝国の頭首、クラウドの住まう、西洋風の巨大な城が構えてある。これは街の最奥部に建設されており、どの建物よりも高さがあるため、街の入り口に立っても、城はその立ち並ぶビルらの奥に、このように霧

がかかっている日でも、うつすらとは確認できる。

日本の東京の中心部と比較しても遜色ないほどの発展具合であり、カバークラウダーの国力の高さを伺える都市となっている。軍事大国らしく、ビルのほとんどは軍の関連施設である。

「まったく！奴は何をしているのだ!!」

今日は雷鳴の代わりに、軍幹部のストームの怒声が響き渡った、そんな城の内部である。

「まあまあ、しかし面白いではありませんか。あのサンダー、強面ですが、女の子には優しい、という意外な一面があつた、そういうことですかね」

言っていることだけなら呑気なものだが、そう発したクラウドの声色からは、かなりの苛立ちを感じ取れる。

それもそのはず。奪えたはずのクリアハートをあろうことか自ら返還し、拳句新たな、それも強力な戦士を生み出し、戦うことを途中で放棄し、街をもとに戻して行方をくらめます。

終始、この城からこの戦いの様子を見ていた2人が苛立つのも当然のことではある。

「あのキュアジョイフルというプリキュア、かなりのやり手に見えるぞ。レインやスノウでは歯が立たないのではないか!？」

「落ち着いてください、ストーム。それは2人を過小評価しすぎです。やりようはありますし……色々面白い存在になるでしょう。まあ、それになんだかんだでエンシャントウエポンの威力は見せてくれました。見たでしょう?キュアパンプを、一撃で変身解除に持ち込みました。すごい代物ですね」

「だが、この失態は、いや、失態なんて話じゃない。命令違反、頭首クラウドへの反逆行為だ。早急にこの城に呼び戻し、死刑を言い渡し、即日執行すべきである!」

「だから落ち着いてくださいと。どうしてあなたはそう、血の気が盛んなのです?」

クラウドはため息をつきながらそう言った。彼の方は、苛立ちながらもまだ冷静の様子だ。

「あれだけの力の持ち主。フルパワーで戦えば、単純な火力だけならレインよりも上。ここで殺すのは、戦力ダウンも甚だしい」

「だが、命令を聞かぬのならば意味がなからう！それだけの力をこちらに向けてくる可能性だって、これでわからなくなったのだぞー！」

「一理ありますが、まだ彼は使います。万一の時は、最悪私がこの手にかけます。もともとその予定だったものを、今回は特例として再び前線に立たせているのです、いくら頭が弱くとも、そのくらいはわかっているはず。私への敬意は最低限あるでしょう。ダークブレードの試運転もしますし、厳密には命令違反とはできません」

「……甘くないか？」

命令を出したのは他でもない、このクラウドだ。ストームは、自身の憤り具合と、頭首の落ち着きようなギャップに少々戸惑っている様子でもある。

「私はこれでも怒ってます。が、この責任は自分で仕事を遂げることでも果たしてもらいますよ。この場合、処刑するのが最適解でないという話です。仮にこれ以上、あなたの目に余ることをしでかせば、好きに、あなたの手で処するとしても止めはしませんよ」

「……俺はクラウドの意思に従うまでだ。そういうことならば、もう少しだけ様子を見るとするか」

「流石はストーム、物分りが良くて助かります。それに、サンダーの脅威を思い知らされたプリキュア側が、これでようやく光のエンシヤントウエポン探しに乗り出してくれることにもなるでしょう。それも大事なことです。結果的に、長い目でみれば悪いことばかりではないのですよ」

「全てはクラウド、お前の手の平の上ということかな？」

「どうでしょうね。……ストーム、少しだけ仕事振ってもいいですか？今はあなたにしかお願いできない」

クラウドは一度間をとると、そのように切り出した。その手の中には、小さな植物の種のようなものが握られている。

「断る道理はない。それは、カオスシードか？レインかスノウに植え付けるのか？レインには以前渡していたな……ならばスノウか。あ

の2人にも、もう少し仕事をしてもらう必要はあるからな」

「いえ、その推測は当たっていません。これから私の指す、人間に使用してください」

「……人間か。それは予想外だが、わかった。従おう。どいつだ？」

クラウドはストームの耳に顔を近づけると、指示を耳打ちで伝えたようだ。

「……どうということだ？何を企んでいる？」

「後からのお楽しみですよ。ですが、まだです。もう少し様子を見て、私の指示するタイミングでお願いします。これは、大きな武器になりますよ。先を想像するだけで笑みがこぼれます」

クラウドはいつになく、笑みを浮かべている。彼にとって都合のい何かのための、布石となり得るということだろう。

「承知。ではそのようにしよう。だが、その人間には俺も興味がある。しばらく、俺もそいつの様子を見させてもらおう」

「構いません。いずれは、あなた直属の支配下に置くことまで構想しています。お好きにどうぞ」

何やら、彼らによる、新たな怪しげな企みが始動しようとしているらしい。次から次へと、実に様々なことを仕掛けてくる、本当に厄介な連中である。

—————

翌日のことだった。生徒会選挙を一ヶ月後に控えた、私たちの通う学校、輝ヶ丘大学附属中学校では、朝から次期生徒会長候補等による選挙活動が始まっていた。流石に、まだ演説をするような時期ではないので、そのような活動をしている立候補者はいなかったが、昨日まではなかったはずの、いつの間にかこれほどの数を準備したのだろうか。やたら目を惹くポスターを校内中に貼り付けていたのが、他でもない月野クレハとその一味である。

「月野クレハ様をよろしくお願ひしましす！」

月野『様』と呼びながら、ビラのようなものを配っているのは、彼

女の取り巻きたちだ。彼女の財力や権力に惹かれて支配下に回った、おおよそ、数ヶ月前まで小学生だったとは思えないほどの、なんともまた、可愛げのない人たちだが、こういうときにものを言うのは数の力。この期間に限れば、強力な存在となり得るだろう。

「やつぱり、月野さんと安楽さんは立候補するんだね〜」

安楽加清にはまだ目立った活動はないが、立候補していることは、昨日の口ぶりからも間違いだろう。それに、この2人であれば本当に異例の1年生会長になってもおかしくないだけの能力や人望がある。もつとも、片方にはあまり就任して欲しくはないのだが―

「ヒカルちゃん的には、やつぱり安楽さんがいいの?」

それを見透かされたのだろうか、急にマナミが話しかけてきた。

「いや、どうだろう。安楽さんがどんな学校にしたいかまでは、まだわからないし……」

「間違いなく、月野さんよりはいいと思いきけどね……」

「決めつけは良くないよ。まあ、私もそんな気はしてるけど……。それに、立候補者は2人だけじゃなくて、谷繁さんっていう先輩もいるんだから」

「なんならひかるちゃん立候補してみるとか?部活じゃなくて、生徒会って手もありよね?」

マナミがニヤニヤと笑い、私の顔を覗き込むようにしながらそう言った。

「なっ!?す、するわけないでしょ!」

「冗談冗談。そんなムキにならないですよ。でも、面白そうとは思わない?」

「それは、面白そうというか……。ただ、自分から進んで学校をよくしていくこうと思えることがすごいというか。私、思ったことないし。歳もそんなに変わらないのに、すごいなあ、とは」

「ヒカルちゃんらしくらぬ真面目な回答ね……」

「私をなんだと思ってるの!」

「天然のアホ」

「……」

真顔でそう返されると、なんとも言えない気持ちになるものである。

「あっ！アホって言ったのに怒らなかつたね！」

「マナミちゃんから言われるのはもう慣れちゃったというか、いちいち怒っていると疲れるというか……」

「でもそれだとヒカルちゃんらしくないわね。もつと、顔を真っ赤にしてアホじゃないしくって言うところが可愛いのに。ていうか、今日ちよつと暗くない？具合悪いの？」

「い、いや、暗いというか、心配なことがあるというか。あのサンダーって人に、勝てるのになつていうか……。古代兵器と言われても、どこにあるのか、どんなものなのかもわからないし……」

私は正直に今の気持ちを述べた。気が沈んでるといふよりは、単にこれから先への不安が大きいのである。もしも、またあの男のように勝てそうにない相手がまた続々と攻め込んできたらどうなるのだろうか。私は自分の家族や友達、この街引いてはこの世界を守るのだろうか。そのような不安が大きい。

「まあ確かに。私も気がついたらヒカルちゃんのうちで目を覚ましてたけど、記憶が正しければ一撃でノックアウトされた身。キサトサイクルに入っただけにか一泡吹かせたヒカルちゃん、渡り合つたと噂の安楽さんと違って、私は何もできていなかったし……」

「な、何もできなかったなんてそんな！マナミちゃんの技がなければ、私のパンチも当たらなかつたわけだし！私たちは2人で1人なんだよ!?!」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、私は何もできなかったのは事実よ。でも心配はご無用。私はしょぼくれているわけじゃないわ。次こそ、私もあいつに一矢報いる！なんなら、私の手で倒すわ。プリキュアの中で、ぶつちやけ今一番あいつに舐められているのはこの私よ。雪辱は自分の手で果たしてみせるわ！」

「いい心意気レティ！プリキュアとして、とても大事なことレティね！」

マナミのポケットから、レティツがひよこつと顔を出した。

「ヒカル！君もラエよ！君の1番の取り柄は前向きな心ラエ！サンダーに、キサトエナジの永久機関とまで言わせた君が、そんな不安を抱えていてはダメラエ！古代兵器なら任せるラエ！僕たちはある程度の知識を持つてる！君たちが学校に行ってる間、僕たちで探すこともできるラエ！」

今度は私のポケットの中からラエティが顔を出し、そう言った。

「それは危険よ」

その会話に後ろから割り込んできたのはカスミだった。

「その古代兵器ってのは、敵も探しているんでしよう？なら、万一妖精さんだけの時に敵に遭遇する可能性を残すのは危険。なおかつ、私が敵の参謀ならば、光の古代兵器の回収はある程度プリキュアに任せるわ。どのみち起動できるのはプリキュアでしょ？それに、クリアハートのように、プリキュアに導かれるように出現する可能性だってある」

カスミはカバンからノートを取り出し、簡単な図解を鉛筆で作成しながら話を続けて行く。

「ならば、いつ出現しプリキュアに導かれてもいいよう、出現のタイミングでの強奪の機会を虎視眈々と伺うために、街を襲う戦闘員とは別に人員を用いて、プリキュアの行動を監視下に置こうとするはず。私ならそうするわ。でも、プリキュアは現在時点で、月野さんを含めなくとも3人。3人のうち2人しか同時には変身できない。そのうちの2人誰かにヤマを張って人間界を監視できるほどの人材余裕はないはず。なら、手取り早いのは妖精の監視。妖精なら、あなたたち二匹しかいないのは確定事項だし、大した反撃も受けない。格好の的よ。万一プリキュアの手には、強奪できないまま古代兵器が渡ったとしても、妖精を人質に交換条件として手に入れるという算段もあるし、この方がむしろ簡単。長くなっただけど、要するにあなたたちは迂闊に動かない方がいい。動くときは、クリアハートの持ち主と動き、守ってもらおうことね。もっとも、それはつまり一緒に行動している人間が現在プリキュアに変身できる者、ということにもなるから注意は必要だけでも」

かなり説得力のある仮説のようなものだった。確かに言われてみればその通りで、これでは妖精だけでの古代兵器捜索は無謀だと、頭の弱い私でもすぐに理解できた。

「その合理的な考え方、クラウドのこれまでの異世界での侵略や外交政策のやり方にそっくりラエ。やっぱり、人の上に立つもの、またはそのように英才教育を受けてきた人間は考え方も似るものラエかね。だからこそ説得力はある。確かに、クラウドならやりかねんラエ」

「しかしわからないことはあるわ。敵の今の動きの動機よ。古代兵器が欲しいのならば、まだプリキュアを倒せはしないはず。なのに、サンダーのような、今の私たちでは絶対に勝てない敵をいきなり導入してきている……。クリアハートを奪ったところで、プリキュアを倒したところで、その先の野望が叶わないんじゃないの？」

カスミにもわからないことがあるようで、人間なので当たり前なことではあるのだが、私はこの人にもわからないこともあるのだなあ、と少しそのような気持ちも抱いた。

「サンダーに関しては、おそらくスノウでは試せなかったダークブレードの力を見たかっただけレティね。久々の実戦で体が鈍ることは想定済み、あののように、なあなあで戦いが終わる、そこまでは読めていたと思うレティ。まあ、それでも流石に、せっかく奪ったクリアハートを返上して余計な脅威をうむ、までは想定外だったと思うレティが……」

レティツが、今回のサンダーの来襲についてそのような見解を述べてくれた。

「目的、レティが、そもそもクラウドは、クリア王国に秘密裏に保管されていたクリアハートを奪おうと侵攻してきたレティ。結果的にプリキュアが人間界に出現してしまったことで、今は光の古代兵器はプリキュアに任せる、そういった方針も取れるようにはなったレティが、恐らくはー」

「自分たちの手で、自らの支配下における、カバークラウダーの戦力としてのプリキュアを発現させよう、そのように企んでいた可能性があると踏んでるラエ」

妖精たちの見解は、耳を疑うようなものだった。

「プリキュアを、あの人たちが？」

私は思わず、少し大きな声で言ってしまった。教室中の視線が一度こちらに向けられたが、慌ててなんでもないとごまかし、再びヒソヒソ話を続けて行く。

「それなら説明がつくラエ。光と闇の伝説を知っているクラウドは、敵対関係にあるプリキュアをも自らの戦力として懐柔することを企んでいたに違いない。クラウドらしい、非常に合理的な考え方ラエ」
「なるほど、クラウドって人が自ら選んだ人間にクリアハートを与え、そして光の古代兵器を回収させ、用が済んだらそこでおさらば。脅威となりうる敵はいなくなるし、計画も支障なく進むはずだった、そういうわけね」

カスミは納得している様子だ。

「あくまで私たちの推測レティがね。おおよそ、間違いではないと思うレティ」

「僕らがあの時クリアハートを持ち人間界に逃走していなかったら、おそらくクリアハートはクリア王国もろとも奴に奪われ、秘密を知る我が王から色々聞き出して、そのあと自ら、古代兵器回収要員としてプリキュアを蘇らせる、そんな手はずだったに違いないラエ」

ラエティは、ほぼ確信めいたものを抱いているようだ。違いないとまで言い切っている。

「でもプリキュアはキサトエナジールの戦士でしょ？ウィザパワーとついをなすキサトエナジールの戦士。いくら彼が選考し、洗脳のようなものを施したとしても、限界はあるでしょう？そのクラウド支配下のプリキュアが反旗を翻さない保証はどこにもないんじゃない？」

マナミは、それでもまだ納得しかねている様子だ。

「最もラエ。けどクラウドはカオスロッドを持っている。抜け道はあったかもしれないラエ」

「カオスロッドって？」

今度は私が訊ねる。

「混沌の杖。キサトエナジールとウィザパワー、両エネルギーを同時に

引き出し扱える伝説の秘宝とされているラエが、詳しいことは聞かされてないラエ。その杖の先端についている水晶から、100年に一度、一粒の種が生まれるとされていて、その種を植えられた者は、混沌の存在となり、両エネルギーを使いこなし、また『両者の反比例である関係性の影響を受けない存在』となる。その力だけならば、神の領域に近づけるだとか。そう国では教えられているラエ」

「……例えば、サンダーとの戦いで、光山さんは最後、怒りによるウィザパワーが発現し、キサトエナジーの効力が弱まり弱体化してしまつた。でも、混沌の存在、というものになれば、ウィザパワー増幅によるキサトエナジーの減少という、反比例な関係を受けないから弱体化せず、むしろ自身のエネルギーとして引き出せるから、あの場面で更なるパワーアップができた、とか？」

カスミが訊ねる。

「さすがに飲み込み早いラエね。そんな感じらしいラエ。その混沌の種というのも、伝説上の存在にすぎないラエが、カオスロッドが存在しているのならば、あつても不思議じゃないラエ。それに、仮に存在し、伝説通りに100年に一度種が生まれていて、その種をクラウドが全てを持っていくとしたらー」

「選考したプリキユア候補生に植え付けることで、その人たちを混沌の存在とし、ウィザパワーでも戦えるプリキユアにできる。どちらの力も引き出せるとはいえ、クラウドのことだから最初から負の感情の強い人間に目をつける。混沌の存在、神の領域に近づくとは言っていないけど、実際は『影響を受けない』の点に着目し、ウィザパワーのみでも動ける戦士が欲しかつただけでしょうね。そしてキサトエナジーも最低限扱えれば、古代兵器も探し出せる。反旗をひるがえす恐れもない、まさに都合の良いすぎる存在」

「ただ、計画通りに事が運んだかは微妙ラエ。君たちの変身の瞬間は見てきたラエが、やはり強い正の感情がなければ変身はできない可能性が高い。いかに混沌の存在となり、両エネルギーを同一のエネルギーとして扱える神の領域になつたとしても、クリアハートがキサトエナジーにしか反応しないのなら、計画は空振りに終わるラエから

ね」

「な、なるほどね〜」

私は、この何を言っているのかさっぱりわかりにくい会話に対し、正直内容のほとんどを理解できてはいなかったのだが、とりあえずわかってる風な相槌を打っておくことにした。

「つまり、混沌の存在っていうのは、本来反比例の関係にあるキサトエナジーとウィザパワーを足し算して力を増幅させることができるから、その圧倒的な力が神様レベルになってしまいうってことね。で、そいつらはウィザパワーが使えるから、あいつらの支配下プリキユアを誕生させるのも理屈上では可能で、それをクラウドは狙っていた。けど今は結果的にプリキユアは私たち。そして私たちは当然従う気はないし、むしろ打倒クラウドを狙っている。それじゃ困るから、私たちからクリアハートを奪い、また自らの支配下におけるプリキユアを誕生させてみようと思っただのね」

マナミも納得した様子だ。これで、カスミとマナミは、敵が今何を目論んで行動しているのか、というカスミの投げかけた疑問に対する答えを得たようだ。

「……反比例って何?」

私はこっそりと、マナミに耳打ちしながら訊ねる。

「塾で習ったんだけど、片方が二倍になるともう片方は半分になるっていう関係のことです」

「反比例の話は今度でいいわ。授業で習ってちょうだい。……まあ、そういうことならば、すでにクラウドは自らにタネを植え付けて、混沌の存在になっている可能性、高いんじゃないの?」

カスミはそう推測する。

「かもしれないラエ。あれだけの力があり、伝説の戦士たるプリキユアまでをも支配下におけるだけの自信があるのならば、もう奴は神の領域の力を手に入れていたとしか……」

「仮にもう神に近い存在になっているのならば、これ以上何を求める、というのかしらね?そもそも、古代兵器を全て揃えたらどうなるの?」

「わからんラエ……。そればかりは謎だらけラエ。大いなる力が手に入る、としか伝説には明記されていないラエね。もしかしたら、神の領域に近づくに終わらず、奴自身が神となり、異世界もこの人間界も、ひいては全宇宙を支配しようだとか、そんなところかもしれないラエ」
「……私たち、そんなにすごい人を相手にしようとしているの……?」

神だの伝説だの宇宙を支配だのと、先ほどから話のスケールが大きすぎて、私の脳では処理が追いつかない。

「聞き捨てならないわね。神なんて非現実的な存在だし、人の上に立つのは同じく人よ。なんにせよ、クラウドって人にこの世界の長の座は渡さないわ。頂点に立つのは、私1人で十分よ」

こんな話を聞かされてもなお、相変わらずあくまでその姿勢には変化のないカスミもまた、スケールの大きな人間である。先ほどからもこのにわかには理解しがたい会話に普通についていけないし、本当に中学1年生なのかと疑ってしまう。1人だけ、世界を救う、みんなを守る、クリア王国を救う、だのという私たちの戦闘動機からはズレていて、あくまで自分が上に立つため、という頑なな自己中心的意思は尊敬の域に達している。これだけ強い芯があるから、プリキュアとしても、強いのもかもしれない。

「まあ、話はややこしくなっちゃったラエが、そう簡単にクラウドの思い通りにさせるわけにはいかないラエ。ここは奴の望み通り、古代兵器を集めてやるラエ!そしてその力を持ってして、必ずクラウドを倒し、野望を阻止してやるラエよ!」

「そだね!なんかよくわからないのが本音だけど、とにかく、私はみんなを守るために戦うし!負けたくもないし!」

そうだ、とりあえずのところ、戦って勝ち続けるしかないのである。「ヒカルちゃんだけだと危なっかしいし、私もヒカルちゃんを守るために戦わないとね!」

マナミも気合十分の様子だ。

「まあ、世界の頂点に立つ前に、まずは生徒会長、この学校の頂点に立たなければ。選挙の邪魔させるわけにはいかないし、サンダーは私が倒すわ。譲らないわよ」

カスミも、珍しくニヤリと笑った。

「混沌だかウイザパワーだか知らないけど、みーんながキサトエナジーを持った世界なら、あいつらも大きな顔できないし、楽しくて平和な世界になると思うんだ！みんながキサトエナジーを生み出せる、正の感情に満ちた、ワクワクに溢れる世界にしよう！」

「それでワクワクプリキュアってわけね。やっと理解したわ。なんでそんなネーミングなのだろうか……」

マナミはようやく納得したのか、両手をぽんつと叩いて感心したようにそう言った。

「い、いや、これは今思いついたやつで、名乗りをした時には無意識のうちと言っていたというか……」

「まあなんでもいいレティ。そんな感じでチーム名もあつたほうがそれっぽくなるレティよ！」

「なら、決定だね！ワクワクプリキュア、これからも頑張るぞ！」

「まあ、私はあくまでも生徒会メインに動くから、そのところは大目に見てよね」

私たちは周囲の生徒たちに気づかれないうちに3人で手を合わせると、小さく笑い合い、これからの共闘を誓い合うのだった。

次回、新章突入

第2章 摩訶不思議！古代兵器とカオスシード！ 第9話 「レイン再び！動き始めた古代兵器!!」

第9話 「レイン再び！動き始めた古代兵器!!」

「光山さん、そういうことだから、これ、お願いできるかしら？」

教室で私の席の前に現れ、無表情で書類を突きつけてきたのはカスミだった。

3人で共闘を誓い合うようなことをしてから3日後のことである。

渡されたA4のプリントには、1番上に小さく『生徒会選挙立候補者応援演説原稿』の文字が入っており、残りの部分は白紙だ。ホツチキスで、合計3枚がまとめられているが―

「いやいやいやいや、どういうこと?!?これ私がやるの!?!」
「そうよ」

カスミは表情を変えず、短く返答する。

「さつきも言ったじゃない。選挙当日には、立候補者である私と、私の応援者による演説が必要なよ。だから、そういうことだからお願いできるかしら?と」

「それはわかったけど、私には任せないほうがいいんじゃない?……」

この街、輝ヶ丘の神童と謳われ、将来を約束されているような存在、安楽加清の応援演説を、マナミ曰く天然のアホとのこと、この私光山ヒカルが務めるなど、荷が重すぎる気はするが。

「大丈夫よ、当たり障りのないことを2分くらい喋ってくればそれで。応援者の演説なんて、カラオケの採点の加点要素みたいなものよ。大した影響はないわ」

例えはよくわからないが、カスミもカラオケという、普通の子供中学生的遊びの経験があるということだけは伝わった。にしても、依頼を持ち出した側の吐くセリフとしては不適切な表現でもあるが。

「でもなんで私?もつと賢そうな人に頼んだほうが説得力も出るよ!いくらそこまでの加点じゃないとはいっても、それが0か10かでも大事なんじゃない?」

「それはぐもつともね。……あなた、失礼だけど、頭が良くなさそうに見えるても、たまに鋭いところとかはあるわよね。まあ、そういうところも幼い頃から知ってはいるから。根がしっかりしている、というか、ただの天然ではない、というか」

殺し文句だろうか。カスミの口から、私への褒め言葉が出てくるこの光景が珍しすぎて、私は思わずポカーンと、間抜けにも口を開けてしまった。

「まあ、あとはその……これはあんまり、プライド的には言いたくないことだけど……」

カスミが髪の毛先を指でくると弄りながら、少し言いくそうに語尾を弱めた。私は、これ以上の褒め言葉が出てくるのか、と身を乗り出し、ワクワクしながら次の言葉を待ったが――

「私、単純に友達いないのよね。昔からの知り合いで、今もなんだかんだ、諸事情でまた繋がりができてしまったの、光山さんくらいしかないのよ」

なるほど。

「あ、あー……そういうことね……」

カスミとは幼馴染ではある。幼稚園の頃はよく一緒に遊んでいた覚えがあるが、それも最初の2年間の話だ。徐々に彼女は様々な習い事や両親による教育を受け始めることで私のような者とは接点がなくなり始めた。

輝ヶ丘は、ある意味で閉鎖的な街だ。一部全国チェーンの進学塾がある以外は、私立輝ヶ丘大学の学校法人管轄下の教育機関しかない。故に、小学校6年間でもたまに同じクラスになる、などのことはあつたが、やはり接点は少なかった。

昔は互いにヒカルさん、カスミちゃんと下の名で呼び合っていたのに、今では苗字にさん付けである。だいぶ距離ができてしまった。もつとも、プリキュアという他にはない、特殊な共通点ができってしまったがために、ここ近日で再び接点が生まれ、急速的に距離が縮まってはいるが。

「まあ……嫌ってわけじゃなくて、単になんで私なんだろうな」と

思っただけだし！やろうかな！応援演説！」

「それは助かるわ。光山さんに借りを作ってしまったわね」

「そんな、借りとか貸しとか関係ないよ！……あとさ、せっかくだし、苗字呼びやめない？なんか余所余所しいし、昔みたいにさー」

「私の呼び方は好きにしていけど、私はあなたを光山さんとは呼ばないわよ」

私の提案は秒で突き返されてしまった。

「そんなあ……」

「あなたは大切なクラスメイトだし、プリキュアとしては先輩よ。でも、あまり人と友達などという、そういう関係になりたくないのよ。知り合いは生きて行く上で必要だから多く欲しいし、人脈が広ければ広いほうが有利なのは事実。だからあなたみたいなのを増やしたいけど。でも私ははずれ国の、ひいては世界のトップに立たなければならぬ存在。トップは下を平等に扱わないといけないの。今の中から、人間関係の中で慣れていかないよ」

これも、そう教育されてきたのか、それとも自身で考えたやり方なのか。わからないが、そう言われては、私から言えることは何も無い。

「そっか……わかった！変なこと言っでごめんね」

「いえ、あなたは何も悪くなくてよ。……じゃあ、このプリント3枚分の原稿を、来週までに生徒会室か、私に直接手渡しでもいいわ。提出してちょうだい」

「おっけーおっけー、来週までに3枚……来週!?3枚!?!」

「では、よろしく頼んだわよ」

顔が青ざめていく私をよそに、彼女は自らの席へと戻って行った。

—————

ここは異世界、今や強大な影響力を持つ大国となったカバークラウダーの植民地となった各国をめぐる、エンシヤントウエポンの調査と捜索に向かっていたのはレイン将軍だった。

プリキュアに、キュアスパークに2連敗して以降、将軍という肩書

きでありながら前線から離れ、自らが率いた軍により強奪した土地を、自らの目と足で探し物をする、という屈辱的な仕事を回されてはいたが、しかしそれも自らの失態が招いたこと。それをすっかり理解していたレインは腐らず、任務をこなしていたようだ。

「ついに見つけたぜ!!闇のエンシヤントウエポン! 『ダークレイニードル』! 俺様にもってこいの代物だぜえ……」

そんな彼だったが、今日は喜びの声をあげていた。探していたものが見つかったようだ。何やら、指輪のようなアイテムである。これが、『兵器』なのだろうか。

レインはこれを利き腕である右の親指に装着すると、その能力を試してみることにした。

その指を狙った場所、遠くにあつた小さな岩に向け、指先に力を込める。

「はっ!!」

すると、指輪の先に黒いエネルギーの塊が生まれ、そこからガトリング砲のように、黒い小さな針のようなエネルギー弾が、まるで雨の如く発射され、次々に岩に突き刺さった。岩は大きな爆発を起こすことはなかったが、無数の小さな弾丸を喰らい、ものの数秒で粉々になつてしまう。

「十分だな。所有者のウィザパワーを、弾丸の雨として降らせる指輪。これでプリキュアを倒し、前線に堂々と復帰してやるぜえ……」

レインは空を見上げ、遠くを睥んだ。

「スノウからはサンダーが人間界に飛んだとこのことを聞いたが、あいつは邪道。軍人の片隅にも置けぬ。確かに強いが、軍のトップはこの俺様、レイン將軍だ。秘密兵器として色々な場所に配属されていたが、問題ばかり起こしやがって。挙句クラウド様から直々に謹慎の命を受けるとは、殺されなかっただけありがたいやがれ」

レインも、サンダーについてはスノウと同じく、よくは思っていないようだ。

「奴の非道なやり方のせいで、我が軍は『極悪』『残虐』などの汚名がついてしまつてるんだ! 我らがカバークラウダー軍はあくまで、この

異世界を！クラウド様の素晴らしいご指導のもとで統一させようと努めているだけなのに、だ！クラウド様はこの世界に秩序と道を示すいわば現人神のような存在であられる！そのクラウド様を侵略者かのように扱う連中がいるのも、大体はサンダーの無関係な非戦闘員への繰り返しされる大量殺戮のせいだ！」

今この場には彼しかいなく、誰も聞いてはいないのだが、このように声を荒げた。相当嫌っているのだろう。

「……奴はクラウド様に不幸をもたらす存在。プリキュアを倒した後には、俺が始末してやる」

レインはニヤリと笑うと、黒いゲートを開き、人間界へと移動した。

—————

「今、レインが人間界に移動しましたか？」

帝国カバークラウドの首都『ネブリーナ』に構える城の中でそう発したのはクラウドだった。彼にはどうやら、部下の位置情報は常に握めているらしい。

「レインが人間界に？ならば、それはつまりー？」

ストームにはわかっていなかった様子だ。

「見つけたんでしょう。エンシヤントウエポンを」

「だとすれば見事な功績だが、我々に報告もせずに直接戦いに行くつもりか？」

「まあ、レインにハウレンソウを期待してはいけません。あの人はいつも、いつの間にか任務を遂行させ、いつの間にか領土を拡大してくれている感じです。プリキュアに連敗したこと、自分で言った『次こそは必ず』を守れなかったことを叱責はしましたが、まあ、そういう人ですので、勝手に行動する分には大目に見ますよ」

「信頼しているようだな。流星に、將軍の称号を与えてるだけの存在か」

「信頼……とは少し違う気がします」

ストームの言葉に対し、クラウドは少しだけ首を傾げた。

「実力や実績は評価します。いまの領土は彼のおかげである分も大きい。ただ、信頼とは少し違うかもしれませんね。なんと言いましょうか……」

クラウドはしばらく考えた後、続けた。

「私のことを裏切れるはずがないというか、私に逆らえるわけないじゃないですか。私は、あなた方とは違う領域の者ですしね。あなたも、レインもスノウもサンダーもそのほか軍人も政治家も国民も、全ては私を恐れている。この国では1番の腕だったストーム、あなたでも、私相手には3分と持たなかった。なんだかんだで、みなさんは途中で任務を放棄することはできないし、私に任された仕事はやり切るしかない。まあこれも、ある意味での信頼、でしょうか？」

「……なるほどな。一理ある。特に軍人諸君は、クラウドに命を救われ、この国という居場所を与えられた者たちだ。俺を含めてな。裏切れるはずがないし、仮に何かを企んでも、クラウドには勝てるわけではない。勝てるわけが、な」

ストームは語気を弱めてそう言った。先ほどのクラウドの台詞から察するに、一度彼に敗れているのだろう。

「まあ、あなたは十分に強いと思いますよ。この世界と人間界を合わせても、最強の人類はストーム、あなたでしょう。私もあなたの強さをたたえ、唯一敬語を使用しないことを許可しています。あなたほどの強さとプライドがあると、やはり私のような外様に敬語は、難しくうでしたので」

「……その混沌の存在になれるかぎ、カオスシードだが、レインに預けるのは正しかったのか？あいつに持たせるのはやはり危険だ。あいつが混沌の存在となれば、なかなかの脅威にー」

「それはいいです。レインではカオスシードを植え付けても混沌の存在になることは敵わない。条件を満たしていません。まあ、他の使い方があるので預けているのです。……それはそうと、観察してみました？この前話した人間については」

クラウドは、人間界で、彼の指定した人間に、彼の指示するタイミングで植え付けるようにと、ストームにカオスシードを予め一粒手渡

しているのだ。その人間というのも、すでに指定されているらしい。「ああ、少しな。確かに驚いた。人間界にあれだけの逸材がいるとは」でしよう。私も驚きましたよ。加えて、私の見立てでは条件さえ満たせば、混沌の存在にもなりえる器……。だからあなたにシードを預けているのですよ。あなたに匹敵する人類になるどころか、私の後継者にだってなりえる。素晴らしいですよ」

「だからこそ慎重に、か。だが、お前は後継者など育てなくても、命は永遠ではないのか？」

「……私もこの領域に達した時はそう思っていました。が、どうやらそうではないようです。神の『領域』に足を踏み入れたに過ぎませんからね」

「なるほど。しかし、神の領域、と言われもやはりピンとは来ない。神とはなんだ？ そんな、存在するかも怪しい、非現実的な例えを持ち出されてもー」

「ああ、神様ならいますよ。私はこの目で見ました。少し私の想像とは異なっていました。何かこう、絶対的な力を持った、人のような。神話に出てくる像をイメージしていたのですがね」

クラウドの口から語られたのは、思いもがけないことだった。

「……では、改めて神とはなんだ？」

「神様とは、世界の意思です」

「……俺にはわからん」

「簡単に言えば、世界の脳みそみたいなものです。神様が創造しようとお考えになれば、何かが生み出され、不要とみなせば、その何かが消える。すごいでしょう？」

「……それで、お前の野望とはなんだ？ エンシャントウエポンを全て集め、その力で今度こそ、次の神にでもなる気か？」

「うーん、あれになるのは嫌ですね。まあ、それはその時になってのお楽しみですよ」

「そうか。まあ、とりあえずやることはー」

「変わりません。エンシャントウエポンの回収です。隙があれば、クリアハートも奪いますよ。敵になるプリキユアはいらない。私が欲

しいのは、私の手となり足となりいずれは後釜となる、こちら側のプリキユアです」

クラウドは、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

—————

「安楽加清が、自らの応援演説に光山さんを指名した、ですって？」

「はい、どうもそのような噂を耳にいたしました。あの2人、どういう接点でつながっているかは謎ですが、しかし、これは有利ですよ、クレハ様。私のクレハ様への応援演説が、あのような者に劣るはずがありません」

放課後の選挙活動中でのことだ。月野紅羽とその取り巻きたちが、校門の近くでビラ配りをしている中、取り巻きのうちの1人が、クレハにこう耳打ちをしている。

「それは確かですか？」

「確証は得られていませんが、しかしどうも嘘には思えません。他に目立った動きもなければ、彼女は常に単独で行動している存在。他に親しいような人物も思い当たりませんし」

「……あの2人、幼少の頃は仲睦まじかったと記憶しておりましたけど、今は接点なんてどこにもなかったはず……。他に友達がいなかったら、あの人があつたわがわが光山さんを指名するかしら？光山さんの方から名乗り出ることもまずありませんわね。……まさかとは思いますが、プリキユア関連が生んだ繋がり……。いえ、彼女はもう興味がないとおっしゃっていたはず……」

1人でブツブツと唱えながら、その背景を考察しようとするクレハ。

「クレハ様？」

「……残りのビラ、すべて配り終えてくださいいな。私は少し急用ができましたわ。斎藤さん！久義を呼んでちょうだい！」

「はい！ただいま！」

斎藤、と呼ばれた女子生徒が少し遠くで返事をした。その女子生徒

に対して顔も向けず、そのままの体勢で指示を出し、相手もこれになんの不満もなく応えるものだから、まだ数ヶ月前まで小学生だった子供達とは思えないほど、確立した上下関係が構築されているようだ。

また、久義とは、彼女の執事の1人である。

「……おや？…これはなんですかの？」

取り巻きの生徒たちに仕事を任せした後、校門の外へと歩いていたクレハは、その途中で、地面に落ちていた、小さな、翼のような形をしたものを見かけた。拾い上げてみたが、金属製ともプラスチック製とも何かが違う、初めて触る感覚だ。

「もしかしたら、プリキュアに関わるもの……？一応、拝借させていただけますわ」

誰にもみられていないことを確かめると、彼女はそれをポケットへとしまい込んだ。

それから間も無く、久義の運転するリムジンが校門前に現れた。いつ迎えの命令が来てもいいように、放課後は常に近くで待機しているのだろう。

クレハは後部座席に乗り込むと、足を組んだ。

「お嬢様。お行儀が悪いですよ。月野家のご令嬢たるもの、常におしとやかでー」

「たまにはラフでもいいのですわ。お父様の教えは厳しすぎて窮屈ですもの。大物というものは、然るべき場所以外ではラフでいいのですわ、ラフで」

そういう持論があるようだ。

「それより、うちには庶民的な自動車はあつたかしら？…こういう、あからさまな高級車、のような車ではなくてよ」

「いえ、月野家のガレージにはリムジンが5台あるのみです。現在は自動車での移動をされるのが、お嬢様しかおりませぬゆえ、必要最低限の準備しか。しかしまたどうして」

「尾行したい人物がいるのよ。でも、リムジンで尾行じゃこの辺じゃ私しかないし、すぐバレるじゃないの。ないなら仕方ないわ」

クレハはスカートのポケットからスマートフォンを取り出すと、ど

ここに電話をかけた。

『お電話ありがとうございます。こちら車田自動車本部の速水と申します』

「もしもし？月野家の長女のクレハと申しますわ。車田社長は今いらして？」

『これはこれはクレハお嬢様。はい、車田ですね。今は外出しておりますが、こちらから繋げましょうか？』

電話先は、輝ヶ丘に本部を構える自動車メーカーのようだ。

「いえ、ご不在なら結構よ。あなたでいいわ。今すぐに路上に出せる車はあるかしら。軽自動車でも構わなくてよ。庶民的な自動車が欲しいの」

『庶民的で、今すぐに、ですね。少々お待ちください……輝ヶ丘大学最寄りのディーラーに4台ございます』

「おいくらくらいするのかしら？」

『1番高いものでも350万円。安いものでよろしければ200万円になります』

「あら、そんなものなの。わかったわ、なら350万のものを一台、父の名義で購入するわ。よろしいかしら？久義、ディーラーまでどのくらいかかるの？」

「最寄りの場所となれば、5分もかかりません」

「5分ね。速水さん、5分後には到着するわ。すぐに出せる状態にできるかしら？」

『ディーラーの店長にはそう伝えておきます。この度はご購入のほど、ありがとうございます』

「こちらこそ、迅速な対応感謝いたしますわ。父にもますます鼻根にするよう、伝えておきますわね」

そういうと、彼女は電話を切った。

「いいのですか？お父様の口座から勝手に大金を……」

「お父様はこの可愛いひとり娘のためならば喜んで支払ってくれますことよ。さて、他の執事と呼んでおきなさい？その者には、この車で安楽加清を回収することを命じなさい。あなたは私と一緒にその庶

民的な車に乗り換えて、尾行するのよ！光山輝をね！そして、その後彼女とも合流するのよ！おーほっほっほー！」

車内に彼女の高笑いが響いたのだった。

—————

レインの開いたゲートの先には、やはり輝ヶ丘の裏山の雑木林が広がっていた。彼らカバークラウダーにとって、この場は人間界における一つの拠点のようなものとして扱われているのだろう。毎度、まずはここに訪れているかのようには思える。

「さて……いくらエンシヤントウエポンを装備したと言っても、やはりそれだけで倒せるほど甘い存在じゃないのは重々承知だ。もう舐めてはかからねえ。今日こそクリアハートを奪わなければ、いよいよ俺の立場もなくなるというもの。強いクライナーが必要だ……」

レインは一番高い気に登ると、その頂点に立ち、街を見下ろす。

「いいウイザパワーを持った人間は……うん？あいつらなんか、いい素材だぜ……！」

舌舐めずりしながら見つめる、はるか先にあつたのは、学校帰りの中学生の集団だった。

「本来ならば、俺ら幹部でも、1体のクライナーを生み出すために扱えるのは、1人の媒体のウイザパワーだけだ。だが、今の俺には、カオスシードがある。複数のパワーを、混ぜ合わせることができる……！」

「生徒会選挙のあれ、始まつてるけどさー、正直誰でもよくね？なんでわざわざ選挙とかするのかな？かつたるい〜」

「マジそれな。校長も生徒会長もぶっちゃけ誰だつていいし。いうて大きな変化とかないじゃん」

「わかる。校則とかでき、制服着なくてもいい、とか、授業サボってもいい、みたいなルールを作ってくれるんならそもそも神様として崇むけど、そこまでの権力ないしね〜」

「そして特にあの子、月野さんっていう1年生。あれだけはないわ。」

金持ちの娘かなんか知らないけど、ちよつと調子に乗ってるよね」

「これ。安楽つて子にも言えるけど、少しませてるというか、粋がつてるといふか。誰でもいいとは言ったけど、あーいう子は嫌ね」

「お前ら、いいウイザパワーをしてるじゃねえか。俺の部下として迎えてやってもらいたいぜえ？陰口悪口どんとこい、大歓迎だ」

などと話し合っているその集団の前に、突然として、レインが降り立った。

「な、何この人……？どこから来たのこれ」

「不審者つてやつ……？」

「通報しとくか？」

突如として現れたのが、色白の身体を威厳ある漆黒のマントと、胸に6つの雫のような形をしたバッチがつけられた深い緑色の軍服に包んだ、185センチはあろうかという高身長。おまけに水色のギザギザとした、毛先が鋭利な特徴的な短髪の男なのだから、このようなリアクションになってしまうのも無理はないだろう。

「おいおい、もつとキヤーツ！とか、いい反応つてもんがあるだろうよ！つたく、最近のガキは湿気つてやがる……」

彼はどうやらこの反応に不服のようで、少し顔をしかめながら、頭を掻く仕草を見せた。

「まあいい。お前らのウイザパワー、いただくぜ。……召喚！クライナー！！この者等の心にかかる雨雲を力に変え、絶望の雨を降らすのだ！！」

レインはそう言うと、右腕を空へと掲げた。その彼の掌を指して、中学生たちから紫色のオーラが集まり始め、それがハンドボールくらいの大きさに固まったあと、これを空へと放り投げた。

『クライナーアアアア！！』

ウイザパワーの塊は上空で漆黒の、一つ目の人型の怪物へと変化する、再び地上へ降り立った。身長は実に三階建て建物くらいのものである、大きな怪物だ。召喚の生贄となった生徒たちは、その場で気を失い倒れている。

さらに同時に、上空を分厚くドス黒い雲が覆い、大粒の大雨が降り

出した。レインの生み出すクライナーは、等しくこのような能力を備えている。雨雲は徐々に拡大を続けており、街全域を覆うのも時間の問題だろう。

「さあこいよプリキュア。目にもものを見せてやるぜ。ふわーはっはっは!!」

『クライナーアアアア!!』

1人と1匹の侵略者の高笑いが不気味に鳴り響いた。

—————

「……むーこの気配!・レインラエ!!」

放課後、マナミと共に下校していた際のことだ。私のポケットの中で、ラエティがそう叫ぶ。

「え!?!」

そして次の瞬間、なんの前振りもなく空が暗くなり、大雨が降り始めた。レインが現れたというのは本当らしい。

「あわわわわ、今日折りたたみ傘とか持ってきてないよ〜!」

「ヒカルちゃん!そんなこと言ってる場合じゃないって!レインを倒しに行かないと!」

マナミはそう言いながら、素早くクリアアートを取り出した。

「さすがマナミレティ!ヒカルもこの戦士としての姿勢を見習うべきレティよ」

「まったくラエ」

「そりやわるうござんしたね……でも、どこにいるの?」

ひとまず近くの屋根のある場所に駆け込み、妖精たちに訊ねた。

「結構遠いラエね。ここで変身して、プリキュアの身体能力で飛んでいくといういつものパターンの方が早いラエ」

「なるほどね。なら、そうするしかないでしょ!いくよヒカルちゃん!プリキュア!エキサイティングー!」

「ちよっとお待ちを!!」

変身の合言葉を叫ぼうとした私たちを止めたのは、雨音よりも大き

な声だった。それも、聞き覚えのあるものだ。振り返ると、こちらの方に自動車が向かってきているのが見える。

「……………誰の車？知り合い？」

「さあ……………」

見慣れない普通自動車の後部座席の窓から、小さな傘をさしながら顔を出したのは、月野紅羽だった。

「月野さん？なんでここに……………」

「細かいことはいいのですわ。この車で現場に向かいますことよ！」

光山輝をつけていた、とは間違っても言えないだろう。

「いやでも、車より飛んで行った方が早いし……………」

私はそもそもクレハが苦手である。マナミもそうだろう。先日喧嘩をしたばかりでもある仲だ。苦手な人間の、それももうプリキュアとは無関係者になったはずの彼女の車に乗り込むなど、現場への到着速度という点でも、また単純な心理としても、乗り気になれるはずがないのである。

「そりやそうでしょうけど、でも御二方は飛べても、私は飛べないのですわ」

「……………あなた、今から行く場所がどこなのかわかってるの？」

マナミが目を細め、彼女を見つめながらそう訊ねる。

「もちろん。戦いに行くのでしょうか？私も雨を使う男性との戦闘経験がありますことよ。この感じ、だいたい察しはつきます。それに、今日は見学するだけですわ。」

「……………何で今更そんな……………」

マナミ的には、やはりどうしても気分が浮かないようである。

「私の生徒会選挙を有利に運ぶため、としておきましようか」

「どういう関係が……………」

「そのうちわかりますわ。ほら、こうしている間にも、街に被害が出ているかもしれないよ？早く乗った方がよろしくって？」

「……………なら、お邪魔します……………」

私たちは渋々、この車の世話になることとした。

「久義、発進して。目的地は？」

運転手に指示を出しながら、彼女は私に視線を移した。

「えーっと……」

「西のほうラエ」

ラエティイが囁く。

「街の西のほう！」

「とりあえず。西の方面にお願い。それと、あなたが今から聞くことを見ることは全て月野家の機密事項になり得るわ。これで口外しないことを誓いなさい。他の執事にも、お父様にもダメですわ。私との契約よ」

クレハはそう言いながら、運転手である執事久義に札束を押し付けた。何百万という額にもなりそうな量のお金だ。これだけのお札を生で見るのは初めてである。

「……お嬢様との私的な契約として、このような大金をいただくわけには。私は月野家の執事として、お嬢様の専属のそれではございません。誠に失礼ながら、このような行為は――」

「つべこべ言わないの。受け取っていただかないと、機密を漏洩しない、という信用ができなくてよ。信用を失えば、あなたどうなるかわかっていて？それとも、明日から他のお家に務めることにするのかしら？」

買収、というよりは半ば脅しではある。

「……かしこまりました」

久義もまた、渋々と言った表情でそのお金を受け取った。カスミにしろクレハにしろ、本当に同い年の中学1年生なのだろうか。私たち2人はこの光景を、引きつった表情で眺めていたが、それも無理のないことだろう。

「選挙活動に関係あることなら、いくら、おうちの執事さんでも、あまりお金のやり取りはしない方がいいんじゃない……？」

私は思わず、そうぼろっと口に出してしまった。カスミの応援演説をやるということ、少し規約のようなものに目を通していたからだ。

「あら、痛いところをつくのですね。あなたが生徒会選挙規約をご存

知だったとは。やはり、噂は確かですね。安楽加清の応援演説をあなたが行うというのは。」

「なるほど、それで光山様のあとをつけろというご命令を……」

執事久義が、誰にも聞こえない程度の声量でボソツと呟いた。今日の一連の流れを理解できたようだ。

「ま、まあ、それは本当だけど……」

これそのものは、隠すようなことではないだろう。

「やはり不思議ですわ。今のあなたたち2人になぜそこまでの接点か。確かに安楽加清は孤高の存在、応援を頼める友人は少ないとしても、もつと良い人選はあつたはず。任せられるほどの一定の信頼、仲をいつの間……。彼女はもうプリキュアに興味がないとはおっしゃっていましたけど、これは今でもプリキュア関連で繋がりがあるといふことではなくて？」

「……やっぱりカスミの変身を嗅ぎつきかけているラエ。だとすればー」

ラエティが小声で呟いたことで、私はようやく今、非常にまずい事態になりかけていることを悟った。隠すべきだったのかもしれない。

「回りくどいことは止みましょうよ。クラスメイトの仲間じゃない」

そう言い出したのはマナミだった。

「クラスメイトの仲間ではありませんが、私は一度あなたに殴られていてですね……」

マナミだけが一方的に悪かったというわけではないだろうに、まだ根に持っている様子だ。

「その節は本当にごめんなさい。……それで、月野さん。仮にもし、安楽さんがプリキュア関連で私たちと繋がっているとしたらどうしたいの？狙いはこれかしら？」

彼女はクリアハートをチラつかせながらそう言った。

「……それは安楽加清の関わり方次第、ですわね。万が一、彼女もプリキュアだというのならば黙ってはいられませんことよ。私は彼女を倒し頂点に立ちたいの。先を行かれていますのであれば、悔しくてよ？」

「やっぱりレティ……」

「2人とも、面倒臭いまでの負けず嫌いラエね。さて、どうしたもののラエか……」

そうこうしているうちに、私たちを乗せた車は現場近くに到着したようだ。見慣れたものより大きな、プレーン型に近いクライナーが、やけに静かに佇んでいる。

「来たか、プリキュア……!」

レインがニヤリと笑う。

「大きいレティ……それに、大きいのは身体だけじゃない……」

「ウィザパワーも相当なものラエ。これは何か細工があるラエね。ただのクライナーとは思えないラエ」

「……あら、あのお方は確か、私もお相手をした、えーつとお名前のほどはー」

車窓ごしに、クライナーの頭上で仁王立ちしているレインを見つけたクレハが、初変身の時を思い返しながらそう呟く。

「レインっていう、時代遅れな格好をしたヤンキーよ」

マナミが補足する。

「お嬢様のお父様がお若き頃の、バブル経済と謳われたあの時代のクラブなどにいそうな風貌ですね。あのお方も、どこかの財閥の御曹司だったりされるのでしょうか?それでお嬢様とも面識がある様子で?」

執事久義の推測があまりに斜め上のもだったので、私たちは少し笑ってしまった。

「いえ、違います!御曹司どころか、悪いやつですよ。懲らしめないといけないんです!」

私がそう訂正する。

「懲らしめる……と申されますと?」

「久義、さつきも言ったけど、全てはトップシークレット。令嬢命令よ。絶対に、ほかの執事間でも漏らさないこと。よくて?」

「……もちろん、承知しております」

「ならいいわ。さて、見せてもらおうかしら?安楽加清の力を」

「え？安楽さんはいないけど……」

車から降りながら、唐突にカスミの名前を出したクレハに対し、マナミはそう応える。ここには私たち3人しかいないはずだが。

その時、黒光りのリムジンがこちらへと向かってきてきているのが視界に入った。この街でこのようなものを乗り回すのは、月野家の関係者以外にあり得ないが――

「まったく、誘拐事件として警察に突き出してもよくってよ？私も暇じゃないのだけど」

こう悪態をつきながら車から傘を刺しながらおりたのは、ほかでもなくカスミだった。

「安楽さん!?なんでここにー、それも、それ月野さん家の車じゃ」

「私がさつき手配致しましたわ。ほかの執事に、彼女をここに連れてくるようにね。ちようど、私たちが庶民的な自動車を使う分、リムジンが1台空いておりましたので」

「手配……てことは、もうほとんど確信していた、ラエね。あの生意気な娘がプリキュアだったってことには」

「確信に変わったのは今のあなたのセリフを受けてから、ですわ。しかしまあ、でも9割そうでしょうとは、思っていましたけど」

「ちよつとラエちゃん、なんで自分から話すの!」

私は思わず突っ込んでしまう。

「ここに安楽加清がいるんだから、もう隠し様がないラエよ。隠していると逆にめんどくさくなるから、ラエ」

「申し訳ございません、安楽様。お嬢様のご指示となれば逆らえませぬので……」

リムジンの運転手が申し訳なさそうな面持ちを浮かべている。

「まあ、この執事の方は何も悪くはありませんし。それで？私はあそこにいる怪物と、男を倒せばいいのかしら?」

「見慣れねえ顔だな、小娘。いや、あの時いたかな？俺が学校を襲撃した時、いたような気もするが……。その口ぶり、まさか貴様もプリキュアか?」

レインがそう問いかける。

「ええ。サンダー、とか名乗る幹部とも互角に渡り合った最強のプリキュア、キュアジョイフルをどこ存知なくて？」

カスミは強気で、堂々と返答する。

「知らない……。サンダーと互角？笑わせる、この俺でも手こずるやつと互角など、ハツタリをかますことは得意らしいな？」

「あら、帝国と言う割には、情報の共有が遅れているようね。まあ、すぐにわかることよ」

カスミはそういうと、マナミの方へと片腕を差し出した。クリアハートをよこせ、ということだろう。

「まあ、今日は任せるわ。どうぞ！」

マナミもそれを察したのか、すぐにこれを彼女へと投げ渡した。

「嫌いじゃないぜ、そういう、強気な敵はな。がっかりさせないでくれよ。」

「それで、もう一つのクリアハートはどうするレティ？金持ちの力をまた試すレティか？」

「いえ、私は結構ですわ。安楽加清のお手並みを拝見したいので。光山さんがお使いなさい？」

「まあ、言われなくても君に渡すつもりはなかったラエが。ヒカル、頼んだラエよ」

「う、うん。じゃ、行くよ、安楽さん……。いや、カスミちゃん！」

「……昼間も言ったけど、あなたが私をどう呼ぼうと勝手だけどー」
「わかってる！いいよ別に。でも、私はカスミちゃんって呼ぶから！」

「そう。まあいいわ。……プリキュア」

「エキサイティングファイバー!!」

この合言葉で、私たちは伝説の光の戦士、プリキュアへと変身することができなのだ。

『弾ける心！キュアスパーク！』

『楽しむ心！キュアジョイフル！』

『闇に染まった心に元気と天気を取り戻す！輝け！ワクワクプリキュア！』

ビシッと、名乗りとポーズが決まった。カスミとこれをやるのは初

めてになる。

『今日はエネルギー切れなんてことは起きないわ。前と違って、本気で戦えるってわけ』

ジョイフルは自信満々の様子である。

プリキュアたる者、正の感情、キサトエナジーがなければ戦うことができない。ゆえに、そもそも変身資格には、秀でたキサトエナジーが必要となる。加えて、プリキュア態では心臓の役割をするクリアハートが、変身者のその瞬間ごとのテンションに合わせて、このエナジーをさらに大きくすることがある。

要は、常に自信や勇氣、希望などの正の感情を持ち続けていれば、クリアハートもこれに呼応し、常に強いプリキュアで居続けられるどころか、心臓クリアハートを通して大きくなり身体中に行き届くキサトエナジーにより、更なるパワーアップも望め、また永久にエナジーの枯渇しない、強力な戦士となれる。この好循環は『キサトサイクル』と呼ばれている。

私、ヒカルことキュアスパークは、このキサトサイクルに突入しやすい才能の持ち主らしい。

しかし、逆もまた然り。

体術よりも戦術よりも、何よりも大切なのは、感情の管理であると言えるだろう。実際、前回のサンダー戦では『怒り』というウィザパワ―を戦闘中に生み出してしまい、サイクルに終止符を打つはもちろん、一気にキサトエナジーを衰弱させ、変身解除にも追い込まれてしまっている。

「キュアジョイフルか……データのほどは……」

レインは右腕を、身体の正面で払うような仕草を見せた。その腕の軌跡より、ホログラムのようなものが出現した。例えるのならば、ゲームのステータス画面だろうか。酷似している。

「……本気ではなかったとはいえ、一度他のプリキュアが使用していて、エネルギー残量の少なかったクリアハートを使いながらも、サンダーと互角の格闘、か。ハツタリではなかったようだな。それが、今日は最初から体力も満タンってわけか。面白い。俺の、この『集合ク

ライナー』ともいい勝負をするかもな。さて、あいつはクライナーに任せるとして、俺はー」

レインはクライナーの頭を蹴り、宙へと躍り出た。

「キュアスパークをやるぜ!!」

その直後、巨大なクライナーも動き始めた。こちらは、ジョイフルの元へと走り始めている。狙いは、1対1に持ち込むことか。

プリキュアは2人揃ってこそ真価を発揮する。それをその身でいたいほど味わっているレインだ。そう考えるのも当然ではあるが、その作戦に乗っかるわけにもー

『面白いわね。受けて立とうじゃない。あの怪物は、私1人でやるわ』
いや、彼女はそうは考えていなかったようである。

『しようがないなあ。まあ、レインは、そんなに怖い相手じゃないよ!』

私たち2人も、迎え撃つように走り出した。レインになら勝利経験が何度かある。サンダーのような規格外の敵に比べれば、まだ可愛い方だ。1人でもやれるだろう。

「な、なんなんですかこれは……」

車に取り残されていた執事2人は、ポカーンと口を開けたままである。

「ひ、久義さん、これは一体……」

「私にもわかりませんが……お嬢様からもトップシークレット案件として取り扱えとのご命令が出ています。知ってはならないのです。う。ひとまず、私たちは安全なところへ退避しましょう」

二台の車が、現場から離れ始めた。

「キュアスパークウー! 今日こそ、貴様を葬り去ってくれる!」

『負けないよ! たあ!』

バチッと、私たちの拳がぶつかり合う。単純な腕力なら、どうやら互角のようだ。鬨ぎ合って、2秒ほどお互いにその場から動かない。これでは埒があかないだろう。

『くっ……』

私は数十メートル後方へとジャンプしながら後退した。組手のような格闘戦になつては、決定的な攻撃を与えることができない。プリキュア組みの中でもさらに抜きん出ている、キサトエナジーによる、力任せの体術があるため、近距離の方が得意ではあるが、私の攻撃レンジは中距離型でもある。電撃攻撃を使い、少し離れたところから――だが、これを見たレインも数十メートル後方へと下がった。これでは、私の攻撃も届かないが、レインの水を使った攻撃だつてそこまで長い距離では狙いも絞りにくいだろうし、第一、私の元への到達時間がかかるため、回避するのも容易になる。有利な距離ではないと思われが――

その次の瞬間、私の顔の横を何かが通り抜けた。小さい。弾丸のようなものだろうか。通過後に、遅れて、それによつて生じた小さな空気の振動が、私のツインテールを揺らした。その後方では、民家の壁に蜘蛛の巣状の亀裂が入っている。

「な!?何、今の攻撃は!?!」

物陰に隠れて見守っていたマナミが思わず声をあげる。見えなかったのだろう。

「なるほど。確かに、あのような代物があるのなら、1対1の方が断然有利になりますわね。光山さん、これは苦戦しますわよ」

この口ぶり、クレハには何か見えていたのだろうか。
「いい目をしているな、キュアイラーレ。いい動体視力だ。今が見えていたのか」

レインは感心している様子だ。

「お褒めにあずかりまして、加えて名前まで覚えてくださっていると
は光栄ですわ」

「いまのは何レティ?」

「さあ?具体的なことまではわかりませんわ。さしずめ、目にも留まらぬ速度で、あれだけ距離の離れた民家の壁に傷を作れるだけの威力の、エネルギー弾のようなものでしょう。それに、あの小ささ、速度ならばおそろく――」

「連射が可能ラエ。それも、まるでマシンガンのようなレベルで、ラエ

ね」

「ご名答。このエンシャントウエポン、『ダークレイニードル』の力だ！」

レインは自慢するかのように、右の親指に装着された、指輪のような兵器をこちらへと見せびらかしてきた。新しいおもちゃを買ってもらったばかりの子供のような、無邪気な笑顔を浮かべている。

「今の威嚇射撃は効いたラエよ。スパークの攻撃レンジに持ち込むには、距離を詰めないかんラエが、簡単じゃない。とんでもない速度で動かないと。もちろん、あれを躲しながらラエね」

「そんなの無茶レテイ！古代兵器に勝るには、古代兵器しかないレテイが、今こちらの手元にはまだ……。ここはスパークを退かせて、ジョイフルとまずはクライナーを片付け、2人で挑まないと……」

「それがベストでしょう。ですが、それも難しいですわ。第一、あの方が、そう簡単に光山さんを退かせるとは思えなくてよ」

「どうすればー」

『……回避が難しい速度、連射もできる、となると、ちよつとヤバいかも……。でもやるしかない。倒せなくても、ジョイフルが向こうをやつつけるまでは、持ち堪えないと！てやつ！』

ここで臆するわけにもいかない。私は地を蹴ると、まっすぐに、レインの方へと向かい始めた。全速力だ。

「ふん、そうこなくては、面白くない!!」

レインはニヤリと笑うと、ダークレイニードルによる容赦のない弾幕攻撃を開始した。弾丸の雨が、見えない速度で飛んでくる。

『プリキュア！スパークバリアー!!』

私は攻撃用の電撃を放ち、これを盾とするかのように、私の正面に配置した。バチつと音を立て、電撃が弾丸を弾いて行く。

「とつさにそのような応用ができるとは、やるな。だが、そんなもので堪え切れるほど、エンシャントウエポンは甘くねえぞ。火力増強だ！」

弾丸の重さが変わった。威力まで自在に操れるようだ。すぐに電撃の壁は崩壊し、私は一発をまともにお腹に喰らい、途轍もない速度

で吹き飛ばされた。

『キャッ!』

私の身体は、民家に激突することによってようやく止まったが、かなりのダメージを受けてしまった。身体を軽くし速度を上げるためにキサトエナジーの鎧もまどつていなかったため、本当に、もろに受けてしまったのである。

「スパーク!!」

「ヒカルちゃん!」

「あら」

妖精たちが、心配するようにこちらを見つめている。戦士であろうものが、情けない。

「どうだ。これが帝国カバークラウダー天下の大將軍、レイン様の力だ!!はーっはっはっは!!とつとつと、トドメをさしてくれ」

レインは倒れこんだ私へと、指輪の照準を定めようとする。

『まずいわね。はあっ!』

これを見かねた、クライナーと戦闘中だったジョイフルは、とつさに怪物の頭を力いっぱいにけたぐり、レインの方へと吹き飛ばした。

『クライナーアアアア……』

「……ちっ」

巨大な怪物はズウンと重たい響きをあげながら、レインの正面へと倒れこんだ。これを回避するためにレインは後退させられ、さらにはスパークに狙いを定めようにも、そこに遮るかのように怪物が倒れこんできたのだ。すぐさまの追い打ちとはいかなかった。

「しかし、キュアジョイフル……なんてやつだ。集合クライナーだぞ?普通のクライナーとはわけが違う。なのに、無傷どころか、ホコリひとつ被っていないとは、どういうことだ……」

レインの気は、スパークから、その圧倒的な戦闘力を見せつけているジョイフルへと移り変わったようだ。腰からちいさな、エネルギーの羽を生やしたジョイフルが、彼を睨むように、空中から視線をおろしている。

『ハツタリじゃないことは、ご理解いただけただかしら?』

「そのようだな。だが、貴様もこのダークレイニードルにかかれば、すぐにスパークのようにー」

『それはある程度距離がないと意味がないわよ』
「!?」

そのジョイフルの声は、なぜかレインの耳元から聞こえてきた。気がつけば、つい今までいた空間に、彼女の姿が見当たらない。瞬時に、彼の背後に回っていたのだ。

「……ほお。俺の背後を取るか。面白い」

『観念することね。あなた程度、あの怪物と二人掛かりできても、私一人で料理できるわ。無駄な抵抗はおやめなさい』

「俺、程度だと……?」

『何か間違えたかしら? 現に、もうあなたの切り札は、私には封じられているけど』

「……ああ、間違ったさ。まだまだ、新米のプリキュアのような。俺たちがウィザパワーで強くなることを理解していないようだ……言葉は、よく選んで発言することだぜ?」

何か、レインの雰囲気が変わった。彼女はそれを察知したのか、警戒を強める。

「俺を怒らせたな? いいだろう。まずは貴様に、お灸を据えてやる!」
『……やってごらんなさい』

レインと、さらに巨大な集合クライナーが目をつぎらせ、ジョイフルと睨み合う。

「まあ、安楽加清は言葉の棘がチクチクしていますからね。見るからにプライドたかそうなあのお方が、あのセリフで怒るのも無理はありませんことよ? ですが、これで光山さんはひとまず助かりましたわね。もしかして、光山さんを守るためにわざと、とか?」

「さあ。そこまで考えていてもおかしくないし、ただ本当に口が悪いだけかもしれないラエ。でも、とりあえずいまのうちにスパークを助けるラエよ。マナミ、準備するラエ。クリアハートを、君に託す! まだ大技も使っていないから、エネルギーは残っているはずラエ」

「プリキュア交代ね! 任せて!」

「いえ、まだ光山さんでも戦えますわ」

「何？」

クレハが、突然そんなことを言い出すのだから、妖精たちは目を丸くした。

「これ、妖精さんたちならご存知でしょう？きつと、光山さんの力になると思っていますわ」

そういつてポケットから取り出したのは、学校で拾っていた、翼のような形をした、小さな物体を取り出した。

「こ、これ！光の古代兵器、シャイニングバードに違いないラエ！こ、これをどこで!？」

「細かいことは後から説明しますわ。古代兵器には古代兵器、なのでしょう？こんな小さなものが……とは思いましたが、あのお方の古代兵器とやらも、指輪程度の大きさでしたわね。ですので、もしかしたらこれも、と思いましたが」

「とにかく、それがあればヒカルちゃん逆転できるんですよ!?!なら、早くこれをあげないと！レインは安樂さんが引きつけてるわ！今ならバレない！」

「よ、よし！今回ばかりは礼をいうラエ、金持ち！」

「金持ちという名前ではありませんわ。私は、月野紅羽と申しましてー」

「あーもうわかったラエ！悪かったラエ、クレハ！」

ラエティは感謝しているのか怒っているのか、そう怒鳴るように礼を言うと、すぐに私の方へと飛んできた。

「スパーク！これを！」

『うう……何これ、おもちゃ？』

「一発逆転のチャンスラエ！これを、背中に、いやもういい、僕がつけてやるラエ！」

慌ただしくしている妖精は、そう言いながら、羽のようなものを、私の背中に取り付けた。するとどうだろう。次の瞬間、私の身体の奥底から、さらなるキサトエナジーが湧き出てきた。今なら、立ち上がれる。なぜかそう確信した私は、スクツと起き上がった。さらに、湧き

出る力は留まることを知らない。破裂しそうなほどだ。

そして、現に、翼という形で破裂して現れた。黄色いキサトエナジーをまとった、白い、天使のような巨大な翼が、私の背中に現れたのだ。その翼は、私の身丈よりも大きい。

『これって……』

「これが、光の古代兵器の一つ、シャイニングバード……現物は初めて見るラエ……」

『古代兵器……これが、探さないといけないという、あの……！これなら、勝てる！』

『クライナーアアアアア!!』

「ハアアアア!!」

レインの発する弾丸、さらにはクライナーの猛攻。さすがのジョイフルも、無傷とはいかないようだった。何発か攻撃を食らいながらも、どうにか2人の相手をしている。

「どうした!?!二人掛かりでも料理できるんじゃないのか!?!」

『この怪物も急にパワーアップをしている……。負の感情、ウイザパワー、ね。それによって強く……。ならば、怒らせてしまったのは私。自分で蒔いた種は自分で……。しかしわからないわね』

クライナーと格闘しながら、ジョイフルはそう呟く。

「何がだ?」

『なんで怒っているのかわからないって言ってるのよ。私は事実を述べただけじゃない』

「……無自覚に人を傷つけるタイプだろ、貴様。そのクライナーの声が届くこえないのか?」

『クライナーの、声?』

『安楽つて子にも言えるけど、少しませてるというか、粋がつてるとい
うか』

女子生徒の声だ。クライナーから、いや、クライナーの中から聞こえてくる。そうか、うちの生徒のウイザパワーから生まれたクライナーだったのか。

「無自覚に人を傷つけるから、お前に対する負の感情でこんな化け物が生まれるんだ。そして、俺も怒らせた。まあ、悪いことは言わねえ。治したほうがいいぜ。貴様も、それでも伝説の戦士のつもりならな」
『それはどうも。頭の片隅に入れておくわ。でも、私は間違っではないと思うけど』

「その私の強さというか、芯の強さというか。一周回って敬服ものだぜ。だが、貴様みたいなやつを見てるとイライライすんだよ、チツ、昔のやな記憶が……」

レインは最後は、周囲には聞き取れない程度の声でボソツと呟きながら、頭を腕で押さえる仕草を見せた。

「チツ、やっちなまえクライナー!!そいつへのウィザパワーを、ぶつけちまえ!」

『クライナーアアアア!!』

クライナーは、大きく口を開け、巨大なエネルギー弾を形成し始めた。これを放つというのだろうか。とんでもない威力になりそうだな。ジョイフルは思わず身構える。

だが、それが発射されることはなかった。クライナーは次の瞬間、強烈な光に飲まれ、消滅してしまったのだ。

「何!?!」

『これが、私の新必殺技!プリキュア!シャイニングスパークル!だよ!!』

声がる方を振り向くと、さつき戦闘不能にしたはずのキュアスパーク、私が巨大な翼を広げながら、煙を上げている両手のひらをこちらへと向けていたのだから、驚いただろう。その煙は、今のクライナーを一瞬で倒した、光線か何かを放ったあとだろうか。

「集合クライナーを、一撃だど!?まさかその翼は、エンシャントウエポんか!?チツ!キュアスパークウウウ!!」

レインはまたもや、ダークレイニードルを、私へ向けて連射し始めた。だが、その弾丸の雨は、翼をはためかせることで生じた衝撃波に、薙ぎ払われてゆく。

「何!?!」

『これで、2対1になったわ。それも、その武器じゃ、今のスパークとの相性も悪い様子ね』

「……く、いつの間に、手に入れていた!?どこで見つけたんだ!？」

『……私がどんなにアホだったとしても、答えるわけないじゃん。で、どうする?・レイン。あなたも、さっきの技、受けてみたいの?』

私は微笑みながらそう問いかけた。溢れ出るキサトエナジーによって、自信に満ち溢れていたのだ。

「調子に乗りやがって……覚えてろ!!」

流石に分が悪いことを判断したのだろう。レインはこう捨てセリフを吐くと、その場から姿を消した。

雨は止み、分厚い雲も消え去り、街に残った戦いの爪跡も、綺麗さっぱり無くなっていた。

続く

第10話 「負けませんわ!復活のキュアイラーレ!」

第10話 「負けませんわ!復活のキュアイラーレ!」

「それで、まず、これをどこで拾ってきたラエ?」

レインを追い払った後、なぜか私たち4人は、私の部屋に集まっていた。久義さん、というクレハの執事に送ってもらったのだが、どうしてよりによつてうちに……

当然だが母も驚いていた。一度に3人も友達が来客したのも久しぶりであつたし、その面子が濃ゆいからでもある。マナミはお馴染みだが、カスミとクレハの2人の顔を見た母は、歓迎する前に、一瞬だけ怪訝そうな表情すら見せていた。

そんな中で、まずはラエティによる、クレハへの尋問まがいのことが始まっていた。私たちは、窮地を彼女が所持していた『シャイニングバード』なるアイテムで乗り切ったのだが、これは探し出し、集めなくてはならない『エンシヤント・ウエポン』のひとつらしい。なぜ彼女が持っていたのか。どこで見つけたのか。色々聞き出さなければならぬのだろう。

「校門ですわ。学校に落ちていたので、たまたま。珍しいものでしょう? 拾いたくもありませんわ」

「学校に……。拾ったのがクレハだったからまだよかつたレティが、他の何も知らない生徒や、カバークラウダーが拾っていたらと思うと、恐ろしいレティ」

「そういうことは、この輝ヶ丘の街に、他にも落ちているかもしれないってこと?」

「そう尋ねたのは私だ。もしそういうことなら、急がなければならぬい。」

「いいや、そうとも限らないラエ。エンシヤントウエポンは古代の戦いの後に、この世界、そして向こうの世界の両方に散らばっているラエ。似たような箇所にとめて複数個、は考えにくいラエね。本当に偶然、この近くにあつたとしか……」

「でもどうかしら。この変身するための『クリアハート』もその、エン

シャントウエポン、なんでしょ？これは、変身者を選ぶかのようになり、ひとりで動き出すこと、あつたじやない？もしかして、プリキュアに引き寄せられるのかも！」

こう仮説立てたのはマナミだった。

「大田さんと同じことを考えていたわ。中学校にはプリキュア変身可能者が3人もいる。私たちのキサトエナジーに導かれてやってきた可能性は捨てきれないわ。プリキュアが本格的に活動し始めた時期ともタイミングが一致するし、待っていればそのうち集まるんじゃないかしら？」

カスミも、彼女に同調していた。

「そんな能天気な……。まあともかくラエ。大事なものは、光のエンシャントウエポンはマストとして全て揃えることラエ！可能ならば、闇のエンシャントウエポンもこちらで回収したいラエね。敵の戦力が増強されるのも阻止できるのならば。それに、どのみち全種類必要ラエ」

「まあ、私たちは前提として中学生。本業学業よ。あまり大掛かりな搜索活動はできないわ。可能な限りで、なるわね。特に、私はこれから生徒会選挙活動が本格化するの。悪いけど、しばらくはあまり力になれそうにないわ」

「カスミちゃん忙しいしね……。なら、クリアハートは私とマナミちゃんが持つておこうよ！カスミちゃんに比べたら、まだ時間がある方だし、ていうか私が1番暇だと思うし……」

「それがいいと思う。せっかく3人もいるんだし、助け合いでしょ！」

「任せるわ。妖精さんたちも、基本は2人に付いてちようだい」
「わかったラエ」

3人の適合者がいるが、クリアハートはふたつしかない。このように、しっかりと役割を分担した上で各々がそれを理解し、互いに共有し合わなければならぬだろう。

「3人、ねえ。話を聞くに、人手はもつとあつたほうがいいのかと存じますが？」

そこにクレハが口を挟んできた。

「……言いたいことは察するラエが、君は一度クリアハートを放棄している身分ラエよ。あまり自己都合でコロコロと変わられても困るラエ」

「まあ、自分でもわがままを言っている自覚はありますわ。でも、安楽加清が変身者になっっている……彼女に先を行かれるのを、指をくわえて見ているわけにはいきませんこと。彼女への対抗心や私の自尊心といった、キサトエナジー、なるものは備わっているはず。一度変身できていることが何よりの証拠」

「……とはいえラエ。君には確かにキサトエナジーがあるラエ。誰にも負けない想いもあると思うラエよ。でも、それだけじゃこの先絶対に挫折するラエ。プリキュアは伝説の戦士、生半可な気持ちでやられても困るラエ。ヒカルには『街を守りたい』マナミには『ヒカルを助けたい』カスミにだつて、あいも変わらず自分ファーストではあるけど、曲がりなりにも『街を守りたいし、ヒカルを助けたい』といった、何かを守りたい、救いたいという心があつたラエ。君にその覚悟があるラエか？プリキュアは、マウンテイングのためのステータスじゃないやなくて、伝説の戦士ラエよ。それでも戦う覚悟があるなら、確かに人手はいるし、経験者でもあり、3人との付き合いもある。再びこれを握ることを許すことも、できるラエ」

「……そこまでは、まだわかりませんわ、というのが正直なところですよ。確かに、軽率でしたわ。ごめんあそばせ」

「ら、ラエちゃん、何もそこまで言わなくても。さっきは私たちを助けてくれたんだしさ……」

「ラエティは手厳しいレティからね……」

「まあ、月野さん。あなたが今倒すべき、超えるべきはキュアジョイフルではなくて、安楽加清よ。生徒会選挙、楽しみにしているわ」

「……ですわね。まあ、楽しみにしている、などと余裕こいていられるのも今のうちですよ。あした、学校で会いましょう。お邪魔したわ」

それだけ言い残すと、彼女は部屋を後にした。

「それで、どうしましょうか。私は正直、月野さんが今後気が変わっても、気まずくていやよ。前に思いつきりビンタしちゃってるし」

マナミはそう呟いた。

「あの様子だと、月野さんはもう水に流しているというか、そう根に持ってはいないでしょう。気にすることは無いと思うわ」

「……カスミちゃんの性的には、どう思うの？」

私が尋ねる。

「そうね……。少なくとも、反対はしないわ。彼女の言うように、人手は足りてない。多すぎても管理できないけど、ひとつの帝国を相手にするのに3人というのもコマ不足だわ。統制が行き届き、かつ仲間内で秘密を留めておける範囲で人員を確保するのなら、適切な数となる4人。そこに事情を知っていて、外に漏れる心配も少ない彼女を加えることは極めて合理的よ」

「そこは僕もそう思うラエ。ただまだ、戦士としての信用度は低い……。そこだけが問題ラエね」

「……ひとつ、いいことを思いついたレティ」

突然、レティツがそう言い始めた。

「今度、4人で遊びに行くといいレティ！どのみち、3人はもうチームなわけレティ。それに、クレハのことを信用できるようにもいい機会にもなるレティよ。あの様子だと、まだどこかでプリキュアを諦めていないし、カスミがそうである以上、いつかまた対抗心を燃やしてくるのもみえみえレティ」

「私は賛成かな！仲良くなることは、プリキュアとしての連携にもつながると思うし！」

「ヒカルちゃんが行くなら、もちろん私も！」

「……選挙で忙しいのだけど」

「まあまあそう言わずに！今度の日曜日くらいいいじゃない！ヒカルちゃんと遊ぶの楽しいよ！それに、応援演説お願いしてるんでしょ!?お互いをよく知ること、選挙を勝ち抜くにも必要よ！」

「……それは確かに、一理あるわね……。選挙のため、といえば、彼女もついてくるでしょうし」

カスミは、しびしび、といった顔ではあるが、了承してくれた。

「やったあ！面白いことになりそうだね！」

こうして、今度の日曜日に4人で遊ぶことが決まったのである。

「ついに出現しましたか。光のエンシヤントウエポンが。それはそれは」

クラウドは実に嬉しそうな表情をしていた。三度敗戦の報告に帰国していたレインは、今度こそ重い処分を受けるのでは、と想像していたのだろうか。予想外の反応に面を食らっている様子である。

「シャイニングバードと言っていたか。一度はためかせれば闇をなぎ払い、二度はためくと希望の追い風を起こすとの伝説の。人間界にあつたとはな」

ストームも、怒っている様子ではない。表情はいつもと変わらず、無表情であつた。

「ダークレイニードルが通用しなかつたようですが、あの感じですと、ダークブレードの方なら相性良さそうですね。レイン、スノウ、各自今後の参考にするように」

「は、ははあつー！」

レインは、その場に同じく召喚されていたスノウとともに、クラウドに向かい跪く。

「し、しかしクラウド様。今回の俺の失態をお咎めにはならないのですか？ またも、クラウド様のお力となることができずー」

「まあ、最近連敗が続いているのはあまりよくないですよ。あなた、この帝国カバークラウドの將軍なんですよ？ 今は人間界が戦場ですから、失態がこの世界の他国に漏れぬよう隠し通せますが、続くようなら漏洩も時間の問題。レイン將軍の名が廃れば、我が軍も舐められる。叛逆などという馬鹿な考えをする従属国が出て来る可能性もあります。今はエンシヤントウエポンに集中したい時期。余計な問題を持ち込まれることに繋がるのは、困りますね」

クラウドは真顔になりながら、こう述べた。そして続ける。

「ですが、プリキュアとの戦闘は必ずしも勝利だけが成果ではない。事実、あなたは私の命を受け、成果としてエンシヤントウエポンを一つ発掘し、さらに敵側のそのデータの取ることまでできた。これは確

かな功績でしょう。別に、そこを咎める必要はないと考えています。前から言っています、ただの負けならば許されませんが、次につながるのなら許容範囲です。……いい機会ですね。レイン、スノウ、目的を解釈違いはしていませんよね？スノウ、そもそも、なぜ我々はプリキュアと戦っているのでしょうか？」

「……クラウド様の尊き野望であられる、全てのエンシャントウエポンを集めることに繋がるためです。奴らの力の源、クリアハートもそのひとつ。クリアハートを奪取し、クラウド様が選考された戦士に渡し、そのものをプリキュアとし光のエンシャントウエポンを集めさせる。奪取が叶わなければ、プリキュアをあえて野放しにし、光のエンシャントウエポンが集まるのを待ち、全てが揃った時に一気に叩き奪い去るため。でしょうか？」

スノウはさすがだった。こう淡々と即答し、これに対してクラウドも満足げな表情を浮かべている。

「まさしく。レイン、いいですか？それが目的。プリキュアを倒すだけ、という、そんな単純な話ではないのです。戦いの積み重ねが、私の大なる夢につながるのです。その程度の敗戦で罰など与えるはずがない。……これからも、私のために、戦ってもらえますよね？」
「か、寛大な御心！この將軍レインはクラウド様に忠誠を誓った身！もちろんでございますー！」

「……では、報告が以上なら解散してください」「はっー！」

レイン、スノウの2名はその場から姿を消した。

「戦いの積み重ね、と言っていたな。先日述べていた、プリキュアにも経験がある程度積みませなければならぬ、という意味もわかった。プリキュアの戦闘力が高まらなければ、エンシャントウエポンもプリキュアに力を与えない。または、奴らの前に現れない、そういうことか」

「まあ、そんな感じですね。とはいえ、それを彼らの前では言えない。プライドも傷つくでしょうね。……そう言えば、サンダーのその後は？」

「さあな。ここに帰ってきた形跡もない。まだ人間界にいるんじゃないのか？」

「勝手なお方だ。まあ、彼を野放しにして好きにさせておくのも、悪くはないでしょう」

「このあいだのキュアジョイフルとの戦闘で勘も戻り、体も温まっただろう。下手したら、プリキュアを全滅させかねないが。そうなった場合の、我々が用意しているプリキュアの候補生とは、今どこで待機している？」

「彼女たちなら、一度もこの世界に呼んだことはありませんよ。それどころか、私とは対面もしていない。ストーム、あなたにマークするように命を出した人間と、もう一人は……いえ、内緒にしておきましょう」

「そんなことで大丈夫なのか？カオスシードを植えつければ、確かに都合良く扱えるがー」

「そんなことで大丈夫なのです。妖精が求めるプリキュアは、ウエポン集めに加えて、我々という脅威を排除することも役割となりますが、我々の求めるそれは、ただのウエポン集め要員。集め終わるまで短期間の洗脳をする、程度でいいのです。戦闘能力を高め、より回収や起動を効率良くするという意味では、我が国で短期間のうちに大量のクライナーと訓練戦闘をさせればいいこと。私の計画は完璧なのですから」

「ふん、訓練、については、俺の知っている候補生については必要なさそうだがな」

「ええ。彼女は素晴らしい。彼女だけは手に入れなければならない。プリキュアの器としても、そしてこのカバークラウダー初の女王になれるだけの器としても……。ストーム、人間界に出向いてください。もう手を打ちしましょう。彼女に、バレないように仕込んできなさい」
「……今がそのタイミングか。任せろ」

ストームはクラウドより命を受けると、強い旋風を巻き起こしながら、その場から姿を消した。

「あなたの才能や能力は、人間界では勿体無い。そして、私の敵となる

にも勿体ないのです」

クラウドはそれだけ言うと、不敵な笑みを浮かべた。

—————

その日は、よく晴れた日曜日だった。前日に大雨が降っていたので、少し心配はしていたのだが、それが嘘かのような晴天である。それどころか、住宅街の屋根瓦や街路樹に付着した露を日光が照らし出すことによつて、より爽やかで、かつ幻想的な風景を作り出している。

生徒会選挙に関わることだから。加清のその一言だけで、彼女の予想通り紅羽は『4人で遊ぶ』という企画に乗っかってきた。彼女の脳みそは、本当に妥当安楽加清に支配されているらしい。

何をするのか、の企画は、特に名指して役割を任せられたわけではないのだが、私が行わなければならない空気ではあったので、私が考えたのである。言い出したのは自分であるのだから当然でもあるし、愛海と遊ぶときも、どこに行こうとか、何をしようだとかは大抵、私が決めているので慣れているところもあった。それに、愛海はともかく、あの2人には任せられないというか、流星にありえないと思うが、勉強会のようなものが企画されそうだという怖さもあったという本音は、彼女らには内緒である。

「タピオカ……スイーツ巡り……？」

聴き慣れなかったであろうか。品のある、淡いピンクのワンピースの上に紫色の薄手のパーカーを羽織った私服姿である加清は、私の提案を耳にして、そう聞き返してきた。

「そう……この輝ヶ丘の街のタピオカ屋さんを食べ歩き、というか、とにかく巡ってみるの！」

私は、輝ヶ丘タピオカ特集！と題されたチラシを見せながらそう言った。各お店の人気メニューや、簡易的だが地図も載っている。

「面白そうじゃない！北区の方に、ヒカルちゃんと行きたいと思っていたお店もあったし、ちょうどいいし！」

「おーほっほっほ！移動ならお任せを。久義に電話一本ですぐに車の

手配をー」

「ダメダメ、せっかくだからみんなでおしゃべりしながら、歩きとかバスで行こうよ！」

「……いいじゃない。実際に口にしたことはないけど、連日のようにニュースで目にするし、少なからずの興味はあったのよ」

「へえ、意外ですわ。安楽加清がイマドキのトレンドをチェックしているとは」

「心外ね。私はいずれ国のトップに立つ存在よ。世間で何が流行しているのかのチェックに抜かりはないわ。それに百聞は一見にしかず。流行る理由をこの身で知れるかもしれないし、楽しみだわ」

「……カスミちゃんって、本当に私たちと同じ中学1年生なんだよね？」

とはいえ、加清のあまりに若干小学生離れをしている価値観や佇まいにはいい加減に慣れてきた頃ではある。

「じゃあまずは北区の方に行こう！新しくできたらしいんだ〜！」

「……とほほ、やはり歩きなのですわね。まあ仕方ないですわ。運動にもなりますし」

「ははは、月野さんウケる。徒歩ととほほで親父ギャグ？意外なこと言うのね」

愛海は爆笑しながらつつこんだ。私はその親父ギャグに全く気がつかなかったが……

「ち、違いますわよ！たまたまですわー！」

「でもいいんじゃない？これを機にそういうキャラクターとしても売り出していけば、ギャップで人望をつかめるかもしれないわよ。私に選挙で勝てたりして」

カスミはカスミで、以前から見かけによらずウイットに富んでいるというか、ユーモアのあるジョークをよくいう人間ではある。ただ、ほぼ真顔のような表情からこれを繰り出すので、ジョークなのか、本気でそう言っているのか、たまにわからなくなることが怖いのだが。

「いくら安楽加清に勝つためとはいえども、そんな手は使いませんことよ！だいいち私は、そんな庶民の薄汚い中年男性が好むような物を趣

味とするほど下品な存在では―」

「ジョークよジョーク。いちいちムキにならないことよ。私に勝ちたければ、まずは煽り耐性を身につけることね」

「キーツ！ムカつきますわね！」

「そういうところよ」

「ね、ねえ。あの2人、なんだかんだで相性いいんじゃない？」

言い合う2人から距離を置き、愛海が私にこう耳打ちしてきた。

「確かに。ライバルとしては敵対しているのかもしれないけど、なんというか―」

私は改めて彼女たちの方へと視線を移し、続ける。

「なんというか、お互いに認め合ってはいるんだよね？」

「多分ね。リスペクトしてるってことよ。彼女らにとって、今の環境ではまともに渡り合えるライバルはお互いにただの1人だけというのをわかっているからでしょうね」

愛海は何やら難しい言葉を使いながらそう解説してくれた。

「リスペクト？」

「……尊敬してるってこと。その部分は、私とヒカルちゃんみたいな関係にも似てたりして？」

愛海はニヤリと笑いながらそう言った。

「え!? マナミちゃん私のこと尊敬しているの!?!」

「してるしてる。どういふところか聞きたい？」

「うん！教えて教えて！」

愛海ははしやぎ始めた私を見て、さらに小悪魔的な笑みを大きくすると、意地悪な声色で、私のリスペクトしている点を発表してくれた。「そういう、いつまでも可愛い子供っぽいところよ。ヒカルちゃん可愛いから好きだわ〜」

「……それって褒め言葉？遠回しにアホって言ってるんじゃない？」

「想像に任せるよ。ぷぷぷ」

「……な、なんか嬉しくない……」

「光山さん。中学生にもなったんだし、使える語彙を増やすことね。そういうのは、オブジェクトに包むっていうの。つまり、オブジェクトに

アホって言ってるわけね」

そこに、先ほどまで言い合っていた（もつとも、紅羽がムキになっ
ていただけだが）2人が追いつき、加清がこう口を挟んできた。

「あ、安楽さん！ヒカルちゃんにアホって言うのは禁句ー」

「やっぱりそうじゃん！あのねえマナミちゃん！いい？私はアホじゃ
なくて天然なの！前にも、何回も言ったでしょう!?!」

「ほーら始まった」

愛海はやれやれといった仕草を見せる。

「これは悪いことをしたわね」

加清はそうは言いながらも、特に悪びれている様子はない。

「とはいえ、天然というのも、それはそれで時に悪口というか、少なく
とも褒め言葉ではない気がしますわね」

紅羽は小声でそう呟いていた。それもそうではある。

「思っていたより4人の波長があっているし、まだ何もしてなくて、た
だ歩いているだけなのに随分と楽しそうレテイ」

いつの間にか愛海のポケットから這い出ていたレティツが嬉しそ
うに、同じく私のポケットから人知れず抜け出していたラエティに話
しかける。

「波長合っているかはわからんラエが……まあ、確かに悪くはないラ
エね」

「あれがプリキュアに変身する人間どもか……あんなガキどもを、レ
イン将軍もスノウも、身体がなまっていたとはいえサンダーも倒せな
かったと思うと、我がカバークラウダーのメンツも総潰れ。屈辱的で
はあるがー」

この様子を、はるか上空から見下ろす人影があつた。クラウドの側
近、ストームである。

「ゆくゆくはクラウドを超えるかもしれないあの人間が含まれている
のなら、それも仕方のないことではあるか。サンダーはまだともか
く、今のレインやスノウでは、本気でぶつかっても互角、倒しきれな
いかもしれない。それだけの逸材だ。近くで見れば見るほど、その果

てしない潜在能力に惹かれる。これほどまでの人間がいたとはな……」

ストームはそう言いながら、無意識のうちに舌舐めずりをしていた。

「それで、ミニクイナー。奴らはどこに向かっている?」

彼はそのままの体勢で、耳にかけていたワイヤレスのヘッドマイクのようなものにそう囁きかけた。クラウドのところにはいた時には装着していなかったものだ。

「……そうか。タピオカ……聞いたことがあるな。それを目当てに、なるほどな。もういい。奴の洞察力では、深追いすれば気づかれる可能性もある。慎重にやろう。情報が得られたならばそれで貴様の仕事は終わりだ」

何を聞き取ったのだろうか。ストームにしか聞こえないものだったのか。

だが確かに、ミニクイナーと呼ばれた何かから、私たちの行き先の情報を得たようだ。

「タピオカ、ちょうどいいな。カオスシードとサイズも色もそっくりだ。ククク……。とりあえずサンダーを探し出し奴にやらせよう。リベンジマツチに燃えているだろうからな。それに邪魔なやつではある。ヘマをするようなら、ついでに消しておくか。さて、奴のウィザパワーのデカさならすぐに見つかるだろう。……いた。かなり遠いが、仕方ない。迎えに行つてやるか」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべたストームは、その場から消え去った。

—————

人里を離れ、いや、それどころか日本を離れ、ありの1匹の気配すらも感じない、水平線の彼方まで続いているような砂漠の中にただ一つポツンと佇む人影があった。

その者は砂漠の真ん中で仁王立ちし、集中力を高めているのだろう

か。じつとしたまま動かず、だが確かに、周囲の砂を、彼を中心に発生している乱れた突風に乗せ、小さな砂嵐のような現象を起こしている。全て、奴から放たれているウィザパワーによる影響だろう。

「……!!」

その状態が数十秒続いた後、彼は突如として目を見開き、両腕を身体の前方へと差し出し、ゆつくりと胸の前で両手のひらを重ねるように動かした。気がつけば、彼の身体はスパーク状のオーラをまとうっており、周囲の砂嵐も激しさを増していた。

「サンダー……ストリーム!!」

そう叫んだ次の瞬間、合わさった手のひらから黄金の光線が放たれた。光線は大量の砂をえぐり取り、まっすぐに水平線の彼方へと走っていく。

だがその光線は、ある地点で軌道を変え、今度は空の彼方へと一目散に駆け出した。しばらくして、大きな爆発とともに光線は消え去ったが、その爆風や衝撃波が彼の元へと届くことはなかった。それだけの高度で爆発したのだろう。

「かなり力が戻ってきているようだな」

軌道が変わった地点からそう声が聞こえてきた。

「……ストームか。俺を処刑にきたのか?」

サンダーは忽然と現れた上官に対し、身構える。いつでも戦闘に移れるという体勢だ。

「そうしてやりたいのは山々だが、クラウドはどうしたとか、貴様を好きにさせたいらしい」

「ならば何の用だ?俺の準備運動を手伝ってくれるってわけか?」

「ああ。それもとっておきの運動をさせてやる。プリキュアを倒したくはないか?」

「……ふん、やはりな。なんだかんだで、クラウド様もストーム、貴様もこの俺を戦力として計算したらしいな。まあ当然だ。我が帝国のナンバーズリーはこの俺だからよ。それに、今なら貴様も倒せるかもしれないぞ?」

サンダーは紫色のオーラを纏い、さらにその周囲をバチバチと音を

立てるスパーク状のオーラで重ね着している。相当にエネルギーを充実させており、燃えたぎるほどの戦意を感じさせる。

「調子にのるな、大罪人めが。エンシヤントウエポンを手に入れたレインの方がまだ格が上だ。単純な火力や戦闘力では劣っても、やはり奴は誇り高き將軍。仕事を果たし、そしてそのプライドも絶対だ。誇りもクソもないようなただの罪人が、二度とクラウドや俺の次の立ち位置を自称せんことだな」

「……レインのような青二才以下とされるとはな。だったら試してみるか？まあ、返答は求めてないが！」

サンダーは稲妻のごとくスピードで瞬時にストームの背後に回り込み、思い切り拳を振り上げた。瞬きをするよりも早く、優位な後ろをとる。流石の強さだが――

「!!」

次の瞬間、サンダーはその巨体をピンポン球のように吹き飛ばされ、砂漠の中に頭から落下した。何が起こったのか、全くわからない。「調子にのるなど言っただははずだ。貴様は俺に触れることもできない。さあ、その有り余る闘争心をプリキュアにぶつけてこい。キュアジョイフルが貴様の相手をしてくれるはずだ」

ストームは先ほどの位置から全く動いていない。何もせずを彼を吹き飛ばしたとでもいうのだろうか。

「……チツ、流石にストームの野郎と渡り合えるレベルには力が戻ってなかったということか……いいだろう。だが、取引をしないか？」
「ふん。罪人の持ち出す取引に、こちら側にメリットがあるというのか？」

「ああ。俺のような面倒な罪人につきまとう必要がなくなる。悪い話ではないだろう」

「……聞くだけ聞いてやるが、くだらん内容であればこの場で消し去ってもいいのだぞ。そのくらいの力量差があることくらいは、貴様の足りない脳みそでも理解しているな？」

「もちろんですぜ、ストーム『様』」

サンダーはニヤリと笑い、珍しくも上官に対して敬称をつけた。逆

に嫌な予感がするというものである。

「俺が今回、プリキュアを倒し、奴らのクリアハートを手に入れることができれば、俺を無罪放免、自由の身にしろとクラウド様に伝えるんだな。カバークラウドの配下を出、強さだけを求め、そして殺したいだけ殺す。自由の身にな」

「……愚かな。クラウドに消されるだけだ。それとも、まさかクラウドをも超える力を身に付ける自信でもあるのかな?」

「さあ、どうかな。だがクラウド様もお忙しい方だ。国を出た自由の人間を消しに動くほど暇じゃなからう」

「そういうことか」

「いいんじゃないですか? 認めましょう。プリキュアからクリアハートを奪えれば、好きにきなさい」

その時、突如空からクラウドの声が聞こえてきた。このような芸当までできるらしい。

「クラウドも物好きな奴だ……。感謝するんだな。我が帝王の器の大きさに」

「ありがたき幸せ。クラウド様には幾度となく救われた身。国出ても忠誠を約束します」

サンダーはその場に跪き、そう述べた。このような様子をみるに、世渡りは上手いらしい。

「ただし条件を加えましょう。ストーム、彼にカオスシードを渡しなさい」

ストームは言われるがままに、サンダーに黒い種子を投げ渡す。

「これをストームの指示する人間に植え付けた上で、先ほどの約束を果たせば、あなたの希望を飲みます。最後の仕事だ。そのくらいの加算ノルマは余裕でしょう?」

「……カオスシード……なるほどな。俺にも少し、クラウド様のお考えになられることが理解できた気がする。承知。ではストーム、俺を奴らのところに連れて行くがいい」

「プリキュアを舐めるな。忠告しておいてやるが、奴らはすでにエンシャントウエポンを一つ扱える。せいぜい、返り討ちに遭わないよう

に気をつけることだ」

そう言いながら、彼ら2人はその場から姿を消した。

—————

「いや、この4人で一緒に遊ぶだなんてこれが初めてだけど、案外気があうんじゃない？ 私たちってさ」

先頭を歩く愛海がそう言った。

「まあ、たまの息抜きには悪くないわね」

意外にも、加清もこれに同調しているようだ。

「安楽加清が遊びに加わる日なら私もついていきますわ。可能な範囲で、休日の行動も監視したいことですし。弱点が見つかるかもしれないわ」

「別に構わないけど、あなたにそんな余裕があるのかしら。私を倒したいのなら、休みの日も自己鍛錬に勤しむべきじゃないの？」

「……いい、いちいち癪に障りますわね……。煽り耐性、煽り耐性……」

紅羽はブツブツと唱えながら、反論を堪えているようだ。

「やっぱり仲良いじゃん、2人とも」

その光景を見ていた私は、思わず吹き出してしまった。ライバル、というより、この様子はまさに友達のものようだ。

「な!? 仲良しなんかじゃありませんわ! 安楽加清は私の超えるべき壁、永遠の宿敵ですよ! 彼女と馴れ合う気など」

「心外ね。こんな、一見育ちの良さそうなお嬢に見せかけた、下品なエセセレブと仲良くだなんてこっちから願い下げよ」

「え、エセ!? 言いましたわね! やる気ですよ!? 後悔させて差し上げましょうか!」

「できるものなら、やってみればいいじゃない」

2人がバチバチと火花を散らしながら睨み合う。もともと、ムキになっっている表情なのは紅羽のみで、加清はというと、あいも変わらぬ涼しい顔と冷たい目をしている。

「ま、まあまあ……」

「やっぱり仲良しレティ」

「人間はこれでも仲良しと呼べるラエか……?」

私と、その両肩の上に乗っていた妖精たちは、苦笑いしながらこれを見つめていた。

「あ、そろそろ着くんじやない?ほら、あそこにお店でてるし!」

愛海が、遠くを指差しながらこう言った。確かに、彼女の指す先にタピオカの屋台が見える。

「あれ?もう少し先だったような。こんなところにタピオカ屋さんなんてあったかな?」

私は不思議に思い、もう一度チラシのマップを確かめるが―

「まあまあ、なんでもいいじゃない。そろそろみんな、休憩挟みたい頃でしょ?このご時世、どこでも急にタピオカ始めたりもするし、新しいお店かもよ!」

「……それもそうねえ……」

「確かに、少し喉が渴いたわ。誰かさんとおしゃべりをしてしまったせいかしらね」

「ええ、私も左に同じく喉が乾きましたことよ。庶民に流行りの飲み物がどんなものか、試してあげましようか」

相変わらず睨み合っているが、別に喧嘩をしているわけでもなさそうだ。

「じゃあとりあえず、一軒目はあそこということぞ!」

私たちはその屋台を目指して足並みを揃えた。

「……なんで俺がこんなことを……」

その屋台の中でタピオカミルクティーをこしらえていたのは、あのサンダーであった。エプロンとコック帽を身につけ、簡単な変装まで施している。

これはストームの案だった。タピオカ屋としてプリキュアをおびき出し、カオスシードを混入させたミルクティーを、彼の指定する人間に飲ませる、という作戦らしい。

無論、そんなことを知る由もない私たちは、微塵の疑いを持つことなく、この店へとたどり着いた。

「……きやがったなプリ……じゃねえ。い、いらつしやいお嬢さんたち」

「こんにちはは〜！タピオカミルクティー、4人分ください！」

「承知…じゃない、おう！4人分ね〜」

「……大田さん、何か変じゃない？」

早くも異変を察したのは加清だった。店主が明らかにおかしいな噛み方をしていたからだろう。

「そうかな？普通のお店だと思うけど」

だが、この中では加清や紅羽にも劣らない頭脳を持つはずの愛海のほうはというと、特に何も気になつていなかったようである。

「そういうことじゃなくて……まあいいわ」

「へいお待ちどう！4人ともみんな個性的だから、これは俺からの大サービスだ！その黄色いおチビちゃんには、このオレンジのストロー。その茶髪の嬢ちゃんには、この青いストローの。赤っぽい髪の嬢ちゃんは赤色の、そしてそのスマした嬢ちゃんには紫のストローだよ。みんな違う色！インスタントグロブみたいなやつにも映えるだろうよ」

「おおーありがとうおじさん！」

私は何も気にせず、むしろこのように気を利かせてくれた店主に感謝しながら、これらをみんなに手渡した。

「じゃあいただきますー！」

「へえ〜。まあ、私はインスタやってないから映えとかは別にいいけど、でも確かにおしゃれな感じするわね。写真くらい撮るときですか！」

愛海も上機嫌である。

「あら。この黒いツブツブがキャビアのようですよ！案外私のお口にも合うかもしれませんわね」

「……まあ、いただくけど。それにしても、こんなことをして何が目的なのサンダー。私たちを手懐けようってわけ？」

加清がストローに口をつけ、ドリンクを一口吸い上げ、何粒かのタピオカの食感を楽しんだ後にそう言った。

「……サンダー？惜しいな、おじさんの名前は三田ってんだ。それに何を言っているんだい？店に来てくれたのは君たちの方だろう」

「慣れない演技はするものではないわよ。別に毒が入ってるわけではないみたいね。これは普通に美味しいわ。おしやれな写真も取れるし、確かに、流行する理由がよくわかる」

「ちよ、カスミちゃん？何を言ってる」

まだ状況を飲み込めていない私をよそに、彼女は続ける。

「毒殺目的でもないのなら、何がしたいのって聞いているのよ。あなたは前に戦ったときに、軍人ゆえに武闘家としての心はなくとも、明らか卑怯な戦い方をする人ではないことはわかったわ。だからそこは信頼して毒味したわけだけど。私たちと戦いたいのなら、前みたく正面から襲ってくればいいじゃない？」

「まあ、さすがの洞察力だと言ったところか。もう少しバレないでいて欲しかったが」

サンダーはそう吐き捨てながら、変装を脱ぎ捨てた。

「ほ、本当にサンダーだったの!？」

私たちも驚きながらに身構える。

「目的か。それはもう果たされた。貴様らはすでに、俺の作ったドリンクを飲んでしまったからな。あとは、貴様の言う通り、真正面から戦うだけだ」

「飲ませたから目的は果たされた……？やっぱり、毒とか入ってたんじゃない……」

私は背中から汗が噴き出すのがわかった。

「案ずるな。俺は確かに殺しを快楽としているが、それはこの力でねじ伏せることに価値がある。そんな弱い奴のやり方は使わない。細かいことはいいだろう。俺と戦え。今日は、前のようにはいかんぞ……！互いに本気でやりあおうではないか……！」

それだけ言うと、奴は戦闘態勢に入った。みるみるうちに、ただ立っているだけでは押し潰されてしまいそうなほどの邪悪な力がこの場に満ちていく。ウイザパワーを高めているのだろう。

「大田さん、ひとまず私にクリアハートを。もう一つはどうしましょ

うか？」

「わ、私が！私のパワーなら、力になれるかも！」

「……光山さん、ここは、わたくしに任せていただけませんか？」

クリアハートを取り出し、構えようとした私の隣に紅羽が歩み寄ってこう提案してきた。

「月野さん……う？でもー」

私は一瞬戸惑い、相棒妖精に視線を移した。

「いや、金持ちの真価を問うにはちょうどいい場面ラエ。ここは2人に任せるのもありラエね」

あれだけ紅羽のことをよく思っていなかったはずのラエティからは、意外にもこれに賛成という意見が飛び出してきた。

しかし確かに、互いに競い合う彼女ら2人が、今度はプリキュアとして起こす化学反応はいかなものなのか、興味はあるもの。

私は小さく頷くと、そのまま彼女にクリアハートを手渡した。

「なら、お願い、月野さん！」

「おほほほほ。ただし、久々かつ、これが2回目の戦いになりますわ。まずくなったら、あなたか大田さん、どちらかにお代わりしますので、備えていていただけます？」

「言われなくても！」

愛海は、そのような心配は無用と言わんばかりに、頼もしく応えた。

「決まったみたいね。ならいくわよ月野さん」

「プリキュア・エキサイティングファイバー！」

声を揃えて変身の合言葉を叫んだ。その瞬間、二人は真白き光に包まれる。

変身が完了し、彼女たちを包んでいた眩い光は徐々にその輝きを失い、光の破片となりあたりに飛散することで消え去った。

その中心に立っていたのは、尻にまでかかるほどの長い、濃い紫紺のポニーテールが特徴的な、どこか大人っぽい雰囲気も醸し出す紫色の戦士と、橙色を基調とした衣装に様変わりし、髪も真紅に染め上がった赤の戦士であった。

『楽しむ心！キュアジョイフル!!』

『高貴な心！キュアイラーレ!!』

『闇に染まった心に元氣と天氣を取り戻す！輝け！ワクワクプリキュア!』

2人による決めポーズもキマった。あの2人がこのようなことを口にし、またポーズを取るというのもまた新鮮な光景である。

『イラーレ、せいぜい、私の足を引っ張らないように努めることね』

普段は冷静な口調の彼女だが、プリキュアに変身を果たすと、その溢れ出るキサトエナジーの影響からか、声が少し弾んだものへと変わるのだ。

『その憎まれ口が開けなるくらいの、圧巻で華麗な、美しい舞を見せて差し上げますわ!』

これはイラーレにも同様の効果があるようで、通常態ではムキになるような煽りにも、このようにポジティブに言い返すことができるようである。

『準備はできたようだな……。最初から本気でいかせてもらおうぞ！ハアアアア……。』

サンダーはそう宣言すると、その場で腰を低くし、岩山のように鍛え上げられた黄金色の全身をさらに強張らせ、力を高め始めた。ただでさえ筋骨隆々の身体が、紫色のオーラとスパークの走るオーラの重ね着の下で、さらにわずかに膨張する。ただ立っているだけだというのに、彼を中心とした半径数メートルの地面はその身体から放出されるウィザパワーのオーラだけでめぐり取られ始めた。元々自身の放つ青白いスパークのようなオーラの影響で逆立っている白髪はさらにその勢いを増し、もはや毛髪というよりは、ツノではなかるうかというところまで達している。

『これは……。想像以上ですわね。どうです？ジョイフルさん』

『……前に戦った時よりも遥かに上のパワーを感じるわ。本気というのもハツタリではなさそうね。氣をつけて』

「そこの赤色の貴様！大したオーラを感じ取れるぜ。貴様もかなりの使い手だな?」

キュアイラーレは、常人には目に見えない『オーラ』で相手の力量

をある程度凶れる能力のあるサンダーにそう評価された。確かに、潜在的なキサトエナジーの量は凄まじいだろう。彼女はこれまで、何度加清に敗れようとも折れずに挑戦し続けている身なのだから納得はいく。

もつとも、ここで彼の指すオーラとは、今彼の体にまとわれているものとは別物らしい。これはどちらかというところ、可視化できるほどまでに高まったウィザパワーの鎧といった方が適切か。

『ええ、もちろんですとも。ここにいるキュアジョイフルを超える存在。それこそが、私キュアイラーレですわ。まずはその華麗な技というものをご覧に入れて差し上げましょう！プリキュア！イラーレフレイム!!』

彼女の利き腕である右腕の先から、大量のキサトエナジーが溢れ始め、これがビームのような形状でまっすぐにサンダーめがけて飛び始めた。それは空中で突如として大きな火炎に変貌。勢いよく燃え盛る真紅の炎が彼を襲う。

「確かに美しい技だ。だが、戦いはコンテストではない。華麗さだけでは、敵を倒すことはできぬ！うおおおおおおお!!」

イラーレフレイムは、そう叫んだサンダーの気合だけでかき消されてしまった。

『むむ……』

「ちよ、ちよつとヤバくない!? あいつ、前来た時ほとんどもなく恐ろしかったのに、もつと強くなつてない!? プリキュアの技が通用しないなんて!」

物陰に避難して戦いを見守っている私たちなのだが、そこで愛海が震えながらそう呟いた。

「本来サンダーは圧倒的な戦闘力を誇る凶戦士ラエ……。前は謹慎処分か何かで解けた直後だったから身体が鈍っていたラエが、今はかなり力が戻って来ている……ってところラエかね」

「こ、これ、エンシヤントウエポンのひとつくらいでは埋まらない差なんじゃ……?」

私も震えながら、手のひらの中でギュツとシャイニングバードを握

りしめながら呟いた。キサトエナジーを力の根源とするプリキュアたるもの、弱気になることは戦闘力の低下にもつながるためご法度だということでは頭では理解していても、その前に私たちはまだ中学生になったばかりの女子である。弱気になるなという方が無茶だというものだ。

『サンダー、戦いはのど自慢大会でもないのよ。隙だらけになるようなことは控えるべきね』

そんな私たちの心配をよそに、キュアジョイフルはその間に奴の背後をとっていた。素早く背中を蹴り上げ、奴の身体を宙に浮かせた。「ぐっ……ほう。ここまでウイザパワーを高めた俺に攻撃を当て、さらには蹴り飛ばしやがったか……」

だが大して効き目はないようだ。すぐに空中浮遊をし、2人の戦士を同時に見下ろせるポジションを取る。

『いかがですジョイフル？勝算のほどは』

『そうね……私一人じゃ厳しいわ。あなたの力量次第ってところかしら。今度は二人掛かりで仕掛けるわよ。ついてこれる？』

ジョイフルはニヤリと笑いながら、挑発するようにイラーレにそう応えた。

『当然ですわ。……行きますわよ！』

2人は同時に大地を蹴り、瞬時に彼と同じ高度にまで躍り出た。

まずはイラーレが、キサトエナジーによって生み出された炎を纏った足を命中させるべく、身体を捻らせながら回転蹴りをお見舞いしようとして接近する。

『ハアアアア!!』

『避けるまでもない……!ハア!』

しかしこれを、片腕でがっちりガードするサンダー。ウイザパワーの鎧を重ねている彼にとつては、炎の熱さすらも感じない様子なのは厄介だ。しかしイラーレも流石である。ガードに弾かれるわけではなく、あくまでそれをも蹴り飛ばさんと、さらに力を加えていく。これにより両者は数秒間せめぎあうことに。

『プリキュア!ジョイフルスラッシュ!!』

足と腕が鬩ぎ合い、わずかな隙が生まれたところに、今度は腕に紫色のキサトエナジーをまとい、ブレードのように変化させたジョイフルが斬り込みにかかる。

「チッー小賢しいーぜやっー!」

瞬時にガードしていた方の腕に力を込め、イラーレの足をはねのけると、すぐさまジョイフルへの迎撃体勢に入り、もう片方の腕でこれをブロックした。これでは攻撃の隙がないように思えるがー

だが、ジョイフルの攻撃はこの一撃だけではなかった。もう一本の腕も同じようにブレード状のエナジーを纏わせ、二刀流で連続攻撃に入った。これには予想していなかったのか、ガードが遅れたサンダーは、胸に一発の攻撃を許してしまう。二重のオーラによる鎧ごと切り裂き、まともなダメージが通った瞬間だった。

「くそつたれめ!流石にキュアジョイフルは別格か……!?!」

『あなたは今、2人を相手にしてるってことをお忘れなきよう!』

その背後に、再びイラーレが飛びかかって来た。ジョイフルとは異なり、空中浮遊の能力は持ち合わせていないため、一度着地した後にもまた大ジャンプをして来たということになるが、この瞬間にそれを行なったということは、相当なスピードを秘めているという事実を示してもいた。

『てやーっ!!』

今度は両足に炎を纏ったイラーレによる、目にも留まらぬ速度の連続蹴りが始まった。

前方からはジョイフルの、後方からはイラーレの両者の小刻みだが確かにパンチのある連続攻撃を受けていては、流石のサンダーも無傷とはいかない。

圧倒的な力を持っているのは確かで、2対1ながらもこれらの攻撃を捌き続けてはいたが、それでも何発かの攻撃は通っており、さらに彼は防御に手いっぱい反撃する機会がなさそうな様子だ。2人の予想外の善戦に、私はポカーンと口を開くしかなかった。

「す、すごい……あんなにやばそうな敵を相手に互角以上に……」

愛海に関しては、すっかり震えが止まっていた。

「……でもこのままじゃ勝てないレティ……。あれだけの、目に見えるほどのキサトエナジーを放出し続けていたら、キサトサイクルにも入らない限り消耗しきってしまうレティよ……。互角以上には見えても、不利なのはプリキュアレティ」

「今のところ、そのキサトサイクルに容易に突入できるのはキュアスパーク、ヒカルだけラエ。それに、相手が相手、突入は厳しいかもしれないラエね。2人とも、そろそろ交代の準備ラエ！まだ合体必殺技やシャイニングバードを起動できるくらいのエネルギー残量はあるはずラエからね！」

妖精たちは、私たちとは異なり、冷静に戦況を分析していたようだ。なるほど、善戦しているのは確かとしても、ぬか喜びしてられるほどではないというわけなのだろう。

「罅があかん……。せいっ!!」

サンダーは両手を広げ、スパークを纏ったウイザパワーを一気に放出した。

『キャッ!』

その勢いで、彼を挟んでいた彼女たちは吹き飛ばされてしまう。一旦距離を取るといふことだろうか。

「俺としたことが……。まさか、今の状態でも手こずるとはな。伝説の戦士プリキュア、やはり侮れない存在か……。私事だが、俺様はこの戦いに色々とかかっているのな。とっておきで、一気に決着をつけてやる！」

そう言いながら急降下し、地響きを鳴らしながら着地した。すぐさま、広げた両腕をそのまま胸の前で重ねる構えをとる。

「……………!!」

極限まで集中力を高めているのだろうか。先ほどまでのような、叫びを伴う構えや動作とは異なり、静かにパワーを溜めている様子だ。

『……………気を付けて、相当な大技がくるわよ』

『そのようですね。こっちも、フルパワーの必殺技を、奴が撃つ前に撃たないとやられてしまいそうですわ』

2人も、これまでとはさらに格の違うウイザパワーをいやでも感じ

取ってしまったのか、身構える。プリキュアの切り札、合体必殺技を持ってしても、同時撃ちは相打ちか、もしくは押し負けてしまうことだってありえそうさ。

逆説的に捉えれば、今この瞬間は隙だらけとも取れる。やるなら今だ、と2人はアイコンタクトをとり、頷きあった。

「ら、ラエちゃん！これじゃ交代の隙が……！」

「ぐ……ここは2人に任せるしかないラエ……！」

「……いや、今私たちにもできることはあるわ！あいつの集中を邪魔してやるのよ！」

愛海は臆せずに、そう立ち上がった。大した度胸である。

「き、危険レティ！生身で向かったら、最悪ー！」

「わ、私もマナミちゃんに賛成かな……！どのみち、次の必殺技でプリキュアはエネルギーが切れちゃう。そうなったら負けなんだから！少しでも勝てるように、できることをしないと！」

「ま、待つラエ！ヒカル！マナミ！」

ラエティの制止を振りほどき、私たちは物陰から飛び出すと、走り出した。

同じく集中力を高め始めていた2人のプリキュアは、それには気付くことはなく、その手を握り合い、重ねていた。

集中しキサトエナジーが高まっている証拠だろう。余計な雑念が消えている様子だ。普段ならば絶対に手など握らないはずの2人が、今は勝つことだけに集中している。なんの迷いもなく、その手を重ねていた。

『プリキュア!!ジョイフルイラーレエキサイト!!』

繋いだ手の先に、虹色に輝く、バスケットボールほどの大きさのエネルギーの球体が、ブウン……と音を立て現れた。その球体はみるみるうちに密度を上昇させ、限界に達した瞬間、目も眩むほどの眩しい光を発生させながら、破裂し、そのまま虹色の光線と姿を変え、サンダーへと突っ込んでいった。

エンシャントウエポン無装備で放つ技としては、これがプリキュアの切り札、最高火力の必殺技となる。

「喰らえ……サンダー……ストリーム……!!」

それに少し遅れて、サンダーも大技を放とうとしていた。しかし、発射の直線、彼の目の前を何粒かの石が横切った。私たちによる投石だ。中学生女子が、それなりの大きさの石を投擲できる範囲ともなると、相当な近距離になるが、極限にまで集中していたプリキュアもサンダーも、全くこれに気がついていなかったのだ。

「ヒカルちゃん！伏せてーっ!!」

私たちはとっさに、腕で頭を守りながら、その場に伏せこんだ。

「し、しまった！気がブレた……!」

その次の瞬間、その大技こそ発射されたものの、サンダーの光線はまっすぐに、ではなく時折揺らぎながら直進していた。わずかな集中の乱れが、技の制度を下げたのである。

あの凶戦士の大技といえども、これではフルパワーとはいかない。

光線は一筋にまっすぐ、ではなく、道中で四方八方にエネルギーを漏らしながら進んでいた。威力を落としながら進んでいるのである。

そして両者の必殺の光線はある地点でぶつかり合ったが、一点集中のプリキュアの光線と、いまこの瞬間にも火力の落ち続けているサンダーの光線とでは、勝負あったも同然だった。

「ば、バカな……うおおおおお……!!」

自身の技を押しつけられた直後、ガードを取る暇もなく、もろにプリキュアの技を全身に浴びたサンダー。必殺の光線は彼の身体を丸呑みしながら、その遙か先の空の彼方へと、彼ごと吹き飛ばして行った。

ギャグ漫画でしか見たことのないような、遙か上空のキラーン、といった光とともに、サンダーは消え去ったのである。消滅したのか、はたまた、ただ、うんと遠くへと吹き飛ばしただけなのかは、ここからではわからない。

「ふう……なんとかなったみたいね」

今の一撃で完全にエネルギーを使い果たしたのか、プリキュアの2人は自然と元の姿に戻っていた。

「2人だけでは完全に負けていましたわ。さしずめ、4人でもぎ取っ

た勝利、といったところでしょうか？おーほっほっほー！」

紅羽とは元気な人間である。まだ高笑いをする気力があるようだ。「しかし、危ないことをするのね。おかげで勝てたとはいえ……」

加清は、信じられない、と言わんばかりの顔で、私たちを見つめていた。

「あはははは……」

私も、気がつけば体が動いていただけにすぎない。度胸がある、というよりはただの無鉄砲と言ったほうが近いかもしれない。それよりも、とつさにこの作戦を思いつき、臆することなく実行に移したマナミこそがMVPだろう。さすが、かつてはあの紅羽の頬をはたき飛ばしただけはあるーと、本人に言うのと怒られそうなので、思っておくだけにしておくが

「にしても、せつかく初めて4人で集まれた日曜日だったのに、残念なことになったね……」

その愛海はというと、その後の第一声がこれなのだから驚かされる。

「まあ、悪くはなかったわ。それなりに楽しかったわよ。タピオカも飲めたし。一口程度だったけど……それに運動もできたわ」

加清はまたいつものポーカーフェイスに戻りながら、それだけ言った。

「そっか。それなら良かったけど……」

「……皆様方、何故ゆえ、そうやってもう1日が終わりましたの……のような顔をされてますの？まだ陽が落ちるまで時間はありますわ。続きをすればいいじゃないですか。疲れたとおっしゃるのならば、すぐに執事に車をよこすように命令いたしますが？」

ほんのりだがしんみりとした空気が数秒漂った後、紅羽がそう切り出した。そう言われて、改めて腕時計を確認してみたが、確かにまだ時間はある。

「……じゃあ今度こそ、行きたかったお店に、行きますか！」

私は元氣よく立ち上がった。

「そうしますか！よし！みんな、ヒカルちゃんに続きましよう！」

「……紅羽のことはどうするレティ？」

歩き出した私たち一行の少し後方で、妖精たちが身を寄せ合って話を始めていた。

「まあ、もう認めざるを得ないラエよ。あのサンダーにもついていける戦闘能力も、そしてこうやって、なんだかんだで溶け込んでいる様子も。……僕は嫌いラエけど」

「なら、この4人でチームは確定レティね！私の言った通り！みんな遊びに行ったら仲良くなれたレティ！」

「……そうラエね。あとは、チームワークもそうラエが、個々のレベルアップも必須……。最低限でも、一人一人がエンシヤントウエポンを扱えるように、そしていつかは、クラウドの野望を断ち切れるほどまでの力をラエ。まだ子どもな彼女たちには、酷ラエが……」

「おい、ラエちゃんレティちゃん!!置いていくよ!!」

ラエティの考え事を一旦遮断させてしまったのは、私のその一声だった。

「……子どもラエね……。でも、世界を変えられるのはあの子達だけラエ。……置いてくくなラエ!!待つラエ!!」

ラエティは呆れたように、でも少し安心したかのように笑うと、レティツと共にスピードを上げ、私たちの後を追った。

続く

第1話 「波乱の幕開け!?選挙と異世界情勢!!」

第1話 「波乱の幕開け!?選挙と異世界情勢!!」

4人で集まり過ごした日曜日の翌日の朝だった。

課されていた宿題は全て終わらせ、保護者に渡さなければならぬプリント類も親に渡しているはずだ。つまり、休日をしつかり休日として楽しみながらも、最低限のことはこなしたはずなのである。

それだというのに、なぜか落ち着かない。何かを忘れている気がしてならないのだ。

「ヒカル〜・マナミちゃんが迎えにきているわよ〜!!」

部屋の外、階段の下、玄関付近だろうか。そこから母の声が聞こえる。

「はーい!!今降りますよ〜!!」

登校のための支度もすませてはいた。制服にも着替え、カバンも持った。あとは行くだけなのだが、どうにもその、何かを忘れているのではという感覚でソワソワする。

「何してるラエ。トイレでも我慢してるラエか?」

そんな、少し挙動のおかしい私を見た妖精ラエティが、真顔のままそう訊ねる。

「お、女の子にそんなこと…!!常識つてのものが無いの!?!」

「人間の常識なんか知らんラエ。遅刻するラエよ。とつとつ行ったほうがいいラエ」

人間の常識なんか知らん、という、妖精目線からは至極当たり前のことを返されては、これ以上会話が續かない。この生意気な妖精に、いつかこの手でお灸を据えてやりたいものだ。

「むう〜…つて、あれ?あなた今日はついでこないの?」

「そうラエ。レティツと一緒に調べ物があるラエね。…どうしたらラエ?僕が行かないと寂しいラエか?まあ、ヒカルはお子ちゃまだから無理もないラエ」

生意気なこの小動物は、ニタニタと笑いながらそう言った。

「だ、誰がこんなのが来ないくらいで寂しくなるもんですか!せから

しいのがついてこなくて、むしろとってもいい気分だね！」

「ほう。この僕をこんなの呼ばわりとは、えらくなつたラエな」

バチバチと睨み合う私たち。だが、こんなことをしている場合ではなかった。

「か、帰ったら覚えておきなさいよ！このちんちくりん！」

私は捨てセリフのようにそう言うと、慌ただしく部屋を飛び出して行った。

—————

「何者かは知らんが……こんな荒地に何の用だ」

嵐とも呼べるような激しい雨風が吹き荒れる、広大な、だが建物などといった文明物らしきものは何一つ見当たらない土地に、2人の男が向かい合うように立っていた。

1人は、その身丈は2メートルはゆうに超え、上半身は裸の筋肉に覆われた大男。スキンヘッドな頭部が、より彼に威厳を与えているようだ。服を着ていないが、確かに、この身体では着れる服がないのだろう。

もう1人は、灰色の巻貝状の髪こそ特徴的だが、大男の腰のあたりまでしか身長のない、子供のような男だ。だが、黒のマントを靡かせ、その下に着ている、胸部に真紅のゼラニウムの花の模様が刺繍された燕尾形ホック掛けの洋服という豪勢な衣装が、彼が只者ではないことを示しているかのようにも見える。

「私の名はクラウド。あなたに用があつてきたのですよ。この地に嵐が起こっているのも、あなたのその膨大なるウイザパワーのせいでしょう？ものすごい力を秘めておられます。それに魅せられてやってきた、というわけです」

小柄な男、クラウドはそう答えた。

「ウイザパワー……？」

「……ご存知なかったですか。まあとにかく、あなたの力がすごいので、惹かれてきましたってことです」

「……そうだ。俺は強すぎるらしくてな。物心がついた頃には、1人この地に置き去りにされていた。どうも、俺の親や周囲は、俺がこう

して無自覚に嵐を巻き起こしてしまうのを嫌ったらしいな。ここは無駄に広いが何も無い土地。俺を封じ込めておきたいのだろう」

大柄な男は、一見不遇で悲惨にも見て取れるような境遇をも、自分の強さに誇りがあるのだろうか、それでもニヤリと笑いながら話した。

「なるほど。でもここじゃ生活ができないでしょう？他の国に行けばいいものを」

「そうしたいのは山々だが、あらゆる国との境に強力な結界を張られている。いかに俺が強いといえど、接近するだけで頭痛がするような結界があると、どうにもならん。まあ、俺はこの有り余る俺のエネルギーで自給自足ができる。飲み食いする必要がない身体だったのが幸いだ。退屈だが、死にはせん」

「それはそれは、さぞ寂しかったでしょう。世界からまるで鬼の子のように扱われているご様子です」

「大きなお世話だ。俺に用らしいが、何の用かと聞いている」

「スカウトしに来たんですよ。私の夢を叶えるための、力となっただけだ。この世界、そして向こうの世界、人間界ですが、その二つの世界の中で、あなたが最強の使い手のようだ。1人でここで暮らす中でも、相当に鍛錬を積んだようですね。突然変異体として、ただでさえ生まれながらに強大な力を得ていたというのに、さらに磨きがかかっている。素晴らしい」

クラウドは上機嫌な様子で声色でそう答えた。

「スカウトだと……？」

「そうです。まず私は手始めにここに国を作りたい。ちやうど空いている地です。国を作るには民も必要だ。民を得なければならぬ。しかしながら、いくら私がこの世で最も強い存在とはいえ、建国と運営は1人では無理です。軍を編成し、他の国を制圧、そして得た他国の民を、従える必要もあるでしょう。あなたがいると、非常に心強い」

「……聞き捨てならぬ。貴様、今自分が最強だと言ったのか？そのなりを見る限り、確かにただのガキではないんだろう。どこかの国の王族か……？だが、この俺の存在を知り、そして俺の前に立ち、それ

でいてまだ俺の強さをわかっていない。そう見て取れるが」

「確かにあなたは強い。ですが、あなたでは私には勝てません。だから、私に従うべきです。他にも当たりたいスカウト候補はいます。最悪、ここであなたを始末してしまうこともできるのですよ。どうです？私と国を作りませんか。あなたの居場所になる。仲間もできます。そして、私が常に目標となる任務を与えます。退屈しなくなりますよ」

クラウドは、彼を受け入れるかのように、大きく両腕を開きながら、そして、絶対に勝てるという自信に満ちた表情でこう述べた。

「だったら、試させてもらおうか。俺が従うべき存在なのか、それかな」

「……いいですよ。そうなることも覚悟の上で、ここに来ました。さあ、どこかでもかかつてきなさい。私はこう見えて余計なことが嫌いです。5分で終わらせましょうか」

クラウドは余裕の表情だ。相手を小馬鹿にするように、挑発した笑顔を浮かべる。

「……その口、開けなくしてやる……!!」

大柄な男は、クラウドに飛びかかって行ったー

ー

「……夢か」

ストームは立ったまま、パチリと目を覚ました。長年のそのような生活による癖、のようなものなのだろうか。彼は寝るときも横にはならない。どうやら、その場で直立したまま眠りにつくようである。

「あれももう、何十年前のことだったかな。覚えていないが、恐怖だけは今でも忘れてはいないさ。俺が1番だと思っていた。そんな中で、手も足も出ない者を相手にしてしまった、あの時の恐怖はな。そしてプリキユア、今ではあの者たちが力をつけつつある。いずれは……ふん、世界は恐ろしく広い、そういうことだろう」

ブツブツと独り言を唱えていたその隣で、突如として小さな吹雪が発生した。スノウが、ここに現れたようである。

「ストーム……様。サンダーのその後の様子を調査しましたが、運の

悪いことに、まだ生きている様子でした」

一瞬、彼を呼び捨てに仕掛けた彼女だったが、すぐに敬語に修正し、そのような報告を上げた。

「まあ、流石に簡単には死なぬだろう。それで？」

「いや、……いえ、私も奴のことに關しては、快く思っておりません。プリキュアを倒せたわけでもないですし、そろそろ、奴への処分命令を下される頃かと、思いました」

「俺もそうしたいが、それはクラウドの意思ではない。奴から受けた任務の一部は遂行できたようだ。まだ、国をあげて奴を消すようなことはしないだろう。一応、俺の判断で奴を始末してもいいとはされているが、気が変わった」

「と、言いますと？」

「関わるのがめんどくさいのだ。プリキュアがこれだけの速度で力をつけている現状を踏まえれば、奴だっていずれ、あいつらに倒される日がくる。ならばわざわざ、カバークラウダーが手間をかけることもない、そう思った。それだけだ」

ストームは淡々と答えた。

「そうですね。……奴は国の恥さらし。クラウド様としても、これ以上野放しにするのはデメリットも大きいはずなのに……。やはり、そうしておくだけのメリットがあるのでしょいか」

スノウやレインは、クラウドによる、あえてプリキュアに戦闘経験を積ませ、ある程度の強さを手に入れてもらう必要がある、との施策を知らない。故に、サンダーが大きなお咎めなしで、のこのこと生きていることが理解できないのだろう。

「さあな。まあ、貴様らにクラウドへの不信がわずかにでもある、というのなら、それも国としては貴重な意見になりえる。俺が報告してやってもいいが」

「め、めっそうもない、疑問に感じていただけです。しかし、プリキュアにやられっぱなしではいけませんね。このスノウ、次こそは奴らに我が帝国の恐ろしさを痛感させてみせましょう」

スノウはそれだけ言うと、再び姿を消した。

「……厳密に言えば、やられっぱなしというわけではないか。クリアハートは奪えず、敗走もしているが、1人が相手なら、何度も窮地に立たせたこともある。キュアスパークの底しれぬキサトエナジー、キュアジョイフルの可能性は脅威だが、まだまだ余裕はある。クラウドは、もう少し奴らに力をつけさせたいようだが、さじ加減を誤るとまずくはなるだろう。エンシャントウエポンを回収し、起動させるとそれ以上の力をつけさせてはならん。常に最悪を想定し行動する。それが、己の絶対的な強さがゆえに、どこか樂觀的なクラウドに足りてないところだ。そこは、俺の仕事だろう」

ストームはそう呟くと、彼もまたその場から姿を消したのであった。

さて、いつものように私の自宅の前でマナミと待ち合わせ、学校に向かっていた私たち。私は彼女に、先ほどから感じていた、何かを忘れていたのでは、というモヤモヤを彼女に話していた。

「うーん、なんだろうね？ 国語の宿題は？」

「やってる！」

「数学は？」

「大丈夫！」

「あ、親に見せる家庭訪問の資料とか！ 希望日時とか書くあれよ！」

「えーっと、それもお母さんに書いてもらったし大丈夫！」

むむう、マナミと会話していく中で何かを思い出せるのでは、と思っただけなのに、ここに挙げられた提出物に関しては何かに何度もチェックしている。一体何を忘れていたのだろうか。それとも、ただの思い過ごしならいいのだが……

そんなことを考えているうちに、気がつけば私たちは教室へとたどり着いていた。

「光山さん、原稿はできたかしら？ 提出期限が明日でしょう？ 私もどんなものかチェックしたいし、訂正して欲しいところがあつたらすぐに訂正できるように、今日中に渡すから」

そう話しかけてきたカスミによって、私はその違和感の正体を暴く

ことができたわけである。

「あー！それだ！それを忘れてたんだ……」

私が突然大きな声をあげて、その場で頭を抱えるものだから、教室中の視線が一旦こちらに集まることとなる。

「……忘れてたって、あなた、先週から言っておいたはずだけども……」

普段はポーカークォイズなカスミも、今回ばかりは呆れた、という表情を隠しきれていない。

「ほんとごめん！すぐに、今日中に書くから！書く内容そのものは決まってるし！」

「まあ、私も甘かったわ。もっと早く、確認しようとするべきだったわね。そもそも、光山さんでは1日で訂正を完了させられるかどうかも怪しかったわけだし。昨日あったときに言うべきだったわ。ごめんなさいね」

カスミも、このように自分も悪かった、とはいつているものの、このような言い方は相当に下に見られてるといふ事実を改めて示してくるため、怒られるよりもかえって心にこう、刺さるものである。いや、こればかりは私が一方的に悪いのであるが。

「おーほっほっほ！安楽加清とあろうものが、人選はしくじった様子ですわね！」

そこにクレハが高笑いをしながら混ざってきた。

「心外ね。人選は悪くないわよ。起こりうるケースを想定して動けなかった、私のミスだよ」

私のことを庇ってくれてるのか庇っていないのか、よくわからない台詞ではある。

「まあ、なんでもいいでしょう。今の時点では選挙は私が一步リードですからね！あなたもそろそろ、目立った活動をした方が良くてよ？ピラもポスターもないではありませんか。先日からバリバリ配布している私に抜け目はありませんわ！」

「その調子でせいぜい、私を倒せるように努めることね。さて光山さん、私の応援演説原稿なわけだし、手伝うわ。昼休み空いてるかしら

？」

クレハを完全にスルーし、彼女は私とともに、私の席の方へと歩きます。

「う、うん。本当ごめんね……」

「私も手伝うよ！ 私たちは、チームなんだし！」

マナミも励ましてくれた。友達とは心強いものである。

「あの余裕綽々な態度……いつものことと言えばそうではありませんが、気になりますわね。何か策でもあるのかしら。私がリードしている現状に焦っていない、という演技をしているだけかもしれない。むむ、読めませんわ。まあ、いいでしょう。やることをやるだけですわ」

クレハは一瞬だけ怪訝そうな顔をしたが、すぐにいつもの人を少し小馬鹿にしているかのような表情に戻ると、自分の席へと帰って行った。

その日は昼休みはおろか、放課後までもが、応援演説原稿作成だけに追われる日となった。カスミとマナミ、2人がついているのにこれであるから、そもそも家でやろうとしてもできなかつたことかもしれない。

「安楽さんは、1年生でも大人っぽくて真面目でー」

「言い回しに気をつけて。でも、じゃダメよ。1年生ながらに、にしましょう」

「う、うん。わかった！ 1年生ながらに大人っぽくて真面目で、小さな頃かー」

「幼い頃から」

かなり食い気味に訂正を入れてくるものだから、押されてしまう。

「お、幼い頃から、常に周囲に目を配り、さらには努力を積んできました。そんな彼女だからこそ、全ての生徒、それだけでなく、先生方にもー」

「ひいては、先生方にも、ね」

訂正箇所だらけである。仮に今日彼女にこの原稿を渡せていたとしても、今頃赤線だらけのそれが送り返されてきていただろう。

「ま、まあ安楽さん。文章が固くなりすぎると逆効果なところもあるくない？」

そこにマナミが一旦、待ったをかけた。

「と、いうと？」

「公的な文書でもなければ、先生に提出する作文でもないわけじゃん？聞くのは私たち中学生よ。だからこそよ。固すぎると、常に周囲に目を配ってきた寄り添える人間、という点に、文章から説得力を感じられなくなるわ。お堅い印象を植え付けてしまうわよ」

「……お堅いと何かマイナスになるわけ？」

「はつきり言えばそうね。大人の世界では評価されても、今回ばかりは評価者は、投票者は中学生よ。私だったら、なんか堅苦しい生徒會長つて嫌だし、入れたくなくなるかもね」

「……非常に参考になる、いい意見ね。ありがとう、確かにそこを考えていなかったわ」

カスミは本当に心底感心しているのだろう。無表情から一点、一瞬目を丸くした後、利き腕の拳を、少しひいた顎にちよこんとのせ頷く仕草を見せた。

「そこを逆説的に捉えて、敢えて安楽さんの真面目な面を前面に押し出す作戦もありだし。安楽さんの、ほかの候補者にはない圧倒的な強みなわけだしね。それか、ヒカルちゃんに演説させるなら、応援演説は堅くなりすぎず、むしろアホっぽくしてのギャップ狙いもいけるかもね」

「アホっぽい演説でわるうござんしたね……。でも、そこまで考えられるのなら、やっぱり私なんかより、マナミちゃんにお願いした方が……」

「いえ、大田さんのは非常に実のある意見だったけれど、原稿も演説も任せるのは光山さんよ。その意見を踏まえるのならば、適任でしょう。アホっぽく、という失礼だけど、明るく元気なことを書いて話せるのは、この中ではあなたが一番得意なはずだわ。むしろ、さっきまでの私は、あなたのその長所を、私のやり方と粹に収めようとして潰してた。ごめんなさいね」

「い、いやいや何も謝ることないし!!それに私のは、そんなたいそうなものじゃなくて、単に私が頭悪いからそんな風になっただけで……」

「ガラにもなく、しおれたこと言っただけじゃないわよ!」

マナミがバンツと、私の背中を手のひらで叩いた。思わずビツクリしてしまう。突然のことに、息が止まるかと思った。

「よく言えば、無意識のうちにも明るく元気な感じを作れるというか、作るというより、あなたは根がそれってことでしょう!さすがはキサトエナジーだけならナンバーワン、ヒカルちゃんつてところね」

「私はまずこの学校の、そして将来的に世界のトップに立つ女。トップは人の長所を存分に引き出す技量も求められるわ。私はまず、光山さんの良さを引き出さなければ。大事なことを忘れていたわ。あなたたち2人のおかげで気づけた。私もまだまだね……。細かい口出しはしないわ。助言ならするけど。だから、今度は自分が好きなように、書いてみてちょうだい」

「わ、わかった……。私っぽくていいんだね!」

よし、と意気込み、私は改めて鉛筆を動かし始めた。

—————

その日の夜のことだった。原稿はなんとか完成し、それに一度目を通したカスミは、私の良さを引き出したい、とは言っていたものの、流石に自分の性格やイメージとは全く異なる、私らしき全開の演説原稿に若干引き顔ではあったが、マナミがとにかくギャップ受けが狙えるからいけるよ!と強く推したためにこれを承諾。まあ、たかが応援演説だし、と割り切ったのだろう。

しかし、されど応援演説。カスミ自身、どこかでマナミの述べたことに納得してもいたのだろう。自分自身の演説や選挙活動だけでは、どうしても真面目すぎる、硬派すぎる印象を植え付け、そしてそれは、中学生相手にはあまり好まれないことだという事実も受け入れたのだろうか。その弱点を補い、かつ、あんな調子で応援演説をされれば、

確かにその『ギャップ』ウケを狙えるに留まらず、堅すぎる、というイメージを払拭し、実はユニークな人間なのは、と再注目される可能性も秘めている。

神童と持て囃され続けはや13年な彼女ではあったが、最近といえば「安楽加清なら当然」と、あらゆる物事がそれだけで処理されることに少し疑問符がついているのだろうか。確かな成果を今でも絶えず残し続け、かつ周囲からは常に高評価を受けているとはいえ、プリキュアに興味津々であったりと、どこかまだこの上を求めているような描写もあつたが。

注目されることが当たり前となつてしまい、それが彼女の中で所謂マンネリ化してきているのだろうか。今までとは一風変わった評価や注目を受けたい、という彼女の中に眠る願望が、ひよつとしたら、私という正反対の人間を応援者に選んだのかもしれない。というのは私にとっては都合の良いすぎる解釈だったか。

「ただいま戻りました」

威厳ある和風の我が家へと帰宅したカスミは、引き戸を開きながら、家の中にいるものへとそう挨拶をする。

「遅かったわねカスミちゃん。学校が忙しかったのかしら？」

奥から出てきたのは、薄いピンクの上品な和服をまとい、その腰あたりまでに黒い髪をストレートにおろしている女性だった。

「はいお母様。生徒会選挙活動が活発になってくる頃ですので。今日は応援演説をしてくださる知人の手伝いをしていました。いいものに仕上げてください、ますます私の勝利が近づいてきているのも同然であり、嬉しく思うのとともなうにありがたい限りです」

「そうですか、それはよかったですね。お夕飯の準備はできてますよ、先に召し上がられる？」

「いえ、遅くなつておりますし、先にお風呂の方へ」

「カスミ、ちよつとこつちにきなさい」

茶の間から父の声がする。

「は、はあ。しかし、帰ってきたばかりな手前、お父様に対する礼儀といたしましても、先に風呂を済ませたほうがよろしいかと」

「いらん気遣いだ。口応えする暇があつたらきなさい。すぐ終わる話だ」

「……では」

カスミは、そばにいた母にバレない程度にため息をつく。父のことは深く尊敬している様子だが、威厳に溢れる人物でもある。話があると言われれば、まあ、彼女であつてもため息の一つや二つ、つきたくなるものであろう。

「なんでしようか」

茶の間に入り、父の向かい側に正座して腰をかける。

「応援演説者と言つていたな。誰にしたのだ？」

「……それは答えなければならぬ質問でしょうか？お言葉ながら私ももう小学生ではありません。お母様、お父様御二方には無論従いませんが、私自身にも意志がー」

「言うようになったなカスミ。まあ、年頃の娘は世間一般的にも反抗期だ。仕方のあるまい。だが質問には答えてもらいたいな。誰にしたのだと聞いている」

食い気味にセリフを切断されるカスミ。

「……覚えておられでしょうか？光山輝さんです」

父にとつては予想外であつただろう人物の名を、彼女は、彼の顔色を伺うように、小さな声で、ゆっくりと口に出した。

「ああ、覚えている。そして、昨日、彼女たちと遊んでいたのだよな？」
予想外だったのは、この返しであつた。

「……どこからそれを……で、ですが、彼女は悪い人間ではありません。確かに頭は足りてませんし、けして上品でもない。お父様の指示したような友人ではありませんし、むしろ、お父様としては付き合つて欲しくない人間になるでしょうが、しかしー」

あのカスミともあろう人物が、明らかに動揺している。幼い頃から友人は選べど。また、親の指示する人間と付き合いえと言われ続けている身分であるから、明らかに彼女の父の構想の中ではこれに該当しない私と付き合いをしていると知られたことには、流石に平静を保てないか。

「落ち着け。私も光山くんの批判をしたいわけではない。だが、だ。光山くんでお前の応援が務まるのか。この安楽加清の応援が務まるのか？そこが気が気でならぬ。まあ、もう今更応援者を変えらうというのは遅いのだろうが、それで選挙に負けたらどうする気だ？月野家の娘さんも、例によって出馬するのだろうか？月野さんの娘に負けるともなれば、お前自身のプライドも傷つくはずだ。そういう経験も大事かもしれない。負けを知るのも大事かもしれないが、今じゃない。今はまだ負けるべき時でも、お前を負かすにふさわしい人間もおらんのだ。まだ勝ち続けないといけない時だ。そこはお前の知るところでもあるだろう。……なぜ光山くんなのだ」

父はゆっくりと、そう語った。怒鳴っているわけではない。怒り、ではなく、本当に、シンプルに疑問に感じたのだろう。

「……勝つためです。私は勝つために光山さんを選びました。光山さんは、少なくとも負けにつながるようなことはしません。必ず私の勝利をより確実とする働きをしてくださる。確信しているからです。私はお父様の娘、ゆえに間違えません。私に間違いはないのです。そう教わったように、私は私の、個人の正しさを、この世の、全体の正義にします」

これは後付けの理由だった。私がカスミの勝利の役に立てるかもしれないと判明したのはついさつき、放課後の出来事なのだから。だが、今は本気でそう思っているのか、だからこそ、でまかせではない。真に迫る語気がそこにはあった。

「具体的にどの点を評価した？納得行く理由があれば、私の疑問は解決される」

「お父様のお考えになられているとおり、私と光山さんはまず、普通に生活していれば相容れぬ存在です。目指す場所も生きてる世界も、価値観も性格も趣味に友人関係、全てが異なる」

「そうだろうな。少なくとも、お前の人生にはプラスになる人間ではない。だから、付き合わせようとはしなかったさ」

あくまで個人を批判したいわけではない。この父親は、娘の今後において利益があるかないかで彼女の周囲の人間を見ているに過ぎない

いのだろう。

「そこに目をつけました。もちろん、私には付き合うように、と指示され、小学生の間は仲良くしていたクラスメイトはいます。ですが、その方々とも異なる、今までにない視点から私を語る、そこに可能性を見出しました。私と光山さんは知つての通り、全くの無関係ではないです。これも何かの縁だと。そして彼女は私の狙い通り、素晴らしい原稿を用意しました。ことにお父様、私はいずれ全ての頂点に立つ人間です。あらゆる人材からあらゆる可能性と力を引き出すことは大切なはず。それをまさにやってのけた。私はむしろ、自信と誇りを感じています」

先程までの動揺していた様子からは一変し、流石の口のうまさをと、とうとうと失礼だが、演説力を見せつけたカスミ。

「……なるほど、さすがは我が娘。すっかりとしたビジョンに基づいていたか。だがまあ、それもそうだ。なんたって、お前は安楽加清なのだからな」

「それに、別の策もすでに打つてあります。ご安心を。私の人生には勝利しかありませんから。私はトップに立つ者です。いずれ、お父様とも対等以上な存在になるでしょう」

「本当に言うようになったな。面白い。反抗期の優秀な娘とは、退屈しないからいいものだ」

父はハハツと笑いながらそう言った後、葉巻に火をつけた。

「我々親はお前を縛り付けたいのではない。まだまだ子供なお前に少しでもいい環境を提供してやっているだけだ。だが、先程お前も述べていたように、中学生にはなったわけだ。子供だが、幼稚ではない。賢さを得た子供、大人もどきつてところか。……今日のようにもつと言いつ返してこい。私が求めているのは私らの人形になるお前ではない。私らが育てた安楽加清なのだからな。その歳で親とこのような話し合いができる子供がこの世に何人おろう。見事なものだ。さあ、もう良い。長くなつてしまったな。風呂にでも入っておれ」

「……よく覚えておきます。では、失礼します」

その場を離れると、彼女は風呂場へと向かった。お腹も空いている

ことだし、さつきとシャワーで済ませて、ご飯も食べてしまうことにしようだ。

「……まだまだ子供、大人もどき、ね」

シャワーを浴びながら、彼女は先程言われたことを頭の中で反芻していた。

「……それではいけない。私は特別、私は周りとはひと回りもふた回りも格が違う存在よ。そのようなところに留まってはいけない。早くお父様に、一人の大人として認められなくては。いずれは親をも配下にする、正真正銘文字通りの頂点、それが私のなるべきかつ親の求めている未来像。それには邪魔な人たちもいるわね……異世界だかクラウドだか知らないけれど、親にバレる前に、とっとと片付けないと」

カスミはそう静かに決心を固めていた。

—————

「ただいま〜」

カスミが家についたのと同じ頃、私もやはり家に帰宅していた。流石に、ぐったりと疲れている。これほど疲れたのはいつぶりだろうか。小学生の頃は一応、ソフトボールという運動部にはいたが、言っ てしまえば所詮は小学校の部活動。街の外の他校と行うような練習試合の後は疲れていても、こういう、なんでもない普通の平日の夜にこうも疲弊して帰宅するなどは稀であった。それも、身体的な疲労ではなく、珍しく頭をフル回転させた結果の疲労である。

「お姉ちゃんおかえり!」

まず最初に迎えてくれたのは、弟のテルキだった。

「ただいまテルキ〜!お姉ちゃん疲れた〜今日夕ご飯何?」

「お姉ちゃんも大好きなコロツケだよ!」

「本当!?こりやテンションも上がるってもんですわ!!」

こんなことで一瞬で疲れがある程度飛ぶから、私も単純である。

「ヒカル、遅かったのね。……まさか、お勉強でなんかやらかして居残

り……?」

そのあとに、怪訝そうな顔をして母が出てきた。

「違うよ！人聞きの悪い！私は今日はとても真面目な理由で遅くなったの！」

「真面目な理由？」

「そう！この光山輝の人生始まって以来の栄誉ある理由でね！」

「……なんだかよくわからないけど、まあ、宿題忘れて罰として、とかではなさそうだしいいわ。テルキったら、お姉ちゃん帰ってくるまで僕も夕ご飯はまだ食べないんだくなんて言っちゃったのよ。この子が待つなら、お母さんも待つしかないしねえ。さ、早く手を洗ってきなさい。食べてしまいましょう」

「テルキ待っててくれたの!?!ごめんね！」

「だって、夕ご飯はみんなで食べないとつままないよ?。」

まあまあこれは、姉想いというか、家族想いの可愛い弟なこと。私との歳の差は4つ。つまり、今年から小学3年生。ついこの間まで小学生同士だったこと、特に彼は低学年だったことを考えると、このように可愛く無邪気であることにはなんの不思議はない。ただ、ここからが怖いものである。いつまでも露骨に家族が大好きすぎる様子を全面に出していれば、これをからかってくるくだらな連中が周囲にちらほらと出てくるのも、だいたいこの年頃からであろう。

小学3年生くらいが1番生意気どが加速する年頃だと私は思っている。まだ二分の一人でもなくせして、周りより少しでも大人な俺かつこいい！と言いたくなるお年頃に差し掛かるのだろう。やれ僕はもうヒーロー番組は卒業したあの、やれクルクルコミックはもう読まないだのと、何かと子供っぽいことをバカにして、僕はもう大人だぞと、示したくなるものだ。そういう子に限って、実はまだまだ子供っぽいものが大好きなところはまあ、可愛いことには可愛いが。

そのような周囲に影響されて欲しくはない。いつまでも可愛いテルキでいて欲しいものだ。

さて、家族で夕ご飯を食べ終わり、風呂にゆたーっと浸かった後、私はいくつをしながら自分の部屋に入った。明日からは1人で喋る練

習も必要だし、一応応援者として、カスミがなんらかの選挙に関するアクションを起こすのならば手伝うことだっけしなれば。それらに備えて、今日はとっと寝てしまおう、とした時だったのだが―

「遅かったラエね。居残りでもしてたラエか？」

暇そうに、私のベッドの上をゴロゴロとしていたラエティが、抑揚のない声でそう喋りかけてきた。母にしろこの妖精にしろ、私をなんだと思っっているのか……

「違うよーっつて、もうさつきもお母さんに突っ込んだばかりだし、もういいや……それよりあなたね！何勝手に人のベッドに上でくつろいでんのよ！この間、あなた用にクッションを押し入れから引っ張り出してきてやったじゃない！」

あのサイズ感が寝付くのにはちょうど良さそうな、ベッド代わりに用意した、マヌケな面をしたカバさん型のクッションは、床の上に放置されている。

「それはそれラエ。こっちの方が寝心地いいラエからね」

「わがままな子……。ていうか、あなたオスなんでしょ？?女の子のベッドに無断でゴロゴロっつてごう、なんかごう、ないの!？」

「クリア王国の同じ種族間であつたら異性に関しては、おそらく人間と同じくらしいの意識をするときはするラエが、ヒカルは別になんとも感じないラエ」

「……まあ、私もゴロゴロしているハムスターがオスだろうとメスだろうと気にしないけどもね、全く、私の気持ちにもならない？疲れて帰ってきたら、安住の地であるベッドが生意気なチビちゃんに占拠されてるっつてさー！」

「別に占拠はしてないラエよ。ヒカルがこっちにくれればいいラエ？」

真顔から一転、生意気な妖精は私を煽るような顔でこう発した。

「ぐぐぐ……あ、そういうえば、今日なんかレティちゃんと調べるものがあるっつて言っつてなかった？それはどうだったの？」

ここで話題を変えることとする。

「ああ、大事なことラエ。それを伝えなくちやいかんかったラエよ。心して聞くといいラエ。古代兵器を効率よく回収するために、レティ

ツと調査したものがああるラエがー」

こう口を開こうとした瞬間、彼の長い耳がピクツと動いた。

「ーが、先に片付けないといけない案件が出たみたいラエね」

「またクライナー？もう、面倒な人たちだね……」

「夜も遅いし、今から金持ちとカスミを呼ぶのも気がひけるラエ。ちようどレティツは今マナミの家に戻ったところ。2人で頼むラエよ」

「おっけー！私も早く寝たいし、とつと懲らしめてやりますか！」

私はラエティを肩に乗せると、窓から屋根へと躍り出た。ここで変身して飛んで行く方が無難だろう。こんな時間に玄関から堂々と家を出ては非行少女と親に心配されてしまう。もつとも、今から私は大ジャンプによる跳躍移動とはいえ、飛行するのだが。

同じことを考えていたのだろうか。何軒かとなりの大田家の屋根上にマナミの姿が見て取れた。私たちはアイコンタクトを取ると、ご近所迷惑にならないよう、小声で合言葉を唱える。

「プリキュア！エキサイティングフィーバー!!」

真白き光に全身を包んだ私たちは、その次の瞬間には姿が変わっていた。伝説の戦士、プリキュアとしての姿である。

『さて、今日はどこに行けばいいのかしら？』

キュアパンプⅡマナミが相棒のレティツにそう尋ねる。

「ここから東の方に反応があるレティ。このウイザパワーの感じは……」

「間違いなくスノウラエ。なかなか厄介なやつラエね」

『あの妖怪厚化粧な雪女ね。確かに手強いわ』

マナミはふむふむと頷きながらそう呟いた。

「奇抜なバブル野郎の次は妖怪厚化粧って、やっぱり人間はすぐに変なあだ名つけるから怖いラエ……」

「ラエティも裏では妖怪おしゃべりタヌキとか言われてるかもしれないレティね」

『それを言うなら妖怪でしゃべり解説員じゃない？』

私が意地悪な笑顔を浮かべながらそう言う。

『なら間をとって、妖怪しやしやりタヌキだね!』

「……全員後から覚えとくラエよ……とにかく、クライナーを倒さないといかんラエ!」

『もちろん!よし、スパーク!とつとと行きますか!』

『オツケー!とう!』

私たちは腰を低くし、足の裏に一気に力を蓄え、そのまま大ジャンプで現場へと向かった。

—————

『クライナーアアアアアア!!』

巨大な氷塊のような怪物、クライナーは雄叫びをあげながら、その場に佇んでいた。なんともご近所迷惑な唸り声である。しかし、夜の静かな住宅街にこのような声が響き渡るのだ。街を破壊するような行動で無駄なエネルギーを消費せずとも、立っているだけで周囲の間からウィザパワーを集められるのだから効率的でもある。

「その調子だよ!クライナー!プリキュアどもが来る前にウィザパワーを充満させておやり!……私がさらに力をつけるには、將軍レインが失態の連続で隙を作っている今しかない。そんな好機を、あんな男に横取りされてたまるかってんだよ!今日こそ、私がこの手で!」

あんな男、とはサンダーのことを指すのだろう。相変わらず幹部間での、よくいえば切磋琢磨な競争―現状は醜い出しぬきあい留まっているが―それが彼らを駆り立て、積極的に戦場へ赴く動機にもなっているようだ。

『うるさい!!』

『時間帯つてものを考えなさいつーの!!』

そしてそこに、クライナーの口を塞ぐように、奴の頬目掛けて同時にキックをお見舞いしてきた二つの影があった。

『弾ける心!キュアスパーク!!』

『高鳴る心!キュアパンプ!!』

『闇に染まった心に元気と天気を取り戻す！輝け！ワクワクプリキュア！』

それらは着地とともに、ビシッとポーズを決めながら名乗りをあげた。私たちプリキュアである。

「チツ、もう来たのかい！だが、まあいいさ。キュアスパークにキュアパンプの組み合わせかい。それなら、私とも相性がいいってももの！クライナー！氷漬けにしておしまい！」

『クライナーアアアア!!』

『一回負けてるくせによく相性がいいだなんて言えたものね。スパーク、私が惹きつけるから、隙を見てどでかいの一発かましてあげて！』
そう言うのとパンプは、空中に躍り出た。

『オツケー！ハアアアアア……』

私はその間、利き腕にキサトエナジーを集中させて行く。

「好きにさせてたまるか。スパークは単体では馬鹿力は凄まじいが、機転も利かなければ機動力も欠ける。隙だらけってもの！」

スノウはクライナーの頭の上から離れ、私の方へと狙いを定め、攻撃体制に入った。

『まあ、そう来るよね。でも、時間ならいくらでも稼いであげるから、スパークは安心して！プリキュア！パンプスライダー!!』

パンプはそう叫ぶと、両手の平を空へと向け、そこにそれぞれ水色の光の球体を生み出した。球体は膨張しながら各々次第に5つに分裂し、そこから勢い良く、水流となり宙をかけ始めた。計10本の激流がムチのようになりながら、クライナーとスノウの進路を阻む。

「チツ、攻撃用の技に見せかけた防御技か……！触れたものをその勢いで押し流す言わば水のバリア。小賢しい技だね！でも、私のクライナーには意味がないよ！」

『クライナーアアアア!!』

クライナーは口からウィザパワーでできた光の球体をあたり一体に吐き散らかした。これらがパンプスライダーと激突するが、スライダーはその瞬間、凍結してしまい、一瞬にして水のバリアは氷の柱と化してしまったのだ。

『……くっ、そう上手くは行ってくれないみたいね……』

氷の柱が妨げとなる事実が変わらないはずだが、巨大な怪物にとってそんなものはなんの足かせにもならないようで、それらを体当たりで砕きながら、パンプへと迫って来る。

スノウはスノウで、身丈は私たちと大差がない人型。柱の合間を器用にスイスイとくぐり抜けながら、こちらは私の方へと突っ込んで来る。

「ハハッ、お得意のコンビネーションつてのもそんなもんかい!? お前の攻撃は当たらなければ怖くない! さあ、仲間の援護なしで、この私に命中させることができるかな!？」

『……くっ、まだ力を詰め終わってない……! ラエちゃん! 何か手は!?!』

「一応あるラエ! とにかく今はこの間合いをどうにかしないと! パンプ! あたりを水浸しにするラエ!」

『了解! プリキュア! スプラッシュユフィールド!!』

パンプは妖精の指示通り、今度は同じように作り出した水色の球体を破裂させ、あたり一体に疑似的な雨のようなものを降らせ、水で湿らせた。これでー

「これはーあの時と同じ! スパークの電気のキサトエナジーを一带に放電するための仕掛けか! クライナー止まるんだよ! チッ!」

スノウは瞬間的にそれを察知し、大きく反転すると、私たちと再び距離をとった。放電が届かないと見込まれる安全地帯まで引いたのだろう。

「……芸のない奴らだねえ。同じ手を簡単に喰らう私ではないよ! それに、ならば遠距離から攻撃すればいいこと! スパークに遠距離の攻撃手段はない! 目の防御のために、自らの武器を潰すとは、とても、いい采配だとは思えないねえ」

「さすがに、この作戦はバレていたレティ……」

「いや、距離を置いたことに意味があるラエ」

『どういうこと? 妖怪厚化粧の言う通り、これじゃこっちは攻められないし』

私の隣に着地したパンプがそう尋ねる。

「い、今妖怪厚化粧だつて!? 誰のことを言ってるんだい!？」

向こうで突っ込みが聞こえてきたが、私たちはそれをスルーしてラエティの次の言葉を待った。

「シャイニングバードで一気にカタをつけるラエ。アレには、別に一撃必殺の大技を放つことしかできないわけじゃない。本当の効果的な使い方つてもものを教えてやるラエ」

「教えるつたつて、ラエティは知ってるレティ?」

「逆にレティツはそんなことも知らないラエか。ちゃんと王様に習ったことは復習しとくラエ! まあとにかく、スパーク、前みたいに、これを背中につけるラエよ」

『う、うん』

私は背中に小さな羽のような形をした古代兵器Ⅱエンシャント・ウエポン、シャイニングバードを装備した。するとやはり、全身からゾワツと、急激にキサトエナジーが湧き上がり始め、これに反応した、小さかったはずの羽は、私の身体よりも大きな翼にへと姿を変える。

『う、うおおおおお……! か、身体が重い……!』

前回は変身解除寸前にまで追い込まれた、ヘロヘロの状態の時にこの装備をしたため、急激なキサトエナジーの上昇は私の変身態を一時的に回復させる役割も担っていたが、今日のようにまだほぼフルパワーが残っている状態で身に纏うと、おそらくキャパオーバーということか。これまでに感じたこともないような膨大なエネルギーに背中から潰されてしまいそうになる。

「な、なんだいこの、この量のキサトエナジーは……うっ、一気に頭痛が……! あの巨大な羽はなんだ!? アレが、キサトエナジーの塊だというのか……これが世に聞く光のエンシャントウエポン、想像を遥かに凌駕している……!」

スノウはすっかり恐怖に支配された顔へと変わっていた。ウィザパワーをエネルギーにする彼らにとって、これほどまでのキサトエナジーは有毒以外の何物でもない。

「耐えるラエ……このエネルギーを一気に光線として、この間のように

解き放つのもまた作戦ではあるラエが、それは敵があのようにノーマークの時にしても避けられてしまうかもしれないラエ。それに古代兵器には色々種類があるラエ。シャイニングバードの場合、本来の効果は装備者の身体能力の大幅な底上げ。ちよつと飛んでみるラエ」

『と、飛んでみるって、こんなに体が重くて、今にも倒れそうなのに飛ぶなんて無茶な…』

「いいからーちよつとジャンプというか、背伸びをする感覚でも構わんラエー！意識を上にな！」

『う、上に……背伸びをするかんか……ひゃあつ!?』？

次の瞬間、私は巨大な翼を1度だけはためかせた後、気がつくと成層圏付近にまで一気に高度を上昇させていた。1秒前までは地面に足をつけていたはずなのだが。

「……あ、アレだけ重さに苦しんでいたスパークが一瞬であんな遠くに……ちよつとこれは、僕も想像以上ラエ……」

『ええ……』

マナミは言葉もなくただドン引きしている様子である。

「なんだあの速度は……！アレほどまでのスピードにキサトエナジー……丸腰でまともに相手にできるわけがない！こちらにもエンシャントウエポンがなければ、どうすることも……クソがつ！今日のところはこの辺にしておいてやる！」

「スパーク!!聞こえるラエか!!スノウのやつ逃げる気ラエ!クライナーだけでも浄化しないと、街の記憶を元に戻せないラエ!急ぐラエ!!」

『待てええええええ!!』

徐々に大きくなるその声とともに、私は急降下しまっしぐらに戻ってきた。身体が重い分、落ちるほうが楽ではある。

『プリキュア!!スパークメテオスタンプ!!』

もちろんこれも即興での技の命名である。

そのまま目にも留まらぬ速さでクライナーの頭上に落下。そのままの勢いでやつを地中へと埋め込み、そのあまりのキサトエナジーに耐えきれなかった怪物の肉体は、次の瞬間には消滅していた。

例のごとく、クライナーの消滅により、あたりの地形や外観、人々の記憶はそれの出現前時点にまで改修されていた。

「……!?おのれ……プリキュア!!覚えてろ!!」

スノウは捨てセリフだけは忘れずに吐き終わると、そのまま一目散に姿を消した。

しかし、消滅したのはクライナーだけではなかった。私も、気がつくに変身が解除されていたのだ。

「な、なに、この打切り漫画に最後の方にありがちな、急激なバトルのパワーインフレみたいなのは……?」

同じく変身を解いたマナミは、ついていけなかったのか、ただ引き顔でそう呟く。

「いや、どうやら、そんなに単純な話ではないみたいラエ……」

ラエティも想定外の事態への混乱が解けないまま、私に視線を向けながらそう答えた。その視線の先で、私は気を失い倒れていたらしい。

「ちよ、ヒカルちゃん!?大丈夫!?!」

「女子中学生の肉体で受容できるようなキサトエナジーではなかったということレティか?この間はたまたま、本人のキサトエナジーが減少していたから、どうにかなったというだけで……」

「……わからんラエ。とにかく、ヒカルを家まで運ばないと……マナミ、頼むラエ!」

スノウを強大な力で退けたものの、なんとも後味の悪い余韻が残ってしまったのだった。

続く